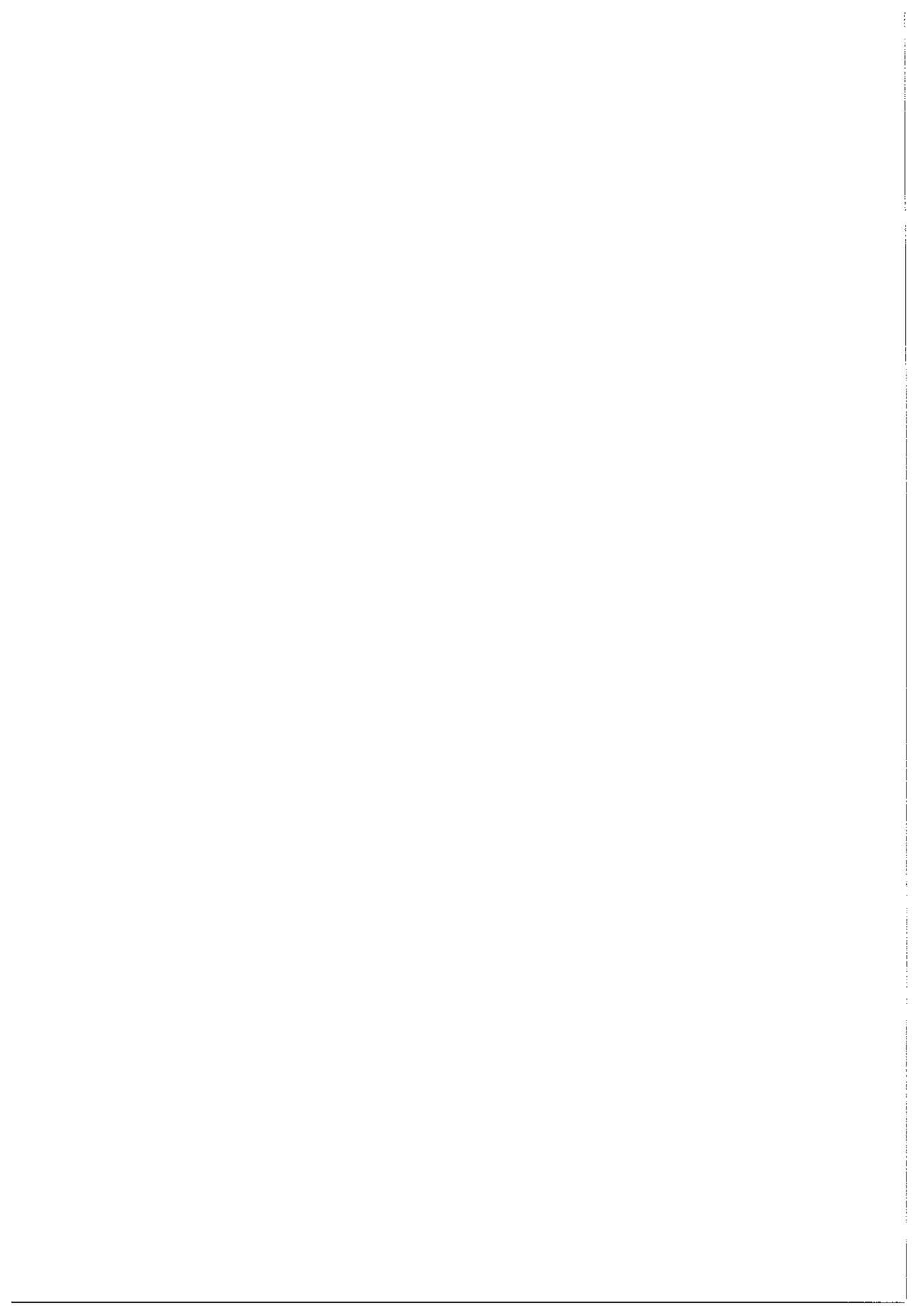


読谷村民話資料集 13
おおき まきばる ながた
大木・牧原・長田
の
民話

沖縄県 読谷村教育委員会
歴史民俗資料館編



ごあいさつ

読谷村長 山内徳信

このたび、読谷村民話資料集第十三「大木・牧原・長田の民話」が発刊されますことを喜び、一言ご挨拶を申し上げます。

民話は遠い昔から、親から子、孫へと語り継がれてきた民衆の精神文化であります。遠い日のあの幼かつた頃、祖父母や父母から興味深く聞いた、いろいろな話を思い起こすことがありますでしょう。子供達にとつて、そのような話（民話）は心を豊かにし、生きる勇気と知恵ともなる大事な文化遺産であり、後世に伝えることは、極めて重要なことであります。民話を読む時、先祖の素朴な純真な心や教訓、生きざまに触ることができます。それはあたかも郷愁や望郷の念にも似た沖縄の昔の人々の心であります。

民話を通して古里を学び、知ることは大変重要なことであります。この民話集が、家庭・学校・社会・生涯・古里・教育の場で活用され、子供達や青少年の心を育む糧となり支えにもなり、これから新しい文化創造の礎になりますよう期待するものであります。

本書には、大木が六七話、牧原が三一話、長田が五八話、合計一五六話を収録した立派な民話集として出版することができます。戦後、大木部落は戦前の場所に部落の復興再建が行われましたが、牧原と長田は旧部落に帰れないまま今日に至つており、牧原と長田の人々の気持ちを、次の詩に託しておきたいと思います。

古里の声

一、國破れて五〇年

戦火に追われて散り散りに

二、望郷の深い深く

友と遊びし長田川

三、緑豊かな田園の

牧原に 長田に

昔の古里近くに在れど
基地の鉄鎖に阻まれて

緑の松の小鳥たち

いつの日か帰らんと

帰郷叶わずこの思い
国家とは 戰争とは

古里の声 心の声

早く帰つてこいよと
我が古里の物語

望みをつなぐ白髪も

本刊で十三集目の民話集になりますが、まさしく「読谷ルネッサンス」の大事業であり、理不尽な戦争と云えども、牧原や長田の人々の心の中の文化までは破壊し得ないのだ、と云う証となり不死鳥の民話集となりました。最後に、語り部としてご協力を賜りました皆様をはじめ、とりまとめにご協力を賜りました関係各位に衷心より敬意と感謝の意を表し、ご挨拶いたします。

ごあいさつ

教育長 伊波清安

字大木、牧原、長田に伝わる民話を集録して、読谷村民話資料集の第十三集が上梓できましたことを喜びつつ、編集に携わつてこられた各位に深く感謝申し上げます。

民話は、先聖右哲達がその時代時代を生きぬいたための生活の智恵として編み出し、時の移ろいに従つて民心を投影させながら、幾世を経て語り継がれてきたかけがえのない文化遺産であります。語り部達を通して大事に保持されてきたこの宝物を、私達はしっかりと受けとめ、漏らさず集めて活字にし、先達の心を生かしながら、正しく後進に継ないでいく責務があると思います。

今回集録した三字の地には、廃藩置県前後に首里や那覇方面から移住された方々が、多数おられたようなので、昔の士族社会やマチガタの暮らしにまつわる民話もかなり伝わっているであろうと期待されます。その地に伝わる民話は、土地の人々の心を豊かにしたり、ときには社会規範になつたりして、日常生活と密接な関わりを果たしていました。また、民話はときとして、語り部を囲んで、家族や地域の人々の人間関係及び連帶意識を支える潤滑油のような役目も果たしてきました。

このような民話の本質にふれるにつけ、戦後五十年このかた牧原・長田の両字民が生地に戻つて集落を作れない現実を実に遺憾に思います。この度の民話集編纂が、父祖伝来の地の自然・風土を知らない戦後生まれの両字の若者達に、ふるさとの姿を捉え直し、字人の糸を確かめ合う足掛りになることを期待いたします。

先人達のものの見方、考え方、生きざまが見え隠れしている民話集をより多くの方々に読んでいただき、生まれ育つたふるさとをより深く理解し、愛する礎にしていただきたい。

情報過多の社会にあって、ともすると人間性や自己自身さえ見失いがちな現在こそ、民話の世界を訪ねて、自己の生きる原点を探してみたいものです。汚れや濁りを知らない、清らかな澄みきつた童心に立ち返つて、無心に民話に接するとき、ふるさとの心の豊かさが実感でき、今を生きる心のありかたを示唆してくれるものと思います。これまでに発行された各字の民話集と合わせて、多くの村民にご愛読いただき、心豊かな人づくりに役立てて下さることを期待しつつ、編集にご協力下さいました各位に重ねて感謝を申し上げます。

大木・牧原・長田部落の概況——序にかえて——

館長名嘉真宜勝

大木部落の概況

大木部落は、海に面しない内陸部の集落で、読谷村の南側に位置し、東は伊良皆、西は楚辺、南は比謝と大湾部落に接する。昭和十一年、比謝ヤードワイ四〇世帯、楚辺ヤードワイ十九世帯、伊良皆ヤードワイ二世帯の合計六十一世帯で誕生した。小字は上大木原、中大木原、下大木原、於須久堂原、嘉阿護原、糸蒲原の六箇所から成る。人家があるのは下大木原、於須久堂原、嘉阿護原、糸蒲原の四箇所である。大木部落の名前の由来は、徳武佐の聖地に古い大木が生えていたことにちなんで命名されたといわれている。

大木部落の前記の屋取り集落がいつ頃成立したかは未調査であるが、明治期にすでにかなりの人々がハワイ移民をして成功している。また、瀬名波の儀間門中の初代は、王府から派遣された医者で、最初は大木のナガハマヤー（長浜屋）に間借りをして、読谷や恩納間切りの医療を見ていた。その初代の遺骨は門中墓に納まつており、厨子甕銘に道光二〇年（一八四〇年）とあり、七〇歳余で没したと伝えられていることから、明治以前から大木原に開拓民が住みついていたことが分かる。

大木部落の昭和十九年頃の戸数は四七戸である。前述の長浜屋は新垣守誠家で、その他新垣姓は二軒ある。多い順に姓をあげてみると、砂辺姓七軒、比嘉姓六軒、我喜屋姓五軒、玉城姓三軒、東恩納姓三軒、糸村姓二軒、以下仲栄真、奥間、禰覇、宮城、渡嘉敷、原田、嘉手納、金城、真栄田、神谷、仲本、長嶺、喜瀬等各一軒となつてている。

家屋は四七戸中茅葺が三戸で、残り十二戸が赤瓦葺であった。

区事務所はセメント瓦葺であった。自宅にチンガー（つるベ式井戸）があつた家は十八軒である。それ以外の人々は共同井戸の上の井戸（明治二七年頃建造）と、下の井戸（明治三十一年頃建造）の二ヶ所を利用していた。それ以前は、楚辺暗川と伊良皆のサシジャーガーを利用していた。毎年旧暦正月二〇日には井戸御願を行つていている。

部落の北側背後の森に徳武佐宮がある。ここは北山城主今帰援司が落ちのびて来たところといわれ、今日でもその子孫が参拝に來ている。大木部落でも毎年旧暦九月十三日に部落の繁榮を祈願している。また子宝を授かる斎場としても知られ、次のようない伝説がある。

「昔、宜野湾市大謝名の比嘉に若い夫婦がいて、十年近くも子宝に恵まれず離婚話まで持ちあがつた。ある日徳武佐宮の話を耳にしたその夫婦は、さつそく参拝したところ一年後に男の子を授かつたという」。大正十年、木造瓦葺の御堂を建立し、そして戦後の昭和三十年にコンクリート造りにした。

大木部落が開放になつたのは戦後三年目の一九五一年で、牧原、長田、大湾、比謝橋、古堅の六部落が大木に集まつた。当時、三〇〇世帯余で三千人以上の人々が住んでいた。現在でも元の部落に帰れない人々がかなりいる。一九五四年、群島政府補助七割、地元負担三割で総工費七〇万円で、沖縄ではじめての簡易水道を設置した。大木出身の活躍した人物は多い。なかでも初代琉球政府行政主席の比嘉秀平は、当地の誇れる人物として記念像を建立してある。

筆者は青年時代五ヶ年ほど大木で暮らしたことがある。当時、す

でに正月は新暦で行っていたが、行事の内容は多分に旧正時代の名残りがあつた。ワカマーチは門口や井戸に松と竹、菜の花が飾られていた。井戸にはジャガイモ三個が供えられていた。宿主のおばあさんに聞いたら、笑いながら、本来は甘藷であるが、手元にないの代用しているとのことであつた。旧暦の三月三日の節句には孫の女の子が三人いて、お重を作つて各自に与えていた。盆は旧暦で、七月十三日に門前で祖靈をウンケー（お迎え）し、十五日の昼からは親戚が来て仏前に供物をし、香を炊いて供養をしていた。そ

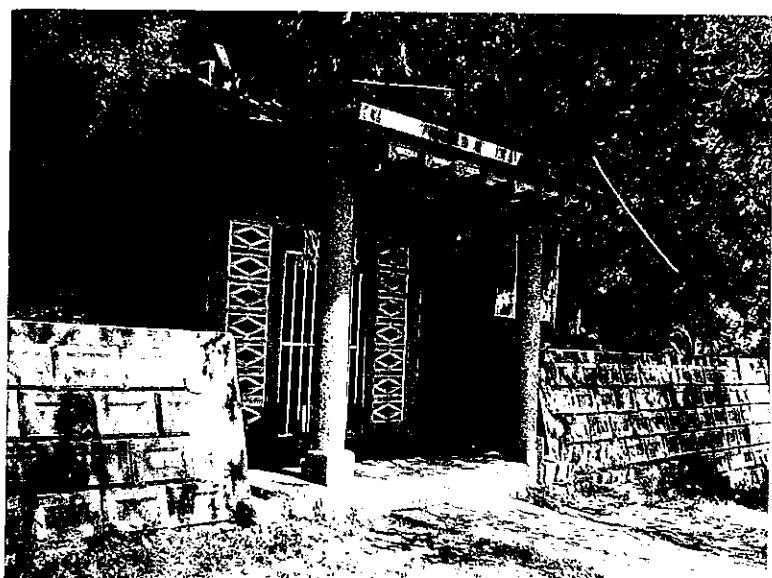
して晩の十一時頃に身内で祖靈を門前でウーケイ（お送り）した。

翌日は部落では青年男女によるエイサーが催された。このエイサー踊りは、大正時代に嘉手納町千原より習つた伝統的な男踊りであったが、十年前から型をくずして女性の参加も認めている。四〇年前までは、十五日のウーケイを終えた後の夜半から翌日にかけてエイサーが行われた。旧暦八月十日のシバサシの日には、門口や屋敷の四隅、それに家の四隅、井戸などにサンを差していた。そして八月十五日にはフチャギ（あづきをまぶしたのを付けただ円形の餅）、十二月八日にはムーチー（月桃の葉に包んだ餅）を造り、仏前に供えた後、子ども達に分け与えて、子どもたちが庭で遊び回りながらフチャギやムーチーを食べている光景は情緒があつた。

戦前の生業はサトウキビや芋作を中心とする農業が主で、各家庭では豚や山羊が飼育されていた。サーダーヤー（製糖場）は、下屋取り、中屋取り、上屋取りの三箇所にあり、各々の組でもつて黒糖を製造して出荷していた。嘉手納に近代的な台南製糖工場が出来てからは、キビ原料をそこへ出荷するのが増え、部落のサーダーヤーは次第に衰微して行つた。

現在では、土木建築業や、設計事務所、銀行、和菓子工場、カーショップ、雑貨店、鮮魚店、スナック、衣服店、食堂、アパートな

どが立ち並び商業の町の観さえある。



大木徳武佐

牧原部落の概況

牧原部落は戦後米軍用地に接収され、現在は比謝部落の伊保堂原と伊良皆部落の西佐久原に集落を形成し、西佐久原にある自治公民館を中心に字行政を行つてゐる。元部落の位置は読谷村の南東部で嘉手納町と接し、北は長田川に南は比謝川に挟まれた台地上にある。

土壤は、ほとんじ国頭マージ（赤褐土）に覆われている。

部落の発祥は、明治十二年（一八七九年）薩藩置県により失業した土族が、尚家の馬牧場を開墾し入植するのが許されたことによる。当時首里から来た人々は、百名兄弟、久志、仲吉、勢理客、仲程、安室兄弟、多嘉良、富里、徳山兄弟、新崎、竹富、知名兄弟、太田、高宮城、金城、兼浜、渡嘉敷、鉢嶺兄弟、知念など二五名であった。その一帯はウママチ（馬牧）と称され盆地で大湾村に所属していた。大部分が農地とし開墾され、この周囲には馬カイと称される松並木が一里以上も続いていた。

明治四一年島嶼町村制を機に大湾部落から分離独立し、初代区長に新崎盛良氏が任命され、以来昭和二〇年（一九四五五年）の終戦時まで一五代にわたってそれぞれの区長が字行政を担当してきた。しかし、地籍は未分離のまま、のち公有地として払い下げられるはずのものが、旧王家が台南製糖会社に売却し、宅地・耕地の全部が小作地になってしまった。小作人は厳しい小作契約のもとで、台南製糖嘉手工場へのサトウキビの売約を強制された。昭和元年から同四年にかけて小作条件をめぐる争議が勃発した。翌五年地主である台南製糖会社による耕地整理事業に端を発して、大規模な牧原小作争議が起つた。土地所有権の問題は未解決のまま現在に至っている。

大正一〇年の戸数は七三戸で、人口四五一人、昭和一九年には戸数七一戸で、そのうち瓦葺き一五軒で残り五六軒が茅葺きであった。家庭に井戸を設けているのは五軒で、他の人々は部落の共同井戸であるウカー（牧原三八番地在）を使用していた。この井戸は尚瀬王坊主御主。一七八七年（一八三四年）が一時居住し使用した井戸と伝えられている。毎年旧暦一月四日、九月九日、十二月二十四日には部落の繁榮を願つて、区長や有志らが代表して拝んでいる。

昭和一九年当時の姓を見てみると、比嘉（十一軒）、喜友名（四軒）、山内（四軒）、町田（四軒）、津霸（四軒）、多嘉良（四軒）、金城（四軒）、大城（三軒）、岳原（二軒）、平安名（二軒）、浜元（二軒）、喜納（一軒、以下同）、屋嘉比、知名、仲吉、龜田、安次嶺、久志、大田、渡嘉敷、福原、安森、安里、仲程、玉村、高宮城、渡久地、嵩元、澤崎、兼浜、久高、富里、仲西、安仁屋、国吉、我如古、以上三七の姓があつた。

部落西側のチチエングーフと称される丘にチチエンの御嶽（十三八番地在）がある。この拝所は部落の移住前からあつたもので、移住当初まで首里方面から婦人の方々がよく参拝に来ていていたといふ。部落では旧暦一月四日の初御願、九月の旅の御願などに拝んでいる。

昭和三年から六年までの三ヶ年間で耕地整理事業が導入された。この事業の一環として約一万坪の農地灌漑用溜池、道路新設、栄橋の架設、排水溝、防風林などの造成工事が行なわれた。この事業の成果は大なるものがあつた。わずか数年後の昭和一〇年には、県から優良農家部落に指定された。県下唯一の二重橋（栄橋）、鯉やフナが浮遊する広大な貯水池、そして県指定優良農家部落などにより、村内外の学校児童の遠足、各方面からの産業観察に多くの人々が頻繁に訪れるようになつた。

牧原部落は全世帯が小作農家という特殊な境遇にありながら、戦前は生活も安定し平和で住みよい理想郷が築かれたが、去る大戦で柴橋をはじめほとんどの施設や家屋が破壊され、大木の松並木もすべて消失した。そして、戦後は土地は全て米軍用地に接収され、部落民は復帰できず、一部は大木部落の東側に敷地を求めて居住しているが、大半は嘉手納町、沖縄市、具志川市、石川市、那覇市に居住している。

長田部落の概況

長田部落は戦後米軍用地に接収され、現在は伊良皆部落（一四戸）、大木部落（一二戸）、比謝部落（四戸）、大湾部落（二三戸）等に分散して居住している（昭和六〇年戸籍台帳による）。大木地番に長田公民館を設け区長を中心に婦人会、青年会、生活改善グループ、区行政委員会、茶組合等の各組織が目的のために頑張っている。元部落の位置は読谷村の東・現国道五八号線伊良皆部落の東側に位置し、中央部を長田川が流れている。土壌は国頭マージ（赤褐色土）に覆われている。

部落の発祥は、明治一二年の廢藩置県前後に、祿を失った士族が伊良皆部落の東方長田原一帯を開墾し入植して屋取を構えたのが始まりだといわれている。明治二九年伊良皆部落から独立して区行政が施かれた。初代区長が繩堀盛昌氏である。部落の中央を流れる長田川の氾濫と鬪いながら、明治三二年隣接北側の喜名部落と結ぶ道路を独自で開通し、その後東隣りの伊良皆部落の道路も政府補助で出来た。

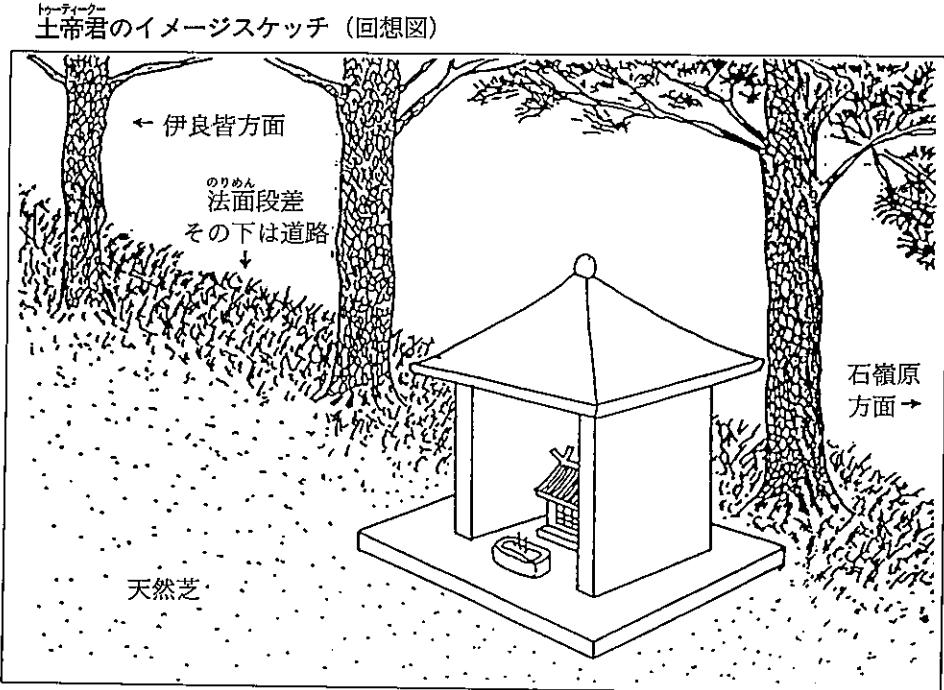
戦前の農業はサトウキビと甘藷作が中心で、それに読谷村ではめずらしく製茶業と養蚕が盛んであった。そのきつかけを作ったのが大正二年に首里から寄留して来た農大出身の川平朝久氏であった。その頃に水車を利用してサトウキビ搾りや精米、製茶をした。昭和一六年には水車を廃して、水力タービンに変えた。

長田部落には、牛馬を利用した伝統的なサークーヤー（製糖場）が二軒あつた。

唯一の拝所として土帝君がある。

土帝君について

土帝君はコンクリート造りの三角屋根（宝形造り）の社の中に、



「読谷村長田民俗地図」より

さらに陶製の小さな社をおき、その中に安置されていた。ただし、陶製の小さな社の表面は格子状になっていたが、中はまったく見えなかつた（したがつて、土帝君の像が中に設置されていたかどうかはわからない）。

陶製の社は、色づけされたもの（釉薬をかけて焼いた厨子甕のような陶器か）で、床に直に置かれ、その前に石で掘った香炉が一つ置かれていた。花瓶や湯飲みなどは特になかつた。

社の前は広場で、天然の芝が生え、広場の周囲には大きな松の木が生え、広場を取り囲んでいた。

この土帝君は、当初はシルジュー（小字・与那田原）の人たちだけが拝んでいたが戦争が近づいて、字から出征兵士が出るときはここで拝んで送り出すようになり、それから長田区の人みんなが拝むようになつた。

拝みは、正月初起こし、五月五日、九月五日、九月九日など日を決めて行われ、また子供が生まれたときの誕生日などにも行われた。

さらにエイサーもここで行われた。長田のエイサーは、まず区事務所（公民館）前ではじめ、次にここ土帝君の広場で踊り、それから各家へまわるようにしていた。

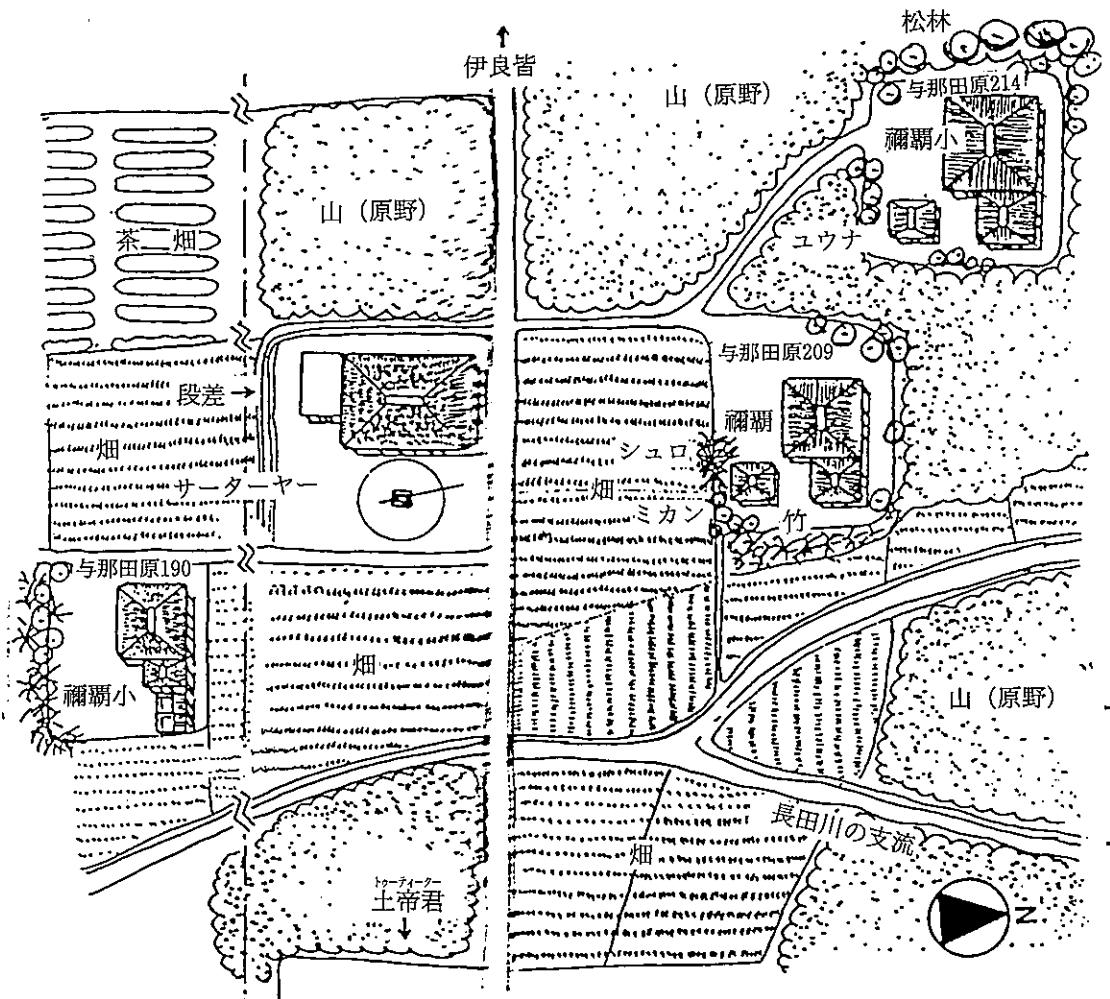
（名嘉真光子・七六歳）
（『読谷村長田民俗地図』より引用）

大正一〇年の戸数は三九戸で、人口一一八人、昭和一九年は二八戸で、一軒だけが瓦葺きで、残りは茅葺きであつた。自宅内には戸戸はなく共同井戸が一ヶ所あるのみだつた。前述したように部落内を川が流れていたので使用水には恵まれていた。姓は禰霸（ねは）、真壁（三軒）、多和田（一軒）、宇江原（二軒）、山内（一軒）、高江洲（一軒）、豊浜（一軒）、名嘉真（一軒）、宇江城（一軒）、町田（一

軒、以下同じ）、喜友名、国吉、岳原、平良、伊佐、備瀬、澤底等の一七の姓があつた。



長田川



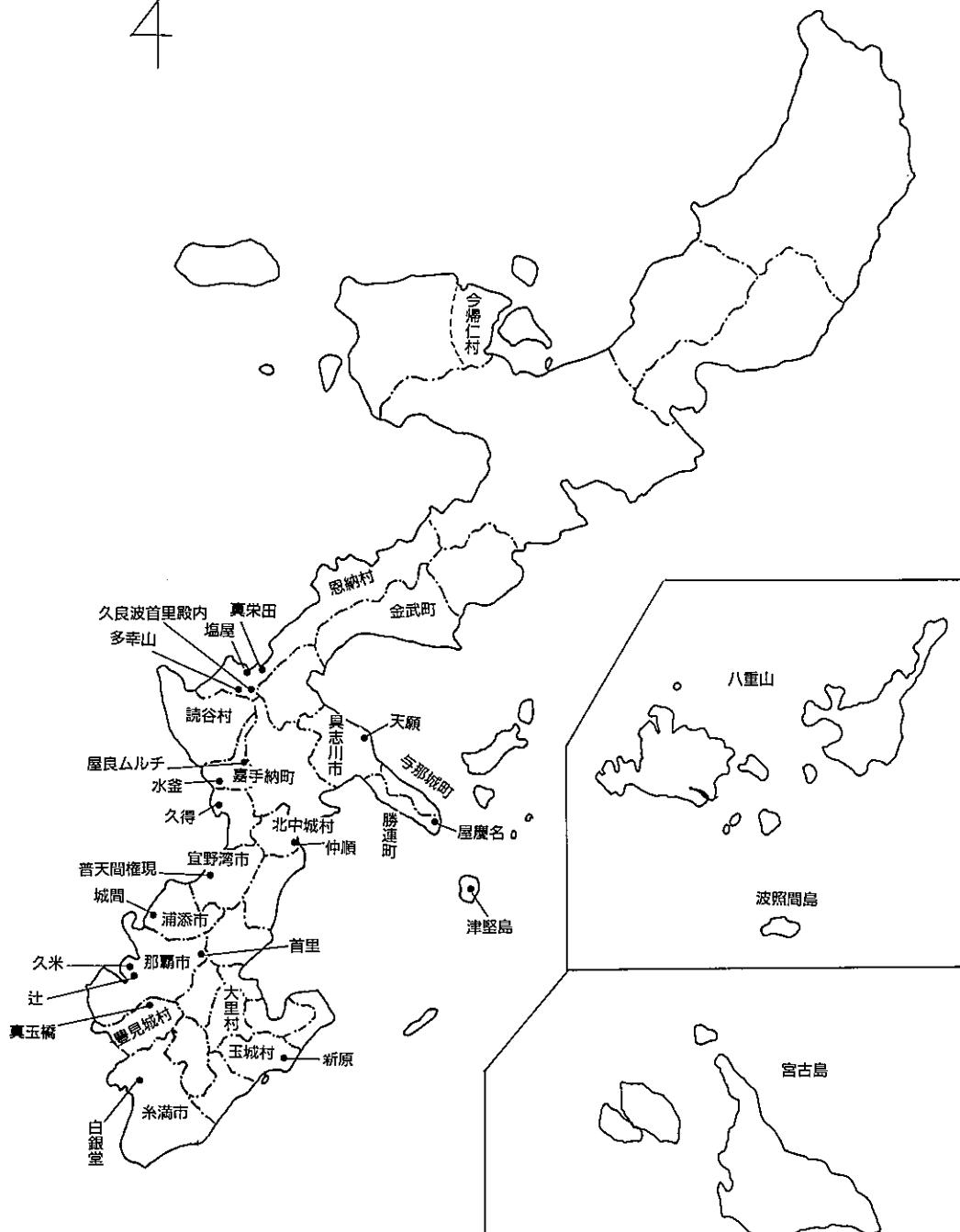
※福霸小（盛樽）はほとんど山（原野）の頂上付近、福霸（樽）は斜面地、福霸小（蒲戸）は畑の真ん中にそれぞれあった。福霸小（盛樽）の山の頂上付近には大きな松が沢山生えていた（松林）。
 （宇栄原宗謹・75才）
 サーターヤーの西側は比較的平坦地で、村内で最も大規模な茶畠になっていた。
 （名嘉真光子・76才、他）（『読谷村長田民俗地図』より）

参考文献

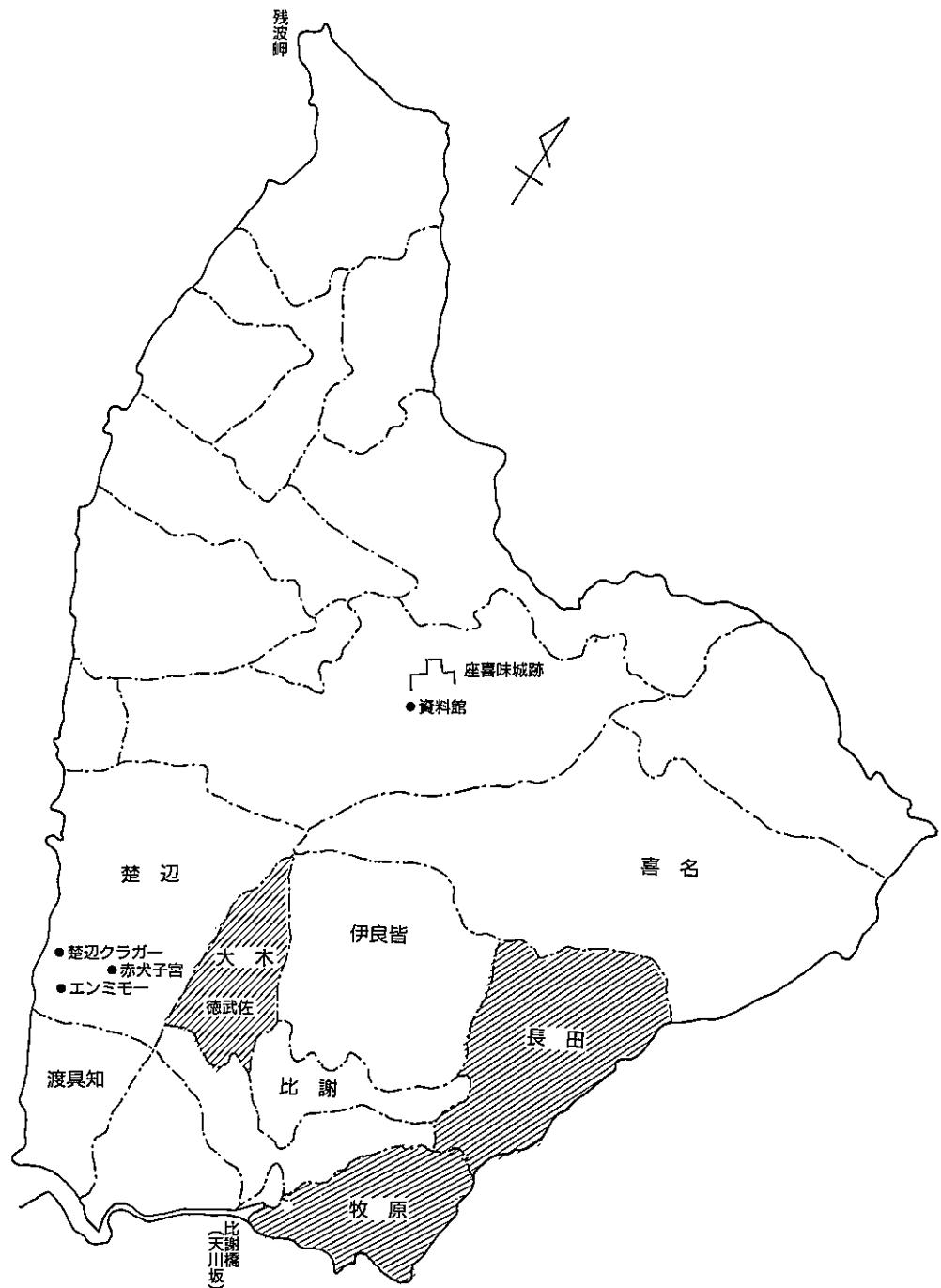
- 『角川日本地名大辞典 47 沖縄』 昭和61年 角川日本地名大辞典編集委員会編
- 「ふるさとの顔」大木・長田・牧原 1965年3月・4月 沖縄タイムス
- 『読谷の文化 第三集』 昭和56年3月 読谷村教育委員会編
- 『読谷村長田民俗地図』 平成7年10月 読谷村長田区

(大木・牧原・長田の民話) 伝説地名地図

N
4



(大木・牧原・長田の民話) 地名地図 (読谷村全図)



凡例

一、翻字対象話の選定基準

- ①昔話（動物昔話・本格昔話・笑話）、伝説を翻字対象とした。
- ②聴取できたすべての話型（話型として認定される可能性のあるものも含む）を網羅すべく、断片的な話でも翻字の対象とした。
- ③類話がある場合は、最も良い語りと思われる話を選定した。
- ④方言・共通語両方の語りを収録してある場合、原則として方言の語りを翻字対象とした。

二、翻字について

- ①語りに忠実に翻字することを原則とした。
- ②語りの場面を反映している事柄や、話の伝承に関わる事柄については、すべて翻字した。
- ③話者の語り口調に区切りがない場合、翻字者の判断により適宜句読点を打つた。また、話の展開に従つて適宜段落を設けた。
- ④語り手自身が、補足的に説明しているところはそのまま翻字し、へ＼で示した。

三、方言表記について

- ①表記は漢字仮名混じり文とし、漢字には全て読み仮名（平仮名）を付けた。また、漢字のあてられる箇所にはできるだけ漢字を用いたが、無理にこじつけた当て字は避けた。
- ②民俗行事や特殊な民俗語彙などは、片仮名で表記した。
- ③引き音（のばす音）はーで表した。但し、引き音に助詞（ーは、ーが、ーの、ーを、ーに等）が含まれている場合は、助詞の部分を小文字で表した。

例　ねずみえさじぐわーやでーるばーでー。

四、対訳について

- ①方言（共通語混じりも含む）翻字には、共通語の対訳をつけた。
- ②対訳は方言翻字に忠実に行い、できるだけ意訳を避けた。また、勝手な付加や削除はしなかった。
- ③共通語語りの場合でも分かりやすくするために、下段にその話を楷書したものもある。
- ④難解な語句や抽象的な表現を避け、できるだけわかりやすい言葉で対訳した。
- ⑤対訳上、補足説明の必要な箇所には（ ）を付して補つた。
- ⑥方言翻字文と対訳文の行数を調整し、段落を揃えた。

五、本文について

- ①上段に方言翻字文、下段に対訳文の二段組みにした。題名の上に通し番号を付した。

②話の初めには、題名、話者名、話者の生年月日、翻字者名を明記し、話の終りに採集年月日、調査団名、採訪者名を明記した。

題名は「日本昔話名鑑」（柳田國男監修）、「日本昔話集成」（関敬吾著）によつたものもあるが、多くは方言翻字に即した題名を付した。

③語りの中の会話部分（文脈上、会話と判断される部分も含む）や、思慮している部分には「」を用いた。「」は会話中の会話を示す。但し、会話部分は特に改行しなかつた。

④歌の部分は、改行して全体に二字下げて書いた。一行には二句程度記入し、句間は一マスあけた。

六、注記について

①人名、地名、年中行事などについては可能な限り注記して説明した。但し、地図で捕える分については省略した。

②地域独特な意味をもつ語句については、注記して意味を説明した。

目

次

あいさつ	読谷村長	山内徳信
あいさつ	読谷村教育長	伊波清安
大木・牧原・長田部落の概況—序にかえて—	館長	名嘉真宜勝
『大木・牧原・長田の民話』伝説地名地図（沖縄県）		
『大木・牧原・長田の民話』伝説地名地図（読谷村）		

大木の民話

大木民俗地図

第一編 翻字資料

△動物昔話▽

1 雀孝行	砂	辺	光	1	
2 雀孝行	比	嘉	ウ	シ	2
3 雀孝行	仲榮眞	三	郎	4	
4 雨蛙不孝	新垣賀眞	メ		6	
5 雨蛙不孝	高江洲ツル			7	

△本格昔話▽

6 鬼餅由来	長浜マツ	9
7 鬼餅由来	宮城ヤス	12
8 鬼餅由来	仲榮眞三良	17
9 千年蛇	比嘉静	20
10 キジムナー△屁▽	石嶺カメ	24
11 アカマタ聟入△浜下り+		
カマンタ孵化+芋堀り女▽	比嘉ウシ	24

12 アカマタ聟入へカマンタ孵化

+浜下り+針糸▽仲榮眞

三 良

32 子供の肝

比 嘉 ウ シ 74

13 アカマタ聟入へ小便呪文▽砂辺

静

33 星になつた姉妹

砂 辺 宮 城 ヤ ス 77

14 天人女房

砂 辺

34 猿長者

照 屋 ヨ シ 78

15 犬女房

比 嘉

35 猿長者

長 嶺 ウ シ 82

16 子育て幽靈へ打紙由来▽石嶺

静

36 猿長者

砂 辺 長 嶺 カ メ 83

17 夫婦の赤い糸

比 嘉

37 大歳の客へ御馳走

石 嶺 長 嶺 カ メ 86

18 真玉橋の人柱

比 嘉

38 大歳の客へ御馳走+若返り▽

長 浜 マ ツ 87

19 真玉橋の人柱▽長嶺

静

39 大歳の客へ御馳走+若返り▽

宮 城 ヤ ス 92

20 親の声は神の声▽仲榮眞

玉 木 恵 雄 三 郎

40 城間ナーカへ田の酒甕▽仲榮眞

比 嘉 静 94

21 難題聟▽仲榮眞

三 良

41 城間ナーカへ田の酒甕▽仲榮眞

三 良 静 94

22 繼子と鳥と毒入り弁当▽仲榮眞

玉 木 恵 雄 三 郎

42 白銀堂の由来

砂 辺 光 105

23 繼子の麦搗き▽宮城

三 良

43 床柱の逆立て

新 垣 賀 真 光 105

24 繼子と機織りと双葉草▽長嶺

嘉

44 姥捨山へ難題▽

比 嘉 光 105

25 繼子の雪払い▽比嘉

嘉

45 姥捨山へ難題▽

比 嘉 光 105

26 繼子と二十日月と麦搗き▽宮城

嘉

46 モーイ親方へ勉強+難題+

比 嘉 光 105

27 嫁と姑へ猫と鼠▽長浜

嘉

47 モーイ親方へ下駄と草履+

下駄と草履▽仲榮眞 光 105

28 嫁と姑へ猫と鼠▽長嶺

嘉

48 モーイ親方へ下駄と草履+

下駄と草履▽仲榮眞 光 105

29 兄弟の仲直り▽長浜

嘉

49 モーイ親方へ下駄と草履+

下駄と草履▽仲榮眞 光 105

30 兄弟の仲直り▽長浜

嘉

50 モーイ親方へ下駄と草履+

下駄と草履▽仲榮眞 光 105

勉強+難題▽仲榮眞

三 良 116

48 モーイ親方へ嫁釣り▽	砂	辺	光	122
49 モーイ親方				
△勉強十ヌブシの玉▽	砂	辺	光	127
50 屁ひり嫁	宮	城	ヤス	129
51 山原と団亀	比	嘉	静	130
52 黄金の瓜種	玉	木	雄	131
△伝説▽				
53 大木徳武佐	長	浜	マツ	136
54 阿麻和利	比	嘉	静	139
55 ウミナイ・ウミキー	比	嘉	静	144
56 浜千鳥由来	長	浜	マツ	147
57 普天間權現	砂	辺	光	148
60 赤犬子へ暗川発見▽	糸	村	ツル	153
61 ヴートートウ由来	砂	辺	光	154
62 マンサン祝い由来	宮	城	ヤス	156
63 お茶二杯	比	嘉	ウシ	159
64 久良波首里殿内	仲	榮	三良	160
65 牛どろぼう	新	垣	賀	163
66 吉屋チル一				
△身売り十御茶屋御殿▽	比	嘉	静	165
67 落ちている扇は				
拾うものではない	比	嘉	ウシ	169

第二編 資 料

話者別一覧表	179
話型一覧表	178
調査者名簿	177
翻字・対訳者一覧表	171

牧原の民話

牧原民俗地図

第一編 翻字資料

△動物昔話▽

1 雀孝行……………勢理客 宗 武 181

2 雀孝行……………仲 程 亀 182

△本格昔話▽

3 鬼餅由来……………比 嘉 ウ ト 183

4 鬼餅由来……………仲 程 亀 185

5 美女に化けた豚……………勢理客 宗 武 186

6 キジムナーへ魚取り十屁▽……………仲 程 亀 186

7 キジムナーへ魚取り十屁▽……………比 嘉 長 二 188

8 キジムナーへ釘打ち▽……………仲 程 亀 190

9 アカマタ聟入へ女呑み▽……………比 嘉 ウ ト 191

10 鍋蓋アカマタ……………仲 程 亀 192

11 子育て幽霊へ打紙由来▽……………仲 程 亀 193

12 繼子の椎の実拾い……………比 嘉 ウ ト 195

13 繼子の毒入り弁当……………勢理客 宗 武 197

14 繼子の毒入り弁当……………比 嘉 長 二 201

15 子供の肝へ仲順流れ▽……………比 嘉 憲 一 203

16 城間ナーカへ盜人▽……………比 嘉 憲 一 206

△笑い話▽

17 姥捨山△難題▽……………仲 程 亀 211

18 モーライ親方へ嫁釣り▽……………仲 程 亀 216

19 モーライ親方……………勢理客 宗 武 217

20 山原と団亀……………勢理客 宗 武 216

21 果てなし話へ蟻運び▽……………仲 程 亀 217

22 牧原の始まり……………比 嘉 憲 一 219

23 牧原の坊主御主井戸……………仲 程 津 波 ウ ト

24 天川坂の話……………仲 程 亀 223

25 宮古の始まり……………比 嘉 ウ ト 223

26 赤犬子へ暗川発見▽……………仲 程 亀 225

27 お茶二杯……………勢理客 宗 武 226

28 黒金座主と北谷王子……………仲 程 亀 227

29 逆立ち幽霊……………仲 程 亀 228

30 中城若松……………勢理客 宗 武 235

31 猫化け……………仲 程 龟 240

第二編 資 料

話者別一覧表

話型一覧表

翻字・対訳者一覧表

調査者名簿

長田の民話

長田の民俗地図

第一編 翻字資料

△動物昔話

1 雀孝行	名嘉眞	フ	ミ	247
2 雨蛙不孝	名嘉眞	フ	ミ	249
3 十二支由来	名嘉眞	光	子	250
△本格昔話	名嘉眞	光	子	251
4 鬼餅由来	岳 原 ツル	岳 原 ツル	岳 原 ツル	253

6 キジムナー

△魚取り十釘打ち▽・名嘉眞 光 子

7 鍋蓋アカマタ……………名嘉眞 フ ミ 257

8 アカマタ聟入△妊娠▽……………宇栄原 カ メ 259

9 アカマタ聟入

△妊娠十洞窟▽・宇栄原 文 子

10 天人女房……………名嘉眞 光 子

11 子育て幽靈

△テーラシカマグチ▽・岳 原 ツル

12 入髪を拾つた男……………岳 原 ツル

△ガジマル十魚取り▽・岳 原 ツル

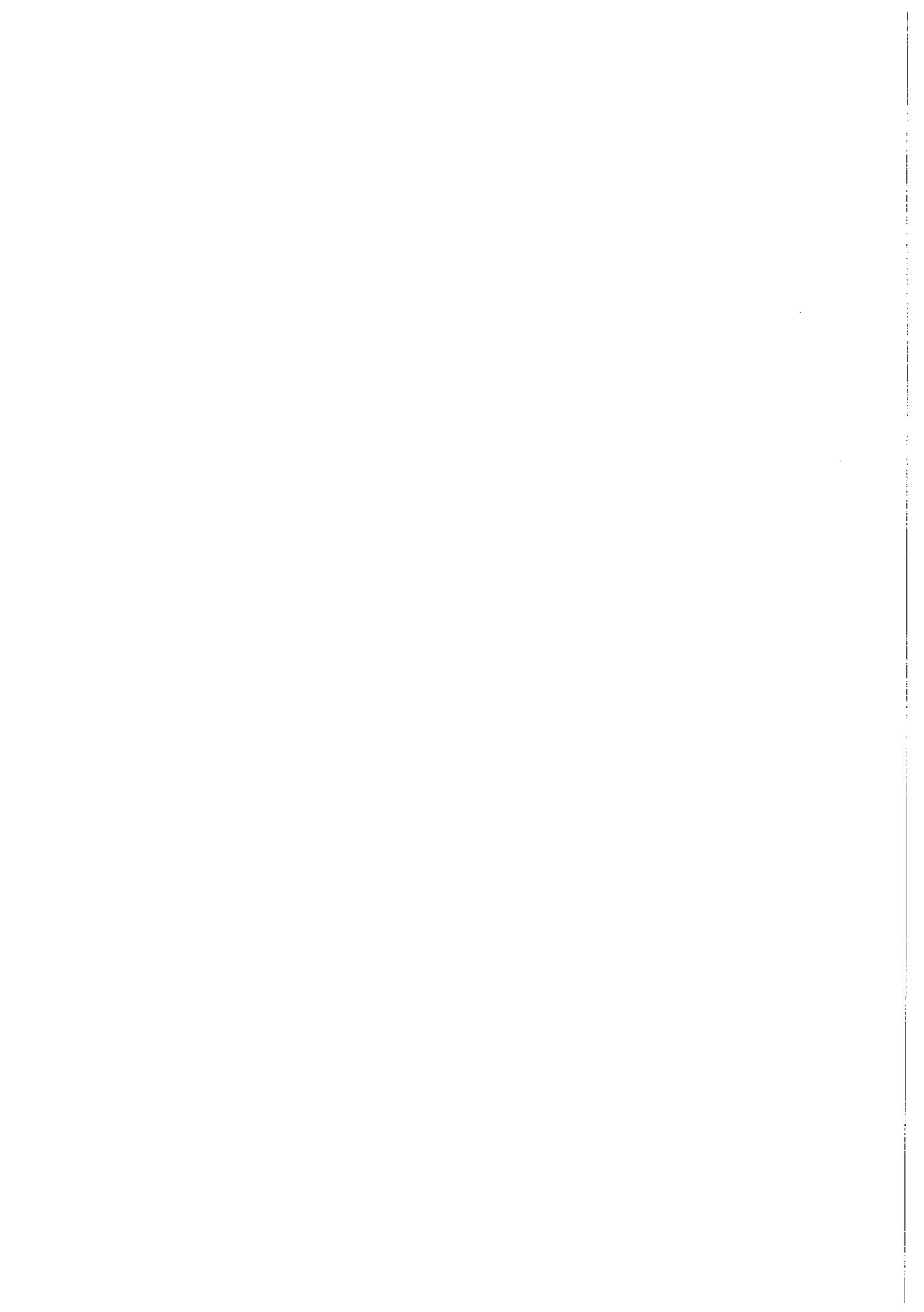
13	真玉橋の人柱	名嘉眞	光子	265
14	難題聟へ動物の恩返し▽	岳原	ツル	267
15	聟選びへ茶腹飯腹▽	名嘉眞	朝光	
16	城間ナーカへ貧乏人恵み▽	名嘉眞	フミ	271
17	城間ナーカへ盜人▽	宇榮原	文	273
18	繼子と竹の子と毒入り弁当	岳原	ツル	274
19	繼子の麦搗き	宮城	ヨシ	276
20	嫁と姑へうどんはミニミニズ▽	岳原	ツル	277
21	兄弟の仲直り	岳原	ツル	277
22	猿長者	岳原	ツル	278
23	大歳の客へ御馳走▽	名嘉眞	光子	280
24	三軒の家	名嘉眞	光子	284
^笑い話▽				
25	鳩料理	宮城	ヨシ	287
26	喜屋武ミーグワーへ俵投げ▽	名嘉眞	朝光	288
27	田場大工	名嘉眞	朝光	289
28	モーイ親方へ難題▽	名嘉眞	フミ	290
29	モーイ親方へ難題▽	宇栄原	カメ	293
30	モーイ親方へ嫁釣り▽	宇栄原	カメ	296
31	モーイ親方へ鶏▽	宇栄原	カメ	297

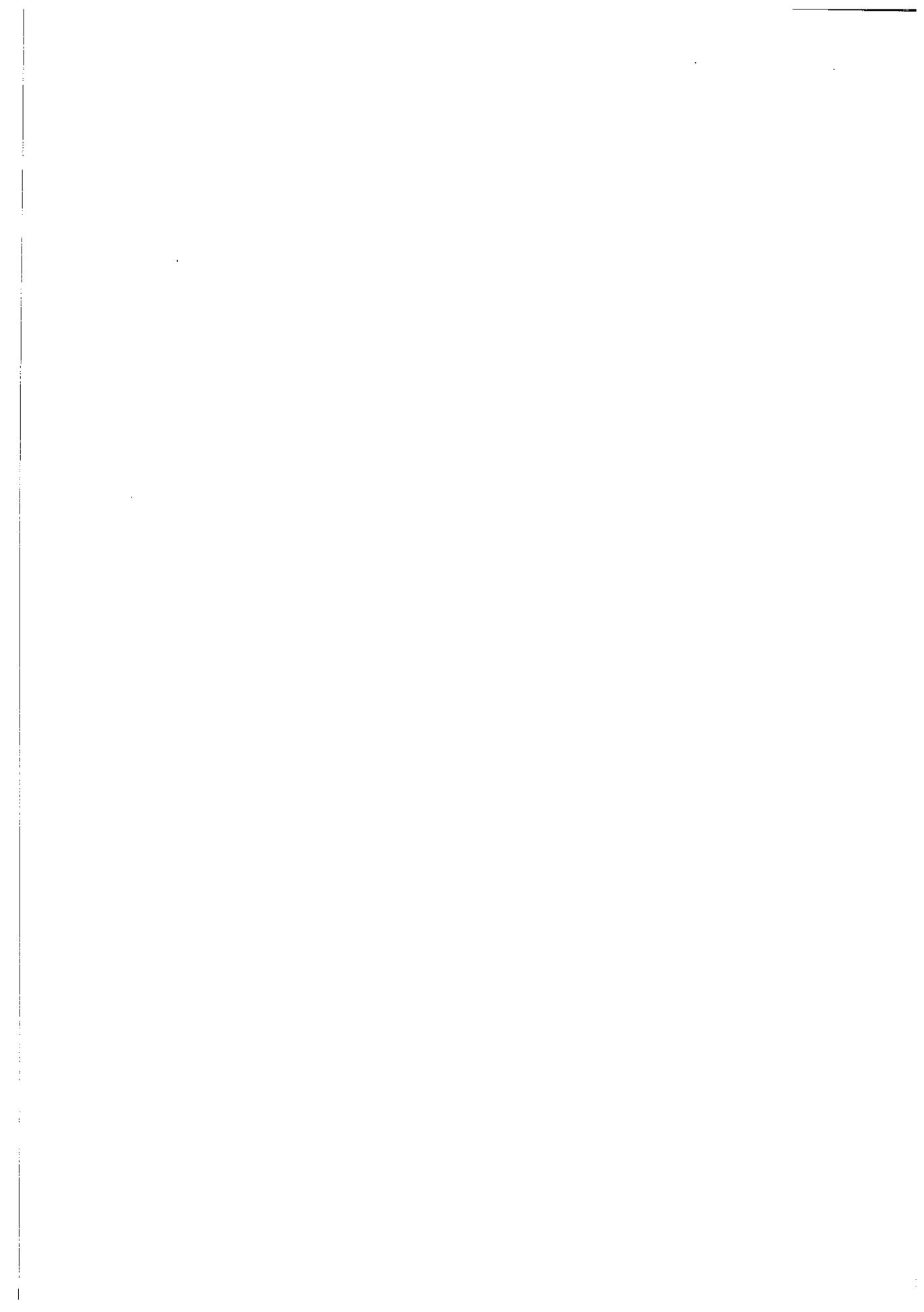
32	モーイ親方へ勉強+嫁釣り▽	名嘉眞	フミ	298
33	モーイ親方	^小便+煙草+難題▽	名嘉眞	光子
34	屁ひり嫁	名嘉眞	フミ	303
35	山原と団亀	名嘉眞	光子	303
36	山原と団亀	宇榮原	ツル	304
37	果てなし話へ蟻運び▽	岳原	ツル	305
38	夫婦喧嘩の仲裁	名嘉眞	光子	306
^伝説▽				
39	人間の始まり	宇榮原	文子	309
40	夫振岩	名嘉眞	光子	309
41	シチャヌカー由来	宇榮原	文子	309
42	タケーサガマの話	宇榮原	光	310
43	天川坂のお粥戦争	宇榮原	文子	310
44	阿麻和利へ網発見▽	宇榮原	文子	310
45	長田の始まり	名嘉眞	文子	312
46	長田の始まり	名嘉眞	光	313
47	普天間権現	宇榮原	文子	314
48	赤犬子へ暗川発見▽	宇榮原	文子	314
49	ハジチ由来	名嘉眞	光子	315
50	ハジチ由来	名嘉眞	光子	315

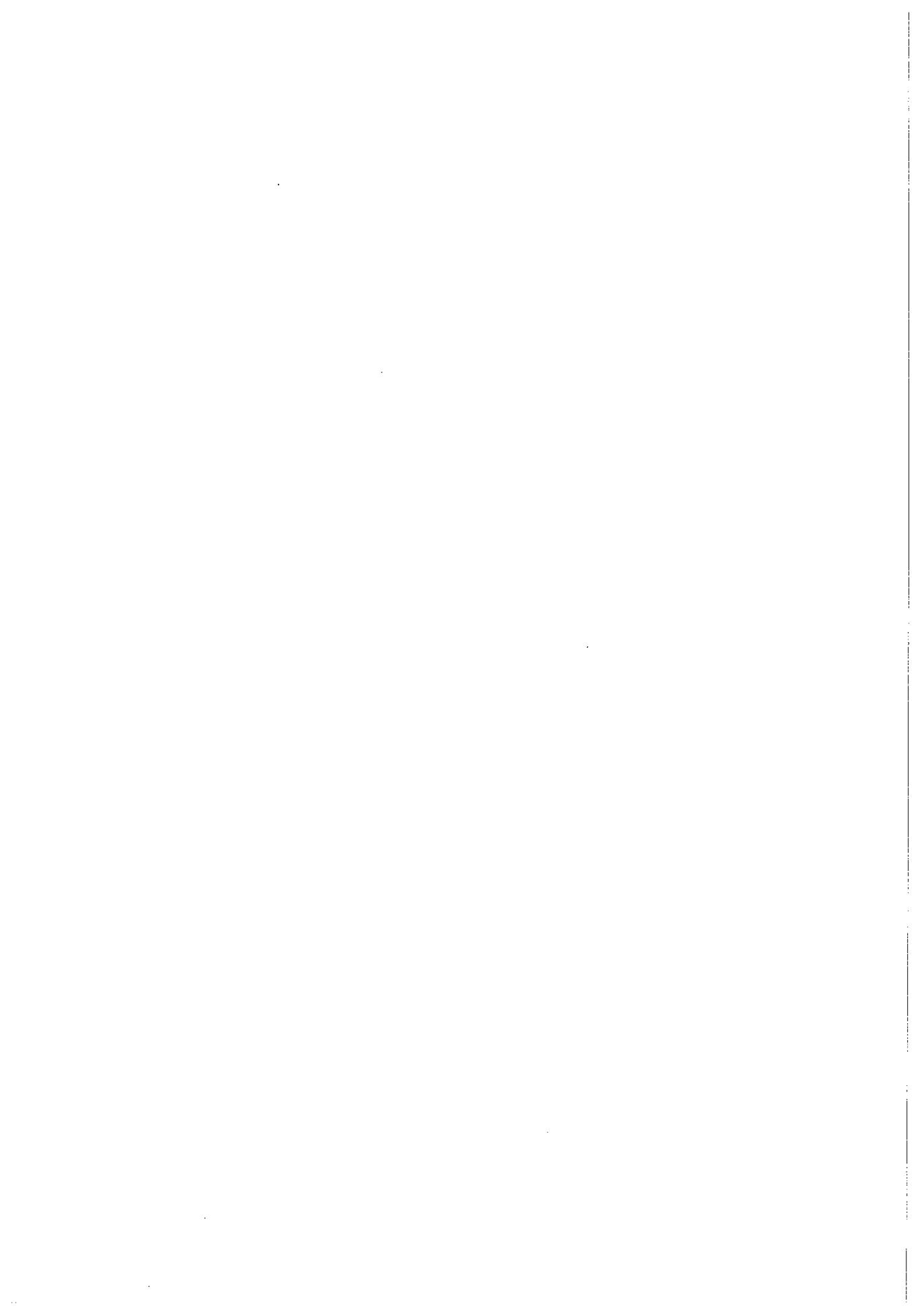
50 お茶二杯	宇榮原	カ	メ	322
51 多幸山フェーレー	名嘉眞	光	子	325
52 伊良皆ビンジャク	名嘉眞	光	子	326
53 吉屋チル一	名嘉眞	光	子	326
54 吉屋チル一	名嘉眞	フ	ミ	327
△歌問答十身売り	名嘉眞	光	子	329
55 炭焼ちやーターリー	名嘉眞	朝	光	336
56 名護親方と具志頭親方	名嘉眞	光	子	337
57 中城若松	宇榮原	文	文	338
58 瓦屋節	宇榮原			

第二編 資 料

話者別一覧表	329
話型一覧表	330
調査者名簿	331
翻字・対訳者一覧表	332
参考文献	333
編集後記	334

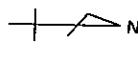






大木の民話

楚边

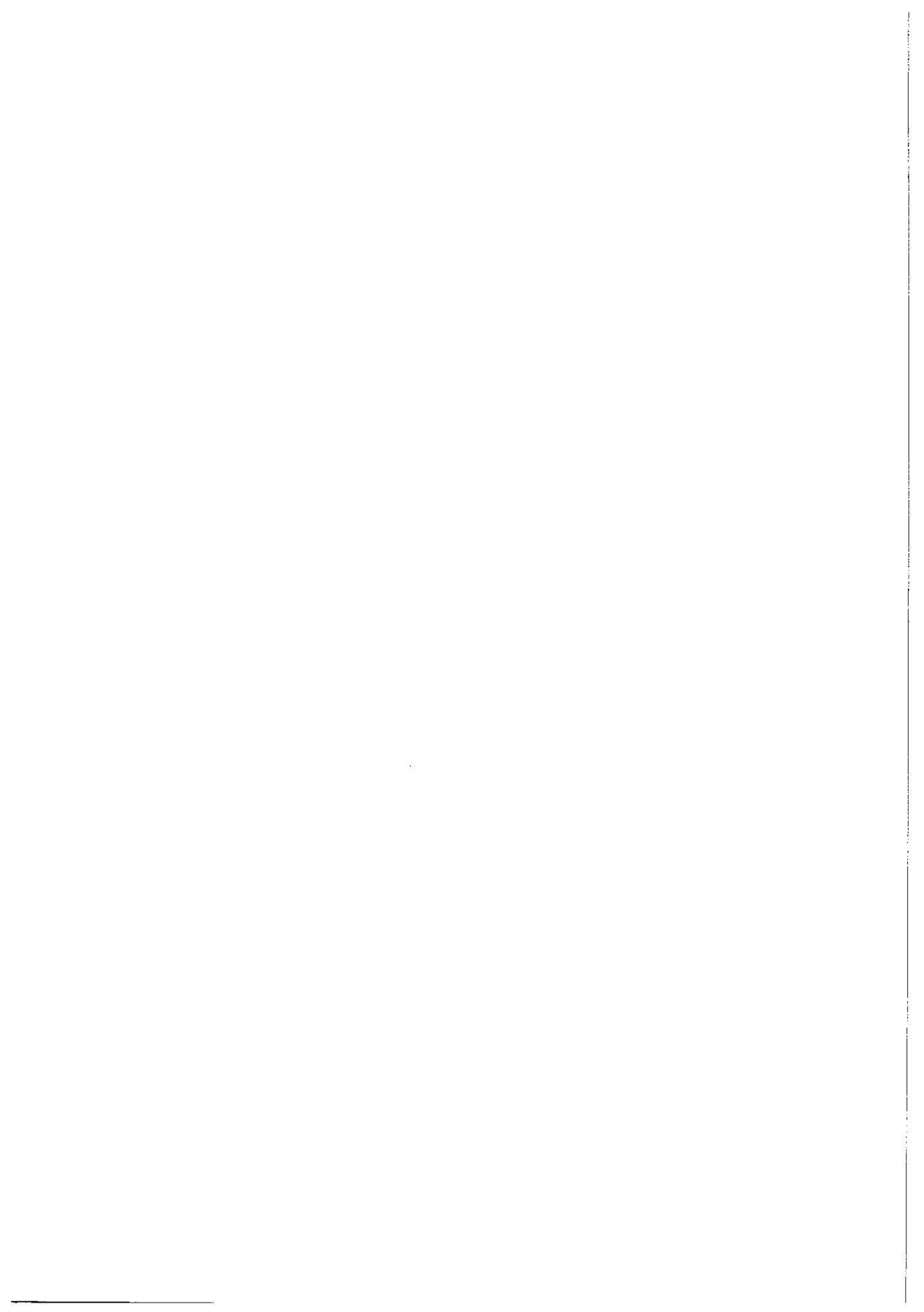


北

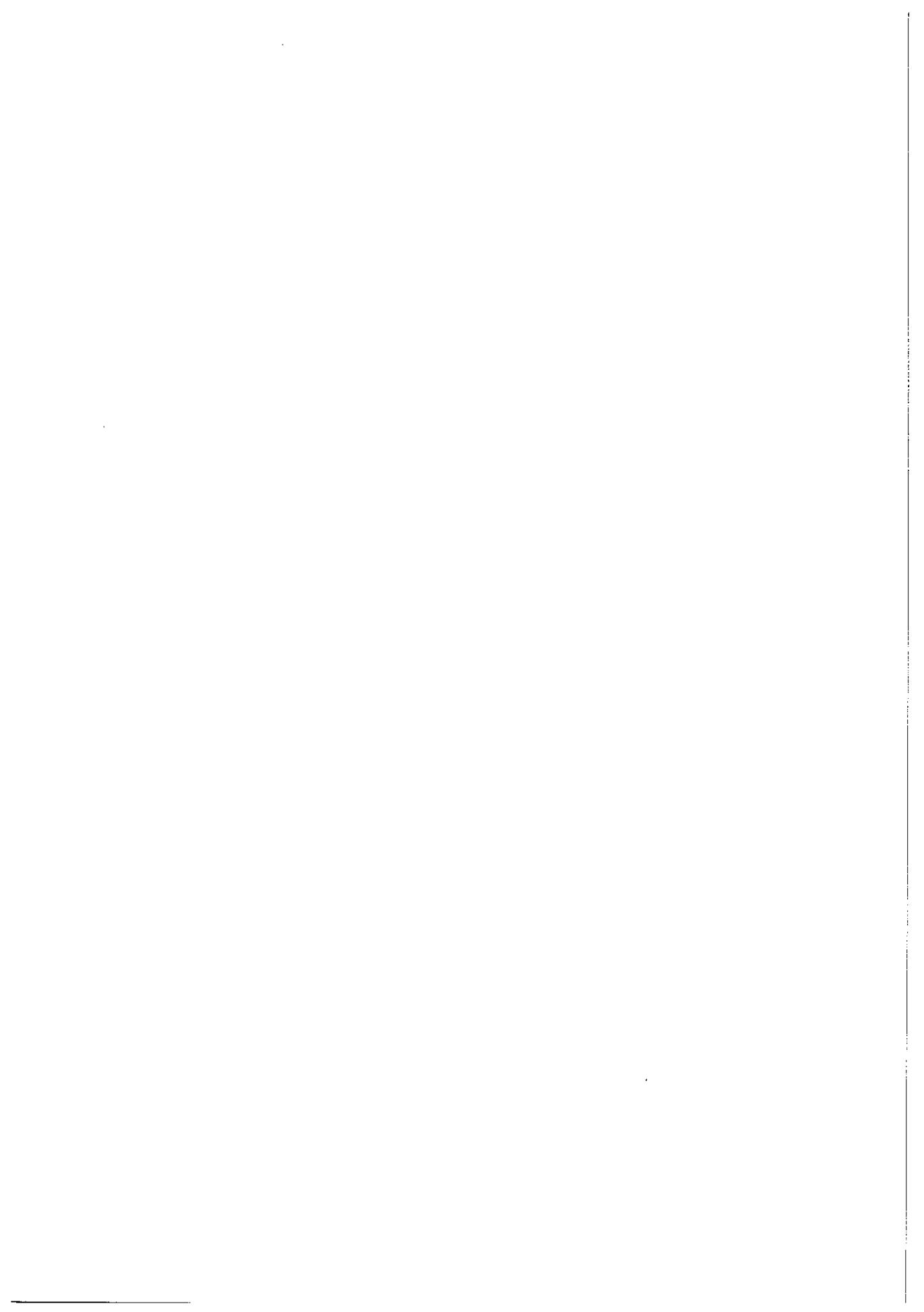


大木民俗地図





第一編 翻字資料



1 雀孝行

話者 砂辺 光（大正元年八月五日生）

翻字 上村照代
対訳 村山友江

何かあのー、儲きーが行じよーる意味るやさにや。

そして、あのー親の危篤だから、早く帰てい来りちかぐとう。

それで一人のあのー、娘え「私ねー、親ぬ顔見りわるやぐとう、私ねー直ぐ行ちゆんどー」りちさぐとう。年上ぬ姉さのー、「私ねー、布おせつかくあぬーうりせーぐとう、なー織てい着ちる行ちゆる」りち。

あんきーに、親見舞しーが行じさぐとう。一人ぬ先行じやる娘え、親の遺言ん聞ち、顔ん見ちやるばー。あんきーに、後ぬ娘え又、親ぬ葬式ぬ後なー行じえーるばーてー。

あんしーし、後からるうりやんりんれー。布織てい行じやる娘えカーラカンジユイリが言たらー。又、何やたがやー、クカルりる言たがやー、それになていありし、又、先来る娘え「いやーや親孝行者だから、倉

何かあのう、儲けにでも行つていたのでしょうかね。

そして、親が危篤だから、早く帰つて来なさいということになつたらしいですね。

それで一人の娘は、「親の顔も見なくちゃいけないから、私はすぐ行くよ」と駆けつけたらしい。また姉さんは「私はせつかく布を織りかけているのだから、織つて着けてから行くよ」ということになつたつて。

そうして、親の見舞いに行つたようだね。先に行つた娘は親の遺言も聞くことができ、親の顔も見ることができた。そして、後から行つた娘は、親が亡くなつて葬式の後に行つたつて。

そのようにした後の話なんだがね。布を織つて行つた娘は川蟬とかいつていたのか。何だったかな、クカルといつていたのかな、それになつて。先に来た娘には、「お前は親孝行だから、倉から米を食べて育ちなさ

なーりー米食り育きよー」りちぬ話が有んりがらー。

い」という話があつたそだよ。

採集51・12・19 読谷村民話調査団第五班 〈山入端孝子・湧川汎子〉

注 クカル 琉球アカショウビン。四〜五月ごろ姿を見せる。凶鳥として忌み嫌われている。

2 雀 孝 行

著者 比嘉ウシ (明治四十一年十月二十七日生)

翻字・対訳 宮城昭美

ゆーかたてい、亡しがたーなでいしんそーちやぐとう。
親ぬミーウティーさんまーる、あぬー早く来んち。多分
あんやぐとう、うぬ縁はちまーぬ、布、布うり
する縁かきーし、うりりしえー首んかいはちま、親
ぬミーウティー見じがつ來。うれーなー親孝行やくとう
でい言やーなかい、あぬーうりがなー家なかい、何が
入りつちん何んあらんしが。

(親が) 亡くなりそうになられたのでね。親が亡く
なる前に、早く来なさいと連絡が来た。多分そういう
ことで、布を織る縁も首にかけたまま、親の死に目に
間に合わせて来たんでしょうね。それで、雀は親孝行
ということで、人の家に入つたとしても、何も災いを
もたらさないということだよ。

又、別ぬうれーなー、多分親ぬミーウティー間に合
ちえー来んてーるばーてー。なー美ら装いし来んでい。
あんさぐとう親不孝なでいとい言やーなかい。うりが

また別の鳥は、多分親の死に日に間に合わせて来な
かつたんでしょうね。美しく装つてから行こうとして。
だから、親不孝と言っていたそだ。その鳥が来る

入しえーましらんりぬ話やるばーよー。なー親不孝やくとう、「いやーやなーうまんかい、多分来んな」ちやる意味合さなかい、なー入りららんばーるやさに。

と、家に入つて來たら良くないという話であるわけさあ。もう親不孝だから、「お前はそこに来るな」という意味合いから、入ることを許されないとなんでしょうね。

あんすぐどう、うりんやつぱしなー、昔えあぬー、浜下り何ぬんち。うりが入ねーよー、浜下りんりやーなかい、家やかんし、棒さーに囲やーによー、戸口や。囲やーなかい、皆、うまなー人ん何ん居らんばーてー、家ねー。居らんないねー、昔えあぬ何んりが、エキ閉ちーねー、あふ灰よ、灰ゆーてい。うりがあぬーうりかんし、鍋、鍋俯しとーちーにりがらーやー、しーねーうりんかい、うりんかいなー足跡んりがらー何がんでー跡ぬ入たんりよー。うんぐとうしーねー厄ぬうりやんりちよ。あんしやんりさんりぬ話。

何んなー自分なーん、ただあまくまる話ん聞ちよーる。はつきりした事お、うれー分からんしがてー。

何も自分達もどびとの話しか聞いていないよ。はつきりしたことは分からぬけどね。

なーうつささーに厄おうりそーるばーてー。あんしから三日目ねー、又、家かい帰ていつ来よー。なーうぬ家族おてー、浜下りそーし家んかい帰ていめんそーちよ。あぬーなー、言ねーなー厄払えなー、うち許す

もうそれで厄を払つて、それから三日目にはまた、家族揃つて浜下りから家に帰つて來た。言わば、その時には厄は晴れているつてことだよ。

んちよーるばーてー。

注①ミーウティー 死の呼称の一つ。ミークータン（目を閉じた）とも言う。

②浜下り 旧暦二月一日に海浜に下りて災厄を払い清める習俗。

3

話者
仲榮眞
三郎
(大正四年四月十七日生)

翻字・対訳 知花 めぐみ

私はこれから、何十代、何百年も前の時代の、雀と
ひよ鳥の話をしようと思っています。

昔ある所に、お父さんとお母さんがいらつしやつた
そうですが。そうして、急にお父さんが病気になつて
しまつて、雀とひよ鳥は、兄弟だつたそですが。突
然親が病気にかかつたので、今すぐ子供達は来なきい
と連絡した。連絡すると、雀は大急ぎで、すぐ駆けつ
けて親の臨終を看取ることができた。

んりしが。

此ぬ、スーサーでいしえー、どうくからハイカラー
なでい、なーあんしーかんしーしー、此ぬ一化粧さい
何さいする為なかい時間食やーんかい、親ぬミーワトウ
イ見じゅーさんでーぬぐとーびん。

あんさーなかい、ミーワトウイするうぬ前なかい、
親ぬ子んかいぬ言し事ぬ、「いやーや親孝行者、いやー
や、一生倉ぬ上部うて、倉から米ん拾てい、あんし
食みよー」んでいぬ親ぬ遺言なでい。クラーや今ちき
てい、ちやー倉ぬ側なー、辺なーり歩つち、あぬー、
生活そーぬふーじーやいびーん。

あん、その反面に又、此ぬスーサーや、親不孝者な
やーんかい、親のミーワトウイ見じゅーさん。あんさー
なでい、今ちきて、岩の側や辺なーりーありし、生
活そーんでいぬー、昔ぬ、伝え話ぬ、八十余りなる人
から片耳え聞ちそーびーしが。此れを私にんはつきれー
分かいびらんしが。こういう話、片耳にしましたので、
今日、片言話いうんぬきみたん。

このひよ鳥というのは、あんまりおしゃれになりす
ぎて、もうああしたりこうしたりして、化粧したりす
るのに時間がかかり、親の臨終を看取ることができな
かつたそうです。

それで、亡くなる前に親は雀に、「お前は親孝行者だ
から、一生倉の近くで、倉からこぼれる米を拾つて、
暮らしなさい」と遺言した。それで雀は今でも、いつ
も倉の周辺で生活しているそうです。

その反面また、このひよ鳥は親不孝者となつて、親
の臨終を看取ることもできなかつたので、今でも、岩
場から歩いて生活しているそうだ。そういう昔の伝え
話を、八十余りなる方からちよつと耳にしました。私
もはつきりしたことは分かりませんが、こういう話を
片耳にしましたので、今日はその話をいたしました。

雨蛙不孝

話者 新垣賀眞（明治三十五年十一月七日生）

翻字 上村照代
対訳 村山友江

昔ぬ、あぬ一親とう子とうぬ、親ぬ言えー、ちやー反対しよ。「海かい行き」りねー、山かい行じ。「山かい行き」りねー、海かい行じ。あんさーにちやー反対。何仕事しりち言付きらつていん、ちやー反対なやーに。

昔のこと、親子がいて、その子はいつも親の「言うことに反対のことばかりしていたって。「海に行きなさい」と言つたら山に行き、「山に行きなさい」と言つたら海に行つていた。いつも反対だつた。何の仕事を言いつけられても、いつも反対のことばかりしていた。

親ぬ病氣し亡ちやぐとう、後お最後ねー、最後の一回の一ちょー親ぬ言る通い、親ぬ孝しわるやるりち。「海んじ葬りよー」りちやぐとう、川端んじ葬りわるりやーに。雨ぬ降てい水ぬ出じてい流さつたぐとうよ。

そうしてゐるうちに親が病氣で亡くなつてしまい、最後の最後に、一度だけでも親孝行をしようと思つた。親が、「海に葬つてくれ」と言つたので、子供はその時ばかりは反対のことをせずに、川端に葬つたらしい。それから大水が出て、親は流されてしまつたそ�だよ。それで、今でも雨が降りそうになると、そのことを思つてガクガク鳴くんだつて。ガクガクするつて。それでアマガクというんだつてさ。

あんさーに雨ぬ降いがたーないねー、うりが事思やーにかい、鳴ちゅんり。ガクガクすんり。あんさーに雨ぬ降りちえーるばー。

あま
雨蛙
がえる
不孝

著者 高江洲 ツル (明治三十三年一月二十一日生)

翻字・対訳 玉城 和美

雨蛙がよー、親ぬやー、「潮水汲り来」んりねーよ、
水汲りつち。「水汲り来」りねー、潮水汲り来たんり。
あんさぐとう、なーくんぐとーる者おりち、親ぬぢやー
しん増どーてーんてー。かんねーぬ者おりち、そーし
が。

なー親ぬ亡しがたーなたぐとうよ、「アイエーナー、
生ちちょーにんちよーやー、私ねー親ぬ言しえー聞か
ん不孝せーるむんぬ。亡しーねーなー、親ぬ言みしえー
る通いしわるないる」りちやぐとう。「なー貴方んかい
ちやー不孝などーしがや、貴方が言みしえー何ん聞ちや
びん。思みせーせー言みそーり」りちやぐとうよ。

雨蛙は、親が「海水を汲んで来なさい」と言つたら、
水を汲んで來た。「水を汲んで来なさい」と言つたら海
水を汲んで來たそうだ。それで、このあまのじやくめ
と親は手をやいていたらしい。こいつはと思つている
のだが。

そして親が死にそうになつたので、「ああ、どうしよ
う、生きている間は、親の言うことを聞かずに親不孝
ばかりしてしまつた。せめて親が死んだ後は言う通り
にしよう」と思つた。それで今度は、「今まででもう貴
方に親不孝ばかりしていたが、貴方の言われることは
何でも聞きます。思つてることは何でもおつしゃつ
て下さい」と言つたようだ。

此りがーなー、言ねー反対にうりやぐとう。反対に
する子るやぐとう。「私が死にーねーやー、あぬー海の
端、浜んじよ葬すり」りちやんり。浜んじ葬すりりちや
ぐとうやー。真つ直ば言ちえーるばーてー、なー。あ

んし親ぬん此れ一反対に言ねー、反対やぐとうなー、
あんししわる陸んかいや葬するり言やーによ。今度お
あぬー、「私が死にーねー、浜口んじ葬すりよー」り言
ちやぐとう。

潮水ぬ満つちーねー、なー砂あ無えんないせーや。
葬すてい後巡たぐとう、持つち行ち無えんたんり、波ぬ。
ぬ。「アイエーナー、私ねー親ぬ言みしえーるぐとうし
る送たしがやー。変な所んかいせーつきやー」ち思てい。
うんにーから改心したところが、なーうんにーから取
り返しえーちかんせー。

あんさーに雨ぬ降いがたーねーよ、親ぬ事、親ぬ孝
行すんりちなー、思び出じやちょーるばーてー。なー
雨ぬ降いねー、又ん私達あ親あ流りーるすがやーりち、
ちやーうぬ事思ているあれーコロコロコロコロすんり。

陸に葬つてくれるはずだと思つて、今度は「私が死ん
だら浜辺に葬りなさい」と言つた。

満潮になつた後に、海水が引くと、砂もみんな流さ
れてしまふでしよう。葬つた後に、浜辺に行つてみると、波に流されてしまつていたつて。それで「ああ、
どうしよう。私は親の言う通りに送つたのにこうなつてしまつて」と思つて、親が死んで改心したつて、もうその時からは取り返しがつかないでしよう。

それで雨が降りそうになると、親孝行しようと思つてやつたことなのにな。その事を思い出して、もう雨が降ると、「私の親は流されるのかねえ」と、いつも思いやつてコロコロコロコロと鳴くそだよ。

6 おに 鬼 餅 由 来

話者 長浜マツ(明治四十年六月十五日生)

翻字・対訳 村山友江

丁度、言るんせー、今ぬ強盜ぐわーりちよーがやー
や。野蛮なやーに、人殺しなつてね。人殺ちえーうい
さぐどう。なー後お此れーかんそーてーならんむー、
世間んかい迷惑かきてーあつちなー、顔ん持つち歩つ
からんむーりち。

ウナイるやたるりぬむんぬ、女がありさーね。うぬ
ウナイぬてー、ムーチー^桂ガーサンかい沢山餅いかんし
作^あくてい。今度^お残波みた^桂崖に連れて行^いつてね。
このムーチーを呉^くがなー、「ヒーヒー」し、うぬウナイ
ぬてー、ホー開^はいてい見^みしたんり。だからあのー、「アバ
ー、ホーよー」り、見^みじやがなー後んかい押し落^うう
ちゃんり。崖んかい。そういう話を聞いた。

だからこれは「鬼ぬ足ぐわー」といつてさー、ムー
チーを食べたら、この殻にムーチーの殻^かやしえーや。
あれをこうアジマーグワード^ひつて、屋根のね。昔は
今のようにスラブ建ての家はないさーね、みんな茅葺^{がぶ}きの家^{いえ}

ちょうど言わば、今の強盗みたいなものかな。兄が
野蛮になつて、人殺しなつてね。人を殺したりした
ようだ。もうしまいにはこのままではいけないと、世
間に迷惑をかけて、これでは顔向けできないと妹は考
えた。

それから、妹であつたらしいが、サンニンの葉に餅
を包んだのをたくさん作つて、残波みた^桂崖に連れ
て行つた。そこでこの餅を食べさせながら、妹は「ヒー
ヒー」と笑いながら陰部を開けて見せたつて。すると
鬼になつた兄が「アバー ホーよー」と見ている時に、
後ろに押し落としたつて、崖にね。そういう話を聞いた。

だからこれは「鬼の足」ということで、餅を食べた
ら、この殻を十字にして軒下に下げたさあ。昔は今
ようにスラブ建ての家ではなく茅葺きさあね。ここ
入口に下げよつたの。これは鬼の足だから、これで鬼

だから、ここに入^{いり}ぐわーに下^さげよつたの。これは鬼^き
ぬ足^{ひき}だから、これで鬼^{おと}を払^{はら}うんだつて。そういう話を
タンメー達^{達^(たつ)}が聞^きちよーるばーてー。

あんしうぬウナイぬ、イキーや押^おし落^{おち}とうち、なー
崖^{はんた}からてー。沢山カーサンかいうぬ餅^{もち}い包り、風呂敷^{ふろしき}
に持^もつて行^いつて、これをたくさん腹^{はら}いつけばいくれて。
又^{また}何^ぬりが、ホー開^はてい見^みしたんり。「アバー、ホーよー」
し、「アハアハー」笑^{わら}いがーなー崖^{はなた}に落^{おち}としたらしい。
だから、この食べた殻^{がら}は鬼^{おと}の足作^{あしつく}つて挿^さした。

を払うんだつて。そういう話をお祖父さん達から聞いたわけさあ。

そうして、妹は兄を崖から突き落とした。サンニン
の葉に包んだ餅を風呂敷いつぱいに持つて行き、餅を
腹いつぱいあげて、それから妹は陰部を開いて見せたつ
て。すると「アバー、ホーよー」と、「アハアハー」と
笑いながら、崖に落として退治したつて。だから食べ
た殻は鬼の足といふことで家の入口に吊るしたそだ。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第四班（阿波根初美・知花春美・恩納加代美）

注①ウナイ 兄弟からみた姉妹のこと。

②ムーチー 一般にシワーシムーチーとかウニムーチーとも称する行事で、読谷では旧暦十二月七日か八日に行われ、大木部落では八日に行っている。臼でひいた餅米の粉を練り、幅約五~六センチ、長さ十二センチぐらいの餅を作り、月桃の葉に包んで蒸して作る。磨除けとして、煮汁を外にまき餅を食べた後の月桃の殻二枚で十字型を作り軒下に吊るす。一歳児をもつ家ではハナムーチーと称して、たくさん作って親類や隣近所に配った。また、男の子の場合は力餅といって大き目なもの作り、それを下にし、その上に子供の年の数の分だけ紐で結んで吊り下げた。

③残 波 読谷村宇座部落にある東支那海に突き出た岬の名称。沖あいは航海の難所として知られ、岬には航海を祈る龍宮神を祭る祠がある。

④アバー 姉妹をさす呼称。



魔除けとして軒下に吊り下げられたムーチーの殻

⑤ダンメー 土族の祖父。または土族の老翁（おじいさん）。

⑥イキー 姉妹からみた兄弟のこと。



サンニンガーサ（月桃）

7 鬼餅由来

話者 宮城ヤス（明治四十四年四月二十五日生）

翻字・対訳 玉城和美

昔、あぬ一首里ぬ大金城村に、兄妹二人、大金城ぬチラ一ぐわーという大変美らかーぎーウナイ・イキ一が生まりとーびたんり。

昔、首里の金城町に兄妹が一人いて、大金城のチラ一というとてもきれいな兄妹が生まれていたそうだ。

あんしうぬ兄妹二人やしがなー、うぬイキーぬ毎日、毎日不思議ぬ事しなー、人捕つてい食み食みすし見じやーに、なー。うぬ此れー確かに此りがるそーつさーりち、字から呼ばりやーい、此ぬチラ一やなし、所払え。「いつたーや此処ねー置つちえーならんぐとう。いつたーイキや、かんかんしなー人食むぬ事なとーぐとう、美らさる童え置からんぐとう、なーあんすんどーやー、チラ一」りちやぐとう。うぬチラ一や大変残念し。「本當、私達あ兄さんのがうんぐどうさびんなー」聞ちやぐとう、「あんし曰掛きているうるむんぬ」り。「とーあんせーなー、まじ此ぬ四、五、六日え待つちよーてい吳みそーりよ、所払えすしん」。

昔えなー、八重山、波照間んかい流する事やいびー

所払いというのは昔は八重山、波照間への島流しだつ

そして、兄妹一人だが、不思議なことに、兄は毎日のように人を捕えては食べたりしていたようだ。これは確かにチラーの兄がやっていることだと、チラーは字から呼ぶれて、所払いということになってしまった。「お前達はここに置くわけにはいかないから、あなたの兄はこうこうで人を食うので、きれいな子供は置いておけないので、所払いするんだよ、チラー」と言わされた。妹のチラーはとても残念がつて、「本当に私の兄はそんなことをするのですか」と聞くと、「もう美しい子にねらいをつけているのだよ」と言われた。「それならば所払いするのを四、五、六日待つて下さいよ。」と願つた。

たんりぐとう。「あんしなー待つちよーてい、呉みそーりよー。むしか私達あヤツチー^(達)があんするむんやいるんさー、私が此れー考え出じやち、女ぬ考え出じやち、私が退治さびーぐどう」り言ちやぐどう。「えーチラー、いやーや女ぬていらむんぬ、上々ぬ人ぬん退治しーさんむんぬ、いやーがあんし本当、いやー自分ぬイキー取つていくえーすんなー」「私が考えとーびん」りち。

あんさーに或る日、餅煮やーに、カーサムーチー^(達)ーちえー本当ぬサンニンガーサんかい包り、カーラムーチー^(達)ーちえー、あぬーそー餅包り。あんさーに自分ぬイキー連てい行じ、うぬ餅煮ちえーる熱湯ん缶んかい入つてい持つち行じやーに。あんさーに崖あ後あなち、あんさーにうぬ後お、「兄さん、今日や私が兄さんが好きな餅持つち来ぐどう。此ぬ餅んちゅふあーら食みよー兄さん」りち、崖あ後あなさーに餅食まさがちー、なーうぬチラーりしぇー自分やなー下あ開てい、あんさーに食まちやぐどう。うぬ兄さんや「アハハー」し笑いがちー、崖んかいけー落ていてい。とー今やさーりやーなさい、「とー、兄さんよー、いやーや私が今日や退治すぐとうやー」りやーなさい、うぬ餅煮ちえーる熱湯う

たようだ。「それでは待つて下さい。もし兄がそういう事をしているのなら、私が良い考えを出して、女の考えで退治しますので」と言うと、「チラー、お上の人に達がも退治できないのに、お前は女だと本当に自分の兄を退治できるのか」「私に考えがあります」と。

そしてある日、餅を煮て、サンニンの葉に瓦餅を包んでね。もうひとつは普通の餅を包んだ。そうして自分の兄を連れて行つて、熱い餅の煮汁も缶に持つて行つたつて。そして崖を背にして「兄さん、今日は私が兄さんの好きな餅を持つて来てあるよ。餅もたくさん食べなさいよ、兄さん」と言つて、崖を背に餅を食べさせながら、チルーは自分の下を開けて見せたそうだ。そうしたから兄さんは「アハハー」と笑いながら崖から落ちて行つた。チルーは今だーと思ひ、「兄さんよー、私が今日は退治するからね」と、熱い餅の汁をかけてしまつた。それからもう兄は死んでしまつた。

いーかきやーに。あんさーにうりからなー、うぬイキー
やけー死レじやぐとう。

今度くどお此くぬチラーや首里すいぬ上代じょうだいから呼よばりやーに、「いえーチルー、いやーやちやーしイキー退治だいじさが」、「とーとーあんあんし、私が貴方達わがうぶなたあ、なー対たいしてすまんり思うむてい、かんかん考かげえ出だじやち、なー私達わたくしたちあ兄いのちさのー餅上戸もちじょうどやたぐどう、餅煮もちにち行はじやーにあんさびたんどーやー」りちやぐとう。「とーチルーよ、いやーや良い氣張いぢばいしどうらちやんどー」りやーに。上じょうからなー、じこー御褒美ごほうび異うらつてい。又、島流しまながしんさりらんなやーに。

あんし此くぬムーチーぬ、此くぬ煮ちえーるムーチーぬ、あぬ餅煮汁もちだいじる、扱あきえ、昔ふるから今まで伝つたえとーる、皆分みなわいみせーんり思うむいびーしが。「鬼おには外そと」、此くれー鬼おにぬ足ひき焼やち上あぎーびんどーりち、屋敷やしきぬ角かど々かくかい全部むるか掛かけてい。又、「福ふくは内うち来る」りち。此くれ、あぬー、サンニンガーサさーなかい鬼おにぬ足ひきぬ形かたちりち、屋敷やしきぬ角かど々かくんかい下さぎーし皆みな覚おぼとーみせーる苦はやいびーしが。今までい私達わたくしたちあうり伝えとーびんどー。

あんさーに此くれーあぬー首里すい 法ほなーふあ法ほくになだ法ほらはちにち・那霸なは・久米くめあ八日は。

そして今度は、チラーは首里の上の方から呼ばれて、「おいチルー、お前はどういうふうにして兄を退治だいじしたのか」と聞かれたので、「私はこうこうで皆様みなさまに対たいしてすまんりと思うむつて、いろいろ考えてきました。そして、兄が好きな餅を煮て持もって行き、退治だいじしました」と言つたら、「チルーよ、よくやつてくれた」と言いわれた。そしてお上の方からたくさんたくさんの褒美ほめいをもらい、島流しまながしも免めんれたそうだよ。

このムーチーの煮汁の扱いは、昔から今まで伝つたわっているので、皆さんお分かりだと思いますが。「鬼おには外そと」というのは、鬼の足を焼き上げるということで、屋敷やしきの角々かどに煮汁を掛けるんだよ。また「福ふくは内うち来る」というのは、とても嘉例かぎれいなことだということ。これはまたサンニンの葉で鬼の足の形を作り、屋敷やしきの角々かどに下さげるのも皆さん覚えていると思いますが、私達は今までそれを伝えていきます。

それからこれは、首里・那霸・久米などは八日は。ま

又、私達あ此処あ田舎、田舎ああぬ七日ムーチーなと一
せー。此れ一ちゃーる理由やがりち、親ん達んかい聞
ちやびたぐとう。昔、唐旅しんせーる人ぬ達や、と一
此ぬ七日、なー此ぬムーチーりしえー誰がん退治えし
みーさん。くんぐとーぬウナイ神ぬる退治せーるむん
りやーなかい、此れーあぬ、大金城ぬホーハイムーチー
りち付きらつとーる次第やいびーしが。

又、此ぬあぬー、久米しんせーる人ぬ達が唐旅しん
せーるちとうなたぐとう。とー此れー嘉例な物ていら
むん、一日や早く煮ち食まち遣らしよーりやーなかい。
あんさーにあぬー本当や七日やしが、とーあぬー明日
や、八日や私達や唐旅かい行ちゆるむんりやーに、一
日や延びてい、とーあんせーうりん煮ち食まち遣らし
よーり。

それが今が今までい、此ぬあぬー沖縄中んかい広が
たる、此ぬ大金城ぬホーハイムーチーりち、じこー有
名な此ぬムーチー。あぬー旧暦なかい十二月の七日え、
今、今ちきていムーチー、いーくるそーみせーらーり
思とーびんたい。これがムーチーの由来記です。

た私達らのこの田舎は七日ムーチーになつてゐるでしょ
う。それはどういう理由があるのですかと親に聞いて
みたらこうだつて。昔は、唐旅する人達がいたらしい。
このムーチーといふのは、鬼になつた兄を誰がも退治
できず、このウナイ神がしか退治できなかつたそだ。
それで、大金城のホーハイムーチーと名付けられてい
るようです。

また、久米の人が唐旅をする事になつたので、これ
は嘉例なものだからと、一日早く餅を煮て食べさせて
行かせなさいといふことになつた。それから本当は七
日なんだが、翌日には久米の人は唐旅に出かけるので、
一日は延ばしてから餅は煮て食べさせてから行かせな
さいと。

それが今につけて、この沖縄中に広がつた大金城の
ホーハイムーチーで、とても有名なムーチー。あのう
旧暦の十二月七日には今につけて、ムーチーはほとん
ど行われてゐると思います。これがムーチーの由来記
です。

注①金城 那覇市の町名。首里城跡の南西斜面に位置。王府時代この町を通り、金城橋を渡る道が南部への要路(真玉道)であった。

②ウナイ・イキー 日常の民俗用語としても用いられており、男女兄弟がいる中で、ウナイは姉妹を指し、イキーは兄弟を指す。

③所払い 遠い島(土地)へ追いやること。
④ヤッチー 平民が兄弟を呼ぶのに使う。

⑤ムーチー 10頁参照

⑥首里里 那覇の東部に位置し、地域全体が高台になって、山紫水明で名所旧跡に富む。かつての王城の所在地で、首里親国といわれていた。

⑦那覇 琉球王府時代の王都、首里の港町として発達。

廢藩置県を機に、政治の中心が首里から移り、県都となつた。

⑧久米村 現在の那覇市久米にあつた中国系住人の集落。

⑨唐旅 中国を唐といい、沖縄と往来することを俗に唐旅といつた。



内金城御嶽 (那覇市首里金城町にある鬼餅伝説で有名な御嶽)

8 おに もち 餅由來

著者 仲榮眞三 良（明治二十七年七月二十日生）

翻字・対訳 宮城昭美

あり何百年、五百年がないらー、六百年がないらー、
又、五百年か此ぬかたんかい三、四百年がないらー一分
からんしが。

あれは何百年、五百年前の話なのか、六百年なのか、
また五百年このかた三、四百年経つてはいるのか分から
ないが。

ありやるばー、大里村がやらー、又何村がやらー一分
からんばーてー。大里村んかい、按司ぬめんせーたん
りしが。うぬ人ん、按司ぬ人ぬ達ぬ、うぬ二人ウナイ。
イキ一生まれたくとう、ありやるばー。又此ぬウナイ
や、女ん子や、立派成長さしが、夫ん持つち、子ん産
ちさしが。此ぬ男あ、うぬ按司ぬ、大里ウナイりぬ人
ぬ長男お、性根や入らんねー、世間ぬ状態ん分からん。
後お盜人し食てい。此ぬ町会、自分ぬ町会、でいむとう
から牛ぐわー取つてい殺ち食らい。盜人さぐとう、島
ぬ人んうり治みーやしーうーさん、町会ぬ人ぬん。
後お暴力がさらー、うつきぬ人ぬ達なかいや適んぐ
とう。今度お、崖端んじ住またるばーてー、自分一人。
崖んじ。崖ぬ山ぬ中んかい行じ、崖んかい住またしが。

そういうことで、大里村なのか、また某村だったの
か分からぬわけさあ。（多分大里村だったのか）大里
村に按司がいらしたそうだが。その按司に、ウナイ・
イキ一が生まれたらしい。そして、この娘はりつぱに
成人して、夫も持ち子も生まれたが。この息子は、按
司の長男は性根が入らなくて、世間の状態も知らない。
後は盜人をして暮らすようになつた。この町会、自分
の町会から牛を取つて食べたりするようになつた。も
う泥棒をするようになつたので、島の人では手に負え
なかつたつて。町会の人達がも。

夜、出^ゆじてい、また取^い物^{ぐら}し食^くて、しが。

たのだが、夜になると出て来ては取つて食べたりして
いたようだ。

後^{あと}お、うぬ^{いな}女^めん子^{むすめ}ぬ知^しりやーに。何^{なに}処^しんかい居^ゐりし、私^{わたくし}達^{たち}あ兄^{あに}さのー何^{なに}処^しんかい行^はじやがやーりち、探^{さが}ちやぐとう。話^{はな}ん何^{なに}聞^きち。かーま崖^{はなだ}ぬ、下^さあ塵崖^{ちりはなだ}やしが、うりが上^のんかい、岩^{いわ}ぬ下^さぬ雨^{あめ}ぬ漏^もらん所^{ところ}んかい住^すまて^い。

後^{あと}お、うぬウナイぬ兄^{あに}妹^{めい}やぐとう、会^あぢやいが行^はじやぐとう。兄^{あに}妹^{めい}やるむんりやーに、なー会^あぢややーに話^{はな}ん何^{なに}し。うれー小便^{しゃべ}しーが行^はじやくとう、童^{わらわ}あん抱^{いだ}ちよーたんりぬむんぬ、「あーうぬ童^{わらわ}えあんし美味^{うまい}さざざざる」りち、なー食^くまんり。なーうんにーから恐^ふるさし、うぬウナイや。「私^{わたくし}ねー小便^{しゃべ}し^つ來^くひーりやーに。あんすらー糸括^{いとあわせ}ち、うま身体^{から}んかいがらー背^せ中^{なか}んかいがらー。なーうれー触^ふり者^{もの}やぐとう。糸^{いと}や、なーうりが先^{さき}なかい、うりあんやんりち悪^{わる}者^{ひと}なたぐとう、物^{もの}考^かえし。うぬ前^{まへ}うて^い糸^{いと}括^{あわせ}じがさらー。又^{また}行^はじやるばーがやらー糸括^{いとあわせ}ち。うぬ糸^{いと}や括^{あわせ}ち、岩^{いわ}んかい、うりんかい括^{あわせ}らつとーぐとう、強く止^{とど}みやーに自分^{じぶん}や逃^{のが}ぎたくとう。

後は妹にも知れて。兄さんはどこに住んでいるのだろ^ううかと、探しに行つたそ^うだ。話なども聞いてね。遠く離れた所の下にはチリが捨てられて^{いる}ような崖だつたが。その上にある岩下、雨が漏らない所に住まつていたようだ。

そうして、妹は兄妹だからといふことで、子供も連れて会いに行つたらしい。話などもして、妹が用を足しに行つて^{いる}間に、「ああ、この子供は何て美味しそうだ」と、もう食べようとしたんだつて。その時からもう恐ろしくなつて、この妹は。「私は用を足して来ようね」と言つたら、背中かどこかに糸を括られたようだね。もう兄は気が狂つてしまい、悪者になつてゐるのだから、妹にさえも糸を括つて行かせたようだ。それで妹はいろいろ考えて、その糸を岩に強く括つて自分で妹はいろいろ考えて、その糸を岩に強く括つて自分は逃げて行つたつて。

うぬ後からん又会ちやいがさらー。あんし「此れ」
なー、取つてい退きらんあれ一大事やん」りち。餅ん
かい、玉、ガラス割やーに、込みてい。「なー、餅持つ
ち来ぐとう、食み」りち、さーに。

うれー食らぐとう。だーうれーまん飲まらんるあた
らー、直ぐうり取いゆーし、又うぬ下見したんりがらー。
「うれー何やが」りちやぐとう。マタバシンかい、「う
れー鬼食え口」りきぐとう、驚ち逃んぎたんりるばー
てー。

あん、マタバシ見ちやぐとう、見したぐとう、「うれー
鬼食え口、あんし此れー、口え又、餅食むし」り言やー
に。餅食てい逃んぎてい行じ、崖んかい押し落とうち
ちやんりがらー。うりまで一分からんしが。なー、う
ぬうりが離りたるばーてー。うんにからうれー落てい
てい、命損なたるばーてー、崖んかい落ていてー。ウ
ナイぬ落とうちやんりがらー。うりまりウナイぬ落とう
ちやんりるまで一分からんしが、崖んかい落とうちや
んり。うれーなー悪者やしどう。

その後からもまた会つたのか、そうして「これはも
う退治しなければ大変だ」と。餅に、玉、ガラスを割つ
て込めて。「餅を持って来たから食べなさい」と兄にあ
げたようだ。

それを食べたら、もう飲み込むことができなかつた
んでしようね。妹がすぐさま自分の下半身を開けて見
せたら、「それは何か」と、兄は聞いた。股ぐらに、「こ
れは鬼食う口」と言つたら、驚いて逃げたというわけ
さあ。

股ぐらを見せて、「これは鬼を食う口」この口は餅を
食べるものだよ」と言つと、餅を食つて逃げて行こう
としたのを、崖に突き落としたとか。もう、それから
離れたわけさあ、それから崖から落ちて命を落とした
ということさあ。ウナイが突き落としたとか。そこま
では、ウナイが突き落としたというまでは分からない
が、崖に落としたつて。それは悪者だからと。

注①大里村　沖縄本島南部島尻郡の中北部に位置。一九四九年に与那原が分離独立。四町二村に廻まれ、沖縄では数少ない海に面しない村の一つ。

②按 司 位階名。元は地方に一城をかまえて割處したが、尚真王時代に首里に中央集権が敷かれた際、首里に集められ、一間切を領する身分となつた。

③ウナイ・イキー 16頁参照

9 千年蛇

話者 比嘉 靜（大正四年十月十七日生）

翻字・対訳 宮城昭美

蛇が竜になつたという話をします。

ある首里の山での出来事だという話ですが。もうその男というのが、たいそうな貧乏者で、毎日、山から薪を取つては売つて、日々の生活をしていたらしいが。ある時、山へ行つて薪を取つてゐる時に、岩からぬなー、直ぐパチパチパチし、岩割りてい。さくとうなー、魂抜きー、「何やがやー」んち見ちゃぐとう、ハブぬなー、ちゃぴなーハブぬ、出していうりし。なー魂抜きやーに逃ぎらんでいさくとう、うぬハブぬ「私

ある首里の山での出来事だという話ですが。もうその男というのが、たいそうな貧乏者で、毎日、山から薪を取つては売つて、日々の生活をしていたらしいが。ある時、山へ行つて薪を取つてゐる時に、すぐもうパチパチパチパチと音がして岩が割れた。たいそうびっくりして、「何事かなあ」と思い見てみると、ハブが、とてつもなく大きいハブが出て來た。もう一目散に逃げようとしたら、ハブが、「私は今まで、何十年もの間

ねー、あぬ、今げーんかんなー、何十年ちなー人間ん
かい見ららんやーに、私ねー天んかい昇てい神様、
竜ない事やしがなー。いやー一人んかい、私ねー見
らつてい、なー竜ない事おならん大変殘念やしが。
いやーがなー、あぬ一人んかい一言やていん話さんむ
んやれー、私ねー竜なてい天んかい昇いぐどう。いやー
んかい、又何処ぬ何処ぬ山なかい行ちるんしぇー、私
が、天から直ぐ宝物落とうち取らすぐどう。いやーや、
大変あぬー富しみーぐとう、どーりんなー私あ願え聞
ちとうらし」んち、うぬハブぬうりさぐとう。

人間に見られることがなかつたので、天に昇つて神様、竜になれるところであつたが、あなた一人に見られてしまい、もう竜になることができなくなり、大変残念なことだ。しかし、あなたが他の人にこのことを一言も話さなければ、私は竜になつて天に昇ることができる。代わりに、あなたとどこぞこの山というふうに決め、あなたが行けば、私が天から宝物を落としてあげ、あなたを大金持にしてあげるから、どうか私の願いを聞いてくれないか」と、ハブがその男にお願いをした。

うぬおなー「私ねーなー、あぬー大変貧乏者なでい
る、うま薪取てはいる暮ちょーいびるむん。あんしえー
なー聞ちやびーん。人んかいなー、全然話さびらんく
とう、あんしえー、あぬー私にんかい宝物落とうち呉
みそーり」でいち。なーうぬ薪取やーや、「なー今日か
らーうつさし薪取らんていん済むさ、竜ぬ天から宝
物落とうち呉みしえーんでいるむんぬ」ち、家かい戻
ていさくとう。

すると、男は「私はとても貧乏なために、ここで薪を取つて暮らしている有様です。だからあなたの言うことは聞きます。他の人にはいつさい話をしませんので、その代りに私に宝物を落として下さい。」と言つた。すると、もう薪取りをしていた男は、大変喜んで「今日からは薪を取らなくてもいいさ。竜が天から宝物を落として下さるとおっしゃつているからな」と家に帰つた。

何處ぬ、何處ぬ山んかい来よーんでいち約束おし、
うぬ山んかい行じやぐとう。んちやなー竜ぬ直ぐ、なー

「えい」そこの山に来なさい」と約束はしていたので、その山へ行つてみると、竜が松の木の上にいた。そう

うぬ松ぬ上んかい。やつぱしなー、あぬ一宝物あらん
しが、竜ぬ糞、竜ぬ糞おな一大変宝なていさくとう。
竜ぬ糞な一直ぐ、うぬ松ぬ上んかい。パラパラパラし落
ていていさくとう、「何がうりがん宝やがやー」んち、
うり魂抜きていそーしが。又竜ぬ、「此れ一大変宝、何
ぬ薬んかいん使りー、此りやか富ぬ宝あ無えんくとう。
いやーやあぬー、うり一拾んち行じやーに、直ぐいやー
うりさーに、錢なでい大変富すくとう。又いやーがう
り使たる時分お又ん来よー。私が又んありすくとう」
んちなー。ちゃーうんぐどうし、なー毎年、あぬ、使
い果てていたる時分お、又うぬ山んかい行ちるんしぇー、
竜ぬ、糞うりしぇーしーしーし。なー、大変なー、う
れー富し。じこーぬ裕福なたくとう、けー忘やーに。
恩儀なー、自分ぬやつぱしー、樂なー、苦めー忘りぐ
るさしがなー、あんし、うりんでいちさーに、けー忘
やーになー。

ある、「何がいつたーや珍し物」、或るつ人ぬ、「あん
し貧乏者やたるむんぬ、あんし富し、やーちゅーちゅ
んなかー、裕福などーしが、何ぬ成行ぬ有てい、いやー
やあんし富そーしがんち、或るつ人ぬ聞ちさぐとう。

して宝物ではないが、竜がその松の上に大変貴重な竜
の糞をパラパラパラと落とした。すると男は、「何だ、
これが宝物なのかなあ」とびっくりした。すると竜が、
「これは大変な宝物だよ。万能薬としても使うことが
できるし、これ以上の宝はないので、あなたはすぐそ
の糞を拾って行つて売ると、すぐにお金となつて大層
大金持になるからね。それに、あなたがそれを売り払つ
てなくなつた時分には、またここに来なさいね。私が
糞を落としてあげるから」と。そうやつて、もう毎年
使い果たした時分には、その山へ行けば竜が糞を落と
してくれたりしたので、その男は大金持になつていつ
た。そして大変豊かな生活をするようになると、竜と
の約束をすつかり忘れてしまつた。恩儀といふものは
苦しい時は忘れがたいが、自分が楽な生活をしている
と、竜との約束も忘れてしまつたようだね。

ある日のこと、「どうしたんだ、あなた方は不思議だ
ね」と、ある人が「あんなに貧乏者だったのに、こん
なに大金持になつて、あつという間に大層豊かになつ
ているが、どういうわけで、そんなに大金持になるこ

「わんねーなー、今げーかーなー、言やんじじどうやしが、いやん一人んかい聞かすぐとう、いやー何んでい言なよーやー」でいち。けー忘しやーに、昔ぬ苦しみえーけー忘やーに、うぬ人んかい話さくとう。

とができたのか」と尋ねた。すると男は、「私は今までずっとと言わないでいたのだが、あなただけに話すから、誰にも何も言うなよ」と、竜との約束や昔の貧乏だった頃の苦しみはすっかり忘れて、もうその人に話してしまった。

直ぐ、うぬ竜や、やつぱし人間んかいなーうりし。
話しーねー、「いやーや、私ねー大事やぐとう」んでい
言ちよーしが、なーうぬ人んかい話さくとう。直ぐ天
から、うぬつ人達あ、あぬー屋敷んかい落ていてい來
に、死じさぐとう。「いやーや、あぬー、人ぬ、うつき
約束しん聞かん。私ねーなー竜やないさん。なーうり
ん」でいちきくとうなー。うれー魂抜^{たまぬ}ぎてい、「私がる
悪さいびーたる」んちなー、うりそーしが。仕方なら
んなー、約束お守^{まも}いさんどうあくとう。^{また}、うぬ人お
元ぬなー、苦しみんかい戻^{むら}てい、貧乏者なたんでいる
話^{はな}。

話者 石嶺カメ(明治三十三年五月十五日生)

翻字・対訳 村山友江

キジムナー（注）とう友達ないねーや、じこー御馳走しー
やすしが。うりが背負、キジムナーが背負し魚取りが
行ちーねー、海ぬ底（注）うていん何処（注）うていん屁（注）ひーねー、
うまんかいボンみかちはん投（注）ぎーたんり。

キジムナーと友達になつたら、大漁でたいそう御馳走はするのだが。それがおんぶ、キジムナーにおぶわれて魚取りに行き、海の底ででも屁でもしようものなら、その場に置き去りにされてしまうんだって。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第一班(遠藤庄治・上原ヨシ・石嶺まさみ・玉寄春美)

注 キジムナー 沖縄諸島に伝承される木の精。本島北部ではセーマ(今帰仁)、ブナガヤ(大宜味)などの異名がある。

11 アカマタ聟入（注）浜下り十カマンタ孵化十芋掘り女（注）
話者 比嘉ウシ(明治四十一年十月二十七日生)

翻字・対訳 辻土名初美

アカマター（注）るやんりしがてー、うりが化きーねーうりやんりよ。うぬ男（注）、騙すたんりせーや、うぬ男（注）、騙さ（注）ちなー、うぬさくとうなー、うれーなーあぬなー騙さ

アカマターなんだけどね、それが化けるんだって。アカマターが男に化けて、それで男に騙され懷妊してしまつた。懷妊すると三月三日の浜下りに浜で砂を踏

りやーになー、うぬ女おなー沢山子持つちさくどう。

丁度、三月三日ぬ浜下りてい、浜踏らみーねーよ、う

ぬ子あ全部下るすたんりよ。うれーさらない下るすたんりよ。

あんさーにうりからぬうりつしる浜、三月三日や女ぬなー、大変あぬー良いうりやぐとうりちよ。二月三日ねー浜下りし、すんりぬ話や、昔ぬうれー聞ちよーるばーてー。

あんすぐとううぬ昔ぬうれーカマンタよ。芋、煮るカマンタぬ有たせーや。うりかんし俯んきてい置ちーねー、うりが下うとてい孵化のアカマターや、人騙すぐとうや。人騙すぐとうあんねーすなりち、年寄ぬ達や全部、「カマンターよ木ぬ枝んかい下げてい置き」とうか、又「かんし俯らち置き」りち話しみせーたるばーてー。丁度うぬうりからやんりぬ話やたるばー。

又、あぬー別ぬ村ぬ話ん聞ちよーしがよ。丁度なし、うぬ化きとーぬアカマターぬなー、あぬ女ぬ芋掘いたんりや。芋掘いたんりしが、うぬ芋掘いん所ぬ前んじ立つちよ。直ぐかんし立つちよーていーなし、大変うぬ女とう相手すてーるふーじよ。相手しすてーるふーじや

むと、その子供は全部下りたそだよ。それはすぐに下りたそだよ。

それから浜に下りるようになつた三月三日は女にとつては大変良いということで、三月三日には浜下りする、そういう昔の話は聞いたわけさあ。

そのことから昔のカマンタね。芋を煮るカマンタがあるでしょ。それをそのまま伏せて置いてたら、その下でアカマターが孵化して人を騙すつて。人を騙すから、そういうことはするなということで、年寄り達は「カマンタは木の枝に下げて置きなさい」とか、または「俯せて置きなさい」という話をなさつていたよ。ちようどそういうことからの話だつたわけ。

また、ある別の部落での話も聞いたのだが、ちようど男に化けたアカマターがいて、そこでは女が芋を掘つていてたつて。芋を掘つていたのだが、芋を掘つている前方に、アカマターが化けた男が立つてよ。すぐこのように立つて、一生懸命に女の相手をしていたそ

しが、なーうぬ女のー男なでい見とーぬばーて。なー
男なでい見ていさくとう。側ぬ人のーなー、やつぱし
なーアカマターンかいなー立つちえー踊い踊い、立つ
ちえー踊い踊いすし見じやーに、棒し打ち殺ちよーる
ふーじよ。側から行じやーに。

あんさぐとう、うぬ女おなー、直ぐブチクンなやー
に。ブチクンなでいあぬー、丁度なーうぬ男、多分知つ
ちよーるーんかい化きとーてーるばーるやさに。トウ
ラーヒーり言たんよ。あんしートウラーヒー、トウラー
ヒーりち、うり殺ちえーんりちてー。ブチクンなでい
そーたんりしが。あぬー息返らちから見したぐとう、
「いやーやうりんかい騙さつているうんどー」りち、
やたんりさりぬ話や、あぬー伝え話聞ちよーんばーてー。

だね。相手をしていたようだが、女には男に見えてい
たわけさあ。しかし、側にいる人には、やつぱりもう
アカマターが立つては踊り、立つては踊りしている姿
に見えたので、その人が棒で殴り殺したそうだよ。側
から行つて。

すると、女はすぐさま気を失つてしまつた。気を失つ
てしまつて、アカマターは多分その女の知り合いの男
にでも化けていたんでしょうね。トウラーヒーと言つ
ていたよ。そして、その男が殺されてしまつたとい
うことで、「トウラーヒー、トウラーヒー」と呼びなが
ら、女は気を失つっていたそしが。正気に戻つてから、
「あなたはその男に騙されているんだよ」という話に
なつたということ。そういう伝説は聞いているわけさ
あ。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第四班（阿波根初美・知花春美・恩納加代美）

注①アカマタ ナミヘビ科に属する大型の無毒の蛇。全長八〇~百八〇内外だが、奄美諸島、沖縄諸島に広く分布する固有種。人家周辺
から耕作地及び山地にかけて、いろんな場所に生息している普通種で、主として夜間活動し、地面を徘徊していることも多い。

②三月三日（サングワチサンニチ） 海浜に下りて災厄を払い清める習俗。また旧暦三月三日に御馳走を持つて浜辺に行き、潮に手
足を浸して清め、健康を祈願して楽しく遊ぶ行事。

③浜下り 4頁参照

④カマンタ（鍋蓋） ススキやチガヤ等の茅で作られた円錐状のシンメーナービの蓋。時にはピロウの葉や蘆製も見られる。

⑤トウラーヒー トウラーは男性の名で、ヒーは年上の男性に付く言葉で、即ち兄さん（トウラー兄さん）と同じ。

12 アカマタ智入むじり（カマンタ孵化ふか十浜下りはまお十針糸はりいと）

話者 仲榮眞三 良（明治二十七年七月二十日生）

翻字・対訳 知花孝子

此くれ一又また、だいぬ話はなしや、昔んかし、昔んかしえ全部むるうぬカマンタ、
今なまんカマンタや有ある筈はず。（えー、木きのやがやー）カマン
タリち、グシチぬ葉はし作つくてい、かんし丁度ちよどマカイぬぐ
とうし作つくやーに有あしが。うれー地面じめんんかい置おきちーねー、
うりが下しんじ、アカマタ註注一ーン子こぬ三さん回かい孵化しりねー、人騙ひとだま
すんりるばーやしが。

あんざーなかい今こん度どお、うぬアカマタ代経物でいじゆぶつが
やたらー、今こん度どお女めの騙だまち。えー、男いきがんかい化いろおとこりやーに、
色男いろおとこんかい化いろおとこりやーに、後あとおアカマタ一ぬありさしが、
ありやるばーてー。後あとおうりんかい騙だまさりやーにそー
しが、なー妊娠かさぎとーぐどう。

これはまた、昔のこのカマンタ、今でもカマンタはあるはず。（ええ、今のは木で作られているのかな）カマンタといつて、すすきの葉で作つて、こうしてちょ
うどお椀のようになつたが。それを地面に置いたら、それの下でアカマターの子が三回孵化したら、
人を騙すそだよ。

そうして今度は、何十年も生きているアカマターであつたのか、女を騙したそだよ。ええ、男に化けて、
色男に化けてしまつた。アカマターが男に化けたわけ
さ、後はそれに騙されて、女性は妊娠してしまつた。

妊娠ていしーねー、アカマターヌ話ぬ、「私ねー人間んかい種込みでい、やがてい生まりーん」りち、どーやーりち言ちやぐどう。「あー、いやーうれー、いやーあんさんてーまん、いやーが下るちえーぬ種え、女ぬ三月三日(注は一ま)に浜んかい行じ、浜遊び、砂踏らみねー、きつさ下りとーん、駄目やんどー」り言ちやるばー。「種下るち人間んかいうりし、種下るちん三月に浜下りし女ぬ、童ん達ん何んくい女ん行じ、浜ぬ砂踏らみーねー、なー駄目やんどーや」りちやくどう。

うんにーから女ぬ、浜遊べーなー、うれー信じらんあれーならんりぬ事やたんり。あんさー此ぬ、年寄りやーあん言ちやしが、年寄まりん本当や行ちゅしやんり。次々ぬ子、孫んかいあんやぐどう。
うにーから又、浜ぬ砂踏らみーねー、上等りやーに。又、此ぬカマンタん、昔ん人お、何処んかいぶつとうかしわん、まるぬ有ん所んじ。今ぬぐとう、昔え、衛生りしん無えんくとう。何処にん置つちゃんぎーたんり。今あ又、うぬ話ぬ通ていから、古ガマンタぐわーぬうれー、木んかい下ぎーんりさ。木んかい下ぎついわつくいねー、又肥さわん、何さわんりる、燃さわん。

妊娠したのでアカマターヌ、「私はね、人間に子種を下ろしたので、やがて生まれるよ」と、仲間に話した
ら、「ああ、お前がそう言つても、お前の子種は、女が三月三日に浜に下りて浜遊びをして、砂を踏んだらすぐ下りてしまふよ。駄目だよ」と言つた。「人間の女性に子種を下ろしても、三月に子供達でも誰でも女性が浜下りをすると、砂を踏ませたら駄目になるよ」と言つたつて。

それから女の、浜遊びは認められるようになつたといふことさあ。そういうことだと年寄りは言つていたが、それは年寄りでも本当は行くべきだつて。次々子や孫にもあるかもしれないということでね。

その時から浜の砂を踏むのは良い事だといふことになつた。また、このカマンタも、昔の人はどこにでも捨てていたらしいが、昔は今のように衛生も良くなかつた。どこにでも置きっぱなしにしていたそうだ。今はまた、その話が広まつてからは、古いカマンタは木に下げるつてさ。木に下げて、それが朽ちると肥やしにしようが燃やそうがいいわけさ。だつてもう昔は薪も

昔え薪ん無えらん、なー芥ぐわーまでいん、燃すしん
無えんるあてーぐとう。

アカマターぬ話や、ありやるばーてーや。私達んか
い、えー美ら二才が来んりせー、うぬ門んかい、若女
ぬ、童ぬ座んかい、後お親ぬ妊娠とーし見ち、「いやー、
何どうありつしさが」「りち、尋にひちさぐとう。「どうー
ち、時間外り遅か美ら二才が来ん」り言ちやぐとう。
夜中、忍り、何ぐわうれー話や聞ちがさらー親あ。何なん
時來んりちしーねー、うぬ女んかい針持たち、着物縫の
いる針、糸や長ん付きやーに。とー、うり欹髻結とー
ぐどう、なー侍え装いやぐとう。欹髻んかいうぬ針貫
きよーりち、さーに貫ちやーに、うぬ女ん子ぬ針、糸
んちや長ん付きて。い。

後お、だーうれーうぬ女会ぢやていから、洞窟んか
い行ちゆくとう。えーうり辿てい行じやぐとう、洞窟
んかい直ぐ、ちやつひんアカマターぬ居たんりるばー
てーや。うんにーからアカマター、人まやーすんりち、
立派注意せーるばーやさ。欹髻結とーぐとう侍え装い
るやくとう。欹髻んかい、うぬ針挿しよーりちやたん
りるばーてー。あんさーにうぬ糸ぬ挿しなぎなー洞窟

なく、塵芥までも燃やすくらい何もなかつたんだから。

アカマターの話はこうだ。アカマターが美青年に化
けてやつて来るというのはね。若い娘の所にやつて來
たらしいが、しまいには娘が妊娠しているといふのに
親が気づいて、「おまえは誰とそなつたのか」と尋ね
たら、「いつも、遅くなつてから美青年がやつて来る」
と言つた、夜中に忍んで来ると。話を聞いたんでしょ
うね。何時頃来ると言つたら、娘に針を持たせて、着
物を縫う針に糸を長くつけてね。美青年に化けたアカ
マタは欹髻を結つて、侍の装いをしていたからね。娘
に、針に長い糸を通して、欹髻に針を挿しなさいよと
言いつけた。

アカマターは娘に会つた後は洞窟に入つて行つたら
しい。そこで糸を辿つて洞窟に行つたら、そこには大
きなアカマターがいたつて。それからもうアカマター
は人を騙すから、注意しなさいよということさあ。欹
髻結つて、侍の格好をしていたからね。欹髻に針を挿
しなさいといふことだつたらしい。そうして糸をさし
たまま洞窟に帰つて行つたので、糸をたどつて行つて

んかい、うぬ糸追てい行じやぐとう。なーうれー明が
らち見ちやぐとう、アカマターぬぢやひんし、代経物
ぬ居たんりるばーやさ。

うんにーからアカマターとううれー、三月アシビン
浜んかい、若童ん達ん、年寄から何から行ちゅしやん
りち、うんにーから念入つちやんりるばーてー。代経
な物お、何ん大概や化りーんりがやたらー。

明かりをつけて見たら、もうそれは何代も経た大き
アカマターがいたということさあ。

そのアカマターとの事から、三月遊びには浜に行く
ようになつた。若者から年寄りまで行くものだよと、
それから浜に行くようになつたといふわけ。代を経た
物は何でもほとんどが化けるということだつたのか。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第十二班（喜屋武猛・鈴木信一・神谷初子）

注①カマンタ 27頁参照

②アカマタ 26頁参照

③三月三日 26頁参照

④歌 肩 成人男子の髪型。元は頭の右辺に結び、後は中央に結ぶようになつた。貴族は十五歳で、一般は十歳内外で結んだ。

13 ア 力 マ タ 駒 入 へ 小 便 吼 文
　　（むこ　いり　しょうべんじゅもん）
　　話者 砂 辺 靜（明治三十六年二月十八日生）

翻字・対訳 村 山 友 江

自分ぬ、あぬ私達あタンメー達からただかんしあぬ、
　　（どう　わうた　たんめーたからただかんしあぬ、）

私のお祖父さん達から聞いたことで、女が夜おしつ

女おんなが夜よるおしつこするでしょ。その時に、あのう三回さんかい睡ねやつて、するというて。またあのー、このしつこした後に、アカマター赤馬がうりさーなかい、この女おんなはアカマターの子こ妊娠にんしんして。

また三月さんがつになつたら、このアカマターが同じ友達ともだちに話して、それをあのー、「あんたは高慢こうまんするが、人間じんげんや物知り者むのしわん、あの一月三日さんがつみっかぬ海うみぬ浜はま、砂踏さなづらみーねー、いやーがうりしえーぬうれー、全部むる下さるすんびー」り言いち。そんな事ことる自分達どぶなたあお父とうさんから聞きちよーるよー。

こうするでしょ。その時には三回睡ねをはいてから、するんだよと言いつてね。またあのう、おしつこをした後に睡ねをしなかつたのか、アカマターが来て、女おんなはアカマターの子こ妊娠にんしんしてしまつたらしい。

そうして三月になつて、アカマターが友達にその事を話したら、「あなたは高慢こうまんになつてゐるが、人間じんげんは物知りだよ、三月三日に浜はまへ行き、砂さなを踏ふんだら、あなたの子供こどもはすぐに下さりるんだよ」と言いつた。そんな事をお父とうさんから聞いたよ。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第六班 へ山城悦子・奥間圭子・又吉利美子×

注①タンメー 11頁参照

②アカマタ 26頁参照

14 天人女房

話者 砂辺 靜 (明治三十六年二月十八日生)

翻字・対訳 村山友江

うりんやつぱしなー搜かてーるばーてー、うぬ男おとこん。

それもやつぱり搜かしたんでしょ、その男おとこも。そ

あんさーにうり一人うりとう夫婦なやーない。あぬ一女お天から下りていつ来よー。あんさーなかいうぬ男とう付き合いさーなかい、子、ウナイ・イキー産往なちえんりたがやー。二人りがらー産なさーなかい。うぬ女おてんかい上がてい行ちゆるばーてー。

あんせー、うぬ飛衣装とうびんすりせー夫うぶぬ隠かくちえーぬばーてー。
倉くらんかい、うぬ夫うぶぬ飛衣装とうびんそお隠かくちやぐとう。なー天あまんか
い飛とでー行いからんせーやー。あんさぐとう、うぬ子こぬ
達ちやが、あぬ子守節くわいじやくぬ何なんやたがやー

アンマが飛衣装とうびんすや 倉くらぬ下したに置おきちえーんどー
りがらー、隠かくちえーんどーりがらー言いち。

あんさーなかい夫うぶぬ畑はたけかいが行いじよーたらー、何なんが
そーたらーやる筈はずやしがてー。うぬ子こぬ達ちやから聞きちやー
なさい。あんさーにうぬ飛衣装とうびんそお倉くらから出だじやちゃー
なさい、うりし天あまんかい上がたんりさりぬ話はなしや。

うして夫婦になつてね。女は天から下りて来て、その男と付き合つて、兄妹が生まれたといつていたかな。二人生まれたらしい。その後に女は天に上がつていくわけさあ。

その飛衣装は夫が隠してあるわけさあ。夫が戸口に飛衣装を隠したからね。もう天には飛んでいけないでしよう。そうすると子供達が子守歌の何だつたかな

お母さんの飛衣装は 倉の下に置いてあるよ

と歌つたとか、隠してあるよとか言つて。

そうして夫が畑に行つていたのか、何かしていたと思つたが。その間に母親は子供達の歌を聞いて、飛衣装を倉から出して、それで天に上がつて行つたといふ話だつたよ。

話者 比嘉 靜（大正四年十月十七日生）

翻字・対訳 村山友江

あぬ犬ぬ子ぬ話。なー昔、お父さんから聞ちやる話
るやいびーしが。あぬ昔、山原奥山んかい男ヤグサミ
ぬ、妻居らん、なー自分一人暮らしぬ居てーるぐとー
びーしが。

うぬ男ヤグサミエー雌犬ぬ、なー大変大犬飼らてい。
なー可愛ぐわーし大変飼てい、丈うわーちさぐとう。
なーうぬ犬おなーやつぱし、うぬ人ぬ子、なー妊娠てー
るばー。あんしさぐとうなー、うぬ犬おなー、一大事
などーさー、私ねー犬んかい子妊娠らちねーんむー、
ちやーすがやーりちそーしが。なー仕方あならんるあ
ぐとう産ちやぐとう。なー女ん子産ち、大変なー美ら
容姿ん子なーいさぐとう、なー魂抜きやーにうぬ男あ。
うぬ犬お殺さーに、うぬ童ぬ親あ、犬お。

ある犬の子の話。昔、お父さんから聞いた話です。
ある昔、山原の山奥に男やもめが、妻もいない独り暮
らしがいたそなだが。

その男やもめは雌犬の大変大きな犬を飼つていたつ
て。もう大変可愛がつて育てていた。言わばそんなんふ
うに犬を妻代わりにして飼つていたようだ。そうして
いるとその犬は、その人の子を身籠もつてしまつたつ
て。そうしたら、犬にもう…、一大事なことになつて
しまつた、私は犬に子を身籠もらせてしまつたがどう
しようと思つたのだが、どうしようもないでしよう。
それで、女の子が生まれたのだが大変美しい子で、そ
の男はびっくりした。それから、その子の親である犬
を殺してしまつた。

殺さーに、丈々なーいさぐとうなー、大変美ら容姿
ん子なたぐとう。うぬ山原ぬ村々ぬ人ぬなー大変望り

男は犬を殺したのだが、子供は育つにしたがつて、
大変な美人になつたそなだ。山原の村々の人達が大変

そーしが、「うれーいつたんかい妻なする訳ねーいかん、
うれー理由ぬあくとうや、いかなしんいつたんかい妻な
する訳ねーいかんどーやー」りちさくとう。なー、「何
が、何ぬ理由ぬ有いびーが、あんし美ら生まりそーる
むんぬ、あんしなー私達あ妻えなさびらんが」りちさ
ぐとう。

うぬ女ぬやつぱしなー、一ちえー女ぬ親んかい似ちょー
る癖ぬ有てーるふーじ。形えなー全部人間やしが、夜、
夜中、人ぬ寝んじゆる場合ねー、今る便所りちん有る。
昔えなーフールりち、フルんじ便所お入たせーや。
フルんじ、昔えなー今る便所りちん有る。

あんさーになー、うり一ちえー女ぬ親んかい似ち、
フルんかい行じトウーシヌミーんじ、やつぱしうり
食いてーぬふーじ。あんさぐとう、やつぱしうぬ癖ぬ
悪つさぬ、うり一ちえーなー犬んかい、犬おなー糞食
いんりぬ話やぐとう。あんしうり一ちえー、あぬ女ぬ
親んかい似ちさぐとう、うぬ男ぬ親あなー大変恼り。
形えあん立派生まりとーしが、なー此れーうり一ちえー
女ぬ親んかい似ちよーるむん。なー夫ん持たさらんむ
んなー、ちゃーすがやーりち、うぬ男ぬ親あなー大変

望んでいるのだが、「その子はお前達の妻にするわけにはいかない。それには理由がある。どうしてもお前達の妻にするわけにはいかないよ」と言つていた。「何ですか、何の理由があるのですか。そんなに美しく生まれているのに、どうして私達の妻にはできないのですか」と聞いた。

その娘には、一つだけ女親に似てゐる癖があつたらしい。姿形は人間なんだが、夜、夜中に人が寝静まつた頃になるとね‥。今は便所があるので、昔はフルルといって、豚舎と兼用だつたさあね。昔は豚舎で用を足していたさあ。今は便所があるが。

だからそれが女親に似て、豚舎に行き便所の穴で、やつぱりもう（糞を）食つていたつて。そうしたら、その癖の悪いこと、それ一つは犬に似ていた。犬は糞を食うという話だつたからね。それだけは女親に似たので、男親は大変恼んだ。姿形は立派に生まれているのだが、もうこれだけは女親に似てしまつて、夫を持たすこともできないがどうしようとも、男親は大変恼んでしまつた。

惱りそーしが。

なーちやーすがやーりち。或る字ぬ男ぬ、「何が、何りちあんし理由ぬあんり言がやー、うぬ人お」、聞ちやべとう。「あんあんやくとう、此れーなー犬ぬ子なてい、是非なー仕方あならん、立身しみーる事んならんくとう」りち、聞ちやぐとう。或る男ぬなー、木ぬ陰ぐわーんかい忍びーてい、本当なーうれー男ぬ親ぬ言ぬぐとう、トウーシヌミーんじ糞食いがやーりち、忍びーてーるふーじ。

あんさぐとう言んねーすんねー、なー人ぬ寝んてい静かなたぐとうからー、トウーシヌミーんかい入つち糞食いてーるふーじやいびんて。なーうぬ男あ魂抜ぎてーい、「はーなー、此れーやつぱしなー、うりーちえー女ぬ親んかい似ちよーるむん」りやーに驚ち。あんしさんりぬ話。

やつぱし生物とうぬ子あ形え人間やていん、うりーちえー女ぬ親んかい似ちよーたんりぬ話やしが。うれーなー嫌な話ややしが、昔話、聞ちやる話。やつぱしもう結婚することはできなかつたそうですよ。

もうどうしようかと惱んでいた。ある男性が「何で、どうしてそれほどの理由があると言うのかな、その人は」と聞いたら、「かくかくしかじか、これはもう犬の子になつて、もう仕方がない。立身させることもできない」と答えたようだ。(それで)男は木の陰に隠れて、本当に男親の言うように便所の穴に糞を食いに行くだろうかと、確かめる為に潜んでいたつて。

するともうその通りに、人が寝静まつた頃に、便所の穴に入つて行つて糞を食つたらしい。男はびつくりしてしまつて、「はあ、これはもう、これ一つは女親に似ている」と驚いてしまつたという話。

やつぱりもう、生物との子は姿形は人間でも、悪い癖だけは女親に似ていたという話。これはもう嫌な話だが、昔話、聞いた話である。やつぱりもう結婚することはできなかつたそうですよ。

注①山 原 沖縄本島北部国頭地方のこと。山が多いのでそう呼ばれている。

②フール 豚舎のこと。

③トウシースミー フール（便所）の穴。糞を落とす穴で下には豚を飼っていた。

16 子育て幽靈へ打紙由来

話者 石嶺カメ（明治三十三年五月十五日生）

翻字・対訳 辻土名初美

妊娠ままよ、あぬー送たぐとうて。亡ちやぐとう、
送たれー、あんしあまんじ後生んじ、又なー童や産ちえー
ぬふーじてー。あんし、やーさしみてーならんむーり
やーなかい、菓子ぐわー、波之上ぬ店んじ、菓子ぐわー
買てい呉てーしーしーし、うりやたんりんどーやーり
ぬ事やたるばー。

あんさぐとう、珍しい物、じゅんに錢お店ぬ主んか
い取らすしがや。まじうぬ錢お側んかい置ちよーてい
試ししんりよー、うれー錢おあらんや。うぬ女お毎日
波之上ぬ後んかい行ち戻やーすぐとう、うれー錢おあ
らんくとう、試しし側んかい置ちよーてい見りよーり

妊娠したまま葬つたって。亡くなつたからそのまま
葬つたら、後生で子供が生まれたらしい。そうしたら
子供にひもじい思いをさせてはいけないと、波之上の
店からお菓子を買って食べさせたりしていたそうだよ。

そうしたら、珍しいことだと、店の主が受け取る時
にはお金なんだがね。まずそのお金を側に置いて試し
てごらん、それはお金ではないよ、女は毎日波之上の
後ろに行き来しているのだから、それはお金ではない
はずだから、試しに側に置いてごらん。そして試し

さぐとう。じゅんに錢おあらんだんりぬばー。紙るや

てみると、お金ではなかつたつて。紙だつたつて。

たんり。

あんしる後生ぬうれー、七日ヒン力に焼香にん紙打つ
ち錢御捧ぎーるふーじどー。

そういうことから後生のお金ということで、初七日
など法事には紙錢（打紙^{はぢ}）をお金の代わりにお供えす
るそだよ。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第一班（遠藤庄治・上原ヨシ・玉寄春美・石嶺まさみ）

注①波之上 琉球八社の一つ。熊野三社五權を祀り、祭神は本宮が伊弉冉尊、相殿は左に速玉男尊、右に事解男尊の三神を奉祀。「琉球神道記」に「此權現ハ、琉球第一大靈現ナリ。建立ノ時代ハ遠シテ人知ラズ」とある。創建年代は不明であるが、元来護國寺の鎮守社として勧請したものである。那覇市若狭の海岸に突出した断崖の上に所在

②ウチカビ 紙錢のこと。ンチャビ、アンジカビともいう。一般に死後の世界の通貨と信じられ、藁や古暦などを原料に漉いた黄色紙に、槌などで叩いて錢型をつけたもの。

17 夫婦の赤い糸

話者 比嘉 靜（大正四年十月十七日生）

翻字・対訳 宮城昭美

縁結びの話ぐわー。あぬー、ある時、うぬ村なかい、
大変なー美ら容姿、男前ぬ男ぬ居てーるぐとーびるむ

縁結びの話です。あのう、ある時、その村に大変美
男子、男前の人人がいたらしいんだが。

のー。

或る時、山なかい遊びーがんち行じやぐとう、うまから、うまんかいなー、白髮御年寄ぬめんしえーといさくとう。「えー、いやー妻ないしえー、あぬー私が分かとーしが、言ち聞かさやー」んちさくとう、うぬ白髮御年寄ぬ。「あんしなー、私あ妻ないしえー誰やいびがやー」りちさくとう。「あね、あまうてい薪ぐわー掃ちゆる、あぬ童ぐわーやさ。うりやなー、丈々んないねー、いやー妻ないしやんどー」んでいち、うぬ白髮御年寄ぬ言みそーちゃぐとう。「とー此れーなー、くんぐとーる嫌な童あぐわー、あんしぇー、私ねーなー妻すんでいーねー」大事やくとう」んでい言やーに、うぬ男ぬうりんかいなー傷付きてーるぐとーん。うんぐとーる嫌な童ぐわー、なー妻すんでいしえーならんむんでいやーに。なー傷付きていさくとう、うぬ童ぐわーやなー、顔んかい、少え、薄傷ぐわーぬ有てい。

さーに、なーうぬまま又うりしざくとうなー、うれーさーに。

アカマターんかい^(售)騙さつてい、あぬー、アカマターぬなー、直ぐ^{しな}女んかい化けていうりし。大変なーうり

ある時、その男が山へ遊びに行くと、そこに白髮のお年寄りがいらっしゃったようだ。そして、「お前の妻になる人を私は知っているので、教えてあげようね」と、白髮のお年寄りがおっしゃった。「それなら、私の妻になる人は誰ですかね」と尋ねると、「ほら、あそこで薪を集めているあの子供だよ。あの子が大きくなつたらお前の妻になるんだよ」と、白髮のお年寄りがおっしゃつた。「これは困つたものだ。あのような嫌な子供を、私が妻にするとなると大変なことになる」と言つて、男は子供に傷をつけてしまつたようだね。このような子供を妻にしてはいけないと思つてね。もう傷をつけてしまつたら、その子供の顔には小さい傷が残つてしまつたつて。

それから、もうそのまま時も過ぎたんでしようね。

男はアカマターに騙されていた。アカマターが女に化けて、その男を騙していたらしい。アカマターとも

しる騙ち、うぬ男騙ちさくとう。うれーなー、うぬアカマター又、大変美ら男騙ちさくとう。うれーなー、うぬアカマター、大変美ら容姿女なてい。あんねーぬ

嫌な童ぐわーんちなー、うれーうしえーてい。

し、なー、うぬアカマターや、大変ぬ美ら容容女なてい見やーに。うりんかいなー騙さつてい、うぬ女る妻するでいち、うりさくとう。うれーなーえアカマターなでい見しが、うりがーなー美ら女なてい見ていさくとう。なーうりんかい騙さつてい、人ぬ、「此れーかんしなーアカマターンかい騙さつてーならんしが。うりちやーし退治さらーましがやー」んでいち。

あんさーになー、或る五月五日ぬ、あぬー五月ぬ場合に、菖蒲ぬ此処んかいなー、うぬ男あ隠わちよーてい、うぬ、うまぬ村ぬ女ぬ達ぬ、なー菖蒲ぬうりし。うぬ鬼ぬなー、うぬ男なー騙さんでい、直ぐ菖蒲うりすしそーしが、やつぱし菖蒲ぬ力さーに、うぬ悪、うれー退治し。

うりさくとう、「なーうぬー、うりが山うてい傷付きてーる女童え丈々なてい、大変美ら容姿なていさーに。

知らず、その女に夢中になつてゐる男は、薪取りをしている子供を馬鹿にしていたわけさ。

それでもう、男には大変美人な女に見えたので、そのアカマターに騙されて、妻にしようとしていた。しかし、実はアカマターで、人が見るとアカマターに見えるのだが、男には美しい女に見えていた。もうアカマターに騙されていたので、他の人が「これはこのままアカマターに騙されはいけない。どのように退治したらよいものか」と考えていた。

そうして、ある五月五日に、菖蒲の中に男を隠して、村の女達が菖蒲の威力でもつてやつつけようといふことになつた。鬼は男を騙そうとして、菖蒲の方へ行こうとするのだが、菖蒲の力に負けてしまつて、鬼を退治することができたつて。

男が山で傷をつけた子はいよいよ成長して、大変美しい娘になつていた。やつぱりもう、男はその女と結

やつぱし、うりとうるなー、あぬーなー結婚、二ービ
チエーし。なー、うりが又、うぬ女童えなー丈々んな
てい美ら容姿なたくとう、うりとう丁度二ービチぬ日。

あんさくとう、「何がなー、いやー顔んかい少ぐわー^{ちら}
傷ぬ有しが、何がいやー傷えうれー何、ちやーさが」
んちやぐとう。「私ねーある時、小かる場合に、山うてい
薪ぐわー掃ちゅんりしーねー、或る男ぬなーあんし傷
付きらつてい、私ねーあぬ人ぬ：」「あんしやー、う
ぬ白髪御年寄ぬ言みしえーたしえー本当ぬなー、んちや
神様るやみしえーさ、やー」んでいち。うぬ男なー、
うにんからなー大麥、うりし。やつぱしなーうぬ薪掃
ちゆたる童ぐわーとうる、やつぱし夫婦おなたんでい。

そうして、「お前の顔に少し傷があるがどうしたのか」と尋ねると、「私はある時、小さい頃に、山で薪を集めていたら、ある男に傷をつけられたんですよ」と答えた。「ああそうか。あの白髪のお年寄りが言われたことは本当のことだつたんだね。神様だつたんだろうね」と、男は言つて。その時から神様を信じるようになり、かつて自分が傷つけたあの時の子供と、やつぱり夫婦になつたんだつて。

採集 S2・5・8 読谷村民話調査団第十一班（宮里光雄・桃原・知花春美）

注①アカマタ 26頁参照

②五月五日（グングワチグニチ） 旧暦五月五日は男の節句で、大麦に砂糖を入れてせんざい同様のアマガシ（甘菓子）を作り、御馳走と一緒に仏壇に供えた。供えた後は、菖蒲の茎で作った箸を用いて食べた。

※赤い糸伝説「夫婦の赤い糸」の話型に「アカマタ笄入」と「菖蒲由来」が結合している。

18 真玉橋の人社

話者 比嘉 静(大正四年十月十七日生)

翻字・対訳 宮城昭美

真玉橋の由来記の話をぐわーさびら。此ぬ真玉橋ぬ
橋え、なー架きていん、架きていん、もう七回架きて
ん、全部とうじゅまらんないさくどう。「珍し物、此
れー何がなぬなー、謂われぬどう有がやー」んち、村
ぬ人お大変苦勞しみそーち。「ちやーしなー此れー、橋
架きたらとうじゅまいがやー」んち、大変苦勞そーるな
かばに。

或る、うぬ村んかいヌールぬ、神生りそーる女ぬ居
てーるふーじやいびんよー。うりんかいなー夢見してい、
「いつたー字ぬ真玉橋え、是非人柱立ていらん間あなー
とうじゅまらん。此ぬ村なかい、七色ムーティーそー
る女、人柱とうし立ていらん間あ、真玉橋のーとうじゅ
まらんくどう」ち、夢見していさくとう。
うぬ女お、村頭スー前んかい行じ、「なー、うぬ真玉
橋え幾回架きていんとうじゅまらんしえー、道理ぬ有
ていなー、やるふーじ。やいびーるむのー、此ぬ字、

真玉橋の由来記の話を致します。この真玉橋の橋は、
もう架けても架けても、七回まで架けても、完成する
ことができなかつた。「珍しいなあ。これはもう何か特
別な訳でもあるのかなあ」と思つて、村人達は大変心
配なさつていた。「これはどのようにしたら橋を架ける
ことができるだらうか」と思案していたらしい。

その村にノロが、靈力のある女性がいたらしく、そ
の女性が、「あなたたちの字の真玉橋を完成させるには、
是非人柱を埋めないかぎり完成することはないでしょ
う。この村の七色の元結いをしている女性を人柱にし
ない限り、真玉橋が完成することはできない」という
ような、夢を見たそうだ。

その女はもう、村頭の前行つて、「この真玉橋は何
回架けても完成することができますのは、理由があつ
てのことらしいのですが。この字、村から七色の元結

村なかい七色ムーティーそーる女人柱どうし立てい
るんしえー、此ぬ橋えとうじゅまいしが、あにーさん
限れーなー、とうじゅまらんどー」でいち、うぬヌー
ルぬ、言ちさくとう。「あんしえーなーうれー、此ぬ村
中、まじ女ぬ有るつさ、全員調びてい見だ」ち。なー
一人残さん全員、女ぬ有るつさ、若さる女全員調びてー
るふーじやいびーしが、七色ムーティーそーる女お一人
ん居らんないさくとう。

此れー、多分、此りが口からるなー出じとーるむん
でいち、此ぬ女ぬ、頭調びていさくとう。やつぱし、
うぬ、言ちえーる本人ぬ七色ムーティーし、そーてー
るふーじやいびーるむのー、「なー仕方あならん。いやー
自分ぬ口から出じとーる事るやくとう、いやーなー国
ぬ為、字ぬ為でい思ていいやーあまかい、人柱とう立つ
ていとうらし」んちなー願ていさくとう。「私ねー、あ
んしえー仕方あならんなー。國ぬ為どうやるむんぬなー、
あんしえー人柱とうし立つちゅんてー」でいちなー、
うりし。

うぬ夫ん大変哀りし、又夫とうぬ仲ねー、女ん子、
ナビーぐわーでいちなー、女ん子産ちえーてーるふー

いをしている女を人柱にしたら、この橋は完成するこ
とができるが、そうしない限り、完成をみることはな
いでしようね」と、ノロが言つた。「それならば、この
村中の女という女を全て調べて見よう」ということに
なつた。一人残さず全員、女は若い女性も全員調べた
らしいんだが、七色の元結いをしている女を一人も見
つけることができなかつたらしい。

これは、もしかしたら、ノロの方から言つたことで
もあるしと思つて、本人の頭を調べてみた。案の定、
そういうことを言つた本人が七色の元結いをしていた
らしい。「もう、仕方がない。あなた自身の口から出で
いることだから、どうか、国のため、字のためと思つ
て、あそこに人柱として立つてくれないか」と願つた。
女は、「私が七色の元結いをしているんだから、仕方の
ないことです。國のためですから、人柱となりましょ
う」と心を決めた。

またそのノロの夫も大変哀れんで、それに夫との間
にはナビーぐわーという娘がいたらしい。「私は先に物

じやいびーるむのー。「なー、私ねー□から先、□から先物言やる私ねー人柱とうなつてはすぐと。ナビーぐわーよー、いやーやなー私あ遺言守てい人先え物ん言なよー。物お言なよーやー」んでいち、遺言さくと。なー、うぬナビーぐわーや、やつぱし女ぬ親ぬ言し守てい、物お言やん。な、チーグーと。うし、なつてはすぐと。

容姿ん美らさぬなー、大変美ら容姿なつてはすぐと。

或る首里から侍ぬ、うぬ村んかい勤みなつてはすぐと、うぬ侍ぬ大変望でい、「なー是非、容姿ん美らさるあくと、いやー私あ妻なつてはすぐとらし」んちそーしが。なー物お言やんるあぐと、妻ねーならうん。「なーちやーすがやー」んち、うぬ侍え大変なー哀りそーしが。「いやーがなー物一言るん言ちとうらしーるんしえー私ねーなー、いやー妻し首里かい連ては行ちゅしが」、そーしがなー、物お言やんどうあくと。

あんしんなー、「まじ首里かい連ては行じ、いやーや、あぬ、親ぬ達んかい、許し受きてはしーるんしえー、あぬー、物お言やんていん済むくと。」んち、「親ぬ達ぬ許ち呉みしえーるむんどうんやれー、いやー妻すべ

を言つたために、人柱となつて立つことになつたのだよ。ナビーぐわー、あなたは私の遺言を守つて、人より先には口を出さないでよ、物を言うなよ」と、遺言された。するとナビーぐわーは、その通りにお母さんの言いつけを守つて物を言わない。もう亞のようになつてしまつた。

もうナビーぐわーはたいそう美人に成長した。ある時、首里からその村に勤めで来た侍が、侍がナビーを大変好きになり、「あなたはとても美しいし、是非とも私の妻になつてくれないか」とお願いした。しかしナビーは何も言わないので、妻になることはできない。しかし侍は、「どうしたらいいものか」大変悩んで、「あなたが何か一言でも話してくれれば、私はあなたを妻として首里に連れて行くのだが」と一生懸命にナビーに言うのだが、何も言つてはくれなかつたらしい。

それでも、「まずあなたを首里に連れて行って、私の親に許しをもらうことができればいいから。あなたは何も言わなくてもいいよ」と、「親が許して下さるのであれば、あなたを妻にするから」と、その侍はナビー

とう」んちなー、うぬ侍え、ナビ一ぐわー首里かい連
てい行じきくとう。やつぱし親ぬ達あ「物ん言やん人お、
妻えならんくとう」でいちそーしが。うぬ侍ぬなー、
「いやーが物一言るん言ちとうらしーるんしぇー、私
ねーなー、いやー妻すしが。どーりんなー、物一言い
ちとうらし」んちさくとう。

なー相談そーるなかばに、直ぐうまから、ハーベー
ルぬ、白ハーベールーぬ、飛でい来くとう、女ぬ親や
てーるふーじやいびーるむのー。なーうにーうとーーー、
「いやーや、あんし立身する為に」んちさくとう、う
ぬー、ナビ一ぐわーや、うぬ蝶々直ぐ追てい、歌し。
さぐどう、うにんからー、物言出じやーに、うまぬなー、
嫁になてい、大変幸福なたんでいる話やいびん。

ぐわーを首里に連れて行つた。やつぱり親達は「物を
言わない人は妻にすることはできない」ということで
あつた。しかしその侍はあきらめないで、「あなたが何
か一言でも言つてくれれば、私はあなたを妻にするこ
とができるのに、どうかお願ひだ。何か一言でも言つ
てくれ」とナビーに一生懸命お願ひした。

するとそこに白い蝶が飛んで來た。それはお母さん
であつたらしく、その時にはもう、「あなたが幸福にな
るために」とお母さんが言うと、ナビ一ぐわーは、す
ぐ蝶を追いかけていつて歌を詠んだ。そうしたら、そ
の時から、物を言い、言葉が出て侍のお嫁さんになり、
大変幸福になつたという話です。

採集 S52・5・8 読谷村民話調査団第十一班 〈宮里光雄・桃原・知花春美〉

注①真玉橋 国場川に架かっている橋で、現在豊見城村と那覇市を結ぶ要路。創建は一五二一年で、一八〇九年、一八三六年に修復され現在の橋は一九六三年の築造。

②真玉橋由来記 平良良勝作の戯曲。初演は一九三五年頃。

③ヌール ノロなどとも称す。沖縄本島区域で、公儀の祭祀を司るために村々におかれている女の神職をいう。

④七色ムーティー 七色の髪飾りでもとどりを結つたもの。

19 真玉橋の人社

話者 長嶺ウシ(明治三十三年一月五日生)

翻字・対訳 村山友江

何処がらかい通てい行ちゅん所かい、あま通ていん
ちゃんよ。此処やさ、七色ムーティーそーる人ぬうりつ
し造たんりる橋え、うまぬ造りわん造りわん壊りてー
ういし。或る人ぬ、此処あ七色ムーティーそーる人、
埋づみらん限れー此ぬ橋の一保かんりちやぐとう。字中
ぬ人調びていん、七色ムーティーりしえー無えらん。

どこかに行く時に、そこを通つてみたのだが。ここ
だよ、七色ムーティーしている人を埋めて造つたとい
う橋は、そこは造つても造つても壊れていたというこ
とだつた。ある人が七色ムーティーをしている人を埋
めない限り、この橋は保たないと言つた。それで字中
の人を調べても、七色ムーティーをしている人はどこ
にもいなかつた。

後おあん言ちやる人、調びたくとう自分んかいなてい。
自分があぬーうまんかい埋ずみらつたんりしがてー。
うぬ埋みらりーが行かんまーる、女ん子んかい、「人先え
物お言なよーやー。人先え物お言なよーやー」りち。うり
遺言し出じたくとう。うぬ女ん子や大変美ら容姿るやし
が物お言らん、なんじゅ。

後は、そう言つた人を調べたら、それは本人だつたつ
て。自分が埋められるはめになつたので、埋められる
前に、娘に「人より先に物は言うんじやないよ。人よ
り先に物を言うなよ」と、遺言して出て行つた。する
と、もう娘は大変な美人に育つたのだが、あんまり物
は言わなかつたつて。

ある首里の御殿殿内から大変望まれて、妻にして連
し妻すんち連てい行じやぐどう。うぬ御殿殿内ぬ男ぬ、
あぬ親や、「物ん言らん人妻さんとうくるが、此ぬ私達

ねーならん」りちさぐとう。なー芝居る見ちやしがてー、
ハーベールーぬぐどうし、マイコーエマイコーサギーーし
が、後お「アンマー」り言ちやぐとう。「物言たん」り
やーになー、本當ぬ結婚式なやーになー、うまぬ嫁な
たんりさりぬ話え、芝居る聞ちゃんれー。あんすぐとう、
人先えあまり言らんしぇーましりぬ。

ならん」と言つた。もう芝居を見たのだが、母親の化
身の蝶がマイコーエマイコーするのだが、後は「お母さ
ん」と物を言つたそうだ。「物を言つた」と、その時に
本当の結婚式になり、そこの嫁になつたという話は芝
居で聞いたさあ。だから、人より先にあまり物は言わ
ない方が良いということ。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第八班（長嶺洋子・田場米子・上原常子）

注①真玉橋 44頁参照

②七色ムーティー 44頁参照

③御殿殿内 王子・按司の家、またはその人をさす敬称。

一般に王族の家や建物を意味する語である。



真玉橋

20 親の声は神の声

話者 仲榮眞三郎（大正四年四月十七日生）

翻字・対訳 知花めぐみ

私は今から、スンサー、ひいては魂込みの話を一応やつてみたいと思ひます。

昔或る所んかい、お父さんとうお母さんとうめんしえーたんでいしが。うぬ長男ぬ、今考え言わばー、立法議員みたいような方やたのーんり思ひびーしが。

或る場合に息子ぬ唐旅、唐旅行ちゅし、言付きらりやーんかい、唐旅んかい行じえーるふーじーやいびーん。あんさーんかいうぬ男ぬ親あ、自分ぬ息子ぬ、ちやーさらー無事に帰つい來がやーんち、あの手この手使てい、書物ぬ家んかい行じえーるふーじーやいびーん。

あんどう此ぬ書物んかい行じょーる所、やつぱし、スンサーぬうれー名字がやらー、私ねー話い聞ちょーびーしが。スンサーでいぬ書物、あのー書物い会ぢややーなかい。会ぢやでいさぐと。うぬスンサーんでいぬ書物が、「いやーやあぬー、いつたー子…」、あんさーんかい、うれー運勢当ていらぢやぐと。「いやー子あ

私は今から、スンサー、ひいては魂込めの話をやつてみたいと思ひます。

昔ある所に、お父さんとお母さんとがいらっしゃつたそうですが。この長男は、今考えますと、言わば立法議員のような方だつたと思ひますが。

ある時に息子は、唐旅へ行くことになり旅立つたようでした。そこで、父親は、自分の息子はどうすれば無事に帰つて来るだろうかと考え、あの手この手を使って、易者の所へ行つたようです。

そうして占い師のところへ行つたところ、やつぱし、スンサーという名字だったと私は話を聞いています。スンサーといふ占い師の所へ行つた。行つて、占いをさせたところ、このスンサーといふ占い師が、「お前達の子は…」と、それで、運勢をみたようだ。「お前の子供は死んでしまう」と、「私のこのスンサーの占いでそ

「すん」りち、あぬー「私あ此ぬスンサーり書物から見とーさー」でい言ちやぐとう。うぬ男ぬ親あじこ一心配し、「あんさーちやーさらーうれー、免かれぬ方法や無えに」んちさぐとう。「あん、うれー一ちえー免かれる方法ぬ有んどー、有んどー」んち。

あんさーなかい、うれー唐んかい着ちから、いえーじゅー二人やてーるふーじーやいびーしが。あんさーんかい「うれーちやーしあぬ、私あ子あ助かいぬうりが有がやー」んちさぐとう。うぬスンサーり書物からー、書物ぬ、あぬ石とう、必じあぬー、岩の石から三個持つち、あぬー割ていぢやーなかい。うりとう、サンとう、又水、茶碗んかい入つていち。あんさーんかい、「松金よー、松金よー」んち、長男お、松金い名やいびーたんでいしが。うり三回、サンさーから招ち、「松金よー、松金よー」しさぐとう。うぬ當時、親ぬかんし、「松金よー、松金よー」しすんでいる場合なかい、此ぬ唐にうぬ長男ぬ松金んでいしとう、又うりが友達とう二人や唐んかい着ちよーてーぬぐとーびん。

あんさーんかい、雨えじこー降たぐとう、なー隠いん所ん無えらん、岩の下んかい隠たぐとう。あんさー

う見えています。」と言つた。父親はひどく心配して、「それならどうすれば、これを免れる方法はないだろうか」と問うと、「免れる方法が一つあります。」とスンサーは言つた。

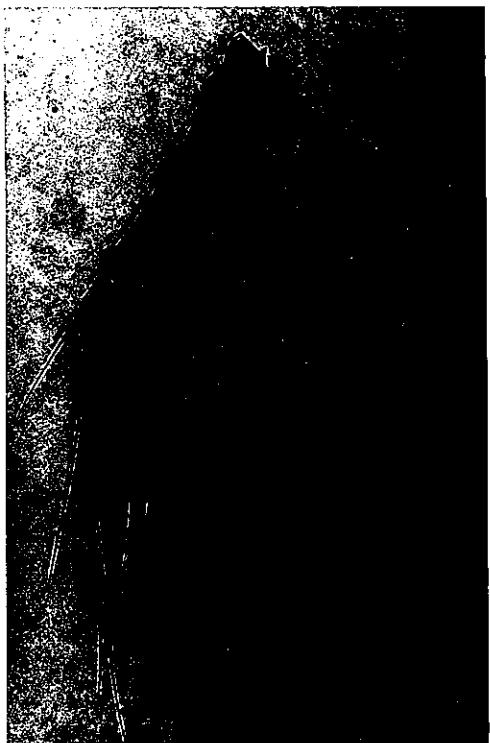
これは息子が唐へ着いてからのことだ、友達二人だつたようですが。そこで父親が、「これはどのようにすれば、私の子が助かる方法があるのでしょうか」と聞いてみた。このスンサーの見たてでは、必ず岩から三個の石を持ってきて、あのう割つて来てですね。それと、サンと、また水を茶碗に入れて来なさい。それから、「松金よー、松金よー」と呼びなさいといふことだつた。長男は松金という名前であったそうですが。これをサンで三回招いて、「松金よー、松金よー」と呼んだ。父親がこのように、「松金よー、松金よー」と呼んでいた頃、長男の松金とその友達の二人は、唐へ着いていたようです。

その時、雨がひどく降つてきたのですが、もう隠れる所がなかつたので、二人は岩の下に隠れていた。岩

んかい、岩ん下んじ隠とーぬ場合なかい親ぬ、「松金よー、
松金よー」んちサンさーかい三回招ちやぐとう、「何が
私達あターリー声ぬ有しが」んち。声ぬ有るやーんち、
外んかい飛ん出じたぐとう。同時にうぬ岩ぬ崩りやーん
かい、友達ぬ一人や押さーてい。あんさーに此の松金り
しえー、親ぬ呼びーんねーしたるやーんち、外んかい
飛ん出しどう、飛ん出たぐとう命え免かつてい。うり
から此ぬ、魂あ付きーねー、岩からー、岩から、石三
個や割ていぢやーなかい、サンさーかい招ち、魂あ付
きーんでいぬ、うぬ昔ぬ、例い話ぬ有いびーんさい。

の下で隠れている時に、父親が、「松金よー、松金よー」
と、サンで三回招いたので、「何だ、私の父の声がする
が」と言つて外へ飛び出したと同時に、岩が崩れてしま
まい、友人の一人は岩に押しつぶされてしまった。そ
うして、松金という青年は、父親が名前を呼んでいる
ようだなと思い、外へ飛び出したので、命は助かつた
ということ。そういうことから、魂を込める時には、
岩から、石を三個割つてきて、サンで招いて、魂を込
めるという、昔の例え話があります。

注①魂込め マブイウティ（魂が体から抜け落ちること）をし
ている人の魂を再び体に込める事。またはその祈願。
②立法議員 琉球政府時代の議員。設立当初（一九五二）、
全琉球の八つの中選挙区から三一人の公選議員によつて構
成されていたが、奄美諸島の日本復帰（一九五三）にとも
ない、五四年からは二九の小選挙区住民代表により組織さ
れた（一九六五年には三二選挙区となる）。立法議員は年
歳二十五歳以上で、少なくとも五年間琉球に住所を有し、か



サン

つ戸籍を有する者でなければならぬとされた。

③唐旅 16頁参照

④スムチ 主に易書をもとにして人の運や、建築の日取り、方向などを卜する民間巫者。

⑤サン ススキの葉を結んで作ったもので、魔除として用いる。現在でもサンの信仰は根強く、日常ひんぱんに行われて、祭日などの御馳走の上にサンを置く。そうすると御馳走が腐敗することなく、新鮮であると信じられている。

21 難題聾むこ

話者 玉木惠雄(明治四十年七月八日生)

翻字 知花めぐみ

昔の伝説をひとつやつてみましよう。昔といつてもいつの昔か知りませんけども、ある所にとても美しい女性の一人暮らしがおつたそうです。その女性の隣には、七十ぐらいのお婆さんがおりまして、親子同然仲良く暮してやっていたんだ。

ある時、ある一人の男が、散歩がてらその道を通りて来たんですけども。あんまり水が欲しくて、その家を訪ねて来て、男はその家に休んだそうですけども。非常に身なりのいい紳士、侍であつたそうですね。それで、男は女を一目見て、「ああ、これは非常に世の中つていうのは、世間は広いもので、社会も出てみなければ、こんなに世の中には美しい女もおるな」と、非常に感服していたそうです。また、女の方にしても、いつも田舎の一人暮らしなんですから、この男を一目見て、すでにもう心奪われたという話ですけども。

で、その後のいきさつはどうなつたかと言えば。男はその人を、女を愛するが為に、毎晩毎晩、雨の日も風の日

も通つて、どうしたらその人、女に会えるか、また、りつぱに自分の思いを打ち明けられるかと思つて、毎晩通つたそうですがれども。雨の日も、雪の日も、風の日も。その女は義理が堅くて、自分の心にこう燃えているけども、打明けることができなかつたんです。幸い隣りにお婆さんがおつたんですから、そのお婆さんがそれを聞いて、「不思議だ、この男は非常にこうその女に対する愛を求めて来てるなあ」ちゅう事はお婆さんが察しまして、早速その女の所に行つて事情を話したそうですがざいます。「あんたを毎晩あの、歌を歌つたり、で、泣いたりする男が通つて来るけど、あんた分かつているか」つて言つたら、「ええ、すでに分かつてます」と、もう率直に言つたそうです。ね。そしたら女も、もともと嫌いじゃなくつて好きな方ですから、それを率直に認めたそうですがも。

んで、お婆さんは、早速男の方に会いまして、「あんたはどういう事情があつて、こうして毎晩通つて来るか」と言いましたら、「実は、これこれと、自分は女を嫁にもらいたい、何とか考えてくれんか」とお婆さんに頼み込んだんですけど、お婆さんは、仲立ちとして、仲人として両方の仲を取り持つて、取り計らつたそうですがざいます。そしたらお婆さんは、女の所へ行つて、実はこれこれ話を聞いたら、「あなたを欲しがつて、あなたを嫁にしたいと。いうけども、あんたは行く氣があるかないか、その返事を承つていい」と言いましたら、「そうです。私はあの人が好きだけでも、しかし、好きながらも、そこには問題が三つあるから、その三つの問題を解いてくれたら、私は、その人の妻になります。」、そう言つたらしいですね。

もうお婆さんはその仲を取り持つてゐるものですから、こつちへ行つたりして仲を取り持つていたそうです。で、女が言つには、「あんたの問題といふのは、どういう問題か」と言つたらしいですね。そしたら、第一の問題は、「馬二つに、いいですか、乗馬二つに鞍を一つ掛けて乗つてこい」と言つたそうですよ。それが一つの問題。そしたら、お婆さんはさつそく男の所へ行つて、女の問題は馬二つに、(乗馬、乗り馬だな、昔は乗り馬と言うんだ)、乗馬二つに鞍を一つ掛けて乗つてこいと言つたらしいですよ。それはもちろん我々が常識から考えてできないでしょ。馬が二頭で鞍が一つと言えば。同じ馬一つには鞍が一つしか掛けないからな。「そうかこれは不思議だ、どうしよう

か」と考えた。非常にこう、で、「それを一週間のうちに返事する」と、こうきつぱり女は言つたそうですね。

そしたら、男は一生懸命考へ込んで。で一週間、いよいよ今日が返事する日になつても、なかなか気は焦つてい
るけども、答えが出てこない。これはどうする、どうせ、女は自分の妻にしたいし、問題は解けないし、もう氣
ばかり焦つてどうする事もできないんだよ。そしたらいよいよその日になつて、今度はまたお婆さんが、「もう問
題はできましたか」と聞いて、「もうどうもできないから何とか知恵をかしてくれ」って言つたらですね。「だから昔
からね、年寄りは宝と言つるのはここですよ」と言つたらしいですね。で、いちいちこのお婆さんに諭されたらしい
ですな。「するとそういう事はどういう事ですか」と男が聞くと、「あんたの家にはね、あんたの所には、妊娠した
馬がおるでしよう」と言つたら、「ええおります」。んで、「それで、二つ、とにかく馬二頭になつてゐるから、それ
を鞍一つ掛けて持つて来い、乗つて来い」「ん、あなるほど、そうだねえ、まあ常識で考えてみたらば、馬一
つに鞍一つはもう決まつてゐるけども、お婆さんが言うとなるほど、ありがとうございました」、こうお礼を言つて
早速、また今度返事をお婆さんが女の所に持つて行つたらしいですな。

そしたら、今度はお婆さんは、早速その返事を持つて女の所へ行つたらしいですよ。んで、「あんたが第一のあの
問題は、馬二頭に鞍一つ掛けて持つて来いという問題だつたけれども、これは、実は、あの人の、男の返事では、
妊娠した馬に乗つて来いという事ですから、これはどうか」と言つたら、「これはもう完全に当たつています。その
通りです」で、女は非常に感服してね。

で、次の第二の問題は、もう一つ次の問題は、「走川の水ぬ止まいねえ、止まる時に來い」と言つたらしいね。川の
水が止まつた時に來いという事だつたらしいよ。そうなるとこれはもちろん、なんぼなんでも、いくらなんぼ乾
燥しても、雨が降らなくつても、川の水が止まるつて事は絶対ないわけね。多少は、少し流れてる。で、それが止
まつた時においでちゅう事なつたんですよ。ね、これはもう不思議だ、いくら天願川でも、どこの川でも水が止ま
るという事は、絶対にないけど、それが止まるという事は滅多にもう、なんぼ何百年と、何十年くらい雨降らなくつ

ても、川の水が止まるといふ事はない。それはまた今度は大きな問題になつてね、男はね、すごく考へて。

でまた、お婆さんはその問題を持つて、男の所へ行つたらしいですね。で、「一応第二の問題はこういう問題だけれども、とにかく、それも一週間のうちに必ず返事してくれ」、そう言つたらしいですよ。さあそれから、第二の問題はできないでしよう。今度はなお焦つてとにかくどうしよう、どうしようと男は。もうその問題を聞かれた場合はなお焦つて、でどうする事もできなくつて。それも一週間のうちに返事する事、という事になつて。それから、今度はお婆さんは言つたけども、「これも一週間のうちに返事する事だから、一週間のうちに返事を聞かしてくれ」と言つたらしいですよ。さあ男はさつき言つた通り焦つているけども、自分の知恵ではどうしても、それはもう解釈する事はできなかつたらしい。

で、その時は恥を失つて、とにかくもう忍んで、お婆さんに「教えてくれ」と頼み込んだらしい。「いやー武士じよー、うぬあたいん分からん（おまえは武士なのに、これくらいも分からぬのか）」て、お婆さんにこう非常に言われたらしいですよ。氣ばかり焦つていてるけどもね。で、「これはこれ、実はこれこれこういう事だと。昔からね走川の水の止まるちゅう事は絶対にない。」とね。「これはあの人非常に賢い知恵で持つてあんたは言つただけだ。それがあんたは察してないか」と、こう非常にこう、まあ笑われていると言うのか、この教訓されたらしいですね。で、「そのわけはどういう事ですか。」と聞いたら、「実はその訳と言うのは速川の水が止まる事は絶対にないけども、走川の水が止まるというのは人目を忍んで、夜の二時か三時か四時ね、人目に付かんように忍んで来いといふ事ですよ」と。「ああそうか、なるほど。走川の水止まいん、おそらくまあ乗馬に鞍一つ掛けて走川の水の止まいんね」来い、と。それは夜一人忍んで来いちゅうわけですよ、ね。

そしたら、今度は、お婆さんは仲もつておるから早速その返事を持つて今度、女の所へ行つたらしいですよ。「実は第二の問題はこれこれこういう、走川の水ぬ止まいねー来いといふのは、人の寝静まつた、今の一時以後、二時か三時の真夜中に一人忍んで来いちゅう事だけども、この問題はどうかと、やつぱり当たつてるか」「うん、これ

は完全に当たつてゐる」と。もうとにかく、女はね、そんだけの知恵を、その人は偉い方だ、非常にこう、だつたら、自分の婿さんになるはずと決め込んでおつたらしいですよ。えいどつこいそうではない、お婆さんから教えてもらつてゐるんですよ。女は非常に喜んだらしい。また男も、もう第二問まではいつてゐるからできるだらうと、こうして心ひそかに喜んだけれども。

次は第三の問題が大きな問題なつてる。もう直接本人同士の問題になつてるから。直接本人同士の問題はですね、どうなつたかと言えば、「お婆さん、今度は私と本人との一対一の問題だから、ここに来てから私が問題明かすから、今言つた通り、馬に鞍掛けと、とにかく走川の水の止まつた時においでなさいと言つてくれ」としてね。まあ二時か三時かね。で、そこで問題を明かすから、その時言うから、と。

で、女はどうするかと言えば、自分の家に蚊帳も吊り、枕を一つ並べてちゃんと寝る準備をしたらしいです。もう自分の一生の夫だから、自分の身を任してもいいという覚悟を決めて枕を一つ並べて、男が来るのを、二時か三時に来るのを待つておつたらしいです。そしたら、女はどうするかと言えば、来てからの勝負だから、ご飯を皿に盛つて、箸一本持つてちゃんとそこに置いたんですね。そんにこう、自分の枕元に。そしたら、女は寝ているけども、起き寝しているわけよな。その知恵を試すもんだから、起き寝して待つていたから。ちようど走川の水の止まる時に、男は忍んで来たらしいですよ。で、その様子をとにかく寝起きして待つて見てるんだ、女はね。「どんな事をするだらうか」とこう言つたけども。で、お婆さんも、「もう一対一の勝負だから、私が教えないから、もうこの時失敗したらば、あんたも諦めないかん」と言つて、男を非常に励ましたらしいけども。「よし、ではとにかく第一回までいつたから三回目はどうしても自分で明かしてやる」ちゅう事を心に決めて、行つたんだけれども。で、行つたところが、そのお膳の上にご飯一膳据えて、箸と据えて、ちゃんと作つて待つてるらしいよ。枕二つ重ねてね。そしたら、男はどういう事をしたかと言えば、「ああ、あんな遠い所から来るから」まあ、自分の錯覚だね、遠い所から来るから、まあ腹もへつてるからご飯だけ、ご飯を食べて寝なさいという事だという、自分がこう

感謝したんだな。そしたら女は起きて待つているんだけど、早速その男は、黙つて入つて、ご飯から先食べたらしいですな、ご飯をね。この女は初めてだけど非常に親切だ。自分があんな遠い所から来るから、ひもじいからご飯も食べて寝なさいちゅう事をちゃんと準備してあるちゅう事だつたのか。その女は自分を非常に愛しているんだあ、思つていてるという事を察して、ご飯から食べたらしいけども。女は、寝て動作を見てるんだから、早速言つたらしい。「もう、あなたの試験はね、今まで二つ完全に通つてきたけど、今日はもう失敗だから、これはこういう事じやないから」と。それともうひとつあのね、こうだつた。ご飯とね、あの竹の小刀、昔シーグんち有たしえー、刀、シーグね。あれを入れてちゃんと待つてるんだ、その試験にはなあ。それを男が見て、どういうことか分からんの、さつきからね。ご飯一膳とそれから竹の中にシーグ入れて待つて寝てる。それを見ているんだけども、これはどういう事かと、非常にこう男は思つていてるけども、自分でそれを解き明かす事できなくて。んで、ご飯から先に食べたもんだから、女は、「もうあんたはね、今まで二つとも、二問題とも完全に明かしたけども、もう今日で失敗だから、私は本当のあんたの妻になることは出来んから、もう諦めて帰りなさい」と言つたらしいですよ。

んで、男はもうすっかり動転してしまつて。今までの、思いがいつぺんにひつ飛んでしまつてね、もう落胆してしまつたらしい。そうしたら、これはどうしようかと、もう男は帰るに帰れない。もう自殺するぐらいの覚悟を決めておつたらしいですよ。んで、もうしまいは泣くやらわめくやら、男泣きに泣いたもんだから。女はあんまり気の毒で、もともと自分で夫にしてもいいという覚悟を決めたもんだから、それとなく二人はまた話し合つて。やつてしたところが、その晩はそれで結合して、もう一緒になるうつていう事を決めて、ひとつの部屋にこう寝たらしいですな。その寝て、まあとにかくいろんな将来の話もして、そこで夫婦の契りもやるということになつたけども。それであ一夜のお情けを、とにかく情けを交わしたらしいですな。

そしたら、女がいつも朝は早く起きるけども、その日に限つて、戸が締まつて開かないんだよな。隣のお婆さんには、それをこう気にして、「確かに夕べは問題を明かしに来たけども、今だに戸が開かないのはどういうわけや」と、

こう思つて訪ねて行つたらしいですな。んで、訪ねて行つたら、その二人とも重なり合つて、そこでもう何て言うのかね、これはもう「泊阿嘉」みたいなことをやつてるんだな。とにかくもう気が安心したのか、もう何したのか、自分の望みも叶つたちゅうんで、そこでまあ二人とも死んでしまつたんだ。よく、本当か話かそれは分からんけど、まあ死んでしまつたわけです。

お婆さんはそれを見て、これをこんな事をしたらいかんと思つて。んで、お婆さんも男の生まれたところを教えてもらつていたので、早速男の方に通知した。知らして、「自分方のこう、いわゆる、あんたの息子はこういう事になつてゐるんだが、何とか後の始末はしないかん」ちゅう事なつて。んで、向こうから葬式もして。で、葬式した場合において、今度はお父さんの考へで、生きた時から非常に愛し合つておつたし、また死んでも、後生に行つても二人は愛するだらうと、お墓を別々に作つたらしいですね。ここは男、ここは女と。そして、男のお墓の前に杉の木を植えたんだ。女のお墓の前には竹を植えたんだ。竹を植えてね、竹。植えてしまつて、だんだんそれが伸びてしまつたら、今度は松の木に竹がずっとこう、絡みついて、ずっと伸びていつたらしいですね。

だから、昔は鉄がなかつたから。杉と、まあ杉といふか、昔は砂糖入れる樽ね。あれなんかも竹でやつてね、今タライでもみんなそうやつて、内地お櫃ね、あれもご飯入れてる。あれも全部竹でやつたけども最近は鉄が出たからそういう事なつて。だから、あれが初めて出て、一人は特に天国行つてもこれぐらい仲良く暮しているちゅう事を表わしたちゅう事だ。

で、ひとつ問題は、何でご飯と、あの竹の中にシーグを入れて、それを試験にやつたかといふと。女は非常に頭が冴えた女だつたんですけども。そしたらその後から話を聞いてみたら、お婆さんに聞いた事には、こう言つたそうです。「何もあんたご飯食べる必要ない」というのね。食べる必要ない。もう黙つてすぐ寝ればよかつた。うん、すぐ寝ればよかつたんで、その訳はどういう事かといふと、これはシーグと言つてゐるのかしら、シーグ、小刀も。シーグが、竹がこう中にはまつてあるでしょ。「しぐ抱ちくま」と。もうすぐ抱けばいいんであつてね、だからその目的分

からなくつて、『飯から食べたから、女は「ああもう駄目、あなたは帰りなさい」とすぐ言つたわけです。「しぐ抱だちくま」だから、もうすぐ寝てね、すぐ何とも言葉をかけずに、ただ寝れば、それで良かつたんだな。だから非常に女が能力が良かつたという事ですよ。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第十班（天久節子・新里律子）

注①天願川 沖縄本島中部に位置し、流域面積三十、九キロメートル、流路延長十三、三キロメートルの一級河川。

②シーグ 小刀のこと。

22 繼子と鳥と毒入り弁当

話者 仲榮眞 三 良（明治二十七年七月二十日生）

翻字・対訳 宮 城 昭 美

田草刈ちーがー、あぬーさくとう、ありやるばー。
今度お田草刈ちーが遣らち、うりが弟ぬ居てーしが、
ありやるばーてーやー。弟んかい、食事ぬ時分なたぐ
とう、弁当持たちさくとう。「珍ましー物やつさー。う
れー今日や弁当んでー持たちえーる、私達あアンマー
当を持たせてあるが」と、思つていたつて。

田草刈ちーがー、あぬーさくとう、ありやるばー。
今度お田草刈ちーが遣らち、うりが弟ぬ居てーしが、
ありやるばーてーやー。弟んかい、食事ぬ時分なたぐ
とう、弁当持たちさくとう。「珍ましー物やつさー。う
れー今日や弁当んでー持たちえーる、私達あアンマー
や、お母や」んち。

弟んかい、弟お都合がちゅーらー、うり弟おちゅふあー

弟とはしめし合わせてあつたのか、また満腹させて

ら食ていから遣らちやらー。少々、「うれー毒ぬ入つちよーんどー、うれー食むなよーやー」りる。言ねー、兄弟いかな何やらわん、あん言る筈やくと、うりがなー変なーてーやー。田草刈ちーが繼子てーやー。又、弁当を持ちやせー弟てーやー。うれー種一ちてー。んー、種一ち、うれーお父さのーーち、又お母や別かとーてーるばーてーやー。うれー、うぬ田草行じょーる、刈ちーが行じょーしがお母や居らんてーんてー。うり後妻ぬしぇーる仕業てーやー。あんさぐとう繼母やぐとうてー。

あんさぐとううれー木んかい下ぎたぐとう、鳥ぬ、鳥ぬ取つてい食てい、開きて。鳥え大事やんどーりる。風呂敷ぐわーかんし括だつとーし外すぐと、かんしーかんしーし。えー鳥え物知りでいくと、あんし、うり食やーに、直ぐパタパターしけー死じ。あんしぇーだー、うれーうりが食いしぇー見だんがあらー、一生懸命うり、田草刈ちよーくと。うぬ、「食みわるやつさー」りち、行じえーさいされー、なー全部んな物なー。あれー、やーさぬ家かい行じやらー。だし、うれー食れーうらんくと。なー、うり食みーねー、終い、今日や。

から行かせたのか。「それには毒が入つてるので食べるなよ」と母親が弟に言つたら、兄弟だからいくら何でもそう言うはずだが。だけど、それが様子が変であるわけさ。田草を取りに行つているのは繼子さあね。また、弁当を持つてきたのは弟さ。二人はお父さんは同じなんだが、お母さんが違うわけさあね。田草を取りに行つている人のお母さんはいなかつたわけさあ。それは後妻がしでかしたことであつて、繼母だからね。

繼子が弁当を木に下げていたら、鳥が開けて食べてあつたつて。ああ、鳥は大変だよ。風呂敷を結んであるのを、こういうふうに外してね。鳥は物知りだからね。そうして、弁当を食べてパタパタと死んでしまつた。繼子は一生懸命田草を取つていて、鳥が弁当を食べるには見なかつたのか、「食べよう」と行つてみたらもう全部なくなつていたつて。おなかがすいて家に帰つて行つたようだが、それを食べていたら、今日にはもう死んでいたでしようね。

家かい来くとう、又喧嘩てい、「食れー無えらん」ち。あんやたんでいるばーてーやー、うん生ちち来んち。あんさぐとう、悪心んちえー繼親んち、なー大事やんでいき。あんさぐとう、又喧嘩し。直ぐ生ちち来くとう、うり食めーなー失いしが、此り珍しー物しちゃー。鳥が食べてーたんでいくとうやー。

採集S2・5・8 読谷村民話調査団第九班（山入端孝子・上江瀬康子）

23 繼子の麦搗き

話者 宮城ヤス（明治四十四年四月二十五日生）

翻字・対訳 安里和子

昔、ある所んかいなー、繼親とう繼子とう居てーるふーじやしが。なーじこー、うぬ繼子粗末にさつてい、自分ぬ実子やじこー可愛さし。なー、冬ぬ寒さいにん山かい遣らちやい、海かい遣らちやい。なー、水汲まちやいや、繼子かいしみてい、自分ぬ子あなー、可愛さし。

昔、ある所に繼親と繼子が住んでいたそうだが、繼子は大変粗末にされ、繼親は自分の実子をかわいがつた。そして、冬の寒い日に山へやつたり、海へやつたりして、水汲みは繼子にさせて自分の子供は大事にした。

後おなー、此ぬ八月ぬ十五夜に麦搗かちえーるふー

その後、八月の十五夜の晩に麦を搗かせたそうだ。

家に帰つたら、そこで繼母と弁当を食べていないということで喧嘩した。生きて帰つて来たといふことで。だから繼母は悪心で、大変だということだよ。繼母が持たせた弁当を食べれば死んでいるものが、生きて帰つて來たので、そこで喧嘩してしまつた。これは珍しいことに鳥が食つていたということだよ。

じやさ。うぬ麦ん又なー、ひつちーひつちー搗ちゃん
てーが、なー夜明き方、ひつちー搗ちゃんてーが、う
ぬ麦やていーちん皮や剥ぎらん。あんしなー、くんぐ
とう搗からんがやーんりち、じこー哀りし泣ちやくどう、
うぬ泣ちゆる、落ちていちゆーる涙きーなかい、うぬ
麦え搗かつてい。

「あー、やつぱし、此れー水入つち搗ちゅしやさやー」
んりやーに。うぬ繼子、水入つてい搗ちやくどう、又、
うりん折檻さつてい。「誰が、うぬ水入つてい搗きんでい
言いたが」んりち、あんさーに怒らつていさくとう。
「なーじこー悪つさいびーたんどー」。

なー自分ぬ、やつぱし感じてい、くんぐどうし落ち
る涙さーなかい麦ぬ搗かつたくとう、麦んりーセー、
かんし搗ちゆる物やさやー。搗ちえーくどうなー、「悪つ
さいびーたんどー」りち。

うりからあんさーなかい此ぬ麦んりせー、水入つち
搗ちゆさやーんりぢなてい。

その麦をもう精いつぱい搗いても搗いても、夜が明け
るまで搗いても、その麦はなかなか皮がとれない。そ
れでどうしてこうも搗けないのだろうかと、悲しくなつ
て泣き出すと、涙がこぼれてその落ちた涙で麦は搗け
たそうだ。

「ああ、やつぱり、麦は水を入れて搗けばいいのだ
な」と、その繼子は水を入れて搗いた。すると、これ
もまた折檻され、「誰が水を入れて搗けと言つたか」と。
それで、叱られたので、もう、「大変悪うございました」
と謝つた。

繼子は自分で感じとつて、このように落ちる涙で麦
が搗けたので、麦というものはこのように搗くんだな
あと。搗いたので、「悪うございました」と。

その時から、そのようにして麦は水を入れて搗くよ
うになつたそうだ。

継子と機織りと双葉草

話者 長嶺ウシ(明治三十三年一月五日生)

翻字・対訳 村山友江

実子とう二人やしが。布織いる事に、継子や昔ぬ
布おチーンテーンりち、大変細物おチーンテーンやた
んりしえーや。今^{なま}私達が一分からんある。あんしや
しが、ナネーマー、ウムヤーとうか大變粗い物、昔ぬ
着物お畠から着やーやナネーマー、スリチラーグわー
やたせー。クルジナーグわーりち作くいてーぐとう、
うり自分が産ちえーぬ子あ教ち。早く織いせーや。

すぐとう、うぬ継子あ細かい物お溜らんせーや。丁度
キユウモンと一同ぬ物るやぐとう。あんし、「かきてい
ん、かきていん管中なーひやー」りち、せーぬ継親ぬ
言ち。「かきていんりば果ていんじやく」りがらー何り
がらー言たんりしがてー。

あんし又、或る正月にん、「一日ぬ日なたぐとう、「双
葉草取つてい来わ」り言ちやぐとう。「双葉草りしえー
何やがやー」りち哀りし。うぬ継子や浜んかい下りてい
行^はじ「双葉草りしえー海に^あ有がやー」りち立つちょー

実子と継子の二人がいたらしい。布を織る時に、昔
の布は大変難しいところはチーンテーン(最初と終わ
り)と言つていたさあね。今の私達には分からないが。
ナネーマー(七よみ)、ウムヤー(六よみ)等の大變粗
い物、昔の野良着はスリチラーグわーだつたさあ。クルジナ
ーぐわーというのを作つていたから、それを自分の実子
に教えたつて。早く織り終わるさあね。

また継子には細かいのを織らせてあるので、いつこ
うに織り上がらないでしよう。だから「かけても、か
けてもまだ管中(途中)なのか」と母親が怒つたら、
「かけてみれば果てもないよ…」とか何とか言つたと
いうことだつたが。

それからまた、ある正月に、「一日の日に、「双葉草を
取つて來い」と行かされたらしい。「双葉草といふのは
何なのだろう」と継子は大変困つた。浜に下りて行つ
て、「双葉草といふのは海にあるのだろうか」と立つて

てい、或る人ぬ舟ぐわー漕じ行ちゅし見ちやぐとう。

あぬ走る舟ぐわー 双葉草知らに

りちやぐとう

うり知らに童 松ぬ縁

りちやぐとう。「あー、うりるやりー」りち、松ぬ葉あ
折てい行じやんりさ、りち。いうふうな話、繼親話聞
ちやるばーん有しがてー。

いたら、ある人が舟を漕いで行くのが見えたのでね。

あの走つて行く舟よ 双葉草を知らぬか

と言つたら

それを知らぬか童よ 松の縁

と言つたそうだ。「ああ、それだつたのか」と、松の葉
を折つて行つたといふこと。そういうふうな話、繼親
話を聞いたことがあるよ。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第八班（長嶺洋子・田場米子・上原常子）

注①スリチラー 袖丈や身丈の短い野良着。

②クルジナー 汚れが目立たないように藍色に染めた野良着。

25 繼子の雪払い

話者 比嘉 靜（大正四年十月十七日生）

翻字・対訳 宮城昭美

雪払えぬ話ぐわー。或るあぬー、御殿殿内ぬうりが
やいびーてーしが。なー、女ぬ親あ早く亡しみそーやー
に。あんさい、男ん子産しみそーやーに、早く亡し

雪払いの話です。あの話は御殿殿内に関わりのある
人の話ですがね。母親は早い時期にお亡くなりになら
れた。男の子を生んでから、早く亡くなつたようです。

みそーちゃんがどう。後妻搜めーみそーやーにさくとう。
うぬ後妻、大変なー悪なみそーやーに。なーうぬ、まつ
子、大変苛みて。なーちやー物ん、あんすかー食ま
さびらん。何時なー苛みていさぐとう。

大変なー雪ぬ、或る大変冬ぬ寒さぬ日やしが。なー
雪ぬ降いる日やしが、外んかい出じやち、大変粗末ん
しさべとう。なーどうくうぬ子、なー哀りなてい。
自分ぬ女ぬ親あ亡ちるめんしえーぐとう。

あんしえー、なー墓んかい行じやーに、「私ねーかん
しそーてい、生ちちよーていん望めー無えんぐとう、
どーりんなー、アヤーなー私連でい呉みそーり」んち。
大変なー墓んじ、大変哀りさくとう。

うぬ場合に又、男ぬ親ぬ、「此れーなー、何処かい行
ちやるむんがやー、夜ぬ夜中からなー居らんしが」ん
ち、男ぬ親、なー搜めーみそーちやーと。やつぱし、
墓んじ、じこー哀りつし、女ぬ親んかい、直ぐ墓うてい
泣ちんさくとう。男ぬ親あ、「とーかんしえーならんき、
りつかなーいやー家かい行じ」。なーうりからなー、あ
ぬー家かい、男ぬ親ぬ連ていめんそーやーに。

うれ女ぬ前うつい、「いやーやあんし、あぬー自分ぬ

それで後妻をめとつたらしいが、後妻は大変心の悪い
人で、繼子をいつも苛めていた。食事も満足にあげないで、いつも苛めていたようだね。

そして、大雪の降る大変寒い日なんだけど、外に出
されて苛められたものだから。もうあまりにもその子
は悲しくなつて。自分の母親はもう亡くなつていらつ
しゃらないもんだから…。

行く当てもないので墓に行つて、「私はこんな思いを
してまで、生きていても何の望みもないのに、どうか
お母さん私を連れに来て下さい」と。もう墓前で大変
悲しい思いをしていた。

その時に、まだお父さんは「この子はもう、どこに
行つたのだろうか。こんな夜の夜中にいなくなつてい
るが」と、搜したらしい。するともう、やつぱり墓で
とても悲しがつてね、お母さんに、墓に向かつて泣い
ていたつて。お父さんは、「これは何とかしなければい
けない。さあ、一緒に家に帰ろう」と、そこから家に
連れ帰つた。

そうして後妻に向かつて、「お前はこのように、自分

産さん子やれーあんし、苛みてーならのーあらに」言
ちなー。男ぬ親ぬなー、繼母いつペー話し聞かちやぐ
とう。あんしなー母親又、「私が悪つきてーさ。あん
しなー苛みたしえー、私が悪つさいびんどー」んち。
あー、大変なー、詫びさーに。うにーから心んうりし直
ていなー、又自分ぬ繼子ん大変良し、幸せになたんでい
ぬ話はどう聞ちよーる。

の生んだ子じやないからといって、そんなに苛めては
いけないよ」と言つた。お父さんが繼母にちゃんと話
をして聞かせた。そうしたら繼母はもう、「私が悪かつ
た。あんなに苛めたのは私が悪いです」と深く詫びを
いた。それから繼母は心も入れ替えて、繼子にも良
くするようになり、幸せに暮らしたという話を聞いた
よ。

採集S 52・5・8 読谷村民話調査団第十一班〈宮里光雄・桃原・知花春美〉

注 御殿殿内 46頁参照

26 繼子と二十日夜と麦搗き

話者 宮 城 ヤ ス (明治四十四年四月二十五日生)

翻字・対訳 安 里 和 子

此ぬ、二十日夜ぬ月んりし、うりん繼子から出じ

とーしやてーるふーじやいびん。

実ぬ子あなー水汲ましーが、近さぬ井戸かい遣らち。

繼子なー海んかい、必じ潮水汲り来りち遣らちやくとう。

なー夜ぬ一時、二時なていん、うぬ繼子、「親ぬ言し

」の二十日夜の月という話も繼子から出たそうです。

実子には水を汲む時、近くの井戸にやり、繼子には
必ず海水を汲んで来いと行かせた。それで、夜の一時、
二時だというのに、繼子は「親の言いつけなんだから」

事るれーるむん」りち、冬ぬ寒さいに、寒さガタガタし、此り汲みーがんりち行ぢやくとう。なー二十日夜ぬ月や照り勝てい、御神加那志ん本当、真心そーる事分かいがしみそーちゃらー。二十日夜ぬ月え早く上がやーない、うぬ子あ暗しんから来し、闇ぬ夜から来し、あんし月ん早く上がやーない帰てい来んりぬ事やいびん。

昔から、此れーなー、繼親とう繼子んりせーなーやつぱし、ああいうふうに、綾が有ていさしが。

此ぬ麦搗ちゅしやたんてーが、此ぬ繼子が考えやーなかい、自分ぬ落ちーる涙さーなかい搗ちやくとう、やつぱしうぬ涙ぬ落ちーるうつさ搗かつたくとう。うぬ大麦りせー、昔え二、三升、四、五、六升、直ぐ夜明き通しーしん搗ちゅたしが。うんにんから此ぬ麦入つてい搗ちゅるなどーるふーじやいびん。

なー、今ぬ世ぬ中ねーうんぐとー無えん苦やしが、昔え二十日夜ぬ月ん、繼子話、これから出たそうです。

昔から、この繼親と繼子の話というのは、あのよう

にいろいろ綾があるものでした。

この麦搗きだつて、繼子の知恵で落ちる涙で搗くとその部分だけが搗けた。昔はもう大麦を二、三升も五、六升も徹夜して搗いたものだが、繼子の涙で搗けたので、その時から水を入れて搗くようになつたそうです。

と、冬の寒い日もガタガタ震えながら海水を汲みに行つた。すると、二十日夜の月は照り輝いて、神様は繼子の真心を知つておられるようだつた。二十日夜の月は早く上がつて、繼子が暗闇から歩くのを照らしてくれ帰つて来ることができだそ�です。

注 二十日夜（ハチカユ） 旧暦二十日の夜。月の出が遅いため宵闇となる。（繼母が夜遅くから繼子を潮汲みに行かせたので、神様

が繼子の真心を察し、二十日夜だというのに月は早く上がり、繼子が真つ暗闇から帰るのを明るく照らしてくれた。）

嫁と姑よめ
としゅうとめ
〈猫と鼠ねこ
ねずみ〉

話者 長浜マツ(明治四十年六月十五日生)

翻字・対訳 村山友江

うぬ男ん子やてー、なー大変烟つし、烟がぢやーや
てーぬふーじてー。なー大変親孝行な意味やてーぬふー
じてー。

あんさぐとうなー、親あなー毎日なー布機んかい布
織みせーせーや。丁度、昔え今ぬぐとうし高機なんか
ないさー。地機じばといつてね。ヒジチヒジチぬ有せーや、ヒジ
チさーに布ぬのおかんし織みせーたん。差し抜さぬちやー、か
んし。

あんさぐとう何りちがやらーや、なーうぬ親や、
うぬ嫁ゆめてー、ヒジチヒジチに四回突よんかいちえーぬふーじやさ。
あんさぐとうてー、ピリピリピリピリーしなー、床下ゆかさ
ぬ中なかい入いつち行へんじやんり。

あんし子ぬ畠から來はらに、「だー、たーや」り言いぢやぐ
とう、「私がヒジチヒジチに、よーんぐわー突つちちやしがや、
鼠ねずみなまい床下ゆかさぬ中なかい入いつち行へんじよーんれー」り。
なー親ぬ言いぢえーるふーじてー、自分じぶんぬ嫡子ぢやくしんかい。

息子は畠から帰つて来て、「だー、嫁は」と言ったの
で、「私がヒジチで少しだけ突いたら、鼠になつて床下
に入つて行つたよ」と、親が息子に言つたらしい。「は
あ、そういうこともあるか。それなら貴方も突いてみ

「ふー、あんすんなー。だー、突ちんだ」りち、うぬ
男ん子ぬよー、うぬ親突ちやぐとうよー、又うぬ親あ
まやー天井んかい上がてい行じやんりぬ、話。

だからあぬ、お母さん達がてー、かんし布織みせー
ねー、「うね！うまんかい来ねー、ヒジチ突かりーねー
猫ないんどー」とうか、「鼠ないんどー」とうか、こ
う言いよつたの。これ小さい時に覚えているさあ。私
にんでー、親ぬ乳い飲むんりち、ちやーうまんかい縋
てい行ちゆてーぐどうてー。「うね！ヒジチさーに突か
りーねー鼠ないん、猫ないん」りち、ちやー叱りーた
んよ。うりん又覚とーんばー、四ち、三ちに。「うね！
ヒジチさーに突かりーねー、鼠ないんどー、猫ないん
どー」り。これは覚えているさー。これは昔話ね。

よう」と、息子が親を突いたら、その親は猫になつて
天井に上がつて行つたという話。

だから、お母さん達が、こういうふうに布を織つて
いる時には、「これ！ここに来て、ヒジチで突かれたら
猫になるよ」とか、「鼠になるよ」とか、そう言いよつ
たの。これ小さい時に聞いた話を覚えているさあ。私
は親の乳を飲みたいばかりに、母親によくくついて
いつたものだから、「これ！ヒジチで突かれたら鼠にな
るよ、猫になるよ」と、いつも叱られていた。これは
覚えているさあ、四歳、三歳の頃にね。これは昔話ね。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第四班 〈阿波根初美・知花春美・恩納加代美〉

注①高機 地機よりあとに使われた手織機。沖縄には一九世紀後半に移入された。地機より丈が高く、構造・作用とも一段と進歩したもの。踏木を踏んで綜糸を上下させ手投げ杼を使って織る。(69頁写真参照)

②地機 高機以前の織機で、織り手の腰で経糸の張力を加減して織る。(69頁写真参照)

③ヒジチ 織りの小道具のこと。(69頁写真参照)

嫁と姑「猫と鼠」

著者 長嶺ウシ (明治三十三年一月五日生)

翻字・対訳 辻土名 初 美

うぬお婆やなー夕ぬ夜暮ていん、肉ん煮ちえー御差
ぎらんなたぐとう、なー欲さぬ生肉うさがてーんてー。
うさがいんりさぐとう、「此ぬお婆や」りち、「いえー
ハーメー、貴方や」りち、ヒジチ突ちやぐとう。ハーメー^{まやー}や猫^{まやー}なでー。

あんすぐとう、うぬ夫^お、うぬお婆^ばが嫡子^{ちやくし}やせーや。

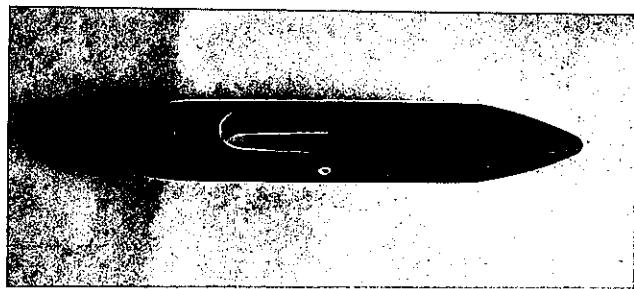
「だー、ハーメー^や」りちやぐとう、「私ねー、布織^{ぬのう}
ちんち慌^{あわ}ていとーるむんぬ、布^{ぬの}織^うていから、肉^{しじ}え煮^に
ち御^う差^さぎーんりさぐとう、生肉^{なまじく}食^いんせーたぐとう、
なー私がヒジチ^ぬし抜^ぬちやれー猫^{まやー}なでーもーらん」り言
ちやぐとう。「何^なやんりー」り、「んだひやー、いやー
んあんしうぬヒジチねーれー、突^ちか」りちやぐとう。
うりし突^ちちやぐとう。ピリピリピリし天井^{てんじよう}んかい行^は
たんりがらー。

あんすぐとう、昔^きからあぬー、嫁^{よめ}とう姑^{おば}固^{くわ}さる猫^{ねずみ}
と鼠^{ねずみ}なでいやんりきり。うぬ話^{はなし}るやたらーなー、トウ

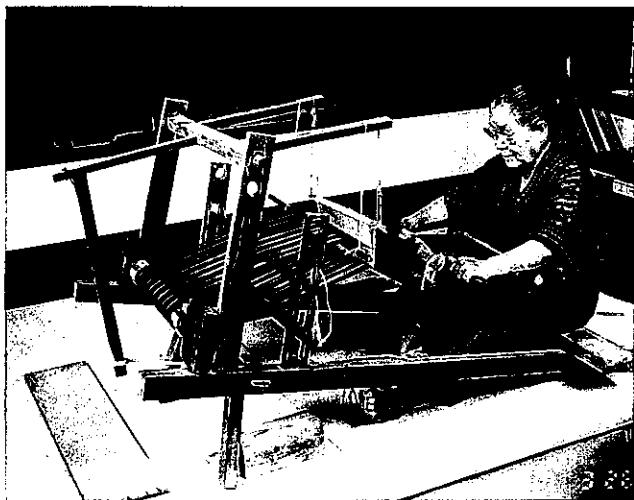
夜が更けても、嫁がお婆さんに肉を炊いてあげなかつたのでね。もう欲しくて、生肉を食べたらしい。食べようとしたら、「おい、お婆さん、あなたは」と、嫁がヒジチで突いたらしい。するとお婆さんは猫になつたんだつて。

それから夫が帰つて来て、そのお婆さんがは長男になるから、「だー、お婆さんは」と聞いたら、「私は布を織るつて慌ててているのに、布を織つてから肉を煮て差し上げるつもりなのに。生肉を食べようとしたので、私がヒジチで突いたら猫になつていなくなつてしまつたよ」と答えた。「何だと」「そのヒジチを出しなさい、お前も突いてやろう」と、夫が妻を突いたら、鼠になつてピリピリピリと鳴きながら天井に上がつて行つたとか。

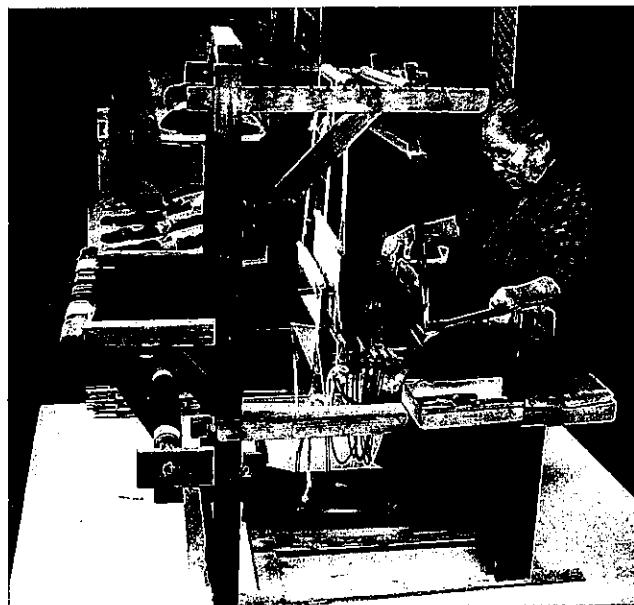
それで、昔から嫁と姑は仲が悪くて、猫と鼠みたいだつてさ。その話だつたと思うよ。大晦日には「嫁の



ヒジチ



地 機



高 機

シヌユルないねー、「嫁ぬウトウウトウはんか夕飯食ウツハシみよー」りち。
 四隅よすみぬ角かどんかい御飯粒ごはんぱる置おきてい、猫ねこやうぬ嫡子ちやくしとう
 一緒にまじょーん、あんし正月せいがつん。肉にくん何んあぬ猫ねこんかい食くち、あ
 んしやたんりぬ話はなんち聞きちやしがてー。

注①ヒジチ 67頁参照

②嫁ぬウトウー 大晦日に天井にいる鼠に御飯を与え、年を取らす時に使う言葉で、鼠をさしている。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第八班 〈長嶺洋子・上原常子・田場米子〉

ウトウー、夕飯だよ」と言つて、四隅の角に鼠のため
 に御飯粒を置いて、猫になつた母親と長男は一緒に正
 月もして、肉やら何やら猫に食べさせたというような
 話を聞いたよ。

29 兄弟の仲直り

話者 長浜マツ(明治四十年六月十五日生)

翻字・対訳 村山友江

あぬ兄弟同士あ固さぬてー。なーちゃーきじやんばんじやんし喧嘩ぬ果てー無えんたんり。固しー兄弟やたんりしが。

ある兄弟がとても仲が悪くてね、いつも大喧嘩ばかりしていたらしい。

或る時てー、なー山ぬ。うにーねー、昔え何ん無えんてーさにやー、山猪捕つてい食むたんりぐとう。山猪捕いがる行じよーんりしが、うぬ山猪る射てーしが、山猪射たぐとうなー、暗さぬ物お見らんあてーさにや。山猪射たぐとう、なーうぬ固さる兄弟んかい、「いえー、なー私ねー今日や人射てーしがちやーすがやー」りちやぐどう。じこー固さる兄弟や、「早くなー歩つけー。あんせー暗さるうちやー、人ぬ見らんうちなかい隠みらんあれーちやーすが」りち。うぬ兄弟え、じこー固さる兄弟ぬ、「早く歩つけー、なー人ぬ見らんうちに、うぬ人お片付みらんあねー大事やぐとう」りち。

ある時に、山でね。昔は山猪を取つて食べていたといふから何もなかつたのでしようね。それで山猪捕りに行つて、山猪を射つたのだが、もう暗くて見えなかつたらしい。山猪を射つたのだが、人を射つたと思って、もう仲の悪い兄弟に、「おい、今日は私は人を射つてしまつたがどうしよう」と相談に行つた。もう大変仲の悪い兄弟ではあつたのだが、「早く歩け。暗いうちに、人に見られぬうちに隠さないとどうするのか」と。大変仲の悪い兄弟が、「早く歩け、人に見られぬうちに、その人を隠さないと大変だよ」と一緒に行つてくれたつて。

そこに行つてみて調べたら人ではなく山猪であつた。それで、山猪を家に持つて帰り食べた。

なー行じやぐとう、調びたれー、人おあらん山猪なつてい、あんさーになーうぬ山猪えなし、家んかい持つ

ち来やー、食り。

あんしる昔から、「肉りしえー切れー寄やーい寄やー
肉ぬべとーん愛しい物お無えらん。赤ぬ他人りせー
食むぬ間る、有る間るやる、兄弟ぬぐとー深しー物お
無えらん」事情ぬうまから出じたんりちてー。なーう
んにーから、うぬ兄弟ぬ大変固さたせー、仲ぬ悪つさ
せー、良い仲ない、うぬ山猪さーに直ぐ祝儀さんり
ぬ話てー。あんしる「肉え寄やーい寄やーい」りち、
昔からこういう意味があつたらしい。

その肉の話でーなー。山猪射てーしが、なー人る射
てーるりち驚るちやーに、うぬ固さぬ兄弟え前んかい、
「はい、私ねーな今日や間違し、人射てーぐとうなー、
りー二人さーに隠みら」りち行じえーるふーじてー。
あんさーにうぬ兄弟りがらー、うんにーから大変良い
仲なでい、なーあぬ固さしん直とーたんりぬ話。

だから昔から、「肉が切つても寄り合つていくように
肉親ほど愛しいものはない。赤の他人は食べている間
だけしか助けてくれない。(困つている時ほど助けな
いものだ。それと比べて) 肉親の情ほど深いものはな
い」というのはこの話から出たことだよ。そのことが
あつてから大変仲の悪かつた兄弟は、大変良い仲になつ
て、その山猪で祝宴をしたという話さ。だから「肉は
切つても寄り合つていく」と、昔からこういう意味が
あつたらしい。

その肉の話の例えだよ。山猪を射つてあるのだが、
もう人を射つてしまつたと驚いて、仲の悪い兄弟の所
に行つたら、「私は今日は間違つて人を射つてしまつた
から、二人で隠そう」と行つたそうだよ。そして兄
弟はその時から大変仲良くなつて、仲が悪かつたのも
直つたという話。

30 兄弟の仲直り

話者 比嘉 静（大正四年十月十七日生）

翻字・対訳 宮城昭美

ある村に、兄弟二人、もう大変仲の悪い兄弟がいた
そうですが。その兄弟同志よりも他人が良いというこ
とで、友と大変仲良く付き合っていたそうです。

ある時、弟の方が、これは本当は兄弟が大切なのか、
人、他人、友人の方が宝なのかと、心試しをするため
に、山へ行つて山猪を射止めていたらしいんだ。

あぬ、或る村んかい兄弟二人、大変な、仲ぬ悪さ
る兄弟ぬ居て一るふーじやいびるむのー。うぬ兄弟や
かな一人おましんち、人とうなー、他人とう、大変友
達とう仲良くし、暮らちよーて一ぬふーじやいびーる
むのー。

或る時なー、うぬ弟ぬ、まじ本当お兄弟る宝やがやー、
人、人るなー、友達る宝やがやーんち。心試しする為
に、山かい行じさーい、山猪射てーるふーじやいびる
むのー。

まじなー、初めーなー、自分ぬ大変兄弟やかん深し
くそーる友達ぬ家んかい行じやーに、「私ねーなー一大
事などーつさー、山猪射たぐどう、人などーさー。いやー
一緒さーに、あぬー片付みていとうらしえー」んでい
言ちさくとう。なーうぬ、兄弟やかん仲良くそーる友
達え、「はーなー、いやー一大事やつきー。なー、人射
てーていいからやー、私ねー大事でーむん。いやんー人し

まずは最初は、自分の兄弟よりも親しくしている友
人の家に行き、「私は大変なことをしてしまった。山猪
と思つて射つたら人間だつた。お前も一緒に行つて片
付けてくれないか」と頼むと、兄弟より以上に仲良く
している友人は、「お前は大変なことを言うな。人を殺
したとあってはとんでもない。私も大変なことになる。
お前一人行つて片付けて來い」と、友人は行つてくれ

片付みれーち、なーうぬ友達どうしえ聞かん。

なかつた。

そうしたものだから、「ああやつぱりそうか」と思い、今度は実兄の所に行つて、「私は大変なことをしてしまつたよ、兄さん。山猪と思つて射たら人間で、人を射てしまつたよ」と言つた。すると実兄は、「これは一大事。射てしまつたのなら、もうすぐに今日中で片付けておかないと大変なことになるよ」と言つて。その兄さんは一緒になつて、弟が人を殺したという山へ片付けに行つた。すると本当は人ではなく山猪なんだが、弟が二人の心を試すためにやつたことであつたらしい。

さぐとう「あーなーやつぱし、んぢやなー、うりやさやー」んでいち。自分ぬ、年上じょうじやぬ前まへんかい行いじさーに、「私ねーなー、大事なと一つさー兄きゆうさん、直ただぐ山猪やましでい思おもてい射的てーしが人ひとなでい。なー人ひと射的てーつさー」でいちさくとう。うぬ兄きゆうさのー又、「とーひやーなー一大事なとーさ、いやーや。なーうれー、人ひと射的てーといから、なー直ただぐ今日きのううててい片かた付きとーかんあれーなー、一大事やさ」んでい言いやーに。うぬ兄きゆう弟だいや、兄きゆうさのーなー一緒にーに、うぬなー、山行やまかなー人ひと片かた付きーが行いじさくとう。本当ほんとうやなーうれー、人ひとおあらん山猪やましるやしが、うぬ弟だいぬなー、二人ふたりが心試こころすんでいるやてーるふーじやーびーるむのー。

あんさくとう、うぬ弟だいなー、兄弟きょうだいぬぐとーる宝たからあ無ねえらん。世ゆぬ中なかねーなー、兄弟きょうだいやか他ほかねー助たすきーる人ひと居ゐらん。なー、人ひと他たん人ひとぬんでーとう、仲良なかよくんでーすしがなー、一大事いちじややさんでいやーに。うにーうていなー、うぬ弟だいお物知ものしやーに、兄弟きょうだいえ大变たいへん仲良なかよくし、さんでいる話はなし。

そういうことで、弟は兄弟よりも素晴らしい宝はない。世の中には兄弟の他に助けてくれる人はいない。兄弟に粗相して他人とだけ仲良くでもしようものなら、一大事なことだと思い、その時から弟は肉親の大切さを知り、兄弟は大変仲良くしたという話です。

翻字・対訳 村山友江

三人産ちえーみせーたんりや。男ん子、三人産ちえーみせーしが。うぬ子ぬ達ぬ、な一心調びーんりやてーみせーるばーて。あんさーに、うぬ夫婦、子ぬ達ん産ちそーみせーしが、子ぬ達や捨てていわん私、あぬー丁度、子同様になーうりきんなーりぬ意味合やてーみせーるばーてー。

あんしさぐとうなー嫡子んあんせーならん、あぬー銘々なー自分ぬ子る可愛さるりち、なーそーみせーい。次男んあんやてーみせーるばーて。あんやしが三男お、親あ又とう拝まりぬ親ああらんぐとうや、なー子あ捨ていてい親うりすぐとうりち。

あんしすんりちやぐとう。うぬ人おなー穴掘やーに、穴掘ていなーうぬ親あうりしみせーんりちやー、子埋すいんりちるやてーぬふーじやしが。うまから宝ぬ出じていやー、あんさーになー親ぬ命ん助かみせーい、子ぬ命ん助かてい。うぬ三男お大変親孝行ぬ子やんり

子供を三人生んであつたそうだ。男の子が三人生まれていたそうだが。その子供達の心を調べるつもりだつたわけさあ。そうして、夫婦には子供も生まれているのだが、それを捨てて私を子同様に育ててくれといふことだつたんでしょうね。

するともう長男はできないと、銘々の子供が可愛いからと言つた。次男もまたそういうことだつたらしい。だが三男は親は二度と拝むことはできないから、もう子供を捨てても親をみると言つた。

そういうことになつて、三男は穴を掘つて子供を埋めて親を育てることになつていたらしい。すると、そこから宝が出て来て、親の命も助かり、子供も助かつたつて。この三男は大変親孝行といふ話。仲順大主といつてね。だから誠ほどの宝はないということだよ。

ちよ、あんしうりやんりさりぬ話。仲順大主りちよ。

あんすぐとう誠ぬぐとーる宝あ無えらん、なー。

採集51・12・19 読谷村民話調査団第四班 〈阿波根初美・知花春美・恩納加代美〉

注 仲順大主 伝承によると仲順大主は、今から七〇〇年頃前に仲順(現北中城村仲順)を統治していた人物で、人々から深く敬慕され

たという。

32 子供の肝

話者 砂辺 靜(明治三十六年二月十八日生)

翻字・対訳 村山友江

男ぬ親あくわ達あ性格見じゆんりやてーるばーてー。

あんざーに、なー嫡子ん呼り。一番嫡子るうりし、

「私がーなー病みーねー、物ん落ていらん忍ばらんぐ
とう。いやーやあぬー、いやー子あ捨ていてい、あぬ
だー乳や私にんかい飲まんなー」り、言るばーてー
や。あんざーにあぬー、「親あ寄とーる年るや。可愛し
い子捨ててー飲まんどー」りち。嫡子え断いたん。

又、次男んかいうりさぐとう。又、次男ん断いるばー

また次男にも同じように言つたらね。次男も断つた

父親が子供達の性格を見るためだつたんだよ。

そうして、長男を呼んで。最初に長男に、「私が病氣
になつて食事も喉を通らなくなつたら、お前は子を捨
てて、私に乳をくれんか」と言つたわけさあ。すると、
「親は寄つた年だのに、可愛い子を捨てて乳を飲ませ
ることはできない」と。長男は断つた。

てやー。

あんし、三男呼らぐとう、あぬ一三男呼らぐとう、
あぬ一三男んかいあん言ちやぐとう。「私がうぬ子あ捨て
ていいてん、親んかい乳い飲ますんどー」り、「見るばー
てーや。あんさーに、「産し子や産し替れー、又ん見じゆ
しえーや。あぬ再び私あ親あ拝まらんくとう、私がう
りさーなかい乳い御差ぎーん」りち。あんさーに三男
ぬ請けぐまーに。

あんしなーうぬ、子埋みーる場所ん、うりん何処ぬ
何処んかいしーよーりち、うぬ親ぬ遺言し、かんし三
本有る松ぬうまんかい、いやー子あ埋ずみりよー」り
ち。あんさーなかいうまんかい、一回落とうちえー子
ぬ顔ぐわー見ちえー、又かんし二回落とうちえー、う
ぬ子ぬ可愛しい産し子あ命捨ていでいやーりち、男ぬ
なーうりするばー。あんし二回りねー、なー黄金ぬ花
ぬうりさーなかい。あんさーに親ぬ命ん救てい、産し
子ぬ命ん救ていりちうりさぎーたるばーてー。

あんさーにうり子ぬ性格見じゅんりち、私ねーやた
んどー、りち。

そうだよ。

それで三男を呼んで、三男にも同じように言つたら
ね、「私は子を捨てて親に乳を飲ますよ」と言つたらし
いさあ。「子供はまた生むこともできるが、親は再び拝
むことはできない。私が乳を差し上げましよう」とい
うことで三男が男親を請けることになつた。

そうして子を埋める場所はどこそこだよと、この親
は言い残した。「このように三本松がある所にお前の子
を埋めなさいよ」と。そこに一回鍬を落としては子供
の顔を覗き、また二回落としてはこんな可愛い子の命
を捨ててと思いながらも穴を掘つていた。すると、三
回目には黄金の花が出てきて、そうして親の命も救つ
て、子供の命も救つたということだよ。

それは子供達の性格を見るために、私（父親が）は
そういうことをしたんだよ、ということ。

33 星になつた姉妹

著者 宮城ヤス（明治四十四年四月二十五日生）

翻字・対訳 村山友江

ティンガーラの意味（^ほ）ちょっと分からんしがなー、^{はなし}話
ぐわーさびら。

あぬ此れ、ティンガーラりぬむん姉妹二人、大変なー
親孝行者ぬ姉妹二人居てい。あんさーに水汲みーが行
じやーなかいさぐとう、うま川満（^{かづらみ}）つち渡らんなやー
に。姉妹二人ちやーすがやーりち、なー直ぐ年上ん二人
うりし立つちょーんりしねー。やつぱしなー、此れ達
大変親孝行者るやるむんりやーい、川ぬ水ぬ立派側ん
かいなやーにかい、やつぱしなー引つちょーぬ意味や
てーんてー。西とう東（^{あがり}）とうなとーし、又、西とう東（^{あがり}）
やーなかい。

あんさーに姉妹二人渡てい行じやーに、うりがなー
今どうせーなー昔（^{なま}）ぬ話、うれー伝え話（^{ばなし}）がやらー分か
んしが。うりが今ぬヨーカーブシ（^ほ）りちなとーんりち、
私達（^{わたくし}）あお父（^{とう}）さん達からうり聞ちいつてーぬ話やいびん。

天の川の意味はちょっとよく分からぬのですが、
話してみましょう。

この天の川の話といるのはね、大変親孝行者の姉妹
が二人いたそうだ。そして水汲みに行つたら、そこ
は川の水が満ちて渡れなかつたつて。それで二人の姉
妹はどうしようと、二人で立つていた。この二人は大
変な親孝行者だということで、川の水がきつかり両側
に分かれて、それはもう川の水が引いたということな
んでしようね。西と東にね。

そうして姉妹二人で渡つて行つて、それが今となつ
ては昔の話といるのは、伝え話なのかは分からぬが。
それが今のヨーカーブシ（金星）になつてゐる、私達
のお父さん達から聞いた話です。

注①ティンガーラ 天の川。銀河。

②ヨーカーブシ 夜明けの明星。金星。

34 猿長者 さる ちようと じや

話者 照屋ヨシ (明治四十二年六月十五日生)

翻字・対訳 玉城和美

あぬ昔な一金持人とう貧乏者とうめんせーたんりしが。あぬだー、うぬ金持人ぬ家やなー何んくいまんり、正月んあぬなー立派してー。あんしうぬ貧乏者おなー正月んしーうーさん、夫婦ぐわーめんせーしがて。あぬだー、「今度おなー火正月さーやー、お祖母」りやーなかい、火正月し、さぐどう。又うぬ、金持人ぬ家やなー肉から何から大変まんりよ。あぬー贅沢にそーんりしが、なーうまー何ん無えんなたぐどう。

あんし此ぬ、うぬ天から降りていめんそー来る、あぬだーうぬ丁度、物乞ぐわーふーじーてーなー。うぬ人がめんそーやーに、うぬ金持人ぬ家んかい泊まいがりちめんそー来ぐどう、泊まらさんたんり。

昔、金持ちと貧乏人がいたらしいが。金持ちの家は何でもあり、正月も立派に迎えたつて。またその貧乏人は夫婦でいたらしいが、正月もできないほどだつた。「今年は、もう火正月しようね、お祖母さん」と言って火正月をしていた。また金持ちの家は肉でも何でもたくさんあり、とても贅沢にしていたらしいが、ここは何もなかつたようだ。

それから天から降りていらしたらしいが、ちょうど乞食みたいな人がね。その人が金持ちの家に行つたのだが、泊めてくれなかつたつて。

泊まらさん、あんしが今度おなー又、貧乏者ぬ家ん
かい行じやぐとう、「なー、うまんかい泊まみそーり」
りち。「一夜明かしみてい興り」りち「うまんかい泊ま
みそーり」りち泊まうちやれー。「あんし何んちお婆さ
ん達や、あぬ正月んやるむんぬ、あんし火ぐわーびけー
ん前なちめんせーが」り言ぢやれー、「なー何ん無えら
ん。孫、子ん居らんぐとう、なー火正月すんどー」り
ち、さぐとうてー。あんさーに、あんしされーなーう
ぬ神ぬ、なーあんしぇーならんりやーに。今度お、あ
ぬーシンメーナービンかい湯う沸かしみやーに。なー
うりから、うぬジーフアーヌカブぐわーし、あぬ薬入つ
たぐとう、なー御馳走ぬだんだん、なー肉から何から
煮ち年ん取つてい。

あんしそーるむぬ又、「今度お若くないしとう、(あ
ぬだー何んりがらー) 錢とう何やましやが」りちやぐ
とう。「なー、ちやー若くないしぇーまし」んり言ぢ。
されーなー、又ん湯う沸かしりち、沸かさーにてー。
あんし薬入りやーに浴みたぐとう、うぬ人ん達やなー
じこー若くなやーに。

隣ぬ、うぬ金持人ぬ、お婆達やうり見じやーなかい、

泊めなかつたので、今度は貧乏人の家に行つたら、
「ここに泊まつて下さい」と。「一夜泊めてくれ」と頼
んだら、「どうぞ泊まつて下さい」と泊めてあげた。「ど
うしてお婆さん達は正月なのに、火を前にしているの
ですか」と言つたら、「もう何もないから、孫や子供も
いないので火正月をしているんだよ」と言つた。する
と、この神様がそれではいけないと、シンメーナービ
に湯を沸かさせた。それから簪のサジ状の部分で薬を
入れると御馳走がいっぱい、肉やら何やら出てきて、
それを煮て年越しすることができた。

そうして今度は、「若くなるのと金とどつちがいいか」
と言つた。「それはもう若くなるのがいい」と答えた。
するとまたも湯を沸かしなさいと言われ、湯を沸かし
た。そうして神様がその中に薬を入れて浴びると、そ
の人達はとても若くなつたそうだ。

すると、隣の金持ちもそのお婆さん達を見て、「私達

「なー私達んあんし若くないしえーましやぐとう、いつ
たーやちやーしさが」りちやれー。うぬ人ん達んなー
頼みーがめんそーちゃぐとう。やつぱしなーあぬ湯う
沸かしりち、湯う沸かちやぐとうてー。沸かちやれー
うりんかい、うぬ人ん達ん浴みたんりよ。浴みたぐとう
一人やあぬー女ぬ主人お猿んかいなでい、又あぬだー、
男主人お飛び鳥んかいなやーに飛り行ち。

あんさーに、うぬ猿んかいなたる人よーなー、毎日
うまんじなー物まんてい。うぬ、貧乏やたる所んじて、
物まんてい、うぬ門んかい座ちよーしが。あぬー、後お
なー、うまぬわじやーなかい、マーサイサー焼ちゃーに
よ、門ぬうまんかい、うりが座やーなかいうぬ人お、
うれー染屋ぬ赤尻猿りちよ。

うぬ主人およ、染屋やたんりよー、うま。あんさー
にうんにーからあぬだー、猿や爪ん黒ろーせーやー。
あんさーに尻えうぬ石ぬ上んかい座ちやぐとう、焼き
やーに赤尻猿なやーに、あぬうりやたんり。

もそのように若くなりたいのだが、あなた達はどのよ
うにして若くなつたのか」と聞いたようだ。そうして
金持ちの人も頼みに行つたので、やつぱり湯を沸かし
て浴びたそうだよ。浴びるとそこのお婆さんは猿にな
りお爺さんは鳥になつて飛んで行つてしまつた。

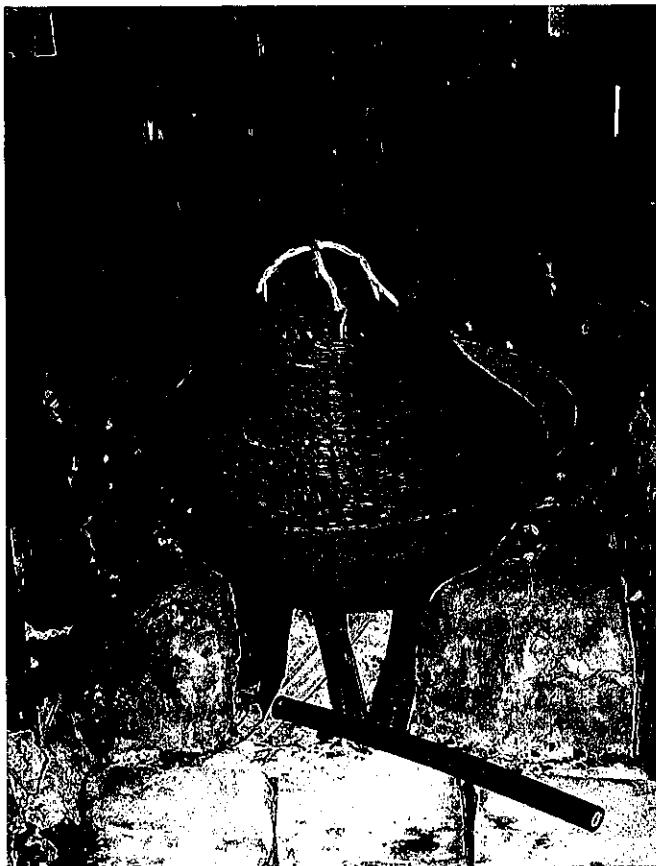
そして、その猿になつた人は、毎日のようにそこに
物乞いに來たつて。貧乏だつた人の所に来て、物を乞
うて門に座つていたようだ。しまいには、若くなつた
貧乏人夫婦が怒つて、その石を焼いてよ、その猿がい
つも座る門の所に置いていたらしい。猿はそれに座つ
てしまい、その人は染屋の赤尻猿というようになつた。
猿になつたお婆さんは染屋だつたらしいが、猿は爪
も黒いでしよう。また、尻は石の上に座つたので焼け
て赤尻猿になつたという話だつたようだ。

②ジーファー 簪のこと。王族時代、當時髪にさした髪飾りで身分を表示した。金・銀・真鍮・べつ甲・木竹などのほか、明治以降はアルミ製もあった。

③マーライサー 黒色の堅い石。力だめしの石として使うこともある。



ジーファー



カマンタとシンメーナーピ

猿
長
者

著者 長嶺ウシ(明治三十三年一月五日生)

翻字・対訳 村山友江

昔ぬ何りが、金持ちとう貧乏とう居とーてい。あん
しなー金持ちえー正月りちん、大変何んどうー易つさ
しが。或る隣に夫婦の年寄りお婆、お爺がめんせーとー
てい。うぬ人ぬ達があんし何ん貸らしりーしん貸らさ
ん。なー何ん無えんるあぐとう、火正月さーやーりち、
火いバンバン前なち正月すし、神様が下りていめんそー
ち。うぬ人ぬあんし、「水汲り来わ」りち、水汲りつち。
朝ぬ、うぬ若水さーに、うぬ人ぬ達あ浴みしたくとう
十七、八ぬ若者なてい。

あんさーにうぬ小てんぐわー、匙ぐわーぬみーびかー
んる入りーたしが、御飯やら何やら沢山御馳走ん出来
てい。あんさーに隣んかい金持人ぬ家んかい行じやぐ
とう、「私達やくんなげーぬ隣ぬ、あぬ一年寄りるやた
しが、かんし神様がめんそーち、くんぐとうーし若く
なたんどーやー。若水、水汲りつ來うりし浴みたぐとう
が。それで金持ちは正月をするにも、お金もあるから
何でもないことだつた。隣には年寄りのお爺さんとお
婆さんが住んでいたそうだ。その人達が金持中に何か
貸して欲しいと頼んでも、ちつとも貸してくれなかつ
た。もう何もないものだから、「火正月をしようね」と、
火をバンバン焚いて、火を前にしている所へ神様が下
りていらつしやつた。神様が、「水を汲んで来なさい」
と言われたので水を汲んで来て、朝の若水で、その夫
婦を浴びせたら十七、八の若者になつたつて。

そうして、小匙ほどを入れたのだが、御飯やらいろ
いろ御馳走も出て来たそうだ。それから隣の金持ちは
家に行き、「私達は隣の年寄りだが、このように神様が
いらつしやつて、若くなつたよ。若水を汲んで来て、
それで浴びたらこのように若くなつたんだよ」と言つ
た。これを聞いた金持ちは、「だつたらもう、その神様

るかんし若くなたる」りち言ちやぐとう。「とーあんせー、
うぬ神様あ今何処んかいめんそーちょーぐとう、何処
ぬ門めんそーちょーん」りち、止みたぐとう。

うまーうぬ金持人お、大変精神が悪つさぬ貧乏者う
せーていならんなやーに、「どーりん」りち。うぬ神様
頼り浴みたぐとう、猿とうか直ぐうぬままなやーに、
「とーうぬ富えいつた一物やさ」りち、取らちゃんと
さ。そんな話や昔ぬ年寄達やゆー言たしがてー。本当
ぬ事るやらー、うれ一分かいんなー。

は今はどこら辺まで行つていらつしやるはずだから、
どこそこの門の辺りまでいらつしやつてはいる」と、引
き止めに行つたらしい。

その金持ちは大変根性が悪くて、貧乏人を馬鹿にし
ていたのだが、「どうが来て下さい」と神様に頼んだ。
そして同じように浴びたら、猿になつてしまつたつて。
それから神様が、「はい、その富は貴方達のだよ」と、
金持ちの財産を貧乏人にあげたということだよ。そん
な話は昔の年寄達はよく話しておられたさあ。本当
の事なのか、それは分からぬよ。

採集 S 51・12・19 読谷村民語調査団第八班（長嶺洋子・田場米子・上原常子）

36 猿 長 者

話者 砂 辺 靜（明治三十六年二月十八日生）

翻字・対訳 村 山 友 江

余所のお爺さん達んかい、一番金持人かい行じてー。
又、貧乏者ぬ所んかい行じやーなかい、「泊みていくなり」
りちやぐとう。「あんし私達や、あんし汚なきぬ所やし

最初に、一番金持ちのお爺さんの所に行つたつて。
それから次に、貧乏人の所に行つて、「泊めてくれ」と
言つたらね。「うちは、こんなに汚い家だが、それでも

がやー、泊までいん済むらー泊まり」りち、泊まらち。

あんさートウシヌユールーやしがてー、又なーうまぬお爺、お婆達や、物言まーきてーんてー。芭蕉ぬ葉んかい、何やたがやー。ユーナーガーサンかいキンキリヌウケオチりがらー言たんよ。あんさー芭蕉ぬ葉んかい、何りたがやー、うりんかいなー、年ぬ晚やぐとう何んくい置ちきていうりせーんてトなー。あんさーなかい、うれー神様るやぐとう、うりさーなかいなー、神様ぬ上とう連絡さーなかい、御馳走ん何んうりしてい、大変幸福なお正月しみてーんてー。

あんさくとう又、あぬー風呂ん、熱ち風呂立ていやーなかい、「うりんかい入り」りち。あんさーに夫婦入つてい。あんさーあぬー、なー大変年寄るやしが、直ぐ若くなていー、二十歳みーいてー。あんしきぐとう、あんさーなかいうぬ、神様やぐとう帰てーみせーたるばーてー。

あんし、うぬ金持人ぬうまんかい来ぐとうや。なーうま、直ぐなー、大変何んくいんまんり、幸せな暮らしそーるばーてーや。あんしきぐとう、「何がいつたー」や、ちやんなかいあんし富えしやー、あんし何んくい

よろしければ泊まつて下さい」と、泊めてあげた。

その日は大晦日なんだが、そこのお爺さんとお婆さんは物の言い方が良かつたんでしょう。芭蕉の葉に何と言っていたかな。ゆうなの葉にはキンキリヌウケオチとか言つていたが。大晦日だというのに芭蕉の葉に色々御馳走を入れて差し上げたんでしょう。その方は神様だつたので、上の方と連絡を取り合つて、御馳走やら何やらいっぱい出してあげ、大変幸せな正月をさせたそうだ。

それから風呂も温かく準備し、「それに入りなさい」と言われたようだ。それで夫婦揃つて入つたら、大変な年寄りだけど、すぐ二十歳ぐらいの若さになつたつて。それから神様は帰られたようだね。

そしてまた金持ちの人がそこにやつて来たら、貧乏人の夫婦は何もかもあつて、幸せに暮らしていたつてさあ。それで「どうしてあなた達は、そんなに金持ちになつたのか、こんなに何もかもあつて。あなたはそ

んまんどーる。いやーあんし若くなとーる」り言ち話い
せーるばーてー。隣ぬ欲張りぬお爺さんが。

あんしきぐとう、「あんし、うぬ人お何処んかい行み
せーたが」りちやぐとう。追つい行じなー、自分達ん
すぬうりやてーんてー。あんしうぬ人おめんそーやー
にや。うぬ人おめんそーやーにや、あんさーなかい、
直ぐ家ぬ主え鼠んかい、家ぬ主りしえーや。あんさー
にうれー女お鼠なち。男あ又、門んかい臼出じやちゃー
なかい、うりが上んかい座やーなかい、猿う尻え。
あんし貧乏者、貧乏者ぬ達や、うぬ「いつたーうま
んかい、いつたーうりしよー」りち。あんさーなかい、
うぬ貧乏者ぬ達がうりさーなかい、うつたー幸せに幸
福に暮らちやんりぬ話。

んなに若くなつて」と言つて話をしたようだね。隣の
欲張りのお爺さんが。

事情を聞くと、「それでその人はどこに行かれたのか」
と聞いた。追つて行つて、自分達も同じようにするつ
もりだつたんでしようね。そして神様はいらつしやつ
てね。神様がいらつしやつて（同じようにしたはずだ
が）、そこのお婆さんは鼠になつたつて。女主人は鼠に
なつて、お爺さんは猿になつた。門に臼を出して、そ
れに座つたら、猿は赤い尻になつてしまつた。

それで貧乏人は、「お前達はそこに住みなさい」と神
様に言われた。そうして、金持ちの家に貧乏人が住む
ようになつて、幸せに暮らしたという話。

話者 石嶺カメ（明治三十三年五月十五日生）

翻字・対訳 知花孝子

お爺さんとお婆さんが居たそだが。その家にボロを着けた夫婦が、「今日一晩泊めてくれ」と来たら、「いいえ、こんなボロを着けているような貧乏者は、私達の家に泊めるわけにはいかない」と、すぐに追い出しちゃつたって。すると「ああ、そうか」と、そのお爺さん達は帰つて行つた。

お爺さんとお婆さんがめんせーたんりしがよ。うまんかいフクターーぐわー着ちなー、「」とうくる、「今日、一夜お泊まらち呉り」りち、めんそー来ぐどうや、「ん」んんー、うんとーぬ貧乏者や、フクターー着やーや、私達あうまねー泊まらさんむー」りち、すぐ押し出じやちゃんりぬばー。あんすぐどう「えー、あんやみ」りやーに、又帰ていよ、うぬお爺さん達や。

あんさーに又、隣んかい行じやーなかい、「今日一夜泊まらち呉り」りちやくとう。「何、いつたーや何処からやが」りちやれーや、「私達や物乞あ裝いそーしがや、物乞ぬ支度そーしが、『今日、一夜お泊まらち呉り』りちさくとう。『んーんんー、うんぐとーぬ物乞あ』隣んじえー泊まらさんりぐとう、私達あ押しやらさつとーしが「あんせーいつたーやなー、今日、一夜おなーうまうてい泊まれー。正月ん一緒せー」りち、あんしやたんりさりちぬ話やたん。

それから隣に行つて「今日、一晩泊めてくれ」と頼んだら「貴方達はどこから来たのか」と聞かれたので、「私達は惨めな姿をしているが、隣で『今日、一晩泊めて下さい』と言つたら、『このような物乞いを泊めるわけにはいかない』と、隣から追い出されてしまった」と言つた。そして貧乏人が言うには、「貴方達は、今日一晩はここに泊まつて、一緒に年越しもしなさい」という話だつたよ。

あんないなかい、うまぬ貧乏者ぬ居る、沢山直ぐ何
ん御馳走ん出じやちよ。うぬウスメー^姓、ハーメー^姓達が、
あんしやたんりざりぬ話い聞ちやる。

採集 S 51・12・19

読谷村民話調査団第一班（遠藤庄治・上原ヨシ・玉寄春美・石嶺まさみ）

そうしてその貧乏人の家では、御馳走も出して、一
緒に年越しをした。そのお爺さん、お婆さん達はそ
うだつたという話を聞いた。

注①ウスメー 平民でいうおじいさんのこと。

②ハーメー 平民でいうおばあさんのこと。

38 大歳の客へ御馳走十若返りく

話者 長浜マツ（明治四十年六月十五日生）

翻字・対訳 村山友江

（お婆さん）とうお爺さん暮らしぬんめんせーたん

り。

あんぐとううぬ金持人ぬ家んかい、「家あ貸らし」り
ち。なーうぬ神様るやみせーぐとう、フクター色々着

ちてー。フクター、なー物乞あ姿いし、うまぬ現世う
見がる來、うぬ人おなー天から下りていめんそー来ん
りしが。うまの一分からんせーや、金持人ぬん。貧乏

（お婆さん）とお爺さんが暮らしていらつしゃつた

そうだ。

そこで、ボロを着けた神様が金持ちの家に「家を貸
してくれ」と尋ねて行かれた。神様はボロをまとつた
物乞いの格好をして、天から下りていらつしゃつて、
現世の様子を見に来られていたそうだが。その人達
は分からぬさあね、金持ちはも。貧乏人がも分から

者ん分からんせー、初めー。

ないさあ、最初は。

あんさぐとう、金持人ぬ家かい初め行じやぐとう、「今日やトウシヌユールーりち、いやーや知らんるありー。トウシヌユールーげーなー、いやー人ぬ家んかい家あ借いが来み」りち。じこー悪さつていてー、うぬお爺さのー。フクターン着ちるめんせーぐとう。あんさーに、「家や借らさん」りち戻さつてーぬふーじ。だから、なーあんせーちやーすがやーりち、泣くうぬ人お戻みそーち。うぬ貧乏者ぬ家かい行じえーるふーじてー、うぬフクターンくわんくわん着ちよーみせーる、なー御神るやみせーしが。

あんすぐとうなー、うぬ貧乏者おなー火い燃ちよ、お爺ん、お婆んなー白髪かみとーてい、火ぐわー燃ちなー、火正月しみせーたんり。なー食むる物ん無えらん、火ぐわー温り、なー夫婦座ちよーみせーたんり。猿と一同ぬ物。

最初は金持ちの家に行くと、「今日は大晦日だというのに、お前には分からぬのか。大晦日だというのに人の家に宿を乞いに来るか」と。このお爺さんはボロを着けていらっしゃるものだから、たいそう無下にされたそうだ。「家を貸すことはできない」と戻されたそうだね。それで、もうどうしたら良いものかと、泣く泣くその人は戻つて行つた。その方は神様であられるのだが、ボロを重ねた格好のままで、今度は貧乏人の家に行かれたつて。

すると、もうその貧乏人の家では火を焚いて、白髪のお爺さんとお婆さんが火を焚いて、火正月をしていたそうだ。もう食べる物もなく、火に温まりながら夫婦で座つていたつて。猿みたいな恰好でね。

あんさぐとう、うまんかいうぬ人おめんそーち、「今日やなー、私ねーなー、かーま国頭ん奥山んかい行つちゅやしが、なー暗さぬ行からんぐとう、いつたんかい一晩お泊まらち呉らんなー」りみそーちやぐとう。「うん

そうしている所へ、ボロを着けた神様がいらつしやつて、「今日は、私は国頭の山奥に行くつもりだつたのだが、もう暗くなつて行けなくなつてしまつた。あなた達に一晩泊めてくれないか」と言つた。「こんな汚い家

べとう汚さぬ家かいや、な一泊まらさびらんさに」、
初め一断わたしが。「あらん、済むぐとう。な一今日」
夜明かしみてい呉り」りちさぐとう。「あんせーなー、
此処あ汚さーあみせーしが、うぬ人が言みせーるむん
ぬ、と一休みそーれー」りちさぐとう。

「何が、何りちいつたーや火いぐわんぐわん燃すが。
今日やトウシヌユールーするむんぬ。火い燃ち座ちよー
が」りちやぐとう、「食むる物ん無えらん、な一肉ん無え
らん、かんし火正用るさびんどー」り、うぬフクター
着ちよーる人んかい言ちやぐとう。「あんるやりー」り
ち、「とーあんせー私がやー、いつたー御馳走い作らす
ぐどう、水ぐわー入つて鍋んかいしれー」りちや
ぐどう。鍋え有てーんてー、ゆーさんねー。水え入つ
ていいしたぐとう、うぬ人が薬ぐわー垂らしみせーた
んり。あんぐどう肉んなれーなー、御飯んなでいてー。
なーうぬ人ぬ達や御馳走ぬなーだんだんない。あん
さーに「とーいつたー、此りさーに年え取れー」りち、
うぬタンメーが言みそーちやぐとう。一緒年取らやー
りち、うまうていうぬお爺さぬん年取みそーち。
「とーいつたーや年取つてーぐとう、な一浴みりわ

には、もう泊めることはできませんよ」と、初めは断つ
たのだが。「いいえ、それでもいいから、今日一夜を明
かさせてくれ」と言つた。「そうでしたらもう、ここは
汚い家ですけど、そうおっしゃるのでしたら、どうぞ
休んで下さい」ということになつた。

そこで、「どうしてあなた達は火を焚いているのです
か。今日は大晦日だというのに。火を燃やして座つて
いるのか」と聞かれたので、「食べる物もなく、肉もな
いのでこのように火正月をしているのですよ」と、そ
のボロを着ている人に言つたつて。「そうか」と「なら
ば私が貴方達に御馳走を作るから、鍋に水を入れなさ
い」と言われた、鍋はあつたんでしようね、多分。水
を入れて鍋をかけたら、その人が薬を垂らしたつて。
するともうその人達の前にいろいろな御馳走ができた。
そうして、「あなた達もこれで年を越しなさい」と、そ
のお爺さんがおつしやつたので、一緒に年越ししよう
ねと、そこでみんな一緒に年越ししたそうだ。

「それから、年越しをして、もう浴びなくちゃいけ

るやぐとう、水熱ちらちと一浴みーる考え方せー。いつ
たー若くないふさしとう、又年寄ないふさしとうじろー
ましが「りちゃぐとう、うぬ神様ぬ。「なるびちえー自
達や子ん居らんむんやぐとう、若くなれーやーり思
いびーん」りちゃぐとう。「とーあんせー水入つていうま
んかいいしれー」りちゃぐとう、水入つたぐとう、又
薬ぐわー垂らしみせーたんり。うにーねー「うぬ水し
まーん頭から掛けてい、まーんくい全部浴みれー」り
ち。浴みたぐとう、なーうぬチヨービン^(桂)ぬん全部真っ
黒なつい、なー昔ぬ十七、八んかいなとーみせーたん
り。

あんしなーさぐとう、なー自慢してー、「いえー私達
や、くんぐとうし、昨夜めんそーちょーる人ぬ、なー
あぬかんし肉んまんり御馳走んまんり、くんぐとう吳
てーみせーんどーやー。又あんし浴みたれー、かんし
頭からまーから全部若くなつい、皺んむる無えんなてい
や。なーかんし十七、八などーんどー」りち、うぬ
金持人かい行じやぐとう。「ひー！あんやんなー。あん
しうぬ人お何処んかい行いたが」りちえーぬふーじ。
「とーあんせー、あまんかい行みせーたんどー。帰み

ないから、あなた達は水を沸かして浴びる準備をしな
さい。あなた達は若くなるのと、年寄りになるのと何
が良いか」と、神様がおつしゃつた。「なるべくはもう
自分達には子供もいながら、若くなりたいと思つて
います」と答えた。「じゃあ、水を入れてそこに置きな
さい」と言われたので、水を入れたら、そこにまた薬
を垂らしたそうだ。そして「この水を頭からかぶつ
て浴びなさい」と神様が言われた通りに浴びたら、も
う頭の白髪も真っ黒になつて、昔の十七、八に若返つ
たつて。

そうなつたので、もう嬉しくてね、「おい、私達のと
ころに、昨夜いらつしやつた人が、このように肉など
御馳走も出して下さつたよ。また、おつしやる通りに
浴びたら、頭のてつぺんから若くなつて、しわも全部
なくなつてね。このように元の十七、八の若さになつ
ているよ」と、金持ちの家に行つた。すると「はあ、
そうか。それでその人はどこに行つたか」と聞いたの
で、「それだつたら、あそこに行かれたよ。帰られて行つ
たよ」と言うと、その金持ちの人がもう一回呼び戻し

せーたんどー、なー一回の一呼びりりちさぐとう。

又、めんそー来てー、うぬ金持人ぬ家んかい。あ

んさーに、「私達んあぬ人ぬ達あ如し若くなし」りちや

ぐとうよ。うぬ人ぬ達あ、「あんせーいつたーん若くな

さやー」りち。又、「湯う沸かせー、とー」りち、薬ぐわー

入りやーさぐとう、あまなー、なーひん年寄、ゴードウ

シなでいや、錢ん無えん貧乏なでい。うぬ人ぬ達んか

い、家ん全部奪らつたんり。

人間ぬ心りせーや、真面目に持つち。じんじあんぐ

とうし、腰曲がてい貧乏んならんしが、貧乏なでいがな

かい、腰曲がていゴードウシなたんりぬ話よ。うれー

年寄ぬ達が話しみせーたんよ。だから人の心見じゅん

りちるやしが、誠やみあらに悪るやるりち、うぬふー

じるやしが分かみそーらん。なー悪者、物乞あふーじー

とう行なてーるばーてー。フクターるくわんくわん、

御神るやみせーしが。

たらしい。

すると神様はまた、その金持ちの家にいらつしゃつ

たんでしようね。そうして「私達も、あの人達のよう

に若くしてくれ」と言つた。その人はまた、「だつたら

あなた達も若くしようね」と同じように、「湯を沸かし

なさい」と、薬を入れた。するとそこの人達はよけい

に年を取つて、お金もなくなり貧乏になつてしまつた。

その若くなつた人達に家も全部奪われたつて。

人間はいつも真面目にしなさいって。そしたら、そ

のように腰も曲がつて貧乏になることもないが、そ

うじやなかつたからよけいに年寄りになつたという話だ

よ。これはまた年寄り達が話されていたよ。それは人

間の誠な人なのか悪い人なのか、心を見るためなのだ

が、このようなことなのだが分からなくてね。もう悪

者、物乞いみたいな扱いをしたわけさあ。神様がボロ

を重ねて着けていたのだがね。

注①火正月 大晦日は何も食べるのがなく、火を焚いて正月を迎えること。

②チョービン 内容からして贋だと思われる。

翻字・対訳 玉城和美

昔、或る所に、お爺さんとお婆さんとめんせーたんり。あんしうぬ、お爺さんとお婆さのー、なーじー」ー、片方や金持人なてい、片方や貧乏者なてい。

あんさーになー「今日はもう、年忘り何んすしん無えらんしがやー、お祖母」りちやぐとう。「なー何ん無えんせーあらー、りーお祖父、あぬだー火い燃さーに、火正月さわん済むぐとう。年忘りし、なー火い燃ち、自分達やさーや」りち。

あんしそーる時に、或る人ぬ降りていめんそーやーなかい、「あんし、何がハーメー、いつたーや今日やうんぐとうそーる」り言ちやぐとう。「今日ぬ正月え私達やなー何ん無えびらん。産しむぬ子ん産しーさん、なーかんし火正月そーんちるやいびんどーやー」りち、火正月すんりちやぐとう。「あー、やん。とー、あんすらーいつたーや今日や私が御褒美に良い物うりすぐとう、私が言るぐどうしーよー」。「とーあんせー大鍋んかい、

昔、ある所にお爺さんとお婆さんがいらしたそうだ。そして、そこはとても金持ちで、もう一方のお爺さんとお婆さんは貧乏だった。

それで、貧乏人の夫婦は「今日は何もなく、年越しもできないよ、どうするお祖母さん」と言った。「何も準備してないのでしたら、じゃあお祖父さん、もう火を燃やして、火正月でもしよう。年忘れして、もう私達は火を燃やして年越しをしようね」と。

そうしている時に、ある人が降りていらつしゃつて、「どうしてお婆さん、あなた達は今日はこのようにしているのですか」と言つた。「今日の正月は私達はありません。子供もなく、こうして火正月をしているのですよ」と、言つた。「ああ、そうか。それなら、今日は私があなた達に褒美として良い物をあげるから、私の言う通りにしなさいよ、じゃあ大きな鍋に湯を沸かしなさい」と、湯を沸かさせて、それから薬を入れ

シンメーナービンかい水、湯う沸かせー」ちやぐとう。

湯う沸かち、あんさーなかい薬入つたぐとう。「とー、

あんせーうりんかい浴みれー」りち、浴みたぐとう。

なーうぬ人ぬ達や、んちやなー六十余いなみせーぬ人

ぬ達がなー、直ぐ四、五十んかいなてい若返てい。「あ

い、貴方がお陰なかい、なー若返いびたんどー」りち。

とーあんし、「いつたーや今日ぬ正月え」「私達や何

ん無えびらんぐとう、炭とう昆布とうさーなかいかん

し結り、夫婦二人がうりすんりちるやいびーたんでー」

りち。あんさーにお爺さんが炭持つ来ち、お婆さんが

昆布うりつし。あんしる昔から、此ぬ結婚式とうか何

とうかでいーねー、此ぬ昆布を結び昆布りち、夫婦二

人いきーなかい作い出じやちえーんりち、うりつし。

とーあんしうりから、なーうぬ夫婦二人やなー、

じこー心ん若くなみそーちやぐとう。

新たまる年に 炭とう昆布飾てい

心から姿若くなゆさ

りち。夫婦二人が歌作てーみせーんりち。今が今までい、
大変がうぬ人ぬ達や、昔かんかんやてーぐとう、貧乏

たらしい。「さあ、これに浴びなさい」と浴びせると、
その人達は六十余になられる人達なのに、もう四、五
十代に若返つてしまつた。「貴方のおかげで、私達は若
返ることができました」と。

それから、「あなた達は今日の正月はどうなさるので
すか」と聞かれたので、「私達は何もないでの、炭と昆
布をこのように結んで、夫婦二人で正月を迎えると
思つてゐるのですよ」と言つた。それからお爺さんが
炭を、お婆さんが昆布を持つて來た。それで結婚式と
か何かの祝いのある時には、昔から昆布を使つた。そ
れは昆布を結び昆布といふことで、夫婦で作り出した
といふことで、そういうふうにするらしい。

それからこの夫婦は、心ももう大変若くなつたそ
うだ。

新しい年に 炭と昆布を飾つて

心も体も若くなるよ

と、夫婦二人で歌を作られたといふことでね。今につ
けて、その夫婦は、私達は昔はこのように貧乏人だつ

者やぐとうりちん、力あ落とうすなよー。後お良い事ぬ來ぐとうりち。あんし歌ん前、作らつとーる話やいびんどー。

たけど、そうだからと力を落とすんじやないよ。後は良い事が来るからと。それで以前に歌も作られているという話ですよ。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第九班 〈運天悦子・棚原直子・金城宏子〉

注 シンメーナービ 80頁参照

40 城間ナーカ力〈盜人〉

話者 比嘉 静 (大正四年十月十七日生)

翻字・対訳 村山友江

城間ナーカぬ話ぐわーしんじやびら。あるなーか城間ナーカりち、昔人ぬ話ぬ有いびーしが。此ぬ城間ナーカー、戦前、戦後から通じてい、今んじこーぬ財産家やるばー。うぬ城間ナーカなし、じこー金持人なていさぐとう、下男子んなーじこーまんり。なー或るトウシヌユールぬ日、なー昔え金持人ぬる肉んまんり、貧乏者おなー、年ん取いさんあたいるやてーぐとう。

あんさーに、或る大変貧乏者ぬなし、子あまんどー

城間ナーカの話をしてみましよう。あるなーか城間ナーカとい、昔の人の話がありますが。この城間ナーカは戦前・戦後を通じて、今でもたいそうな財産家であるわけさあ。城間ナーカはたいそうな金持ちで、大勢の下男も使つていた。ある大晦日のことなのだが、昔はもう金持ちの家に肉もたくさんあつて、貧乏者は何もなく年も越せないほどだつたからね。

そうして、ある大変な貧乏者が、子供も大勢いるの

しが、年ん取いさん。じこ一貧乏者ぬ、「なー今日やなー、トウシヌユールやしが、私達あ肉一斤ぬん買いさんむんぬ。年ん取いさんむんぬ、よーい童ぬ達なーいつたー私がやー、取つてい来ぐとう。うにーに年ん取らさやー、待つちょーきよー」りち。うぬ男ぬ親あ城間ナーカんかい行じやーに、今日盜人し、肉取つてい來りわるやつさーりち。

なー夕方がきていなー、城間ナーカんかい行じさぐどう。なーうまー、直ぐアコークロー^(注)ぐわーになー。(昔えあぬ大竈りち、芋煮ちゃい肉煮ちゃい、今るなー焜炉やる、昔え全部大竈ぬ有たるばー)なー、大竈んかい、大竈ぬ後んかい隠てーるふーじ。うぬ人お。

あんしさぐとう、うまぬ主え大変良い人やみせーたらんりぐとう、金持人んやみせーい。うぬ盜人ぬ、なー竈ぬ後んかい隠いせー見ちるめんせーぐとう、「今日や、とー早くなーあぬー、肉ん沢山うまんかい煮りよー。いつたー下男お何名が。又、家族お何名が」りち。全部肉えたまし、昔えなー年取いんりち、全部肉うりすたるばー、沢山煮ち。「とーあぬ何名やが。なーうまか

だが、年を越すこともできない。大変な貧乏で、「今日は年の夜なのだが、私達は肉一斤（六百グラム）さえも買うこともできない。もう年を越すこともできないから、子供達よ、私が肉を取つて来るからね。それで年越しをしようね、待つておけよ」と。その父親は城間ナーカに忍び込んで、今日は肉を取つて来なくてはいけないと考えた。

それでもう夕方時分に城間ナーカに行つたようだね。そこではもう夕暮れ時になつていた。今はもう焜炉といいうのがあるが、昔は大竈というのがあつて、それで芋や肉を煮たりしていた。昔はどこでも大竈があつたわけさあ。大竈があつて、その後ろに隠れていたようだね。

そこの主は大変な良い人で、また金持ちでもあつたらしい。盜人が、大竈の後ろに隠れるのを見ていらつしゃつたので、下男達に、「今日は、早いうちに肉もたくさん煮なさいよ。あなた達の家族は何名か」とおつしゃつた。昔は、肉を使った料理で年越しするということで、人数分の肉を煮て準備させたそうだ。「はい、何名か、そこに全員分集めなさいよ」、「余分にあとひ

い全部ちりちやめりよー」りちやぐとう。「なー一ちえー、あぬ立派支度りりたんり。「何があんせー、私達あ家族おくつさる居いびーるむんやー、なー一ちえー何が。何やいびが、誰物やいびが」りちやぐとう。「あらん、私が言しえー聞けー」りち、うぬ主え。

あんせーうぬ一ちえー、又なー立派直ぐ、年取らすぬ支度ていさぐとう。「とーあんせー、皆早くなー夕飯ん今日やトウシヌユールでーむんぬちゅはーら食めー」りちさぐとう。「私ねー見ちょーしが、竈ぬ後んかい、なー一人やぐどうや、うまんかい出じり。いやーん此処んじ沢山肉ん食り、今日やなー年取つていやー、いやーんかい苞ん沢山持たすぐとう。直ぐ年ん取りよー。早く竈ぬ後から出じれー」りちやぐとう。なーうぬ盗人お、盗人しーがる入つちょーしがやー、「アキサミヨー、なー一大事などーん」りやーに。なー主ぬ言みせーせー聞かんあれーならんせー、ほろほろほろほろぐわー、なー出じてーるふーじ。

あんさぐどうなー、うまんじ肉んじこー御馳走しよーなー、一緒なー城間ナーカぬ金持人とう、家族とう一緒に御馳走し。「とーいった一家族お幾人が」りちやぐとう

とつ準備しなさい」と言われたそうだ。それで、下男は「どうしてですか、私達の家族はこれだけしかいなにのに、あとひとつというのはどういうことですか。誰の物ですか」と言つたら、「かまわず、私の言うことを聞け」と、そこの主は言われたようだ。

そうして一つは立派に準備して、年越しができるよう支度をした。「はいじゃあ、今日は大晦日だからみんな早く夕飯も腹いっぱい食べなさい」と言つた。「私は見て知つているのだが、竈の後ろにもう一人いるからね。そこに出て来て、お前もここで一緒に肉を食べて、年越しをしなさい。土産もたくさん持たせるから、年越ししなさいよ。早く竈の後ろから出なさい」と言つたら、もう盗人は泥棒に入つたのだが、「ああ、どうしよう、大変な事になつてしまつた」と。もう主の言うことを聞かないといけないさあ。ほろほろほろほろ出て来たようだね。

そこで、金持ちの城間ナーカや家族と一緒にたくさんの肉も御馳走になつた。「お前達の家族は何名か」と聞かれたので、「子供も五人います。妻を合わせると、

なー、「子ん五人居いびん。なー妻しーていー、私しー
ていー七人家族やいびんれー」りちやぐとう。「いやー
なー、うまんじちゅはーら食ろーぐとうやー、あんせー
六人分肉ん担みてい遣らさやー」りち、うまぬ主えなー、
大変良い人やみせーてーるばーて。肉んなー沢山担み

らち遣らちやんり。

あんさぐどうなー、直ぐ妻から子から、「私達あスー
今來がやー、今來がやー、肉盗り來がやー、來が
やー」し、待ち兼んていーそーーーぬふーじ。あんぐ
とう、言んねーすんねースーーやめんそーちやぐとう、
「スー、沢山肉ん取てい来」りちやぐとう、「沢山なー
ひやー、私ねー今日や取てい来んどー。今日やな一年ん
取てい、良い正月さーやー」りち。なー家族じこー御馳走
しや、年ん取てい。

あんさぐどうなー、うぬ人お大変うり、「私達あなー、
働ちぬ足らーんぬるや。かんし貧乏んし、あるなーか
城間ナーカりち、あまー働ちみそーちるあんし富さぐ
とう。私達ん直ぐ明日から一生懸命働ちや、富さーやー、
童ん達あー」りち。あんしなー、うぬスーーやてー、童ん
達んかいなー「あんし、明日からー私達あ働ちぬ足らー

私と七人家族ですよ」と答えた。「お前はここで腹いつ
ぱい食べたから、だつたら六人分の肉を持たそーね」
と、そこの主は大変良い人であつたわけさ。肉もた
くさん担がせて行かせたつて。

すると家ではもう、妻や子供達が、「私達のお父さん
はもう来るかなあ、もう来るかなあ、肉も取つて来る
かなあ、来るかなあ」と、待ち兼ねていたらしい。す
ると、言うやいなやお父さんが帰つて來たので、「お父
さん、肉もたくさん取つて來たか?」と聞いたら、「今
日はたくさん取つて來たよ。今日は年越しの夕飯も取
り、良い正月を迎えようね」と。家族で駆走を食べ、
年越しをした。

もうこの人は大変考えたんでしょうね。「私達は働き
が足りなくてこのように貧乏なのだから、あるなーか
城間ナーカといふうに、あそこは働きがあつてあん
なに金持ちなんだからね。私達も明日から一生懸命働
いて金持ちになろうね、子供達よ」と。お父さんが子
供達に、「私達は働きが足りなくてこのように貧乏して

んぬるかんし貧乏そーぐとう、一生懸命働かやー、子
ぬ達あ」りちさぐとう、うぬ子ぬ達あ大変性根入つち。
なーじこーうま富し、盜人するやしが。

あんしなー、じこー子ぬ達あ性根入やーになー、じ
こー富さぐとう。此れー是非、城間ナーカんかいお礼
しーが行きわるやるりち、うぬ人お子ぬ達ん直ぐ丈々
なーい大なたぐとう。なー沢山直ぐ何んくい買てい行
じ、「なー貴方が御陰様にやー、私達あかんし子ん達ん
性根入つち富そーびーぐとう、昔前ぬ有たる事う覚
とーみせーびがやー」りちさぐとう。「いやーひやー、
私達んかい盜人し入つちよーせー、いやーあんし富そー
んなー」りち。うぬ人おなー、「あんせーなー、いやー
がうりそーる、私達あ子ん達が性根入つちよーぬ分し
なー大事やさ」りち、うまぬ主えあんしなー、うりし
みそーちゃんりしが。やつぱし今ちきて、城間ナーカ
なー財産家。城間ナーカりち、あるなーか城間ナーカ
りち。

いるのから、明日からは一生懸命働こうね、子供達よ」と言つた。すると子供達も性根を入れ替えて、そこも大変な金持ちになつたつて。元は盜人をするほどに貧乏だつたのだがね。

子供達も性根を入れ替えて、大金持ちになつた。

これはもう是非、城間ナーカにお礼をしなければいけないと、その人は子供達も成長したのでそう考えた。いろいろな物をたくさん買つて行き、「貴方のおかげでね、私達は、子供達も心を入れ替えて、金持ちになることができました。昔、以前にあつたことを覚えておいでですか」と言うと、「うちに盜人に入つたのが、こんなに金持ちになつたのか」と。その人はもう、「お前にあんなことがあつて、子供達はみんな性根が変わつたのだつたら大変良い事だよ」と、その人の主は言われたそつだ。やつぱし戦前、戦後を通じて大変な金持ちだつたつて。今につけて、あの城間ナーカは財産家。あるなーか城間ナーカといふことでね。

注①城間ナーカ　浦添市城間に実在する富豪の家。

②アコードクロー 夕暮れ。夕方の暗くなりかけの頃をいう。

41 城間ナーカへ田の酒甕

話者 仲榮真三 良(明治二十七年七月二十日生)

翻字・対訳 村山友江

裕福、田ぬ、城間ぬ昔ぬ道から那覇んかいぬ、此ぬ
戦ねー、昭和二十年ならんまーるまでー、那覇んかい
ぬ道。うぬうまから、かーま海ぬとうー、なーあまぬ
田やしが。うれー田ん、二万坪びかーんねーんたがやー、
田あ。二万坪、田あ、山野ん何んまんり。なーあれー、
昔からぬ財産持ちがやらー、やみせーたらーやしが。

城間ナーカは大変裕福だつた。戦前は那覇に行くに
も城間の道を通つて行つていた。(それほどに土地があつ
た)田も、もうずっと海の近くまで、城間ナーカの土
地だつた。それはもう二万坪もあつたんじやないかな。
田や山野も多く所有していた。そこはもう、昔からの
財産家だつたのか、そういうふうにすごい金持ちだつ
たらしいが。

うれー、田ん何ん、なーシカマーんそーい、うりか
ら、シカマー達ありやたるばー、田草刈ちーが行じや
ぐどう。一、三千坪どうか。うれー二万坪、一、二万
坪りちやんてーん、自分のー全部おせーうらん筈。貸
ねーしみたいそーくどう。二、三万坪びかーん有てー

ある日、下男達に、田の草を刈りに行かせたようだ
ね。城間ナーカの土地は一、三千坪とか。二万坪ある
といつても、全部を自分でやつているということでは
なく、貸したりもしていた。土地も合わせると。土地
もすべて計算すると、もうどのくらいになるのかは知

んやー。地しーていーや。地しーていー、なーちやつさが有たらー、うれー計算お分からんしが。二十四、五人五人、三十人なー、田草りち、うぬ稻ぐわーうなぎなー生ねー、田ぬ草かぢやーしーが行ちゅしが。

ありやるばーてーやー、此ぬ主えタンメーや、田ぬ真ん中んじ、チュワカサーんかい酒入つてい行じ、油断んさんよーい立派かち、ぐるくかぢゅんりるばー。田ぬ真ん中んじチュワカサー置ち、さくとう。早くうりあまんじ行じやーい、早く飲むる考えやぐとう。居るうつき。

あんさーなかい、うぬ真ん中んかい置ちえーせー飲り、又、残いし行じょーぐとう。家かい行じやくとう、「とー、いつたー物お、なーだやぐとう、又んしつ來り、遣らさつたんりぬばーてーや。酒ぬ有ぐとう、早く嫌な切さーに飲れーんりちぬ事やぐとう、又んしみらつたんりるばー。あんさぐとう、又んしーが行じさくとう。うんにーねー立派しつちーがさらーやしが。

良い人やたんり、うまぬ人お全員、嫁ん。十四、五人なーん賄てい、又、全部畠んかいん、畠からん一緒

らないが、二、三万坪もあつたと思う。二十四、五人の下男が、稻が生える頃に田の草を取りに行つたようだが。

ここのは主人のタンメーは畠の真ん中に酒を入れた一升徳利を置いて、立派に草を取り、急げずに早く刈り取らせることができたそうだよ。田の真ん中に一升徳利を置いて、そこまで早くきれいに取つて行けば、酒が飲めるわけだからね。全員。

そうして、真ん中に置いてある酒を飲んで、草を残したまま帰つて行つたんでしょうね。下男達が家に戻つたら、「お前達はまだ済んでないから、もう一度取つて来なさい」と、行かされたようだね。酒があるものだから、早く終わりたいばかりに、きれいに取らずに酒を飲んだということで、またも行かされたわけさあ。そうして、またも行かされたので、その時はきれいにやつたのか。

良い人でもあつたつて、そこの家族は全員、嫁も。

十四、五人の下男を賄つて、また畠にも一緒に行つ

ん來、薪ぐわ一拾つてい、燃すし。此ぬ木薪ぐわーん
何ん、燃ち。うりつし畑ぬ行ち戻いし折いるさく、薪お
やたんりがらー。城間ナーカぬ嫁、カマルーリ、ヤカ
ラ者やみせーたんりがらー。

今度お、正月に、トウシヌユールに、あぬー下。下お
女中達が食事んすがいん、うり見らんがあたらー。
何時入つちやらー盜人ぬ、うまかい入やーに、天井
んかい昇いし、よーんなーよーんなーさぐどう。

此ぬ主タンメー横などーている寝んどーたらー、
知らんふーなーそーてい、さーに。夕飯、トウシヌユー
ルぬ、しき飾い、入りしきし肉ん何ん御飯ん何ん入り
しきさぐどう。「今日ぬ夕飯お人ぬ居るうつき一済むん、
分かいくどう。」ちえー多く入りりよー」りちさぐどう。
目ぐるぐるしなー、女中や珍さし、かんしつし。なー
でちえー多く入りりよーりち、さーに。

夕飯ぬ時分なたぐとう、「とー、あぬ天井んかい昇い
たる二才え下りてい来」りち、直ぐれー驚ち、ゆか
い長えゆるんし。後おなーやぐみさし恐るさ、後お下
りやーに。「此処んかい来」りち、タンメー側んかい呼
り来ぐとう。「いやー、何やが。ちゃーる成り行ちし、
た。「ここに来なさい」と、タンメーの近くに呼んで、

て、薪を拾つたりもしていたそーだ。小枝なども拾つ
てきては薪として燃やしていた。そういうふうに畑や
薪取りにも一緒に行き来したりしていただらしい。城間
ナーカの嫁・カマルは大変気丈な方だつたらしい。

今度は、大晦日に、台所にいる女中達は食事の支度
をしているのに、見なかつたんでしようね。いつ入つ
たのか知らないが、盜人がそこから入つて、天井にゆつ
くりと上がつて行つた。

タンメーは横になつて寝ていたのでしよう、それを
見ていたが知らないふりをしていた。そして、大晦日
の供え物や飾り物、肉や御飯を準備していらー、「今日
の夕飯はいつもの人数分より、ひとつは多く入れなさ
いよ」とタンメーは女中達に言つた。もう女中は目を
丸くして、辺りをぐるぐる見回した。一人分は多く入
れなさいよとおつしやつたのでね。

夕飯時になつたので、「はい、天井に昇つてゐる青年
も下りて来なさい」と、もうタンメーが言うと、盜人
に入った青年は驚いて、長いこと下りて来なかつた。
後はもう、恐れはばかり、恐ろしくなつて、下りて來
た。「ここに来なさい」と、タンメーの近くに呼んで、

人ぬ、いやーや変な事、天井んかい昇たが」りさぐ
とう。「あー、実えなー車引んちやー、那霸ぬ人力車引
ちやーやしが。あー、童ぬ達ん幾人、幾人やいびーし
がなー、トウシヌユール食むる物ん無えらん、買いる
錢ん無えらん。ちやー、命びちやーりぬあたいぬ立場
なてい。童ぬ達ん多さぬ、車引んち儲きてーなー正月ん
しーうーさんりち。貴方達あ家庭んかい掛かいねー、
何がな少ん正月ぬはんしないしん、ウンチエームンな
いがすらりちやいびん「りちやぐとう。「あんせー、いやー
童ぬ達あ幾人が」りちやぐとう。「ああ、幾人やいびん」、
ありしきくどう。「えー、あにー」りち。

うりから「とーあんせー済むくとう。使え一縉行じ來」
りち。うまから、嘘がやらりち、うまから又男二人ば
か一、三人、うぬ本人しーていー三人、遣らちゃん。
二人がらー遣らちやんりーしが。「あー、なーうれ一本
当ぬ、生活上立場、なー苦しい生活立場そーびん」り
ち。うぬうまからタンメーが、「とー、いやー一縉ん行
き」りち、遣らちやしが訴えさぐとう。「済むん」りち。
あんさーに又ん、又ん来るばーやぐとう。うぬ本人お、

「お前は何者か。どういう成り行きで、人の家の天井
に昇ったのか」と言われた。「あの、実は私はもう那霸
で人力車夫をしている者です。子供も何人もいるので
すが、大晦日だというのに食べる物もなければ、何に
も買うお金もない。やつと命を繋いでいるだけという
ほどの生活をしています。子供達も多く、車引きだけ
では、もう正月をすることもできません。貴方の家に
入つたら、何か少しでも正月の足しにできるような物
が押借できるかもしれないと思つて忍び込みました」
と答えた。そして、「だったら、お前は子供は何人いる
のか」と言われたので、「ああ、何人いますよ」と答えた。「ああ、そうか」と。
それから「もうよろしい、使いの者も一緒に行つて
来なさい」と。嘘かもしけないと思つて、使いの男を
二人ばかり、本人も含めて三人行かせた。そして使い
に行つて来た男が、「あの家族の生活というのは、本当
に苦しい状態にあります」と報告したので、「よろしい」と。

盗人と使いの者はまた戻つて来て、那霸で車引きを

那覇んかい車引んちやーや、うんにーねーうれー証拠お
上がてい来ぐとう。「本当、うぬ人ぬ言んねーやいびん。
苦しい立場そーびん。なーやーさ苦さんりぬ立場」り
ちやぐとう。米とう肉ん沢山、四、五斤びかーんがらー、
大根そー物、米とう。「正月、あんせーうまから貸らす
ぐどう」りやーに、正月しみやーに。

又うまぬ使たんりるばー、うぬ人お。うまぬ下男、
うまんかい住み込み。童ん達ん住み込みしちゃんりが
らー。うぬふーじー使いてーぐとう。

あんしうまーなー、貧乏者助きて。寒させー着物
くしり、やーさせー物呉て。りぬあたいぬ、大変ぬ良
い精神ぬ方々なやーに。なー、富え通ちよーんりぬばー
てーやー、富え。富え減ならん、たつた富勝いるすん
り。うれ、あんし心やぐとう。人、人間お。

やぐとう貧乏者やぐとうりち、うせーたい何さいしー
ねー、なーうれー大事やぐとう。人ぬ心んりせーなー

していたという本人の言葉は嘘ではないということが
分かつてているのだから。「本当にこの人の言う通りです。
苦しい立場にあります。もう腹を空かせて苦しい立場
です」と使いの者が報告したから、米と肉をたくさん、
四、五斤ほどだつたのか、大根なども持たせた。それ
で、「正月をする物は貸してあげるから」と、正月もさ
せてあげた。

それからまた、この城間ナーカが使つたようだね、
この人を。その下男として、子供達も一緒に住み込
みで働いたそうだ。そういうふうな人達を、使つたよ
うだね。

そのようにして、城間ナーカは貧しい者を助けてい
た。寒くしている者には着物をつけさせて、おなかを
空かせている者には食物を与えて、というほどに良い
精神の持ち主であられた。それで、富は保たれている
ということだよ。富は減らない、だんだん勝るばかり
だつたつて。それは、そういう心だから、人間といふ
のはね。

だから、貧しいからといって、馬鹿にでもしたら大
変なことだよ。もういかなるどんな人でも、金持ちで

うれし、如何なちやーねーぬ人ん、うぬ金持人ん羨ま
さすしんあらん。子持ちん、沢山居んりち羨まさすし
んあらん。うぬやらちんりわる分かいぐとう、五、六
十年、七十年。うれし身体かなーんていん、又嫌な
事しーねーなー、なー人兄弟ぬ後引ちゆぐとう。う
れーうぬ生まりやきー、運命やきーりち、ちやー良い
心持つてー、ちやーん無んばーてー。

あんすぐどう、うぬ城間ナーカんれーなー、あるなー
か城間ナーカりち、富え勝てい、むる人助けたんりぬ
くどう。

も羨ましがるものではない。子供がたくさんいるといつ
て、羨ましがるものでもない。人の心というのは、体
は丈夫でなくとも五、六十年、七十年も経つてから分
かるんであつてね。また悪い事をすれば、親兄弟に尾
を引くこともあるし。これは生まれだから、運命だと、
いつも良い心を持つておけばどうもないわけさ。

だから、この城間ナーカというのは、あるなーか城
間ナーカということで、富は勝つて、いつも人助けを
していたそうだよ。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第九班 〈山入端孝子・上江洲康子〉

注①シカマー 負債のために使役される人のこと。

②タンメー 11頁参照

③チユワカサー 一升徳利のこと。

④キダムン 木の薪のこと。タムン（薪）には別名ファーダムン（葉薪）がある。

⑤城間ナーカ 99頁参照

⑥カマルー 城間ナーカの嫁の名前。

白銀堂由來

著者 砂辺光（大正元年八月五日生）

翻字・対訳 玉城琳子

丁度、糸満ぬ何んり所がやら一、うれ一分からんしが。偉い勤めるやいびーたらんり。うまぬ長男が勤めに出てたくとう。うまー女親とう嫁とう居せーやー。でもしかしたらなー悪者ぬ來、うぬ嫁乱暴さりーがすらーりち、旦那さの一勤みんかい行じとーんりちえー分かとーぐとう。だから、うぬ女親ぬ考え方ーに、男役し寝んてーみせーるばーてー、男支度し。

あんさぐとう、うぬ旦那さの一、勤めーなー、うぬ帰てい来る日にちより早く済ませて帰つて來たわけよ、夜中。あんさぐとう、なーんちや入つちやぐとう、んちや言んねーすんねー、男ぬ寝んとーぬむんなーりやーに。あんさーに、持つちよーる刀さーによー、短刀し殺さんりすたんりしが。その場合に、親ぬ達あ、朝晩言ちん事しえーし思び出じやち。「意地ぬ出じーねー手い引き手ぬ出じーねー意地引き」りてーぬむん、まじえー起くちんだ」りち。「起きり」りち、足さーに頭くん剝は

糸満の何という所だつたのか、それは分からぬがね。偉い勤め人がいたそうだ。そこの長男が勤めに出たら、家には母親と嫁しか残らないさあね。で、旦那さんが勤めに出ていることは知つてゐるのだから、もしかして悪者が入つて来て嫁さんが乱暴されるかもしれない、母親は心配した。それで母親は考えて、男の格好をして寝ていたそうである。

そうしたら、旦那さんは予定の帰りよりも、早めに勤めを済ませて帰つて來たわけよ、夜中に。で、帰つて來たら、もう思つていた通り男の人が寝ていたので、持つっていた短刀で殺そととした。その場合に、親が朝晩言つていた言葉を思い出した。「意地が出たら手を引け 手が出たら意地を引け」と言つてゐたので、まずは起こしてみようと思い「起きろ」と、被つているのを足ではぎ取つて見た。するともう「貴方たちはどういうつもりなのですか」「どうしてお前はこんなに早く

じ起くちやぐどう。「貴方達あ、何などーぬばーが」「何
がいやー、いーなあんし来るばーい」りち。「私どうや
んでー」りちさぐどう。自分ぬ産し親なていさぐどう。

あい、女ぬ親、朝晩言みせーたる言ちん事お、私ねー
助きらつたんむんりち。私ねー親ぬ命買たせーんち思
いねー、うにーねー「実えかんかんやたんどー」んちゃ
ぐどう。「やぐとうる言つさみ、朝晩ぬ親ぬ言ちん事忘
んなよー。胸内んかい留みとーきよ。留みとーきよー
りせー。うりるやんどー」り、言みせーたんり。

帰つて來たの」と、(実は男支度して寝てたのは母親で)
「私なんだよ」ということで、自分の生みの親だと分
かつた。

ああ、私は母親が朝晩言つていた言葉に助けられて、
さらに母親の命をとることもなかつたと。「実はこうい
うことですよ」と説明した。「だから、親が言つている、
朝晩の言葉は胸に留めておきなさいよ。そういうこと
なんだよ」と話していたそうです。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第五班 〈山入端孝子・湧川汎子〉

注 白銀堂 国道二三一号线から報得川を渡つたところ、糸満の入口に

ある。昔から糸満の人々は、出漁や旅立ちの時に、この白銀堂に無
事を祈つた。ハーレー競争もこの氏神への奉納行事のひとつであり、

また、空手の守護神でもあり、空手を志す人々の参詣も多い。



白銀堂

床柱の逆立て

話者 新垣賀眞(明治三十五年十二月七日生)

翻字 玉城琳子
対訳 村山友江

かたたつち、生と一ぬ木や、上や梢、下あ根元やせ一
や。うぬままどう立ていーるばー。やしが、うり逆に
立ていてい来るばーてー、大工ぬ。毎日、仕事さがちー
なー、何がサービスすせーや。茶あ水ん茶請きん支度
てい、うりが悪っさんりち。

あんし、うぬシースビーなたぐとうよー、うぬ代わ
いりち、全部錢入つてい取らちやんり、主ぬ。あんさ
ぐどう、うり見じやーなかい、今度おうり替りわるや
るりち。ティーン、踊いたんり。わざとうたつ切つちや
んりよ、うれー。主ぬ分からんぐとう。あんしーねー
なー、自分やサービスきつてー居らんしが、うぬ代わ
い又、錢取つてーべどう。あぬ一代わいさつとーしが。
あんされー、あんしーねーなー、大事りやーなか
い。自分くる、自分負担さーに、うぬ柱替たんりぬ話。

(普通に) 生えている木は、上が梢で、下は根元さ
あね。柱はそのまま立てるわけよ。しかし、ある大工
が柱を逆さに立てたそうだ。というのは、普通、大工
仕事をする時にはサービスがあるさあ。お茶や茶請け
も出して賄うのだが、それが悪かつたといでのでね。

そうして、落成式にはね、主が今までのお茶の代わ
りとしてお金あげたつて。そうしたらそれを見て、
今度は、柱を取り替えなければいけないと、ティーン
を持って踊つたつて。柱をわざと傷つけてしまつたつ
てよ。主は柱が逆さになつているのは知らないのだが
らね。サービスがなかつたので柱を逆にしたところが、
サービス代わりとしてお金をくれた。

そうしたら、これは大変なことだと。大工はわざと
柱に傷をつけて、自分で柱を取り替えたという話。

姥 捨 山 〈難題〉

話者 比嘉シゲ（明治三十六年三月十日生）

翻字・対訳 村山友江

六十ねー、あぬーあい言る所んかい連てい行ちやびーたしが。あんし偉い人ぬ、「繩、灰縄縊てい来わ」り言みそーちやぐとう。

あんしうぬ灰縄あ、あまんかいめんそーちょーぬ年寄んかい習たぐどう。「灰縄りしぇー、ちやーし持つち行いちやびがやー」りちさぐとう。「あぬー、繩あ縊てい燃ちしーぬんせー灰縄ないぐどう、うり持つち行き」りち、持つち行ちやびたぐどう。「此れー誰から習たがりちやぐどう、「あんし、あまんかいめんそーちょーる年寄から習いびたん」りち言ちやぐとう。うにーからなー、捨ていらんなどーびーたんり、年寄や。

六十歳になつたら、年寄りはある所に捨てに行つたのだが。あるとき、偉い人から、「灰縄を縊つて持つて来なさい」という難題が出たそうだ。

それでその灰縄は、向こうへ捨てたお年寄りに習つた。「灰縄というのはどういうふうに持つて行きますか」と聞いたつて。そしたら「あの灰縄というのは、繩を縊つて燃やして持つて行けば、それで灰縄になつているからそれを持つて行きなさい」と言われたので、そのまま持つて行つたそうだ。持つて行つた先では、「これは誰から習つたのか」と聞かれたので、「向こうに捨てたお年寄りから習つて来ました」と答えたつて。もうその時から、お年寄りを捨ててはいけないといふことになつたそうですよ。

姥捨山うばすてやま
〔難題〕

話者 比嘉 静(大正四年十月十七日生)

翻字・対訳 宮城昭美

えー、姥捨山うばすてやまの話はなしぐわーきびら。昔ふるえなー、年寄とねりんでい言いやーに、直ただぐ山やまんかい捨てはないてーるふーじやいびーしが。

姥捨山の話をします。昔はあるのう、六十一歳になるともう年寄りだといつて、すぐ山に捨てられたということらしいですが。

或あるる時ときなー、うぬ字あざんかい、大变ひつぱい親孝行おやこぎょうの息子むすこが居ゐてい。「私達わがたあなー、女ぬ親めのおやこあ六十一ろくじゅういちなとーい、なー捨てはなていらんあれーならんあい、ちやーすが」んち、なー大变ひつぱい衰あかりつし。さくとうなー、「私ねーあんしえー仕方しかたあならん、六十一ろくじゅういちなてているうるむんぬ。山やまんかい捨てはないれーわ」んでい言いちよーしが、なー。うぬ子むすこなー、大变ひつぱい親孝行者おやこぎょうしゃなやーに、捨てはないやうーさんなやーに。かーま山奥やまとおくんかい、人ぬ見みらん所ところんかい、あぬお婆おばあや連つれてい行ゆじやーに。なー家やぐわー造つくりてい、置おきちえーてーるふーじてーるむのー。

なー、食事むしん又また、通かち御差うさぎていそーしが。親おやのー、「私ねーなー、うぬまま山やまうとーてい、六十一ろくじゅういちなれーからーやーさし、此この世よう終つわいぐとう」んでい言いし

ある時、ある字に大变親孝行の息子がいて、「私のお母さんはもう六十一歳になつてしまつたので、捨てなければいけないのだが、どうしたらいいものか」と、大変衰れんでいた。すると、お母さんは「しようがないさあ、私は六十一歳になつてゐるのだから、山に連れて行つて捨てなさい」と言うのだが、その子は大変親孝行者で、どうしても捨てることができなかつた。

それで、ずっと山奥の人目につかないような所に、お母さんを連れて行つて、そこに小屋を造つて住まわせていたらしい。

食事も運んで差し上げていたらしい。そうしていたが、親はもう「六十一にもなれば私はそのまま山で、おなかをすかせて、この世よを去るから」と言うのだが、

が。子なーやつぱし、親ぬ事思ていあねーならん。なーに、三度ぬ食事ん通わち、御差ぎてい。大変なー元氣し暮らちよーみしえーてーるぐとーしが。

或る時なー、戦争ぬ起くりやーに。あんしさくとう、なーうぬ村んかい、問題ぬうりそーしがなー、字中しなー大変考えていん、ていーちん考えうーさびらん。あんさー後お、何ぬ問題やたんがでー、一ちえーなー、あぬー灰縄、縄あ綺りんでい。あんさんあらー、直ぐ戦寄しーんどーりち。一ちえー又、雄鶏ぬ卵必じ持つち来でいるなー、二ちぬ問題。

なーうりさぐとう、うぬ子あ「此れーなー字中し考えていん考えららん。ちやーすがやーなー」んでいち、大変苦勞そーるばーに。或るなー、やつと考えやーに、「とー此れー、亀ぬ甲や年ぬ甲りち。私達あお祖母や山んかい捨ていてーしが、まじなー聞ち来りわるやる。年寄の一分かみしえーがすら。うぬ二ちぬ問題んでー、分からんむんやれー、直ぐ戦寄してい來い。ちやーすがやー」んち。うぬ自分ぬ女親ぬ前んかい、奥山んかい行じやーに、「かんかんしなー、他國から問題二ち分からんあらー、直ぐ、戦寄しーしが、ちやーすがんちょー

息子は親のことを案じるばかりであつた。息子は親の元へ通つて一日に、二、三度の食事も差し上げていたので、お祖母さんは大変元気に暮らしていたようだが。ある時、戦争が始まつた。するとともう、その村に問題が出され、字中の人が一生懸命に考えるのだが、解決がなかなか見つからない。それはどんな問題かといふと、一つは灰で縄を綺いなさい。さもなければ、すぐにでも兵を寄せるよ、ということ。もう一つはまた、雄鶏の卵を必ず持つて来なさいという、この二つの問題を出された。

息子はもう「この問題は字中の皆で考えて、なかなか答えを見つけることができない。どうしたら良いものだろうか」と、大変悩んでいた。すると、ある時ふと思いついて「こうなつては、亀の甲より年の甲といふ言葉もあるので、私達のお母さんは山に捨ててあるが、まずは聞いてきてみよう。年寄りだつたらお分かりになられるかもしけないし…。その二つの問題をもし解くことができなければ、すぐにでも兵を押し寄せて来るというし、どうしよう」と。自分のお母さん

しが「んち、女ぬ親んかいなー相談、話聞ちやぐとう。

を二つ出されて、それを解くことができなければ、すぐ兵を寄せて来るというのだが、どうしよう」と、お母さんに相談して、話を聞いた。

なー又、うぬ女ぬ親あ、「とーうれー大変どうー易つしーやさ。灰し縄あ縄りんでいしえー、いつたー、いやーが一分からん筈やしが。縄あ瓦ぬ上んかい置ちきやーに、うり縄あ、火付きて燃しるんしえー立派ぐわー直ぐ灰さーに縄あ縄てーるぐとうすい」。又、雄鶏ぬ卵、雄鶏ぬ卵どうぬ二ーちぬ問題さぐとう、うぬ女ぬ親ぬ教ちえーみしえーぐとう。「雄鶏ぬ卵んでいしえー、大変どうー易つしーやさ。とー、いつたや男ぬ子産する試しぬ有みでいち。とー、あん言るんしえーあまーなー、やつぱし負きーぐとう。とーうつさーあぬー、いつたが言るんしえー戦勝つちょーさ」でいち。うぬお祖母が、うぬ女親ぬ教しみそーちゃぐとう。

なーうぬ子あじこー嬉つさぐーじやーし。とーんちやなー亀ぬ甲や年ぬ甲んち、年寄ぬさーーちゃー誰がん、んちや考え無えんむんりやーに、うまぬ或る村頭んかい。あんし、「とーなー私ねー、なー大変私がゆー考えとーいびん。灰し縄あ縄りんりしえー、あぬ縄あ直ぐ

もうその息子は大変喜んで、「ああやつぱり、亀の甲より年の甲といつて、お年寄りのようには誰もこのよう考えがないもんだ」と言つて、そこの村頭の所に駆けつけた。そうして「村頭、私に大変良い考えがあります。灰で縄を縄いなさいというのは、縄をすぐ瓦

瓦ぬ上んかい置ちきやーに燃しるんしえー立派灰ぬなー
うり、縄あ絹てーるぐとうし出じーい。又、雄鷄ぬ卵り
しえー、親ぬん、男ぬ親ぬん卵、男ぬん卵産する、子
産する試しえー無えんぐとうり言るんしえー、なー。
私ねー考へとーびんでー」でい言ちさぐどう。

あまからなー「うぬ問題」ちえー、いつた一分かとー
みち、ありさぐどう。なーうぬ子ぬ、とーあんしえー、
あぬ灰し縄あ絹りんでい言しえー、やつぱしなー縄あ
うりしきくどう。「うぬ間、きつさ縄あ絹てーいびんどー」
でいち。又、「貴方なー男ぬ親あ子産しみしえーびん?」
でい言ちさくどう。「あーとー、いつたーや、なー頭お上
上でーむん。私達あなー國やかんいつたーなー頭お上
でーむん」でい言やーに、うぬ人お負きやーに帰みそー
やーに、戦やつぱしきんよーい済まち。

さくどう、「何がいやーや、あんし頭お良たさる。う
ぬ考へあんしいやー分かいてーる」でいちさくどう。
「私ねー実えあんあんしやしが、女ぬ親なー、どうく
産ちえーる親ていらむんなー捨ていららんなやーに。
山ぬ中んかいなー置ちる有いびーる。かんし私ねー、
私考へどうやるんちさぐどう、「とーなーうれーなー、

の上に置いて燃やせば立派な灰で縄を絹つたような形
ができるし。また雄鷄の卵という問題は、父親が卵を
生むとか、子を生んだということは、いまだかつて聞
いたことなどないと答えれば良いと、私はこのように考
えております」と言つた。

(そうしているうちに) 向こうから「この問題ふた
つは、お前たち分かつているのか」と言つて來た。灰
で縄を絹いなさいというのに対してもうその子が、お
母さんの言われた通りにやつてみると、すぐにできたつ
て。「もう縄は絹つてありますよ」と言つて解いた。ま
た、「貴方のところでは男が子を生みますか」と言つた
ら、「ああ、貴方のところはもう頭が良いよ。私達の国
よりずっと頭が良い」と言われて、その人は負けて帰
られて、戦もしなくて済んだそうだよ。

そうしたので、「お前は何と頭が良いことか、あの答
えを良く考えつくことができたもんだな」と言つるので、
「実は私が考えついたものではありません。私を生ん
でくれたお母さんを捨てることができず、山の中に住
まわせていました。さつきの答えも私の考えではなく、
私のお母さんから教えてもらつたものなんです」と言

今からいかなしなな一六十一なていん捨ていしえーあらん。年寄や宝、今から一な一捨ていらんうかやー」んち、うぬお婆や又山から直ぐうんちけーさーに。又、立派家んじん孝行し、わんだたんでいぬ話どう(聞ちやる)。

うと、「ああ、そうか。これは今からはどんなことがあっても、六十一歳になろうとも、捨てるものではない。年寄りは宝。今からはもう、決して捨てことはしないでおこうな」と、お母さんを山からすぐに呼び戻して、家に連れて来てからも立派に孝行をして、大切に世話をしたという話です。

採集 S2・5・8 読谷村民話調査団第十一班(宮里光雄・桃原・知花春美)

46 モーカイ親方へ勉強十難題十下駄と草履

話者 仲榮眞三 良(明治二十七年七月二十日生)

翻字・対訳 宮城昭美

伊野波ぬモーカイんち、むる踊てい、触り者ぬ真似しつちゆたんでいれ。親ぬ達あ常時なし、「此れ」な一大さら触り者ぬ生まりとーる」ち、ありやるばーてーやー。

伊野波のモーカイといつて、いつも踊つてばかりで、馬鹿な真似をしてしていたらしいが。親達はいつも、「こいつは大馬鹿者が生まれてしまつて」と心配していた。

丈々なたくどう学問んすんり、皆が前うてい字ん習いねー、なーうれー皆んかい負けーんち。床下ぬ中んじ、チンナングルーんかいジーナー、うりチンナング

年頃になり学問をするようになると、皆の前で勉強をすると、皆に負けてしまうと思つていた。床下でカツムリの殻に虫を入れて、明るくしてから勉強をし

ルーんかい溜みて。明がらちから学問さんり。

雄鷄ぬ卵とうか、八重山ぬ於茂登岳御用とうか、雄鷄ぬ卵とうか御用、うれー。あんさー此ぬ、此ぬ人お、うぬモーヤーぬ親んかい、役人やぐとう。うり、御用やしが、「雄鷄ぬ卵とう八重山ぬ於茂登岳、薩摩んかい持つち来んち、うぬ親あなー哀りつし。なーうりちやーし、うり持つち来べとう。灰縄でいがらー、灰縄でい、灰縄御用。灰縄、灰縄とう雄鷄ぬ卵とうどう御用やつさー、あまんかい、薩摩んかい。

あんさぐとうなータンメー や心配し、男ぬ親あ。「何がターリー、あんしし顔あ心配きさー、何やいびーが」んちやぐとう。「うぬ灰縄とう、雄鷄ぬ卵、薩摩から持つち来ちやつさーりがらー。なー、大心配しんそー やーに。「あーとーうれー、どうー易しーぐわー。貴方が代わい、私が行ちやびーさ」ち、さりたーくとう。「触り者ひやー、いやーが言るくとうしん通いみひやー。いやーぐとー触り者んないみ」しが、「あー、大丈夫。私がし来ん」ち、うり解んちえーたんでいしが。

ていたんだつて。

雄鷄の卵とか、八重山の於茂登岳御用という御用がきたらしい。このモーヤーの親は役人だつたからね。その御用だけど、「雄鷄の卵と八重山の於茂登岳を薩摩に持つて来い」というので親は心配した。それをどのようにして持つて行くことができるのかと。また灰でできた灰縄御用。薩摩に灰縄と雄鷄の卵を持って来いということだつた。

そういうことなので、父親は大変心配していた。「どうしたのですかお父さん、そんなに心配そうな顔をして、いつたいどうしたのですか」と尋ねると、「灰で作った綱と、雄鷄の卵を薩摩から持つて来なさい」と、言つたようだ。もう大変心配なさつて、「ああ、それはたやすいことです。お父さんの代わりに私が行つてきます」と言うと、「馬鹿なことを言うな。お前が解決できるようなものではない。お前のような者にできるか」と言つたようだ。もう大丈夫なことを言つて、「ああ大丈夫。私が解決して来ます」とモーアは出かけて行つて、問題を解決してきたそうだ。

あまんかいよー、あまんかい下駄、片足や、片足や

だけど、あそこに行く時に、片足は下駄、片足は草

下駄、片足あ草履、懷んかい入つていあまんじかんしー
かんしーさーい、懷から出じやち。「何がモーヤー、いやー
うれー片足や下駄、片足や草履くり歩つちゅる」んぢや
くとう。「此れー雨降いに履むしぇー、下駄。又此ぬ草
履、日照に、雨降い水ぬ溜まらんあいに履むし」やん
ち。うれー、あんやんりわるやんでい。

やくとう、「何、いやーターリー遣らさん。いやーが
来る」りちやぐどう。「ターリーや子産すんでい、産催
そーびたぐどう、私が来びたん」でいやーが
男ぬんひやー産催ち有み「ち叱たくとう、「あんしえー
貴方達や、雄鷄ぬ卵、あぬー持つち来んぢやいびーる
むんぬ」でいやーが
産催すみ「んぢやぐどう、「あんしえー貴方達あ雄鷄ぬ
卵持つち来んでいねー、うり産催しぇー当たい前やい
びさ」でいちてー。負けたんでいひやー。
灰縄御用や又、繩あ持つち行じやーに。板とう繩とう
少え綺やーにが燃ちやらー、うり灯ぶらち、うり見し
たぐどう、ありやてーんやー。負けたんでい。薩摩あ
負きたんでい伊野波モーヤーんかい。

履をはいて行き、薩摩ではそれを懷から出したり入れ
たりしていったようだ。「モーヤー、お前はどうして片足
には下駄、片足には草履をはいでいるのか」と尋ねる
と、「それは雨が降る時に履く物は下駄、また草履は晴
れた時に履く物。雨が降つて水が溜まつてない時に履
く物」だと。それは、そうでないといけないんだって。
だから、「どうしてお父さんは来ないで、お前が来た
のか」と言うと、「お父さんは子が生まれそうで、産氣
づいていましたので私が来ました」と返事をした。「お
前は男が産氣づくということがあるか」と叱ると、「だつ
たら、貴方達は雄鷄の卵を持つて来いとおっしゃるで
はありませんか」と言った。「お前、男が産氣づくか」
と言うので、「そうでしたら貴方達は雄鷄の卵を持つて
来いというのは、産氣づくとの同じ事ではない
のですか」と、薩摩の人は負けてしまつたつて。

灰で絹つた縄の問題は、縄を持つて行つて。板と縄
と、少しは絹つてから燃やしたのか、絹つた縄を燃や
してそれを見せたので、また相手を負かすことができ
た。薩摩は伊野波のモーヤーに負けたということ。

注①モーイ親方

毛氏八世盛平。伊野波親方（一六四八—一七〇〇）。童名字真志、唐名モクス、順治五年戊子閏三月三日生。父盛紀（毛

泰永、尚賀王代の三司官）、母尚氏眞伊金、室は毛氏池城親方安憲の女思武太金、長男盛忠（伊野波親雲上）、次男盛任（糸満親雲上）。

康熙一九年庚申三月任鎖鎖側職、二三年甲子十二月四日叙紫冠、三三年九月任三司官職加賜知行高三百二十石都合四百石。同十月任

大美御殿總大親職。三九年庚辰十一月四日卒寿五三才号瑞泉。

②於茂登岳 石垣島北部寄りにある群峰中の主峰。海拔五二五、ハメートルで県内の最高峰である。

③タンメー 11頁参照（ここではモーイの父親のことときをさしている）

④ターリー 士族でいうお父さんのこと。

47 モーイ親方 〔下駄と草履十勉強十難題〕

話者 仲榮眞 三 良（明治二十七年七月二十日生）

翻字・対訳 村山友江

生まりたくとう、なー全部舵え聞かん馬鹿ふーじない
てい、親ぬ言しん聞かん。二人ぬ親ぬ達が、うれー反対
ぬーやしが、大変偉い人んやるばーやしが。うれー丈育い
さくとう、サバン、草履ん、草履。片足あ草履、片足あ下駄
履り歩つちゆる人やたんり、馬鹿。片足交んちやーし。「何、
いやーやあんしうんぐどうーし、いやーや履物、足ぬ履物、
歩つちゆる」りちゃくとう。「貴方あ分からんある、此ぬ草

生まれたのだが、もう融通のきかない馬鹿みたいに
育つて、親の言うことも聞かない。両親が言うのとは
反対のことばかりしていたが、モーイは大変偉い人で
もあつたそうだ。成長してからのことだが、片足は草
履、片足は下駄を履いて歩く程の馬鹿だつたつて。片
足ずつね。「どうして、お前はこのような履き方をして
歩くのか」と言つたら、「貴方達は分からぬのですか。

履え雨降らんあいに、水ぬ塵ん何ん付かんしやぐとう、草履えうぬ為。又下駄あ、雨降いぬ入り用やんりるばーてーひやー。

あんやぐとう、なーうりんかい全部括んじ回さつてい。後おうれー、育いーたくとう七ち、八ち、皆とう一緒ん勉強しーねー、うれー全部同ぬ物ないんりち、床下ぬ中うてい勉強し。床下ぬ中うてい勉強すし、ちやーしやがり言ねー。なー今る螢りせー無えん、なんじゅ飛でー歩つかんしが。螢集みやーに、チングルーンかい溜みやーに、うり幾ちんしーねー全部見ゆーたんりよー。夜ん、床下ぬ中うつい。あんさーなかい、うり直ぐ学問し、後お偉い者なでい。

やしが、今度おうぬ薩摩から大和のー、大和のーあらん、薩摩、琉球、沖繩やうんにーねー薩摩ぬかげーうちえーぐとう。中國から許ち後お廢藩。なーうれー此處ぬありんちんやんや、百年、二百年ばかーんぬまでー、大戦あ百五十、七、八十年まりん戦あむるやでーるばーやしが。

今度お、うぬ摂政三司官りるかんじ、今ぬ県知事ぬあり、県知事ぬ下々ぬ社会人ぬ人ぬ達やしが。うりが

この草履は雨が降らない時に、水や塵もつかない時のための草履。また下駄は雨降りの時に入り用だ」というわけさあ。

そういうことで、いつもモーイに振り回されてばかりいた。また、七歳か八歳の時に、皆と同じように勉強したら同じにしかならないと、床下で隠れて勉強したつて。床下で勉強するということはどういうことかといふとね。今は螢もいなくなつて、あまり飛んでいるのも見られないが。螢を幾つも集めて、カタツムリの殻に溜めると良く見えたそうだよ。それで夜も、床下で勉強をしていた。そういうことで、モーイはいつも学問をして、後は偉い人になつたつて。

だけど、今度は薩摩から、琉球に、沖繩は当時は薩摩の支配下にあつたから。中国から許された後に、廢藩になつて。もうそれは、百年、二百年ぐらいまで、大戦は百五十、七、八十年までも戦をしていたらしいが。

摂政三司官というのは、今の県知事に仕える人達だったが。そういう意味だつたのか、摂政三司官といつて、

やたら一、意味合、摂政三司官りち、えー県知事ぬ御側。昔え此ぬ今何んりがらー、御側人りたしが。うれー上等兵んれー居てい、上等兵や天皇陛下ぬまんまる覚悟すし、うりんかい御側人りたせー。丁度、今言ねー、今ぬ總理大臣とうか、何大臣とうかうりやしが。昔え、御側人りち言たる。また沖縄うていん御側人りちやたしが。

今度お、沖縄あ封鎖し焼ち企り、ありやるばー、薩摩から、八重山ん沖縄ぬうりがやたらー。

今度お、此ぬ場合ぬ伊野波ぬモーイぬ親んかい、うれーなー上がやーやぐとう、首里勤めやくとう。薩摩から雄鶏ぬ卵とう、又灰縄とう御用りちやくとう、なー大心配し、うぬ親あ。「何、私達あターリーあんしどうるばとーるやー、アヤー」りちさくとう。「いやーひやー分かいみひやー、触り者なでい、むる墨ん習ん、いやー遊り」、叱ていそーしが。「何りちあんし顔持ちぬどうるばたい何さいそーみせーがターリー」りちやくとう。「此れー薩摩ぬ国から、雄鶏ぬ卵とう灰縄とう御用やしが、なーうれーちゃーあてーしむが」りちさくとう。

県知事の御側人みたいな方がいた。昔は、御側人と言つていたが、今は何と言うのかな。それは天皇陛下の身辺を護衛する上等兵みたいのがいて、それに御側人といつていたさあ。ちょうど今で言えば、今の總理大臣とか、某大臣とかいうのだと思うのだが。昔は御側人とか言つていた。また沖縄でも御側人と言つていたが。

薩摩が沖縄を制圧しようとしていたらしいが、薩摩から難題が来たつて。八重山も沖縄と一緒にだつたのか。その時、首里勤めをなさつていた伊野波のモーイの親に御用が来た。薩摩から雄鶏の卵と灰縄の御用が來たので、親はもう大変心配なさつていた。モーイが、「どうして、うちのお父さんはそんなに黙りこくつているのですか、お母さん」と言つと、「お前に分かるものか、馬鹿者は、お前は勉強もせずにいつも遊んでばかりいて」と、叱られたようだが、今度は「どうしてそんなに黙りこくつた顔をなさつてているのですか、お父さん」と聞くと、「これは薩摩の国から、雄鶏の卵と灰縄の御用なんだが、もうそれはどうしたら良いものだろうか」と言われた。

ありやるばー、昔え六十一から一なー食むしえー無え
んりち、畦ぬ下んかいガマぐわー掘てい、寒さんあい
なーうれー、今とー似らん苦しい事やてーしが。うり
んかい先考えたんりる人がやらー、或る年寄ぬ畦ぬ下
んじ置ちえーる年寄ぬ。此ぬ物ぐわー持つちやー童ん
かいる、「話ぬ有つきー」り、畦ぬ下ぬタンメーんか
い言ちやくとう。「とー、うれーどうー易し物やさ」り
ち。灰縄あ明かちやんりしが。灰縄あうぬ通い、うぬ
タンメーが言ぬ通い當たとーしが。

又、今度お、雄鶏ぬ卵やぐとう、「うぬ雄鶏ぬん卵産
すみ」りち、「うれーなー、ちやーすが」りち、大変大
心配そーたんりる。あんしうぬ心配そーぬうちねー、
「はーうぬあたいぐわーなくとう心配すみターリー、
とーなー代わいや私が行ちゅさ」りちさくとう、伊野
波ぬモーイヤ。「いやーひやー触り者ぬひやー、触り者
言し」「大丈夫どーれーターリー、私が行ちゅさ。うぬ
あたいぬ事ぐわー、貴方や」りちさくとう。「とーあん
せー、気張てい来わ」りちなー。あま首里城からん、
何んりる人ぬ薩摩んかいうり披露しーが行ちゅんりち
さくとう。

あのう、昔は食べ物も満足になかつたので、六十一
歳になると畦の下に穴を掘つてそこへ連れて行つたそ
うだ。寒くもあるし、もう今では考えられない苦しい
ことであつた。畦の下に置かれた年寄りに食べ物を運
んでいる子供が「話があるさ」と、畦の下にいるお
祖父さんに言つたようだ。すると、「これはたやすい事
だよ」と。灰縄御用は解いて見せたつて。灰縄御用は、
お祖父さんが言う通りにしたら解けたつて。

また今度は、雄鶏の卵だから、「雄鶏が卵を産めるか」
と、「これはもうどうすれば良いものか」と、大変心配
なさつていたそうだ。そうして心配なさつていううち
に、「はあ、これくらいの事で心配するのですかお父さ
ん、私が代わりに行つて来ますよ」と、伊野波のモー
イは言つた。「おまえは馬鹿者は、馬鹿なことを言つて
「大丈夫だつてばお父さん、私が行くさ。そのくらい
の事で、もう貴方は心配なさつて」と言つたつて。「じゃ
あもう、頑張つて来てくれ」と。首里城でも、某とい
う人が薩摩にそれを披露しに行くということになつて
いた。

えー、繩あ持つちよーたんりがらー、ゆー燃いるぐ
とうし。繩あ綯てい。あまんじえー薩摩ぬ御用んじえー、
うりが此ぬ城んかい行ちーねー、うりが通いる所お崖
造やーに、下んかいなー刃物向かーち取いる考えやぐ
とう。とーうれー、武勇んかねー者やくとう、あー伊
野波ぬモーヤーりぬ者お。あんさーに「ウワーッ！」
りち飛んじさぐとう。また槍二ちねーてい来しが。槍
一ち、人んかい又、後からねーいる槍取やーに、捕つ
擗みやーに前んかい引んち転ばちえーさ、二人。うぬ
崖からん下あ塵崖んかい謀反せーしが、うまから飛ん

(首里に行く時には)繩は良く燃えるようにして持つていたとか。繩を縄つてね。薩摩では、モーイが城に行く途中の崖下の方に刃物を向けていて、やつつけるつもりだつた。しかし、伊野波のモーイは武勇も達者だつたのだからね。そうして槍が二つ向かつて来るのを「ウワーッ」と飛んで攻撃をかわした。槍が二つ飛んで来たが、後方から向けられた槍を擋まえて、前方に引きずり降ろしたそうだよ、二人。その崖の下の方は塵捨て場になつてゐたが、そこから謀反を企んだ人が飛びかかつて来たんでしようね。

あんさーに、なー口えがー開らち、目んうり、うれ一
か
変わり者やんりち、やしが、ありやるばー。「あん、いやー
や、何がいやーやターリーる御用やるむんぬ、何んち
いやーが来がりち。「うん、私が、なーターリーや産
催り、「お産催やぐとう、私が来びたん」り。「男ぬ
んひやー産催し」、お産ぬありりちゃくとう、「雄鶏ぬ
御用や何やいびが」りちやくとう、だー負きたせー。
雄鶏ぬ卵産さんむんぬ、雄鶏ぬ御用しみせーみ」りち。
あんさくとう「産催そーん」り。雄鶏ぬ卵御用り言ねー、

そうしてもう、口もあんぐり開いて、目も丸くして、こいつは変わり者だと。そこで「父親に御用を出したのに、どうしてお前が来たのか」と言つたので、「はい、私の父は産気づいております」と、「産気づいていましたので、私が来ました」と返した。「男がも産気づくということがあるか」と言われたので、「じゃあ、雄鷄の卵というのは何ですか」と言つたものだから、もう負けさあ。「雄鷄は卵を産まないので、雄鷄の御用がありますか」と。そう言われたので、「産気づいています」

うりる、あんしわる「当たいびき」りちゃんりち、うりん負きたんりち。

しーねー又、「灰縄御用や」りちやるばーてー。なーうりん板ぐわー持つち來り言やーに、立派ゆー燃いるべとうし綱やーに、板ぬ上んかい灰縄あ風ぬ吹かんべどうし立派燃さーに持つち行じやぐとう。だーうりん負きて。なー薩摩ぬ国え負きたんり。

あんしからなー又戦ん始まいしが、宮古、八重山ぬ戦んぐーがやたらー。又、於茂登岳御用りちざぐとう、「うりんどうー易し物」りち、「沖縄や島ぐわーやくとう琉球ぬ国え、大国やしに就てー、沖縄やうり引ち取つていすぬ道具積むしん無えらんぐとう、船貸らし」りちやくとう、だーうりん負きたせー。「沖縄や小国やしに就てー、うぬ道具ぬ無えんくとう、船無えんくとう、薩摩から貸らし」りちやくとう、うりん負きて。うぬ後おなー戦やま切りたるばーてー。

やしが、「國ぬうれー、沖縄やなー小島ぐわーるやぐとう。沖縄ねー道具とう船とう無えんくとう、うり積むる、引ち取いる道具とう、於茂登岳引ち取いる道具とう、船貸らし」りちやくとう、だーうりん負きて。

と、「雄鷗の卵御用」ということでしたら、そうじゃないと道理が合いませんよ」と、それも負けたつて。

次にはまた、「灰縄御用は」と言つたらね。それも板切れの上に、きれいによく燃えるようにして縄を綱つて、その灰縄は風が吹かないように立派に燃やして持つて行つたつて。ああ、これもまた負けて。もう薩摩の国は負けたそだよ。

それから戦は始まつたが、宮古、八重山の戦も一緒だつたのか。また於茂登岳御用と言つたら、「それもたやすいことです」と。「沖縄は島国だから、琉球の国には、それを取り壊す道具や積む船がありません。薩摩は大国ですから、船を貸して下さい」と言つたら、それがも負けて。「沖縄は小国でそういう道具がないから、船もないから、薩摩から貸して下さい」と、それも負けて。その後は薩摩は收拾がつかなくなつてしまつた。

そういうことで、「沖縄という国は小島だからね。沖縄にはその道具と積む船がないから、於茂登岳を取り壊す道具と船を貸して下さい」と言つたら、それも負けてしまつた。

注①モーアイ親方 116頁参照

②三司官 首里王府の職名および位階名。漢名を三法司・司法官という。

③ターリー 116頁参照

④アヤー 士族でいうお母さんのこと。

⑤於茂登岳 116頁参照

モーアイ親方へ嫁釣り

話者 砂辺 光（大正元年八月五日生）

翻字・対訳 玉城琳子

あんしから、丈いーていからどうやいびさにやー。
又、縁談ぬ話が有せーや。あんさぐとう、うぬ同級生
が、うぬ女、偉い人ぬ子ぬ、偉い女ん子やてーるふー
じやしが。「いやーや、いやー許嫁えあぬモーアイやんり
やー、いやー馬鹿ぐわー妻るないんりさやー」んち、
皆が苛みて、笑ていさぐとうや、友達同士が。

それは成人してからのことでしょうね。縁談の話があつたでしょ。嫁にもらう娘は、偉い人の娘だった
そうだ。それで同級生が、「あなたの婚約者はあのモー^イつてね、あなたは馬鹿の妻になるの」と、皆に苛められて、笑われたそうだ。

あんさーに家かい帰てい来に、「私ねー、ありが妻え

それで家に帰つて来て、「私はモーアイの妻にはならな

ならんどー、ターリーー」んちあぐとう。「あんせーなー、
あん立派や許嫁、あん立派口え入つてはるあぐとう、
どうする事もできないよー」んちあぐとうや。「んーん
んー、私ねー、ありが妻ないるさくやらー、死ぬせー
まし」りちなー、外んかい全部出じらんてーるふーじ
やー、うぬ女お。

あんさぐとう又、うぬモーイ友ぬ達が、「だー、いやー
妻ないんりせーじるが、本当の話、何見しれー」りちや
ぐとう、「んー、見しゆき」んちやぐとう。なーうぬ女お
籠でいるうぐとう、誰がん出じやしーうーさんせー。

あんさぐとう、うぬモーイ知恵さーにありやたんり。
タウチー鶏ぐわー持つち行じやーに、あまぬ屋敷んか
い置つちやん投ぎやーに、「アイエーナー、私あタウチー
ぐわーよー」しち、泣ちやぐとう。「何なとーぬむんが」
んち、うぬ女お飛ん出じてい来ぬふーじやー。「えー、
あんぐとうしち触り者るやるむんぬや、私あんぐとー
るーが妻なすんなー、ターリーー。私、絶対ならんどー
んち。あんさぐとう「やさやー、なー」んち、「此れー、
あんすかぬ者やてーる。話ぬ通いやさやー」んち。

あんさーに、うぬ男ぬ親とう夫婦行じやーに、なー

いよ、お父さん」と言つた。「そやはいつても、ちゃん
と婚約者ということで、約束してあるのに、どうする
こともできないよ」と言われた。「いやだ、私はモーイ
の妻になるくらいだつたら、死んだ方がいい」と、娘
は外には出なくなつてしまつたつて。

それからまだ、モーイの友達が、「おい、お前の妻に
なる人は誰か、本当かどうか見せなさい」と言つたら、
「うん、見せるよ」と。しかしもうその娘は閉じ籠つ
ているのだから、誰がも外には出せないさ。

そこで、モーイは知恵を出したそうである。モーイ
は闘鶏を持って行つて、娘の屋敷に放し、「ああどうし
よう、私の闘鶏よ」と、泣いたから、「何ごとか」と、
その娘は飛び出て來たらしい。娘は「ええ、あのよう
な馬鹿なのに、私をあんな奴の妻にするの、お父さん。
私は絶対に嫁にはいかないよ」と言つた。するともう、
「そうだね」と、「これはこれほどの者だつたのか、噂
通りの奴だな」と父親も考えた。

それから夫婦でモーイの家に破談を願いに行つた。

縁返しーがやるばーてー、直しーが。「ならんりぐとう、いつたーん別考えしとうらし」んち来ぐとうなー。親ぬ達ん、ちやー自分ぬ子あ触り者りちえー分かとーぐとうてー。「学校遣らせー、あぬ田ぬ畦なーりーどう歩つちゆい。勉強しんりねー床下なーりーる籠ていあつちゆぐとう。んちゃんなー、此りがーあんぐとーる良い所ぬ婿おならんき」んち、断ていちえーるふーじや。

あんさぐとう、うぬモーイや、なー帰てい来ぐとう、「んじ、私ねーあまぬ縁談とー断らつていなー」りちやぐとう、「断たんだー、断らつたんだー。いやーやうんぐとうーし、触り者なてい歩つちゆぐとうやー」んち言ちえーるふーじて。

あんさぐとう、うぬモーイや又考え出じやさーに、「此れー又、ちやーがなし考え出じやさんとーならん」りやーに。今度おあまぬ門の一鳥居が付ちよーる門やたんりがらーやー。あんさーに、うまんかい行じ座ちょーてい、あぬ魚釣る釣針持つちょーていて。あり持つちょーてい、うまぬターリーが勤みんかい出じていめんせーに。昔え、欹鬢ぐわー結とーみせーたんりせーや、カ

「娘が結婚することはできないと言つてゐるから、あなた達も別に考えて下さい」と言つたので、モーイの親はもう自分の子が馬鹿者だということは分かつてゐるのだから、「学校へ行かせば田の畦道から遊び歩いてゐるし。勉強しなさいと言つたら、床下に籠つてゐるのだから。なるほどもう、こいつがは良い所の婿にはなれないさ」とモーイの親も納得し、断りを受け入れた。

そしたら家に帰つて來たモーイは親に、「私はあそことの縁談は断られたのか」と聞いたら、「断つたよ。断られたよ。お前がこのように馬鹿になつて歩くからだよ」と言つたようだね。

するとモーイは知恵を出して、「これはまたどうにかして考えを出さなければいけない」と思つた。今度は、娘の家の門には鳥居がついていたそしが。そこに座つていたつて、魚を釣る釣針を持つて行つて。そうして釣針を持つて、そこの父親が勤めに出て行かれるのを待ち受けていた。昔は欹鬢を結つてゐるでしよう。カンプレーをね。

ンプ一ぐわー。

うぬカンプ一ぐわーなかい、釣針引つ掛けたぐとう、釣針や自分くる抜ぎらんて一ぬふーじ。「何がモーイ、いやーやうんぐとうーする、うり外ちとうらせー」んちやぐとう。「あんせーやー、結でーる縁ぬ外さりーびーみ。掛けーぬ釣針の一す直ごー外りやびらん」り、言えーるふーじやー。「何が、あん言る」んちやぐとう。「あんせー姉さのー、私あ嫁なすんりちやるむんやー、あん立派縁ん組りから、縁結りから、貴方達や断わたらんりさに。自分くる外しみそーれー、掛けーる釣針の一外りらんどーりちやぐとうやー。「とー、モーイよー、私が悪つきてーぐとう。なー私達あ女ん子、いやー嫁なすぐどう、外ちとうらせーモーイ」んちやぐとう。「言ちやる言葉あ忘しみそーんなよーやー」りち、「言葉の一朽たんどー腐りらんどーやーターリー」りちえーるふーじ。「んー、いやーが言せー聞ちゅぐとう、立派ぐわー外ち取らし」んちさぐとう。なーうぬ釣針ぐわーや、髪んやんらんよーい、立派ぐわー外ちえーるふーじ。「覚とーみそーりよーや」んちえーるふーじや。

あんすぐとううぬターリーや、出じてい行ちゅし、

その歓喜に釣針を引っ掛けたら、自分で釣針を外すことができない娘の父親は、「モーイ、お前はどうしてこんなことをするのか。それを外してくれ」と言った。「だつたらね、結んである縁がも外せますか。掛けたそうだ。」「どうしてそう言うのか」と言つたら、「だつたら、貴方の娘を私の嫁にするといつて、ちゃんと縁組もしたのに貴方達は断つたそうじやないです。自分で外して下さい。かけてある釣針は外せませんよ」と。「分かつた、モーイよ、私が悪かつた。私達の娘は嫁にやるから、外しておくれ、モーイ」と言つた。「言った言葉は忘れないで下さるよ」と。「言葉は朽ちないよ、腐れないよ、お父さん」と言つたようだね。「うん、お前が言うのを聞くから、ちゃんと外してくれ」と。模型を乱すことなく、その釣針をきれいに外したつて。「覚えていて下さいよ」と言つたようだね。

それで、父親は出て行こうとしているのを、家に戻つ

帰てい行じやーに、「此ぬような事やぐとうや、いやー
や此れ一触りた真似そーてい、確かに頭お優りーぐとう。
あぬ、なー元ぬ縁ん結り、女ん子ん縁入つて、あり
が嫁になすしるましやさに「んち。あんさぐとう、「あ
んさびんでーやー」りち、あんさーに夫婦ん相談し。
又、今度お女ぬ家からモーイ達あ家かい行じ、「立派な
婿やいびーぐとう、婿しみてい呉みそーり。又、私達あ
娘ん嫁取て、い呉みそーり」りちぬ話が有たんりがらー。
うぬ話、うれー私達あターリーから聞ちゃん。

て来て、「このような事で、こいつは馬鹿な真似をして
いるのだが頭は優れているから、もう元のように縁も
結び、娘は嫁にした方が良いのでは」「そうですね」
と夫婦で相談した。今度は娘の家からモーイの家に行
き、「立派な婿ですから、うちの婿に下さい。娘を嫁
にして下さい」という話があつたとか…。その話は私
のお父さんから聞いた。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第五班 〔山入端孝子・湧川汎子〕



闘鷄

注①モーイ親方 116頁参照

②ターリー 116頁参照

③タウチー 鳥の一種で闘鷄のこと。

④欹髻(カタカシラ) 成人男子の髪型。元は頭の右辺に結

び、後には中央に結ぶようになった。貴族は十五で、一般
は十歳内外で結った。

⑤カンブー 髮を折りまげて小さく結うこと。

モーイ親方（勉強＋ヌブシの玉）

話者 砂 辺

光（天正元年八月五日生）

翻字・対訳 玉 城 琳 子

学校あつからちやぐとう、うぬモーイりぬ者お。もう
言つたらねー、直ぐ覚んと一ひーじーてー、一回教(達)えー
し、全部ちん込みてーぬふーじーやー。だから「今日
ぬ物、私が分かゆしるやる物」りち、又学校さぶてい。
あんさーに田ぬ畦なーりー、アタビチャー取えーし
よー、タウチー鶏抱ち。あんさーにタウチー鶏る闘ら
ち歩つちゆたんりれー、勉強時間。して、皆が帰る時
分、又「学校行つて来ました」りち、家かいちゃんと
本や持つち帰ゆるばーてー。あんそーてい、うれ一床
下ぬ中てい勉強そーたんり。

学校に行くようになると、モーイという人はね。先
生が教えることは一回で覚えて、全て頭に詰め込んで
いたようだね。だから、「今日の勉強は、私が分かるも
のだ」と、いつも学校をなまけてばかりいた。

そして田圃の畦道で蛙を取りたり、それから闘鶏を
抱いて歩いて。勉強時間には闘鶏させて遊んでいたそ
うだ。また、皆が帰る時分には、「学校へ行つて来まし
た」と、家にはちゃんと本を持って帰つていたという。
そうして遊んではかりいるのだが、床下で勉強をして
いたつて。

或る何か卒業式(達)がやらー、学校ぬ祭りがやらー、なー
うに一ねー皆集合すしやてーんてー。タウチー鶏ん持つ
ち、田ぬ畦なーりー來ぐとう、アタビチャーが、あぬ
真ん中んかいよ（ヌブシぬ玉りせー、ちゃんぐとうー
がやらー分からんしが）、うりかみとーてい。周れー、
又ガーケークーし呼びーたんりせーや。こんなに

また、卒業式(達)だったのか、学校の祭りがあつて皆が
集まることになつていたらしい。その時も、闘鶏を抱
いて田圃の畦道を通つて来たら、蛙が真ん中で、（ヌブ
シの玉というのはどんな玉なのか分からないが）その
玉を頭にのせていた。周囲の蛙はガーケー、ガーケー
と鳴いていて、こんなにたくさんのが鳴いているの

沢山のアタビチャヤーがあんそていさぎーセー、うれー
何がやーんち。見ちやぐとうなー、丁度あの水玉みた
いなよー、玉持つちよーたんり。「これ珍しいこと、先
生かい持つちんじ見しりわるやさー」んち。

あんさーに、うぬかみとーぬ玉あ取やーに、手んか
い持つちよーたぐどう、汗はいたんり。私あ手んかい
持つちよーてい汗はらしーねー、もつたいないやぐどう
口んかい含みりやーに。口んかい含まーに、田り有せー、
溝ぐわーが有せーや。その溝ぐわーから飛んじゅんり
さぐどう。うちまん飲でーぬふーじや、うぬ玉あ。「私
ねーしまつたむん！先生なかい見しーんりちやたんむ
ん。うぬ玉うち飲み無えらん、ちやーすがやー」んち。

あんさーに、学校んかい行じやぐどう。「モーイ、今日
やいやーあんし遅刻さる、何が何んちやが」「今日や
こうこうぬ事が有てい、あんしきれいな玉が有たぐどう
やー。先生かい持つちち御差ぎーんりち、私ねー手ん
かい汗はたぐどうもつたいないりやーに、口んかい含
まーに、来に溝から飛んじゅんりさぐとうやー、うぬ
力さーにうち飲み無えらん、先生」んち話すたんりよー。

何だらうと思つた。見るともう、ちょうど水玉に似
たような玉を持っていたつて。「これは珍しい事だ、持つ
て行つて先生に見せないとけない」と思つた。
そうして蛙が頭にのせてゐる玉を取つて、手に持つ
ていたら、汗をかいたそうだ。手に玉を持つていて、
汗をかいたらもつたいないと思い、その玉を口に入れ
た。田圃には溝があつたので、溝を飛び越えようとし
たら、その玉を飲み込んでしまつたそうだよ。「しまつ
た！先生に見せようと思つていたのに、玉を飲み込ん
でしまつた。どうしよう」と。

それから学校へ行つたら先生が、「モーイ、今日はど
うして遅刻をしたのか」と聞かれた。「今日はこういう
事があつてね。きれいな玉があつたので、先生に差し
上げようと思つて、手に持つていたのですが、手に汗
をかいたのでもつたいないと思つて口に入れていたら、
来る時に溝を飛び越えた勢いで玉を飲み込んでしまつ
たよ、先生」と、話してはいたつて。

注①モーイ親方 116頁参照

②タウチー 126頁参照

③ヌブシの玉 願望成就の玉。

50 屁へひり嫁よめ

話著 宮城ヤス（明治四十四年四月二十五日生）

翻字・対訳 村山友江

昔、ある所にもう、百姓の娘なんだが、大変美人の娘がいたらしいが。首里の方の目にかなつて、そこの嫁にしようということになつたつて。

あの一昔、或る所んかいな、じこーなー百姓るやしがなー、容姿美らさぬ、大変なか美ら容姿女ん子ぬ居てーぬふーじーやいびーしが。首里ぬ親國方から目通りさりやーなかい、うまぬ嫁ないんりち。

あんしきーになー、執心さつてい嫁なでい行ちゆる事さぐとう。なー又、うぬ美ら容姿なかいや、うりマージュー名んやしなかい、一ちえー癖ぬ有てーるふーじやいびん。うぬ癖りしぇー何やがりねー、屁、おなら、なー出じやすぬ癖ぬ有てー。なーとーち屁普ップツプレーしーねー、むしかいやや首里親國んかい行じよーてい、捨ていらつてーならんぐどう。「マージューよー、

そうして見初められて、嫁になつていくことになつたそうです。この美人はマージューという名であつたが、ひとつは癖があつたようだ。その癖というのは何かといえば、おならね、おならをする癖があつたつて。もういつも普ップツプレーとおならばかり出して、首里に嫁に行つてから捨てられたりしたらいけないからね。「マージューよー、あなたは親が言つたのを覚えてい

いやーや親ぬ言いわしゃしえ一覺うぶとーらやー。いやー屁փひりがたねー、此ぬ踵あき、足ぬ踵あき込みんきよー、マージュあじゅ。踵あきよーマージュあじゅー」りちやぐどう、「覺うぶとーやびん、アンマーアンマー」^{注①}りち。

あんきーにうれー、首里親國すいぱくこくぬ、なー容姿かぎん美ちゅらさるあぐどう、金持人いっせきじんぬ嫁ゆめなでい。うんにーからー、うぬお緊張きんぢょうさーになー、じいーが良い所いぬ嫁ゆめなでい、ありそーんりぬ話はなしやいびん。

そういうことで、その娘はもう大変な美人であつたので、首里の大金持ちの嫁になつたつて。その時から、女は氣をつけたので、たいそう良い所の嫁になつたという話です。

これはやつぱし、昔は美ら容姿かぎやていん、田舎いなかと侍さむれと一釣り合あわんなやーなかいる、親うやあん言いちゃんり思うむとーやびん。

注アンマー お母さんのこと。平民についていう。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第十班 (天久節子・新里律子)

51 山原と団亀

話者 比嘉 靜 (大正四年十月十七日生)

翻字・対訳 村山友江

あぬ、旅人たびにんやたんり。旅人たびにんぬ話。或る旅人たびにんぬ、山原

あのう、旅人たびにんだつたつて。旅人の話。ある旅人が山

ぬなー、山原山んかい行じさぐとう。山原山んじなー、便所入ぶさたぐとう。亀ぬ居しえー分からんなやーに、亀ぬ上んかい糞おまていきぐとう。

なーうぬ旅人おー又歩つきわるやる、なー旅え続^ちきりわるやるりち、歩つちさぐとう。なー自分ぬまでーぬ糞ぬ歩つちさくとう。なー珍し物、糞ぬ歩つちゅんりちん有るやーりち。

山原ぬ旅や 績^{いく}旅んさしが
糞ぬ歩つちゅしや 今度初^{いんだう}み

りち、此ぬ旅人おなー、じこー珍さし、さんりぬ話ぐわー。

原に行つて、そこで便意を催したくなつてしまつた。
それで亀がいるとは知らずに、亀の上に糞をしてしまつてね。

そうして旅人はまた、旅を続けないといけないから歩いたらその亀も歩いた。それを見て、自分がやつた糞が歩いたので、これは珍しいことだ、糞が歩くつてこともあるのかなと不思議に思つたつて。

山原の旅は 縂^{いく}旅もしたが
糞の歩くのは 今度が初めて

と歌つた。この旅人は、大変珍しがつたという話さあ。

採集 S 51・12・19

読谷村民話調査団第四班（阿波根初美・知花春美・恩納加代美）

52 黄金の瓜種

話著 玉木恵雄（明治四十年七月八日生）

翻字 知花めぐみ

昔、琉球時代のことですけど。ある王が、本妻はおるけど、どうしても後の妻が欲しいということで。自分の部下に命じて、琉球国から非常にきれいな女を、自分の妾にできるような女を探したらしきけど。で、その部下は琉球一般を探していたところが、とうとう津堅の島に、とても美麗な女の子がおつたらしいですがな。そしたら、

その使いの者は早速その王に對して、きれいな女がおるちゅう事を強調してしまつたら、早速連れて來いといふ事になりました。で、早速連れて行つたら、王も非常に氣に入つて、その女を愛したらしいです。

そしたらそこには本妻もおるし、本妻との間には子供がまだできてなかつたらしいです。そしたら王も、とにかく非常に氣に入つて、もう政治はおろか、すべてサンゲーの事ももうほつたらかして、いつもその女と遊ぶ事だけしか考へてなかつた。で、政治も乱れて、世の中も亂れてしまつたらしいですね。

ある時、王の誕生日にその女を迎えた。で、大きな御殿でお祝いする事になつたらしいですけども。で、昔から王というは一夫多妻の方で、妻一人でなくつて、今度は女官とかいろんな妾がたくさん付いておつたらしいけども。その嫉妬のあまり、その本妻が、これはどうしてもその女を取り除いていかなきやいかんと。今まで自分を愛してくれたけども、その女が来てからはもう、自分には触れようとしないから、どうしたらその女をお城から追い出すかという事をいつも日々それを考えておつたんですね。

で、相談の結果、どうしたらいいかという事がある女同士考へて、で、来たるいつ何日の王の誕生日に女が出るから、その時を利用して何とか訴訟を起こして、早速追い出そうということで協議は帰結したらしいですね。

いよいよその誕生日を迎えて、とにかくやつて。その式順が決まり、座る場所もちゃんと決まっておつたらしいですな。で、案の定、正妻は別として、王はいつも自分が可愛がつておるその津堅から来た女を相手にして酌をしとることになつていたらしい。で、それを見た本妻や別の女は、なおさら嫉妬に燃えて非常に怒つたらしいですけども。んで、その悪辣な方法はどうするかとこれを帰結したら、じゃあこうしようという事になりました。で、その悪法は、今日は誕生日だから、どうしてもその女が王にお酌をするでしょうから、で、その時に誰か出したくないおならでもひとつやつてくれるか言つたわけ。やつたらしいですな。で、その時、王もたしか怒つて早速その場で、その女をまた元の津堅の島へ帰してくるだらうちゅう事になりました。

いよいよ、誕生の祝いもまつ盛りとなつて、まあ案の定、その話の通り、いよいよ女が王に對して酌をする時に、

誰かがお酌をする途中に、屁をへつたらしいですな、おならを出して。んで、とにかく相手は七、八人で、こつちは一人だから、「今のおならを出した人は誰か」と王は非常に怒つたらしいですな。今日のこの場所に限つて、今日に限つてそんな不承知な事は無礼千万の事をしたちゅうんで、王は非常に怒つたらしいけども。元々四、五人の女の方は話あつた結果だから、今の女がおならを出したちゅう事を皆に押し付けたらしいですよ。女は「どうして、私はそんな粗相な事はしていません」と頑張つたけども、とにかく皆のその多数決で、「お前が今やつたじゃないか」という事を皆にこう言られて。で、泣く泣く、王も怒つて、「今まで君は非常に私が可愛がつてきても、場所柄、こんな粗相を起こすというのは、とにかく田舎者のくせに」と、非常に怒つて早速帰す事になつたらしいですね。

そして、泣く泣く、とにかく船に乗せて、また元の生まれ故郷の津堅の島に行つたらしいですよ。で、幸いにして、帰す時にその女は身重になつておつたらしいですな。妊娠しておつたらしいですよ。で、その女は国あげての、津堅の島をあげて、非常にこう見送りもして、盛大に送つてやつたけども。まあとにかく、また田舎者だからまた帰されたという事は、國の方でも非常にこう落胆してしまつて。その女は、しょつちゅう一人暮らしで、悔しがつて、一人暮らしておつたらしいですな。その女は、帰された時は、こうおめでたをして、妊娠しておつたらしいです。女は、せつかく國をあげてのお見送りと、また今度は帰されたとの悲觀からもつて、いつも一人暮らしをおつたらしいですな。

そうして、毎日毎日、暮らしている間に、とにかく十月十日になりました、とうとうその女は、男の子を生む事になりました。で、言わばそれが、その人が琉球王の後継ぎになるわけです。本妻とは子供ができなかつたそうですが、その女とはちゃんと子供ができる、琉球王の後を取つたちゅう話だけども。

で、そのいきさつというのはだんだん子供が成長するにしたがつて、周囲の友達から、父無し子として非常にいじめられたそうですな、その男の子は。で、お母さんはそれを聞く度に、非常にこう心が焼けて。で、「今はとにかくそういう事言う（時）じゃないから、いつかはその事が表われるから、その時まで辛抱して待つておけ」と、い

つも子供を諭しておつたらしいけども。で、「そのいつかとはいつになるか。」と言ふと、「あんたがね、十五になつたら必ずあんたのお父さんの行方、また誰々ということは名前を告げるから、その時まで十五になるまでは、とにかく辛抱して人が何と言おうと待つておきなさい。その時には、お母さんは早速知らしてやるから」ちゅうて。で、その子どもも、お母さんの言う事を聞いて、十五になるまで非常にこう、楽しんで待つておつたらしいですな。

そしてある時、今度はその男の子は、一人散歩に行つて浜辺に遊びに行つたららしいですな。行つたら沖の方から、とにかく小つちやい甕が流れて來た。で、その甕がいわゆる黄金甕、いわば黄金の甕であつたらしい。で、それを拾い上げて、母ちゃん、その子供は自分の家に持つて行つたらしいですな。持つて行つて、それを蓋を開けてみたところが、そこには、その甕の中にはいわゆるその今日の穀物、穀物ですね。米、麦、粟、とうもろこし、全ての種が入つてあつたらしいですな。昔はそれはなかつたですけども、これはどういうもんだろうと非常にこう不思議がつて、その女は自分の庭にもう何とかしてこれを植えてみようという、試験的にとにかく捨てるつもりでこう、庭に放つておいたらしいです。それがだんだんだん実つて、米やらマージン（黍）やらすべて穀物が非常にできたらしいですな。

今度は、そのうちに男は十五になつて、いよいよお母さんと約束の通り、「お母さん私も十五になつたから、わざのお父さんの行方と、名前、居所知らせてくれ」と言つたらしいですな。そしたら今度は、男の子は、そのお母さんが作つた食べ物をまた元の甕に入れて、「あんたのお父さんは、これこれという人だから、しかし、お前に会つてくれるかくれないかは分からんけども、まあとにかく、これを持つていつてお父さんに会つてくれ」と、お母さんがこれをしきりに諭して、子供にやつたらしいですな。で、その子供は、その話を聞いて、自分のお父さんは国王であるということを聞いて、勇気づけられて今度は、今の首里に國府に行つたらしいですな。

まあもちろん、今でもそうですけども、昔もとにかく番兵がおりまして、そこは門を閉ざしてなかなか中に入れないと、子供は、自分はとにかく国王であるという事をちゃんと心に決めてるんだから、もうゆうゆうと、と

にかくそこに、どうしても入るちゅう事を、とにかくお父さんに会えるちゅう事を言って元氣にその門に行つたらしいですな。その門兵は何と言つたかと言うと「君はどこから来たか」と、「実はこれこれで、田舎から來たけども、私の、王に会わしてくれ」と言つたらしいですな。ね、国王に会わせてくれと。「お前」ときが、子供のくせに王に会わせるわけにはいかん」と、早速追い返されたらしいですよ。「追い返されても、私は死んでも、一週間十日でも、あんた方が会わすまではどうしても帰らない。一応王に会つて初めて、私はあんたらの事を私は打ち明けてやるから、とにかく会わしてくれ」となんば嘆願しても、子供のくせに、身なりも汚いから、絶対会わす事できないと、でそれを、拒んだけども。で、その熱心さに今度は門兵の方もほだされて、じゃあ一応とにかく、顔だけは見せてやるちゅう事で、いよいよお取り次ぎして、まあ王に会う事ができたらしいですな。

そしたら今度は王もこれは不思議な子供だというんで、子供のくせに会うというのは、とにかく最も勇氣のある子どもだ、一應会つてみようちゅう事で。とうとう王もその子供の熱心にほだされて会う事になつたんだが。いよいよ、とにかく正座し話をした。第一に答えた後の質問は何と言つたかと、その子供ね。「王様、この世の中人に人間に生まれて、おならを出さない人がありますか」と、早速それを言うたんですね。その子供はね。王は何と言つたかといふと、「いや、とにかく世の中に生まれて、人間として、生を持つ動物では、誰しもおならを出すんだけども。おならを出さない動物がおるか、人間もましてはそうですけども」ちゅうと、「そんな馬鹿な事があるか、皆おならは出る、それを出ないのはおかしい、病気だ」と(王は言つた)。「それなのに、私のお母さんはね、おならを出した関係で、母は王のお側の人だつたけど、今では自分の生まれ故郷に帰されて一人寂しく暮らしているけども、昔の事を考えて、十五年前の事を考えてごらんなさい」とそう言つたらしいですな。で、王もしばらくずっと、「ああ十五年前に、これこれこういう事があつたね」ということを早速思い出して、「あんたのお母さんは、お母さんの名前を言つてみなさい」と言つたらね。これこれ、何の名前であると言う事を聞いて、聞いたけどもまあおそらく王もその子供の意見にね、非常に感服して「とにかくお母さんはまだ元氣か」と聞いたら「元氣です」「じゃ

あ、私が悪かつたから、今度はお母さんを早速呼んで一緒に暮すから」と言つて、こう共に仲良く、もつと仲良く暮したらしいですけどもね。それが、そのまあ、おならの出たという原因で離縁された話ですけども。で、また持つて来たその壺の中には「これは私のお土産だから、私のお母さんが、ちゃんと海から流れてくる壺に入つた種を庭に撒いたら、これぐらいできておるから。確かに将来は琉球の為になるから、これをいつぺん試験的にやつてみて、して下さい」と百姓に命じて、それを植えさせたらしいですな。で、それから、今度はその苗が実つて、とにかく沖縄の穀物が盛んになつたと。まあそれが、おならの壺になつてゐるといふ。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第十班（天久節子・新里律子）

53 大木徳武佐

話者 長浜マツ（明治四十年六月十五日生）

翻字・対訳 村山友江

徳武佐は、非常に徳のある人がそこに隠れて、戦を凌いだつて。そこで何とか戦を凌いだので、一息ついて、その後はもうどこに散らばつて行つたのかは分からぬが、そこに隠れた人達は命が助かつたそうだ。
徳武佐は、非常に徳のある人がそこに隠れて、戦を凌いで、あの一戦を凌じやー。あんさーに、うまうとーてい何とか凌じやぐとうりち、なー大息しみそー やーなかい、又、何処んかいがわづくいみそーちやらー 分からんしがてー。うぬ洞窟やなー入みそーちやる人お命助かてい。渡具知の港うてい活躍の戦した時には負けたらしい。

徳武佐とうくわさやあぬー、この非常に徳ぬ有みせーる人ぬそ
こに隠れて、あの一戦いっせんを凌しおじやー。あんさーに、うま
うとーてい何なんとか凌しおじやぐとうりち、なー大息うぶいきしみそー
やーなかい、又、何処まんかいがわづくいみそーちやらー
分からんしがてー。うぬ洞窟がまどやなー入みそーちやる人お
命めいぢだし助かてい。渡具知の港みやどうてい活躍かくやくの戦たたかした時ときには負
けたらしい。

それからエンミモーといつてね、ここ上のモーがあつて、そこは戦前、今からもう五十年くらいなるかね。まだなるでしようね。牛をあの一楚辺から牛ウワー
スン所有たんよ。ここであの一ここはエンミモーという所は、エンミさせたからここはエンミモーの名前付
けられている。そうウンメー達や言みせーたんてー。

あんさー又、此ぬ徳武佐ぬうまんかい、うまー岩る
やたんりしが、うまー。此処、洞窟なてい木ぬ有てい、
そこに入つた人は命が助かつて、徳ぬ有みせーる神様
やぐとうりち。ここはもう毎年大木ぬ人達が指導して
ね、拝まびーみせーたんりぬ話。

又、ここに来る時には必ずこのおにぎり、今の弁当
さーね。これももう昔やぐとう、なー有る物さーを作
ていてー、なーチンクワーウブサーン豆腐ん何んし、
うりさーい持つて来て、これ食べるのが楽しみだつた
の、私達が小さい時には。これがもう今も思い出になつ
てさー、この伝説が残つて、今も大木の部落民が毎年
九月十三夜はこうして拝みしている。それで、屋良とか
嘉手納方面からも皆拝みに来よつたの。

それからここ上にはエンミモーというのがあつて
ね。そこは戦場だから、もう五十年くらいなるかね。
おそらくもつとなるでしようね。牛を楚辺から引つ張つ
(降参) したから、そこはエンミモーと付けられて
て来て闘牛をさせる所があつたよ。その近くでエンミ
徳武佐は岩であつたというが、そこに、洞窟があり
木も生えていて、そこに入つた人は命が助かつたので、
徳のある神様ということですね。ここはもう毎年大木の
人達が指導して、拝んだという話。

またここに来る時には必ずおにぎり、今で言う弁当
さあね。これも昔だから有り合わせの物でカボチャや
豆腐等を詰めて持つて行き、これを吃るのが楽しみ
だつた。私達が小さい時には、これが思い出として残つ
ている。この伝説が残つて、今も大木の部落民は毎年
九月十三夜にはこうして拝んでいる。また、屋良とか
嘉手納方面からもみんな拝みに來たよ。

注①徳武佐 部落の山手にあり、今から約六百年前に三山戦国の時代に中今帰仁按司が戦い敗れ追われてここに身を隠し、余命を全うして伝えられている。毎年旧暦の九月になると、各地から今帰仁按司の子孫が参拝にやって来る。

②エンミモー 現在の楚辺部落で、古堅小学校西側一帯の原名。そこに阿麻和利の墓がある。「エンミ」とは方言で「降参する」という意で、阿麻和利が首里の追手に討ち取られる際の言葉が小字名として使われるようになつたといわれている。

③楚 辺 読谷村の南西部にある部落。戦後、部落全体が米軍の通信施設として強制接収されたので、新部落を字都屋の近くに建設。六万坪の耕地を字が買上げ、一戸当たり百坪の割当てで区画整理を行つて、現在に至つている。

④ウンマー お祖母さんのこと。

⑤屋 良 嘉手納町の字名の一つ。町分離以前は北谷村に所属。



大木徳武佐



エンミモー

阿 麻 和 利

著者 比嘉 静(大正四年十月十七日生)

翻字・対訳 村山友江

アマンジヤナーぬ話さびら。今あ阿麻和利り言やびー
 しが、昔えアマンジヤナーリ言やびーたしが。昔、あ
 ぬ屋良ぬアシビナーに大川按司りち、仏壇作ていあり
 やいびーたしが、拝どーびーたしが。このアマンジヤ
 ナーは大川按司ぬ嫡子とう生まりて、嫡子とう生ま
 りとーびーしが、なー生うまりながらに片端者なていビー
 ラーなたぐとう。うぬ大川按司え、「此れーなー、世繼
 じゆる童えあらんむー。城ぬ下んじなー捨てりわる
 やる」りち、なー捨ていてーぬぐとーびん、アマンジヤ
 ナーや。

うぬアマンジヤナーや又なー、大変賢い。頭お優り
 とーしが、やつぱし歩つちえーうーさん、蛸ぬエーク
 とー同ぬ物ビーラーなたぐとう。城ぬ下あ大変ぬ深山
 やいびーてーん。あんし、うまんじ捨ていていきくとう。
 うぬアマンジヤナーやなー賢い、頭あ大変良たざる有
 ぐどう。

アマンジヤナーの話をしましよう。今は阿麻和利と
 言いますが、昔はアマンジヤナーと言つていました。
 あの屋良のアシビナーに大川按司といつて、仏壇も作つ
 てあり、そこを拝んでいましたが。このアマンジヤナー
 は大川按司の長男として生まれたのだが、生まれなが
 らにして片端者で軟弱であつたそうだ。それで大川按
 司は「これはもう世継ぎできる子供ではないな。城の
 下に捨てないといけない」と捨てたようだね、アマン
 ジヤナーは。

このアマンジヤナーは大変賢くて、頭は優れている
 のだが、やつぱり歩く事ができなく、蛸のエークとい
 う諺通りに虚弱者であつた。城の下には深い山があつ
 たそうだ。そうしてそこに捨てられたのだが、アマン
 ジヤナーは賢い、頭は大変良かつたのだからね。

此処んじな一捨ていらつとーてい座ちよーてい、木ぬ上うとーてい蜘蛛ぬ、蜘蛛ぬ巣い作くいし毎日かんしみ、眺みとーてーるふーじやいびるむのー。此れーなーちやーしんまじ此ぬ蜘蛛ぬ、蜘蛛ぬ巣んかい真似てい、糸さーに蜘蛛ぬ巣とー同ぬ物網作くていんりわるやつさーりち。此ぬアマンジャナーや、蜘蛛ぬ巣んかい真似やーに、網、ちやつびんぬなー網作てい。

さぐとう、うぬアマンジャナーやなー、やつぱし丈いいたぐとう、按司ぬ、嫡子若按司るやくとう。頑丈者なたい、なービーラーやしが、丈いーたぐとう頑丈者なやーに、大変なー賢い人るやぐとう。網作やーに、勝連、与那城んかいうぬ網担みてに行じ。あんさーになー、勝連お昔え魚んまんりるうぐとう。取いる人居らん。網しなーちやつさん魚取つてい、あんしうぬ部落ぬ人んかい沢山呉てーるふーじ。

あんさくとう、うぬ部落ぬ人がうれーなー神様るやるりち、大変信じてい。さぐとう、うぬアマンジャナーや此れー是非、中城護佐丸討ち滅ばさーに、自分や護佐丸なりわるやつさーりち、企みていさくとう。或る部落ぬ人んかい、「とーいつたー、私が魚ん呉ていそー

そこで捨てられ座つたまま、木の上の蜘蛛が巣を作るのを毎日見て、眺めていたようだ。そうしながらどうしてもこの蜘蛛の巣に真似て、糸でまず蜘蛛の巣と同じように網を作つてみようではないかと思つた。そしてこのアマンジャナーは蜘蛛の巣に真似て、大きな網を作つた。

そうしてアマンジャナーは成人したのだが、(本当は)按司の長男なのだからね。虚弱児だつたのだが、成人したら頑丈になつて、さらに大変賢い人でもあつた。網を作つて、勝連、与那城に網を担いで行つた。昔は勝連は魚もたくさんいたが、取る術を知つてゐる人がいなかつたようだ。それで、アマンジャナーは網を作つて、魚もたくさん取つて、部落の人々にたくさんくれていたつて。

そうしたらもう部落の人々は阿麻和利は神様だと、大変信じていた。アマンジャナーは是非、中城護佐丸を討ち滅ぼして、自分は護佐丸の跡継ぎになろうと企んでいた。部落の人々に、「お前達は私が魚も取つてあげているのだからね。私が何時か中城護佐丸を討ち滅ぼす

ぐとう。私が何時がなー中城護佐丸討ち滅ばすぐとう、
うぬ場合やいつたー松明付きてい、浜いつペー揃りよー」
りちさくとう。うぬ部落ぬ人ぬ達やなー、信じている
うぐとう、「あんさびーぐとう」りちさくとう。

なーうぬ護佐丸おうぬ話い聞ち、驚ちみそーやーに、
「此れーなー謀反企どーぐとう、是非なー婿取りわる
やる」りち。あんさーに、アマンジャナーなー、自分
ぬ女ん子あ嫁なちえーるふーじ。あんさぐとう、うぬ
アマンジャナーあんしん聞かん、護佐丸討ち滅ばち。

護佐丸はこの話を聞いて驚いて、「これはもう謀反を
企んでいるのだから、是非婿にしてどうにかしなけれ
ばいけない」と思った。（婿にすれば反逆もしないだろ
うということだった）それで娘を嫁にさしだしたらし
い。しかしアマンジャナーはそれでも聞かず、護佐丸
を滅ぼしてしまった。

それでもう、護佐丸は、アマンジャナーに滅ぼされ
るよりは、自ら切腹した方が良いと思つた。勝連の百
姓達が松明をつけて浜に兵を寄せて来るのを見て、護
佐丸は大変驚かれてしまつた。もうこれは薩摩から兵
を寄せて来ているのだから、私は凌ぐことができない
と、切腹してしまつた。そうして次男の亀千代は乳母
と一緒に山原に逃れさせたらしい。

さぐとうなー、護佐丸おあぬアマンジャナーンかい
滅ばさりーしやか、自分くる切腹すせーましりち。なー
直ぐぬ勝連ぬ百姓ぬ達や、直ぐ浜んかい松明付きてい
戦寄していさぐとう、なー護佐丸お大変驚ちみそーやー
に。とーうれー薩摩から戦あ寄しとーむん、なー私
ねー凌がらんせーりやーに、切腹しみそーちゃぐとう。
あんさーになー又、次男カミジユーりがらーやヤカー
んかい連うち、山原んかい凌がちえーるふーじ。

あんさぐとう又、護佐丸滅ばちんなーやあらん、なー
此れー謀反人るやぐとう。今ねーなー首里城んかい登

から、その時には松明をつけて、浜いつぱいに勢揃い
しなさいよ」と言つた。この部落の人達は、アマンジャ
ナーを信頼しているので、「そうします」と言つた。

てい、又首里ぬ國家ん滅ばしわるやるりち、大変謀反
するやぐとう。あんしさぐとう、首里やなーうりから
大変臣下あまんりるうぐとう、首里から追りやーに、
あんさーにアマンジャナーや読谷ぬ楚辺何処りがらー
うてい、滅ばさつたんりぬ話。

採集 S 51・12・19

読谷村民話調査団第四班（阿波根初美・知花春美・恩納加代美）

行き、首里城を滅ぼそうと謀反を企てた。首里城には
大勢の臣下がいるのだから、思うようにはいかず首里
からは追われてしまった。そこでアマンジャナーは読
谷の楚辺のどこかで滅ぼされてしまったという話だよ。

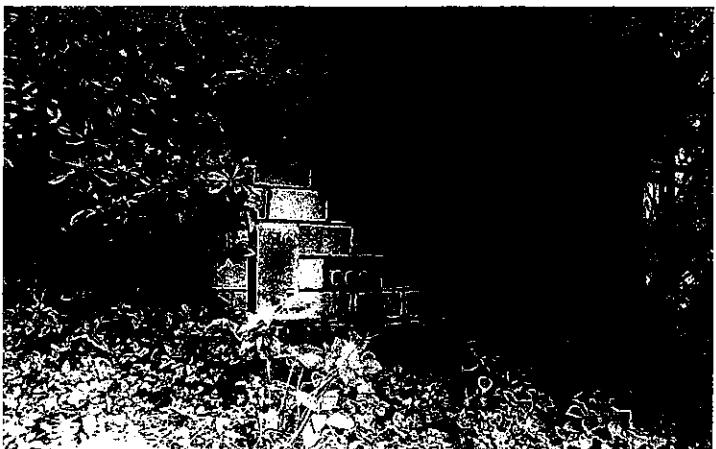
注①アマンジャナー 阿麻和利のこと。

②阿麻和利 ?~一四五八(?)~尚泰久5十五世紀中葉の
勝連城主。阿摩和利とも表記。北谷間切屋良(現嘉手納町)
に農民の子として生まれたという口伝がある。勝連城主茂
知附按司を攻め城主となる。以後急速に頭角を現わし、國
王尚泰久の娘百度踏揚を娶る。奸計により中城城主護佐丸
を討ち(護佐丸・阿麻和利の変)、つづいて中山攻略を計
画するが、夫人百度踏揚と鬼大城に事前に知られ、鬼大城
を大将とする中山軍に滅ぼされたという。

③屋 良 138頁参照

④アシビナー アシビや村芝居をする所。ナーは庭のほかに
広場という意味がある。

⑤勝 連 沖縄本島中央部より東方に突き出た与勝半島の



阿麻和利の墓

南半を占め、西方は具志川市、南方は中城湾、北方は与那城村と接している。

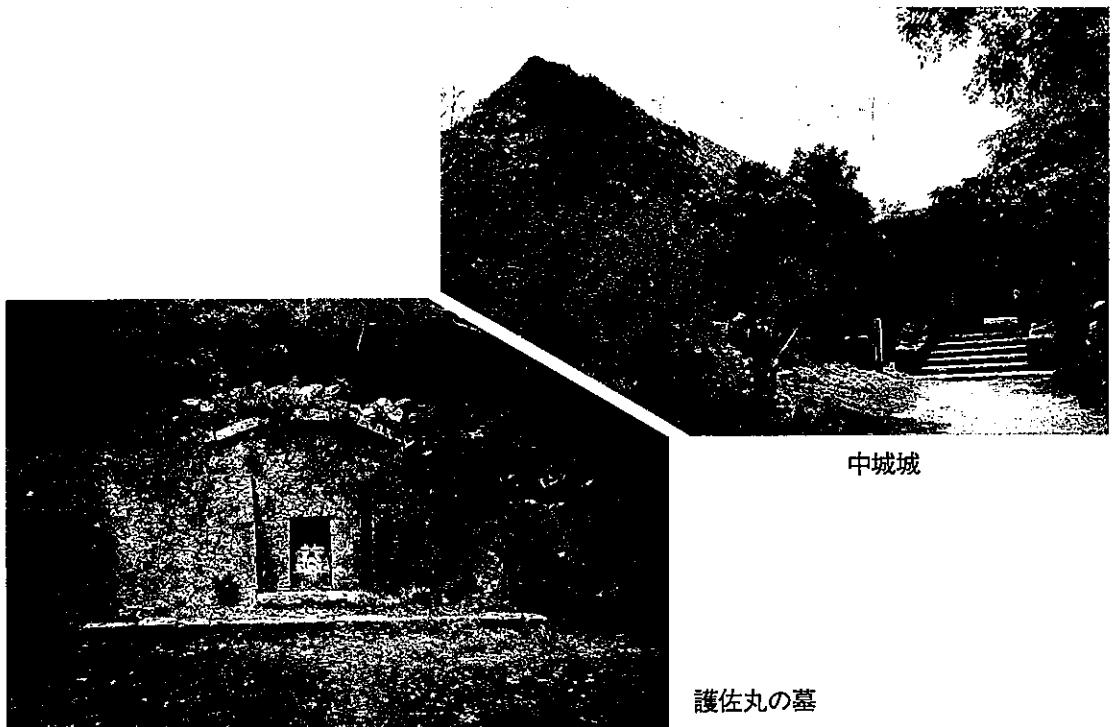
⑥与那城 沖縄本島中央部より東方に突き出た与勝半島の北半を占め、西方は具志川市、南側は勝連に接し、北側は金武湾に面している。

⑦中城城 中城村伊倉堂にある。尚泰久王時代（一四五四—一四六〇年）護佐丸が読谷山座喜味城から移り、一四五八年、勝連城の阿麻和利に亡ぼされるまでの居城で、城も亦彼の計画に係るものという。内外城壁は今なお厳然としてほとんど完全に近いほど残っている。

⑧護佐丸 一四二〇年代の英雄、護佐丸はもと大北（読谷山、恩納）地方を領し、最初山田にいたが、後に座喜味に城を築いて移った。ここで北山地方をおさえ、長浜港を利用して南蛮貿易を行つたといわれる。更に、その娘が尚巴志の妃（夏氏大宗由来記には尚泰久の妃）となり、北山も一四一六年に滅亡したので、一四四〇年頃に中城城を築造して移つた。

⑨カミジュー 護佐丸の三男の童名。後の豊見城按司盛親。

⑩ヤカー 守り役。上流家庭の男子の守り役。



中城城

護佐丸の墓

ウミナイ・ウミキ

話者 比嘉 静（大正四年十月十七日生）

翻字・対訳 知花 孝子

昔、あぬーお祖父さん、お祖母さん達から聞ちやびたしが。昔ウミナイ・ウミキ^(注)りちめんせーびーたしが。此ぬ首里ぬ御城ぬ、按司え、何ぬ按司がやら分かれんしが。うぬ按司ぬ戦んやま切りやーに、この按司がなー滅ばさつたぐとう。敵んかい滅ばさつたぐとう。

なーイキーや、自分ぬ養なみそーやーに、ウナイやヤカーんかい、ヤカー^(注)や山原人、国頭ぬ人やてーぬふーじやいびーしが。国頭ぬ人んかい、此ぬウナイや女ん子や養なーち、国頭んかい連て行じ。あまんじなー丈々なでいさくとう、丁度なー十八なでい、なー丈いーといさくとう。うぬウナイやなー大変が美ら容姿なでい、美ら容姿なでいさぐとう。うぬイキーやウナイやか二ちえー上なでい、二十歳なとーびーてーるむのー。

なー首里ぬ御城から山原勤みなでい、山原んかい勤みしーが行じやぐとう。自分ぬウナリちえー分からん。うぬどうくからなー、山原んかい田舎んかい、あ

昔、あのうお祖父さん、お祖母さん達から聞いた話です。昔、兄妹がいらっしゃったそうですが。父親はこの首里の御城の、何という按司だったのかは分かりませんがね。ある戦でこの按司は滅ぼされてしまつたそうです。戦に滅ぼされてしまつたから。

もう兄は、首里で育つて、妹はヤカー（守り役）に、国頭に連れて行つてもらつた。国頭まで連れて行つて、妹は育ててもらうことにした。そこで妹は無事に育ち、十八歳になり大変美人になつた。その時、兄は妹より二歳上だつたから二十歳になつていたようだね。

そして兄は、首里の御城勤めから山原に勤めに行くようになつたのだが、自分の妹だということは知らず、このような山原の田舎に、こんな美しい女性もいるも

んし美らさぬ人ん居るりち。ちやーうぬイキーぬ、自分
ぬ兄妹のやしが大変望り。あんさーになーじこー望り、
なーちやーしん此れー妻し、首里かい連てい行きわる
やしがりち。うぬウスメーんかい、「妻しみていい呉り」
りち、大変願ていさくとう。ウスメーや、此れーなー
首里ぬ御城まーからめんそーちやせー、自分のーなー
分かいしが言ららん、「いやーウナイるやしがやー」り
ち、大変言らなやーりやしが、なー言ららん。大変なー
うぬお爺や悩りそーしが。なー望りるぐとう。

又、あぬ花笠踊りしえー、丁度うりから出じてー

るふーじ。

花笠造やい 面顔隠ちよてい

梅ぬ匂い ヤーレ

ヨイシヨイシトウ カタミティヨイシ

これ歌です。歌。

してあのー、なー兄さんるやしが分からんなやーに、
歌まり造てい大変望りそーしがなー、ウスメーがー
妻えなさん。なーウスメーがー分かているぐとう。ヤ
カーるやぐとう、妻えなさんなたぐとう。なーちやー
しん此れ田舎勤めー終わやーに、私ねー此りる妻する、

のかと思つていた。自分の妹であるのだが、そつとは
知らずにたいそう望んでいた。もう大変望んで、どう
しても妻にして首里に連れて行かねばならないと思つ
ていた。お爺さんに、「妻にさせて下さい」と願つたの
だが、お爺さんは首里の御城から連れて來た娘を「あ
なたの妹ですよ」と言ひたいのだが、どうしても言え
ない。お爺さんはもう大変悩んでいた。兄がは望んで
いるのだから。

それで花傘踊りというのは、ちようどこれから出た
らしい。

花笠を造つて 面顔を隠し

梅の匂いだよ ヤーレ

ヨイシヨイシトウ カタミティヨイシ

これ歌です。歌。

このように、兄は娘が妹だとは分からず、歌まで作つ
て望んでいるのだが、おじいさんは妻にはさせてくれ
なかつた。もうこれはどうしても田舎勤めを終わつた
ら、私は妻にする、首里からは絶対に妻は搜さないと
兄は思つていた。

首里から一絶対妻え搜めーらんりち。

あんさー、此り連てい行ちゅんりちきぐとう、うぬ
ウスメーが、ヤカーウスメーが口説詠り。うつたが小
さる場ぬ口説詠り、「なーいつたーや、小さいに男親ぬ
失なみそーちやぐとう、いやーや首里んじ丈いーてい、
ウナイやなー私があぬー田舎下りし、ヤカー、いつたー
うまぬ草チリーやたぐとう、按司加那志からなー、いやー
ウナイや私がるなー丈うわーち、いやーウナイるやん
どー」りちやぐとう。なー仕方あならん、うれー兄妹え
妻する訳ねーいかん、諦みやーになー首里かい上て
あんし又、うぬウナイン首里んかい連てい行じ、やつ
ぱし又、良い夫持たちやんりぬ話。

それから妹を連れて行こうとしたら、お爺さんが、
ヤカーのお爺さんが口説を詠んだ。「もうあなた達が小
さい時に父親は亡くなられて、貴方は首里に育ち、妹
は私が田舎下りし、そこで草刈りをして私が育てたの
ですよ。貴方の妹ですよ」と言つたそうだ。もう仕方
がない、それは妹なのだから妻にする訳にはいかない
と、兄は諦めて首里に上つて行つた。また、妹も一緒
に首里に連れて行き、そこで良い夫も持たせたといふ
話。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第四班 〔阿波根初美・知花春美・恩納加代美〕

注①ウミナイ・ウミキ一 16頁参照

②ヤカ一 143頁参照

③山 原 36頁参照

④ウスメー 87頁参照

翻字・対訳 村山友江

此れーなー、或る所んかいありやんせーみせーたんりせー。なーウミングワや美らさい、うぬ猿う大変可愛さそーてーるふーじてー。

あんきーにうぬ猿なかい、うぬウミングワ一押すらりやーなかい。なーかんーせーならんむーり、うぬ男ぬ親ぬ、此り生ちきとーちーねー、ちゃーぬ事んするむんりち。猿ん殺さーなかい、うぬ子しーていー海んかい流ちゃんりが言たらー。

あんきーに、うぬ猿う生ち返ていちゃんりたがやー。あんきーにうぬ浜んかい着ちゃーに、「チューアイ、チューアイ」し、うりからる出じたんりさ。ちゃー私あ親あ、あぬ

あぬ

旅や浜宿り 草葉ぬ葉どう枕

りちや。親ぬあんし殺しーが、なー昔え大事やでーせーや。少ん悪い事しーねー一直ぐ、ぼーりーるやぐどう。あんきーにうりから出じていうぬチジユヤー節ん、

ある所での話だがね。大変きれいな娘がいて、猿を大変可愛がつていたらしい。

そうしているうちに、娘は猿に犯されてしまったので、このままではいけないと、父親はこの猿をそのまま生かしておいたら何をするか分からぬと思つた。それで猿を殺して、娘も一緒に海に流したとか言つていたのだが…。

そうなんだが、猿は生きて返つて來たということだったかな。それから浜に着いて、「チューアイ チューアイ」と鳴くようになつたつて。私の親は(どうしているだろうと)

旅は浜に宿り 草葉の葉が枕なんだよ

と言つてね。親はそのように駆けたのだが、もう昔は少しでも悪い事をしようものなら、大変だつたさあ。浜千鳥節で、浜で「チューアイ チューアイ」と鳴いて

いるのは、親の面影を忍んでいるという話。

浜うてい「チューアイ チューアイ」しなー、丁度、親ぬ
面影し、あんしうぬ鳴ちゅんりさりぬ話。

何かあれは道理があるらしいよ。浜うてい、「チューアイ チューアイ」すしん、「旅や浜宿」んひとつ道理があつて、これを歌にして踊りに作った訳だよ。

浜千鳥節に道理があるらしいよ。浜で「チューアイ チューアイ」鳴くのも、「浜や旅宿」というのにもひとつ道理があつて、これをまた歌にして、踊りも作ったというわけだつてよ。

採集 S 51・12・19

読谷村民話調査団第四班（阿波根初美・知花春美・恩納加代美）

注 ウミングワ 上流家庭の娘のこと。

57 普天間権現

話者 砂辺 光（大正元年八月五日生）

翻字・対訳 玉城琳子

あのねー、うぬ普天間権現んかいよー、兵隊が行ちー
にん、又帰てい来にん、うま拝みすてーるふーじやー。

あんしひ帰てい来ぐどう、なー軍曹なてい帰てい來
さにやー、うぬ人お。あんさーに、太刀持つち來、う
まうてい拝むんり。うぬ太刀え取てい置ちよーてい拝
まーに。帰てい行ちーねー、うぬ太刀え忘てい行じえー

あのね、普天間権現といふ所、兵隊として出征する時も、また帰つて来た時にも、そこを拝んだらしい。
そうして帰つて来た時には、軍曹にでもなつていたんでしうね。それで、刀は取つて置いてから拝んだので、帰つて行く時には刀は忘れて行つたわけさあ。

るばーてー。

あんさぐとうなー、うまんかい帰ていけりから、「あいなー、私ねー太刀忘ていまーんち。」「その神様が本当に靈驗あみせーるんさー、私太刀守ていくらみそーりーんち。あんさーに、なーあまうてい願ていさぐとう、して、その太刀え人ぬ見じーねー蛇ないしが、うぬ人ぬ帰ていが間、うぬ刀が有たんりちよ。本当にこの普天間權現お靈驗あみせーんち。

すると、そこから帰つて来てから、「どうしよう、私は刀を忘れてしまつた」と言つて、「普天間權現の神様が靈驗あらたかであらせられるんでしたら、私の刀を守つて下さい」とお願いした。そうしてそこで願つたので、刀は人には蛇に見えて、その人が帰つて来るまであつたそうだ。本当にこの普天間權現の神様は靈驗あらたかであらせられるんだなどということ。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第五班 〈山入端孝子・湧川汎子〉

注 普天間權現 宜野湾市普天間の普天間宮内にある洞窟。鳥居をはいると拝殿があり、その後に洞窟があつて鍾乳石がたれ下がり奇観を呈している。中に普天間權現を祀り、熊野權現を勧請してある。

屋 良 ム ル チ へ生贊

著者 比 嘉 靜 (大正四年十月十七日生)

翻字・対訳 村 山 友 江

屋良ムルチんかい、蛇ぬ住まとーてるふーじやいびるむのー。蛇やなー、全部農民ぬ作い荒らち、川か

屋良ムルチに蛇が住まつていたようですが。蛇はもう、川から上がつて来ては農民の作物を荒らしていた

ら上がていいちえー、作い荒らちえーしーしーさぐとう。
 此れーなー、ちやーしさらー此り退治さらーましがやー
 りち、じこー村ぬ人お考かんけえたぐとう。なー此ぬ蛇じゃー、
 必じうまんかい人、人柱ひとばしうりし、人うりさん間まあ、絶
 対たたかうりつしなー、作つくい荒らちえーしーしーさくとう。
 或ある村むらんかい、大變だいへんなー親孝行おやこごぬ娘むすめ居ゐたんりるむ
 んぬ。なー是非じひ、うれー何月何日ねー、是非蛇じゃぬうま
 んかい上あがてあい來きぐとう。是非うぬ女めのん子こちやーしん
 なー、うまぬ村むらから女めのん子こ一人、蛇じゃんかいうりしなー、
 うりが御棒おほきざらん間まあなー全部作つくい荒らちさぐとう。
 うまぬ村むらぬ人ひとおなー、あんせー大變だいへんなー親孝行おやこごぬ子こぬ
 居ゐしが、なー仕方しかたあならん有あるむんぬ、うりやてい
 ん蛇じゃんかいうりさんあれーならんさりち。さくとう、
 なー大變だいへん泣なわか別わけりし。

あんしなー、或ある山やまんかい、うぬ蛇じゃぬなー何時いつぬ何日いつか
 うまんかい上あがてあい來きぐとうりち、うちゅくわ食くりーがり
 ち、うまんかい座いちよーんりしーねー。あんしなー、
 蛇じゃや、言いんねーすんねー川かわから上あがてあい來きに、うぬ女めのん
 子こあ大變だいへん親孝行おやこごな子こるやぐとう、神かみ様さまぬ、やつぱしなー
 天あそまり通つじててい神かみ様さまぬうりさーに。蛇じゃぬかんし出だじてて

ようだ。これはもうどうして退治しようかと、部落の人達は大変考えた。もうこの蛇は、必ずそこに人柱をたてて、生け贋にしない限り、いつまでもそのように作物を荒らすということだった。そうしない限り、いつまでもそのように作物を荒らしたりしていた。

ある村に、とても親孝行の娘がいたそうなんだが。もう何月何日に、蛇がそこに上がつて来るから、その時に、村から娘を一人出して蛇の生け贋にしない限り、作物を荒らされてしまうということだった。その村人としては、大變親孝行な娘なんだが、もう仕方がないことだと。そうでもして退治しなければいけない、蛇の生け贋にしないといけないとということになつた。すると、娘はもう大變泣いて皆と別れたつて。

そうして、何日には蛇がそこに上がつて来るからと、いうことで、蛇に食われる為にそこに座つていた。すると蛇は川から上がつて来たのだが、その娘は大変な親孝行者だつたので、それが天に通じて神様が助けに來たそうだ。蛇が現れると同時に神様がいらっしゃつて助けたつて。そして、娘は蛇に食われずに済み、ま

來しとう、神様ぬうりさーに助きて。うぬ女ん子あ

た蛇も退治したという話を聞いた。

なー、蛇んかいうちゅ食らんよーい、又蛇ん退治し、

うりさんりぬ話る聞ちやる。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第四班（阿波根初美・知花春美・恩納加代美）

注 屋良ムルチ 嘉手納町屋良にある。俗にムルチグムイと称し、比謝川の支流である茂呂木川上流の知花へ抜ける県道十六号線沿いの森の中にある。この溪潭は、昔は約千坪の広さがあつたといわれるが、米軍基地拡張で半分埋められた。

59 ハーリー由来

著者 玉木恵雄（明治四十年七月八日生）

翻字・対訳 村山友江

今ぬ世ぬ中なかいハーリーりち有しが、此ぬハーリー
ぬ行く先え、ちやーしハーリーすがりぬ話、ひとつし
なーびら。

現在、ハーリーというのがあるが、このハーリーの由来、どうしてハーリーをするようになつたという話、ひとつしてみましょう。

時代や何年前がやら一分からんしが、昔、太公望りぬ人ぬめんせーたん。昔え沖縄なかいや食むる塩、あれー無えらん。全て味付けや、全部潮水ぬ水汲りつちすたんり。

時代は何年前になるのか分からぬが、昔、太公望りぬ人ぬめんせーたん。昔え沖縄なかいや食むる塩、あれー無えらん。全て味付けや、全部潮水ぬ水汲りつちすたんり。

あんし或る時、太公望がうぬ潮水汲りつ来なかい、棚に
棚んかい下げる。うぬ棚んかい下げるたる潮水から自
然とう此ぬ水ぬ垂でい、うぬ垂たぬ水ぬ大変あぬ固ま
てい。そしたら固まていさぐとう、これ不思議な物り
ち。うぬ人お大変ありさぐとう。

或る日、うぬ固まとーる、うりまり塩りちえー分か
らん。うり持つち行じ、確かに此れー潮水から取とー
る固まりやぐとう、御汁んかい入りーねー、大変味い
じーぬ筈り言やーい。王ぬにーんかい持つち行じ、う
りし味作らちやぐとう、王や大変不思議りち。「此れー
ちやーし作たる事が」り言ちやぐとう。あんさーい、
うぬ供ぬ方ぬ、「此れー太公望りしが、此ぬふーじー固
まり持つち來、今日や、うぬ固まりし御汁作たん」り
言ちやぐとう、うれー大変不思議。「とー此りんかいや、
大変世の中の功労者やぐとう、功呂りよー」りち。う
ぬ人お大変功労者りやーなかい、王やうぬ人んかい対
して、沢山ぬ功労呂みそーちゃんり。

そしてさぐとう、後々うぬ人ぬけー「ちやぐとう、
王や此りがとにかく供養とうし、是非此れー塩ぬ神ぬ、
うぬ人んかい対する供養り言やーなかい。丁度うぬ日

そしてある時に、太公望が潮水を汲んで来て、棚に
下げておいたら、潮水から自然に水が垂れて、その垂
れた水が固まつた。固まつたら、これは不思議なこと
だと。その人は大変不思議がつた。

その固まつたのが塩だとは知らなかつた。これは確
かに潮から取れた固まりだから、御汁に入れたら大変
良い味になるはずだと思って、ある日王の元へ持つて
行つた。そして、それで味付けをしてもらつたら、王
は大変不思議がつた。「これはどのように作つたのか」
と言つたそうだ。そしたらお供の人が、「これは太公望
という人が、このような固まりを持って来て、今日は
その固まりを入れて汁を作りました」と言つたら、も
う大変不思議だと。「じゃあ、この人は大変な世の中の
功労者だから、功を与えなさいよ」と。この人は大変
な功労者だということで、王はこの人に對してたくさ
んの功労を与えたそうだ。

そして、後々になつてその人が亡くなつたので、王
はその供養として、是非この塩の神様として供養する
ためにね。ちょうど王が功労を受けた日が五月四日だつ

や、王おうがうりんかい授さずぎたる日ひが五月ごつ四よ日にちやたんり、
旧きさうぬ。あんしさぐとう、うれーうぬ人ひとぬ供養くようとうし、
何い時ときまでいん祭まつりあぎれーやーりー思おもやーい、王おうから
が達示たっしぬ有あてい、丁度とうど五月ごつ四よ日にち、旧きさう五月ごつ四よ日にちあハー
リーする事ことなつい。そして今日こんじつまで伝つたえとーんりぬ話はなし
やしが。これは実じつか本当ほんとうか、これは伝え話はなしるやぐとう。

たつて、旧曆の。それで、その人の供養をいつまでも
讀えようと思つて、王から達示があつて、旧曆の五月
四日にハーリーをすることになつた。そして今日まで
伝えられているという話なのだが、これは実のことか、
本当なのか、伝え話だからね。

採集51・12・19 読谷村民話調査団第九班（運天悦子・棚原直子・金城宏子）

注①ハーリー 旧曆五月四日に行われる競漕行事。ハーリーは「爬竜」の中國音で竜のこと。競争に用いる船は舳に竜頭、艤に竜尾の形

りものを飾つてある。

②太公望 周代の齐の始祖。本姓は姜、字は子牙。氏は呂、名は尚。初め渭水の浜に釣糸を垂れて世を避けていたが、文王に用いられ、
武王を助けて殷を討ち、天下を定めた。

60 赤犬子あかいぬこ 暗川發見くらがははつけん

著者 糸 村 ツ ル（明治三十三年六月二十五日生）

翻字・対訳 村 山 友 江

あぬ水みじえ無みじえらんたんりさ。あぬ水みじぬ無みじえんどーさ
くどうや、困くまとーたんりー。

あのう水がなかつたつてさ。水がないよということ
になつてね、もう困つていたつて。

あんし赤犬ぬ居たんりるむんぬよ。うりが暗川んじ
浴みて一行きさぐどうや、うに一から水ぬ有んどーし、
水え探めーたんりぬ話る聞ちゃんどー。

それで赤犬がいたというんだがね。その犬が暗川で
浴びに行つたりしてたので、それから水があるとい
うことや、水を搜し当てたという話を聞いたよ。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第八班 〈長嶺洋子・田場米子・上原孝子〉

注①赤犬子 読谷村字楚辺出身と言われるが、生没年未詳。楚辺部落では毎年旧暦九月二十日にアカヌク祭りを催し、五穀を中国よりもたらした恩人としてあがめている。また、おもう歌唱者としても有名である。古典音楽の世界では三線歌謡を始めた人として信じられている。

②暗 川 楚辺部落にあり、鍾乳洞を流れる地下源水で、戦前は飲料水として利用されていた。洞窟が暗いので、クラガ（暗川）の名前がついている。現在は米軍基地になつていてる。

61 ウートートウ由来

話者 砂辺 光（大正元年八月五日生）

翻字・対訳 知花孝子

あのね、沖縄ん人お初めー何ん分からんさーね。大人ん童ん、礼儀ん知らん、怖さん知らん。

あのね、沖縄の人は最初は何も分からないさあね。
大人も子供も、礼儀も知らない。怖さも知らない。
あんさぐとう、なーうぬ唐ん人ぬちやーさらーまし
がやー、うつたー物知らすがやーりち。唐から石ぐわー

あのね、沖縄の人は最初は何も分からないさあね。
大人も子供も、礼儀も知らない。怖さも知らない。
それでもう唐の人達がどうすればよいかと、この人達にどのようにして物を分かつてもらおうかと、考え

持つち來に、此処あ神様どーりち。あんきーにてー、
此り踏みたい、取つてい行じやい、又此処んかい生とー
ぬ木草ん引つ切んなよー、引つ切ねー、直ぐうぬ神様
んかい病まさりーんどーりやーによ。

うりさぐどう、或るなー腕白ぬ、うぬ木ぐわー引つ
切つちえーぬふーじてー、唐ん人ぬ植てーぬ木ぐわー。
指ぐわー切つちやぐどう、「うり、いやーやうま触いぐ
とうや、うま触たらやー、あんすぐとうる神様ぬる病
まさつたんどーりち。あんきーなかい大事やさやー、
本当に神様りちん有さやーりち、うにーから礼儀とう
か何とうかぬうりん分かたんりんどーりち、お婆さのー
はなし
話んしみせーたしが。

ウートートウりせー、あんきーにうぬ石ぐわー三
置ちきてーせーや、あんすぐとううまー拝しごーりち、
うぬ御香さーに拝りうりつし。うぬウートートウりし
んや、あぬ丁度、今ぬ何派、何派りち有せーや、あれー
なー聞かん坊やー、唐ぬ言せー聞かんぐとーしが。
私ねー唐ぬあぬ言し聞ち、唐ぬ方やいびんどーりち、
ウートートウりちやんりぬ話。

たようだね。唐から石を三個持つて来て、ここは神様
だと。そうしてそれを踏んだり、取つて行つたり、ま
たそこに生えている木や草を取つたりしてはいけない
よ、取つたりしたら神様の祟りがあるよと教えた。

そななんだけど、ある腕白が唐の人達が植えた木を
取つたようだね。その時に指を切つたので、「そこを触
るからだよ、そこを触つたから神様が祟つたんだよ」
と言われた。そういうことからこれは大変だね、本当に
神様というのもいるんだね、大変だねと。その時から
礼儀とか色々なことが分かつたと、お婆さんは話を
なさつていたよ。

ウートートウというのは、その石を三個置いてある
さあね、そこを拝むものだということで、線香も供え
て拝んだ。そのウートートウというのは今のちょうど
党派みたいなもので、きかん坊は唐の言う事は聞かな
いらしいが、私は唐の言うことを聞いて、唐を信じて
いますよということで、ウートートウをするという話
だつて。

マンサン祝い由来

話者 宮城ヤス(明治四十四年四月二十五日生)

翻字・対訳 村山友江

じゃあ、私が昔の満産祝いのお話をいたしましたよ。昔は凡そ明治時代までの人達の頃は赤子が生まれたら、一週間は夜伽というのがあつたわけさあ。そうして夜伽となると、一日目、三日目、四日ジールと特に四日目は親子とも健康であるということで、お茶請けも準備して盛大に祝つていたが。

じゃあ、私より昔のマンサンユーエーのお話をうんぬきやびら。昔なーボージャーぬ産しーねー、大概明治時代まりぬ人達なーボージャー産しぇーからー、一週間までー、ユートウジリち有たるばーて。あんしうぬユートウジリねー、一日目必じ、又三日目、四日ジール一りち、四日目は親子のとつても健康で有るりやーにかい、なー茶請きぐわーんすがてい、じこーうりやたしが。

あんさー或る所、昔なーじこー自分ぬ、産しむぬ子ん産しんそーらん所んかい。じこーが可愛さし、なー四年間飼てーる猫ぬ、雄猫が居てーる筈やいびーさ。あんしうぬ猫ぬやつぱしあぬ主、自分やなー子ん産さんる有たしが、長れーが間ありしちなし、うまぬボージャー産ちさくとう。今度お、うぬ猫やや、あんせーならんむんりーなかいうまから捨ててい、かーま山ん中んかい捨ていでいる有しが。

それである所に、昔、子供に恵まれない家庭があつたつて。四、五年の間、大変可愛がつていい雄猫がいたらしい。そのようにして、主は子供に恵まれずに猫を長いこと養つていたのだが、そこに子供が生まれたらしい。それで今度は、猫をそのまま置くわけにはいけないということで、ずっと遠くの山の中に捨てられてしまつた。

今度おうぬ猫が化きてい來にかい、うまぬボージャー
スージー、六日ぬ夜に化きていちゃーなかい、あんさー
に人んかいなつい。あんさーにマンサン披露ぎてい三
線、歌、三線そーに。うぬ尻尾や、筵ぬ間あ開きーる
物お有らんり言ちよーるぶーじやいびーんてー、ふー。
うまんかい尻尾や隠さーなかい、やつぱし人間んかい
化きてい。あんさーなー、同ぬぐどう歌、三線し、あ
んし帰て 行じ。

今度おなー、ある人ぬうりが出じてい行ちゅし迫つい、
見ちやぐとう。やつぱしうまぬ主人ぬ捨ていてーぬ、
うぬ山んかい登てい行じ。見ちやぐとうなー、うぬ猫が
狸みたような、じこーじやひんな猫あなやーに。あん
さぐとう、やつぱし昔から此ぬ猫りせーなー、主ぬ命
取い物。又化きてい、狸んかい化きたい、色んな物、
人間んかい化きたいすぐとう、長れー飼らいぬ物おあ
らん。取い替え取い替え猫でも動物やていん、犬やてい
ん何やていん、主とう主人とうぬうり、ゆく止みやー
い。

あんさーなかい昔え此ぬマンサンりせー歌、三線
りせー、じこーがありやぐとう。なー友ぬ達あ集まつて、

すると、今度は猫が、その家の六日目の出産祝いに、
人間に化けてやつて来た。そうして満産祝いの座で歌、
三線を披露している時に、猫の尻尾は筵の間に隠して
座つていたらしい。だから、そういうことから筵の間
は開けるものではないと言うことらしいですよ。人間
に化けて、そこに尻尾は隠して座つていたんでしょう
ね。それから、同じように歌、三線をして帰つて行つ
たそうだ。

その化け猫が出て行くのを見る人が見て、追つて行
くと、するとやつぱりその主人が、猫を捨てた山に
登つて行つたつて。見るともう、その猫が狸のような
大きな猫になつていたつて。だから、やつぱり昔から、
この猫というのは、主の命を取るという。また狸に化
けたり、いろんな物、人間に化けたりするから、長い
こと養うものではない。取り替え、取り替え、猫でも
動物でも、犬でも何でも、主がそういうふうに肝に命
じてやるべきだつて。

そういうわけで昔のこの満産祝いで歌う歌、三線と
いうのは大変大切なことだよ。もう友達が集まつて、

一人違る一ユートウジし。一週間ね、な一生まりていひちゅいちがー
七日目ねー、名字ぐわーん付きて、マンサンりち、
人兄弟え集まつてする事などーるぐとーやいびん。

一人ずつ交代で夜伽をしてあげた。一週間経つたら、もう生まれて七日目には名前も付けて、満産ということとで、親戚兄弟集まつて祝うようになつたということです。

やぐとう生物やたんてーが、此ぬ主人が可愛がつて自分が食べぬ食むる物ん食まさんぐとう、腹ていーちゃんかい込みていしーねー、うんぐとうし化きていぢやい何さいすぐどう。なー生物やていん取い替え取い替えい長れーの一飼らんぐとう、ありすしる話い聞ちよーやびん。

あんさー昔から、此ぬ昔え、今あなー畳りちん有しが。昔え畠りちん無えらんニクブクとうか、それから筵どうか敷物ぐわーんうんぐとうし自分くる作くているすてーぐどう。うぬ筵ぬヒージャ、ヒージャー開きて一敷ちゆる物お有らんりち言しや、うまんかい尻尾隠ちやい何さい、悪者ぬ尻尾隠ちやい何さいすんりし。
又此ぬ、童ぬ達あ枕元んかいやていん、此ぬサン、サンぐわー縫てい置ちゆんどうか何どうか、刃物置ちゆんどうかすせー、うんな化物ぬじこー恐るさすんりちるボージャーが生まりーねー、昔えサンぐわー結てい置ちやい、刃物ぐわー置ちやいすぬ事などーいびん。

今はもう畠というのがあるが、昔は畠というのもなくニクブクとか筵とかの敷物も、全て自分達で作つていた。そうして昔からその筵の隙間は開けて敷くものではないと言うことは、そこに悪者が尻尾を隠したりするからということから、そういうふうに言われている。

また、子供達の枕元に、サンを結んで置くとか、刃物を置くとかするのは、そんな化物が大変怖がるからということで、赤子が生まれたら、昔はサンを結つて置いたり、刃物を置いたりしたそうですよ。

注①マンサンユーニー（満産祝い） 子供が生まれて七日目の夜、近親者が集まつてする祝い。

②ユートウジ（夜伽） 出産、看護のために家族、近親の者が夜通し世話、相手をすること。

③ジール（地炉） 出産後一週間昼夜の別なく火をたき、産婦に暖をとらせた炉。

④ニクブク 薬縄で編んだむしろ。農家で用いる。

⑤サン ススキの葉を結んで作ったもので、魔除けとして用いられる。

63 お茶二杯

話者 比嘉ウシ（明治四十一年十月二十七日生）

翻字・対訳 宮城昭美

「必じ一回の一飲み」何んぬんでい言みしえーしえー、
何うれー、道理え何からどう出じとーが。あぬ難ん外
ちすぐとー、なー人ぬ飲みんでいしえー、飲みよーん
ちよーるばー、やるばーてー。何、年寄ぬ達あ、あん
言ぎーしえー。「一ち茶あ飲むる物おあらん」、又かん
し、「一回飲むる間なかいやー、ちやーる難ん外する場合
ぬ有ぐとうんちやる意味合から出じとーるばーてー。」

「お茶は必ず二回は飲みなさい」などと言われるの
は、これは何の道理から出でているのか。それは難を逃
れることができるから、人が飲めと勧めるものは飲み
なさいよというわけさ。ほら年寄りの人たちは、そう
言うでしょう。「一杯のお茶は飲むものではない」と。
それに、このように、一回飲む間には、どんな災難か
らも逃れることができるからという、意味合いから出

て いる わけ さあ。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第十一班 〔宮里光雄・桃原・知花春美〕

64 久良波首里殿内ち達①

話者 仲榮眞三 良（明治二十七年七月二十日生）

翻字・対訳 知花孝子

山田ヌン殿内どうんぢやなりち、えー昔ふきえ有あたんりしが。何百年
がないら一分からんしが。今度こんどお、國頭くにがみから那霸なはんか
いぬ往信おうしん歩あつちるやで一いぐとう。此こぬ那霸なはから島尻しまじり
から國頭くにがみんかい用事ゆうじさーん、又國頭またくにがみから那霸なは、島尻しまじり
かい中頭なかがみとうかぬ用事ゆうじさーん全部歩かるつちやで一いぐとう。

山田ヌン殿内どうんぢやなといつて、昔むかしはあつたそうだがそれは
何百年の話になるのか分からないが。昔むかしは、國頭くにがみから
那霸なはへの往来も徒步徒歩だつた。那霸なはや島尻しまじりから國頭くにがみの用
事ゆうじも、また國頭くにがみから那霸なはや島尻しまじりへの用事ゆうじも全て徒步徒歩だつ
た。

今度こんどお、夕暮ゆつきてい歩あつからんりる所ところから、な一道みち
小ちてんぐわーる有あぐとう、昔むかしえ。あんさいなー泊とまうて行ゆこう
行きりち。丁度ちょうど、今言なまねー沖繩おきな口くちし旅館りょかんりしとー同ゆぬ
物ものやしが。うまんかいなー夜よないねー泊とまういたんりし
が、えー此こぬ那霸なはんかい用事ゆうじさーや、るく遅おそかないねー、
フエーレーうんうんどうか何などうか。

山田やまだヌン殿内どうんぢやなりる所ところかい泊とまういたんりしが。今度こんどお、

夜よも更よけて歩ゆけなくなつてしまつたらしい。もう昔むかし
は道みちも小さかつたからね。それでもう泊とまうて行ゆこう
といふことになつたそうだ。ちょうど今で言いう旅館りょかんと
同じようなものでね。そこに夜よになつたら泊とまうてい
たそうだ。那霸なはに用事ゆうじで行く途中で遅おそくなつたら、多
幸山こうさんに追い剥はくぎが出でるとか何なとかといふ話はなしがあつた。

それで山田ヌン殿内どうんぢやなという所ところに泊とまうつたつて。それ

うれー言ねー、夜入る人お居しが出じーる人お居らん
ぐどう。此れー不思議な物りち、調びーる事んかいな
てい。歌ん有てーぐどう。童が子守歌ん

山田ヌン殿内入る人や居しが

出じーる人お全部居らん

りち。

辻りしとう同ぬ物がやらー。女ん子がやらーりち、
丁度なー、昔ん何がうれー今ん同ぬ物るやぐどう、女。
あれー、うぬ泊まやーが入ねー、男ぬ客が入ねー、女
ん子とう寝んしてい、錢取いんりるばーやしが。だー
うれー、錢取やーにうぬまま出じゃち遣らしーねー、
溺らみらりぬ事からるやたらー。うれー女ん子とう寝
んしやーに、殺ち。うぬ旅人お殺ち、うりんかい家ぬ
後だーすー所んかい穴あちやつひん掘てい、うまんか
いたつ込むたんりがらー。

あんし調びーる事んかい政府からなたくとう。知り
やーに、告発さる筈やしが。

やくとう、又後おりやるばー、女ん子ぬ、着物、
女ぬ着物、男んかい被してい、男ぬ着物お女んかい被
したくとう。うれー、自分ぬん女ん子やるりち、うぬ

と。

ちようど昔の辻のようなものだつたでしょうね。昔
も今と同じようなもので、女がいてね。男の泊まり客
が来たら、娘と寝かせてお金を取りつていたらしい。お
金を取つてそのまま行かせたら、捕らえられてしまう
さあ。だから、娘と寝かせてお金を取つた後は、旅人
を殺して、家の後ろに穴を掘つて埋めていたという話
だつた。

それで政府から調べることになつたつて。告発があつ
たと思うが。

また、しまいには娘の着物を男に着せていたそうだ。
だから娘の着物を被つているのは自分の娘だからと助
けて、(反対側にいる)自分の娘を刺し殺したといふこ

は言わば、夜になつて入つて行く人はいるが出て行く
人はいなかつたそうだ。それで、不思議なことだと、
調べることになつた。歌にもあつたよ、子守歌にも
山田ヌン殿内入る人はいるが

出て行く人はいない

女ぬ着物被と一せー自分ぬ女ん子やるりち、うれー助
きやーに、自分ぬ女ん子あ刺し殺ちやんりる事やんばー^ト
てー。

とさあ。

あんさーに直ぐうにーから、な一直てーるばーてー。

だー、着物お、此ぬ男ぬ物お、男ぬ物お、昔んれーや
れーなー、着ちよーる着物ぐわーる被じゆぐとう、着ち
物お無えらん。なー金持人ぬる、侍えぬる豊やぐとう。
百姓から全部搾ていくとう。

今度お男ぬ着物お、あぬ女ん子んかい被してい。又、
女ぬ着物ぐわーや旅人、泊まやーんかい被したぐとう、
ばつペーやーに刺し殺ちやんり。自分ぬ女ん子あ刺し
殺ち。うんにーからる溺らみらつたさ。うりが申しう
じやーに、うぬ泊まとーる男ぬ申し出じやーに、「かん
かんやんどー」。うにーから判断さーに、あれーなー旅
館ん、旅館でーなー、今ぬ旅宿。うにーから止みらさつ
てーんばー。

それからもう、そういうこともなくなつたそうだよ。
昔は着物もなくて、男は着ている着物を被つたんだか
らね。百姓からお金搾取している金持ちや侍が豊か
だつたからね。

今度は男の着物は女に被せて、また女の着物は旅人
に着せてあるものだから、間違えて自分の娘を刺し殺
したつて。それで捕まえられてしまつた。その男がね、
泊まつた男が申し出て、「こうこうでした」と訴えた。
そうして旅館も止めさせられたわけさあ。

② 山田ヌン殿内 これは久良波首里殿内の語り違いである。旧久良波部落跡で、現マリップハウスの一角にその屋敷跡が遺っている。山田ヌン殿内は現在でもあり、山田ノロの出た家の屋号で、山田ではこの話が間違つて伝えられているのを至極迷惑千万だとしている。

③ フエーレー 追い剥ぎのこと。

④ 辻 一六七三年、羽地朝秀によつて辻、仲島に私娼を集めて遊郭がつくられる。一九〇八年に仲島と渡地が辻に合併。以後、辻は唯一の遊郭となつたが、一九四四年の十・十空襲で焼失、二七〇年の歴史を閉じた。

65 牛どろぼう

話者 新垣賀眞（明治三十五年十二月七日生）

翻字・対訳 玉城和美

牛盜人ぬ話や聞ちやしが、牛えよー、うぬフエーレ
注 1ん達が、山んじ牛え盗り行じ殺さーにや。殺さーに
鍋え無えんぐとう、牛ぬ皮あ剝じやーによー、木い立
ていやーに、うりんかい牛ぬ皮ぬ四隅んかい、木んか
いうぬ皮あ張つぱてい、水入つて煮食むたんり。

牛泥棒の話は聞いたよ。牛をね、追い剥ぎ達が、山で牛を盗んで殺していた。殺したもののが鍋はなかつたので、牛の皮を剥いで四隅に木を立てて引っ張り、それに入れて煮て食べていたつて。

あんしよ、うぬ部落から追つて來せーよ、なーちゅふあーら牛ぬ肉や殺ち。埋みーんりち、側うて穴掘いたんり。あんきーに、うぬ盜人見ちやーなかい、此れー埋みーぎざーやるむんりやーなかい、「便所入ちくー」

それから、部落から牛の行方を追つて來た人に、牛の肉をたくさん食べさせてから、その人を殺して埋めるつもりで、側では穴を掘つていたそうだ。それで、これは泥棒たちに埋められるかもしれないと思い、「便

りちよ、側んかい飛んじやーに逃んぎたんり。だー、
夜るやぐとう、山なー前なち道え分からんせー。
あんさーにうぬ逃んぎたせー、川頼いねー必じ海か
い行ちゅぐとうりちよ。川なーりー逃んぎとーたんり
る話や聞ちゃん。

昔ぬ牛盜人りち、牛え盜り行じやーに殺ち食むたん
り。捕みらつたるばーやあらんどー。うれーなー一人
や捕みーんりちよ、いなからやるむんりち行じやーな
かい、捕みらつて いる一緒しみらつとーぐとうや。
此れー戻てい遣らしーねー破りーぐとうりやーな
い、殺ち埋みーんりち、穴掘いたんりよ。見らつとー
ぐとうてー、見らつとーぐとうなー、うり殺ち埋みら
んねー破りーんりやーに。かんし逃んぎーねーなー山あ
道え分からんせーや、迷てい。やしが川ぐわーんかい
下りーるんせー、必じ海岸んかい行ちゅぐとうりち。

所に行つて来る」と言つて、側から逃げて行つた。も
う夜なので、先も見えず山道は分からぬさあ。
そうして逃げた人は、川を頼つて行くと必ず海に行
けるはずだと思つてね。川辺に沿つて逃げて来たとい
う話を聞いたよ。

昔は牛盜人というが、牛を盗んで来ては殺して食べ
ていたつて。捕まえられたわけではないよ。それは、
牛盜人を捕まえるために行つたのだが、逆に捕まえら
れて一緒に肉を食べさせられているのだから。

こいつを逃がしたら、牛を盗んだのがばれると思つ
て。殺して埋めようと穴を掘つていたつてよ。見られ
ているから、見られてしまつたから、殺して埋めない
とばれるといつて。だからこの人は逃げたのだが山道
は分からぬさあ、迷つて。だけど川に下りて行つた
ら、必ず海岸に行き着くはずだと。

吉屋チルー「身売り十御茶屋御殿」

話者 比嘉 静（大正四年十月十七日生）

翻字・対訳 宮城昭美

あの、吉屋チルーの話ぐわーをします。

あのー吉屋チルーや読谷喜名んかい生りていさーとう、
なー大変、此処んなーやつぱし、困窮ぬ家庭なてい。
女ぬ親ぬ、大変ちゅー病氣かかていそーびーしがなー、
薬、なー買てい飲まする錢ん無えらん。

うぬ男ぬ親あ、大変哀りし、「薬飲まさんあれー死に
るすい、ちゃーすがやーチルー」ちさくとう。うぬチ
ルーや、「とースーよー、あんしえーなー、錢ん無えん
るあい、女ぬ親ぬ命助きーぬ為ねー、私ねーなー、花
ぬ島んかい行じうりすくとう、私ねーなージュリ賣い
し呉みそれー、スー」。あぬー女ぬ親んかい、「金ぬ
ありわる命ん助きらりーる」んでいやーに。

あのう、吉屋チルーの話をします。
あのう、吉屋チルーは読谷の喜名に生まれた。そこ
の家も貧しい家庭で、お母さんがたいへん重い病氣に
かかっているが、もう薬も買ってあげるお金もなかつ
た。

それでお父さんは大変心をいためて、「薬を飲まさ
ないと死んでしまうし、どうしようチルー」というと、
チルーは「ねえお父さん、それならばお金もないこと
だし、お母さんの命を助けるためには、私は花の島に
行つてもいいですから、私をジユリとして売つて下さ
いお父さん」と言つたようだ。お母さんに薬を買つて
あげるには、「お金があつてこそ命も助けることができ
るので」と言つた。

さくとうなー、スーん大変哀れやしが、「とーチルー、
なーいやーや、あんしえー、女ぬ親助きーる為ねー、
花ぬ島んかい行じ働ちとうらしえーやー」んでいち。

なー親子なー、那霸かいジユリ売いしーがんち行ちゅ
る道中に、比謝橋なー来くとう、なーうぬチルーや、
大変秀り者なでい歌上手やてーるふーじやいびーるむ
のー。比謝橋ぬ橋来くとう、歌ぐわーしえーるふーじ
やいびーるむのー。

恨む比謝橋や 誰が架きて (うちえさ)

私渡さとうむてい 架きていうちえさ

ちぬ、話ぐわーさぐとう。歌うたたぐとう、うぬスー
やなー驚るち、「とー、いやーや、あんし歌ぐわーん分
かいるむのー」でいち。

し、なー連てい行じ、那霸んかい、辻んかいジユリ
売いしえーる、やいびしが。うれーなー、大変歌上手
なでい、歌返し返し分かいる人ぬやれー、誰にん呼ば
りーてーるふーじやいびーしが。

なー或る仲里ぬウメーぐわーでいち、首里ぬ人んか
い呼ばつてい、大変二人や、うりそーてーるふーじー
やいびーしが。ジュリアンマーがなし、企らまーに、
うれー錢どうなー、ジュリんでいしえー、うりやくとう。
或るなー二ンブチャーンかい、あぬー呼ばつていさ
くとう。呼ばつてい、金取てい呼ばつていさくとう、

で那霸へジユリとして売られに行く途中、比謝橋に來
ると、そのチルーは大変頭が良くて歌が上手であつた
らしいんだが。あのう比謝橋の橋まで来ると、歌を詠
んだ。

恨めしい比謝橋は 誰が架けたのだろうか

私を渡そうとして架けてあるよ

と歌を詠んだので、お父さんはとても驚いて、「お前は
歌を詠むことができるんだな」と。

で、もう連れて行つて、那霸の辻にジユリとして売
られたらしいんですけど。チルーは大層歌を詠むのが上
手で、歌を詠んで、その歌を返せる客には、誰となく
呼ばれていたらしいんだが。

仲里のウメーぐわーという首里の人には呼ばれて、二
人はたいそいい仲になつていたらしいんだが。ジユ
リアンマーが、金儲けのために悪企みをしてしまつた。

ニンブチャーに客として呼ばれたのでチルーは、も
う自分は汚れてしまつてゐるのだから、ニンブチャー

うぬチルーや、あんしぇー、うれー自分や汚りていどう
無えんむんぬなー、ニンブチャーンかいまでいん。

だー、うぬチルーや、うりさくとう、なー仲里御殿
ぬウメーや、なーうりつし。なーうまぬ、イキーぬ、
うれーうりどうやるむんぬりち。なー、遺骨取つてい,
担みていなー、喜名かいなー、うりすんでいさい、道
中うとーてい。なーうぬ仲里御殿、御殿造くていそー
しが、うぬ「何んち付きたらーましがやー」んち、大変、
うりそーるばーに。死じから、遺骨なついからー、なー
歌、又作くてい。

あんしなー、喜名かい戻いる場に、仲里御殿ぬ、遺
骨なていから歌し、しえーるぶーじやいびーるむのー。
吉屋チルー、はつきれ一分からん。

チルーがそういうことになつたので、仲里御殿のも
うウメーは悲しがつた。その後、チルーは死んでしまつ
たのでしようね。チルーのお兄さんが遺骨を取りに行つ
て、担いで、喜名に帰ろうとする途中だつたらしい。
仲里御殿は建物を造つてあつたようで「御殿の名前を
どのように名づけたらしいのか」と大変悩んでいたら
しい。その時にチルーは死んで遺骨になつているのに
もかかわらず、歌を詠んだらしい。

チルーの遺骨を持つて帰る時に、仲里御殿の（名前
をつける歌を）、遺骨になつてから歌つていたらしいん
ですが。吉屋チルー、はつきりは分かりません。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第十一班（宮里光雄・桃原・知花春美）

注①御茶屋御殿 首里崎山町にあつた旧家の別邸、東苑のこと。一六七七年築造。

②吉屋チルー 恩納ナベと並ぶ女流歌人で、幼いとき遊廓に売られ、ある男と恋仲になるがそれも引き裂かれ、十八才で亡くなつたと
いう。生没・出生地等不明。

③喜名 読谷村の字名。村の北部に位置し、国道五十八号線沿いにある。王府時代には番所（喜名番所）がおかれ、北部と南部を結
ぶ中継地として栄えた。

にまでもお金で呼ばれてしまつたのだからと悲観して
しまつた。

④スー 平民でいうお父さんのこと。

⑤花の島 遊里のこと。

⑥ジュリ（尾類・女郎）遊女、娼妓のこと。歌も歌い、三線も弾くので、芸者も兼ねている。

⑦比謝橋 読谷村と嘉手納町との境をなしていはる比謝川にかけられた橋。当初は板橋で、一七一六年に石橋に改修され、その後一九五三年に車用道路拡張、改修に伴ない、現在の鉄橋に変わった。

⑧ウメーブー 若殿様。若様。ウメー（御前様。殿様）の

長男に対する敬称。

⑨ジュリアンマー ジュリの抱え親。抱え主にはすべて女で、

娼妓はこれと母子まがいの関係を結び、アンマー（お母さん）と呼ばれる。

⑩ニンブチャ一 念仏者。葬式に鉢を叩く者で一般に蔑視されていた。那霸垣花辺りではお経を読むこともあった。



御茶屋御殿跡

67 落ちている扇は拾うものではない

話者 比嘉ウシ（明治四十一年十月二十七日生）

翻字・対訳 村山友江

あぬ昔てー、丁度なー今ぬ村あつちみせーてーるばー
て。だー、うりんかい何りーたが、昔え。地頭代るや
りー、村役場あつちみせーたんりせー。うまからよー、
帰ていめんせーにあぬー、人ぬ酒うさがでいる寝んとー
みせーるりやーなかい、夜、夜中道んかい寝んとーみ
せーたんりぐどう。

あんさーうぬ人ぬ、うぬ酔い冷ますんりよ。なー酒
うさがでいる、多分あんそーぐとうりやーに、かんし
扇じ冷まちえーるふーじてー。扇じ冷まち、いつちん、
扇じ冷まちなー起きみそーらんなたぐとう。うぬ扇え
置ちゃーによ、あぬー、うぬ人かんし触てーぬふーじ
よ。触たぐとう青冷るーなやーに、直ぐ魂抜ぎみそー
やーに、うぬ人おうまんかい扇うち放さーにかい、なー
家かい行えーみせーるばーてーなー。道るやんりぐ
とう。

あのう昔ね、ちょうど今の村役場勤めだつたんでしょ
うね。それに何と言つていたのかな、地頭代だつたの
かな、村役場勤めだつたそうだよ。そこから帰つて来
る時に、ある人が酒を飲んで寝ていた。もう夜中に道
に寝ていたものだから、酔つて寝てるとばかり思つ
ていた。

そしてその人は、寝ている人の酔いを冷まそうと思つ
た。酒を飲んで寝ているとばかり思つているものだか
ら、扇で酔いを冷まそうとしたようだね。しかし、い
くら扇いでも一向に起きる様子がなかつた。それで扇
を置いて、その人を触つて見たら、もう冷たくなつて
いたので、びっくりして扇をそのまま置いたまま家に
逃げ帰つてしまつた。もう道中でのことだつたからね。

あんさぐどう、うぬ扇悟らりやーによ、名字ぬうり

すると扇から名前が分かつてね、扇に書いてあつた

んかい扇んかい名字ぬ立つちょーし、悟らりやーにかい。あぬーうぬ人お捕みらりやーにかい、うぬ地頭代え辞みらさつていよ。辞みらさつていそーたんりしが、又、人ぬ「誠お後ぬ宝」りしと一同ぬ物、殺ちえいぬ人ぬ側から出じとーたんりよ。

あんすぐどう、うにーねーうぬ人お褒美吳らりみそーやーに、だーなー扇じ冷まちなー、座ち、扇じ冷ますんりちるやぐどう、褒美吳らりみそーやーに。又、同ぬぐとうあつちみそーちよ、地頭代あつちみそーちゃんりぬ話。

あんすぐどう、うんななー名字から悟らりーぐどうや、うんなむんありすせーあらんりさりち。落ていとーる扇搜めーいせーあらんりぬ話ん、あん所ん有んり。あん首里辺でーあんやんりさりぬ話やるばーてー。うんなうれーなー、私達あお祖母さん達から聞ちょーるばー。

名前から分かつてしまつたらしい。そうしてその人は捕らえられて、地頭代も辞めさせられてしまつた。一旦は地頭代を辞めさせられたものの、その後に「誠は後の宝」というように、殺した人が見つかつたそうだよ。

その時にはもう、殺したのではなく、扇で扇いで酔いを冷まそうとしたということで、褒美をもらつた。また、今まで通りに地頭代の勤めにも戻つたという話。

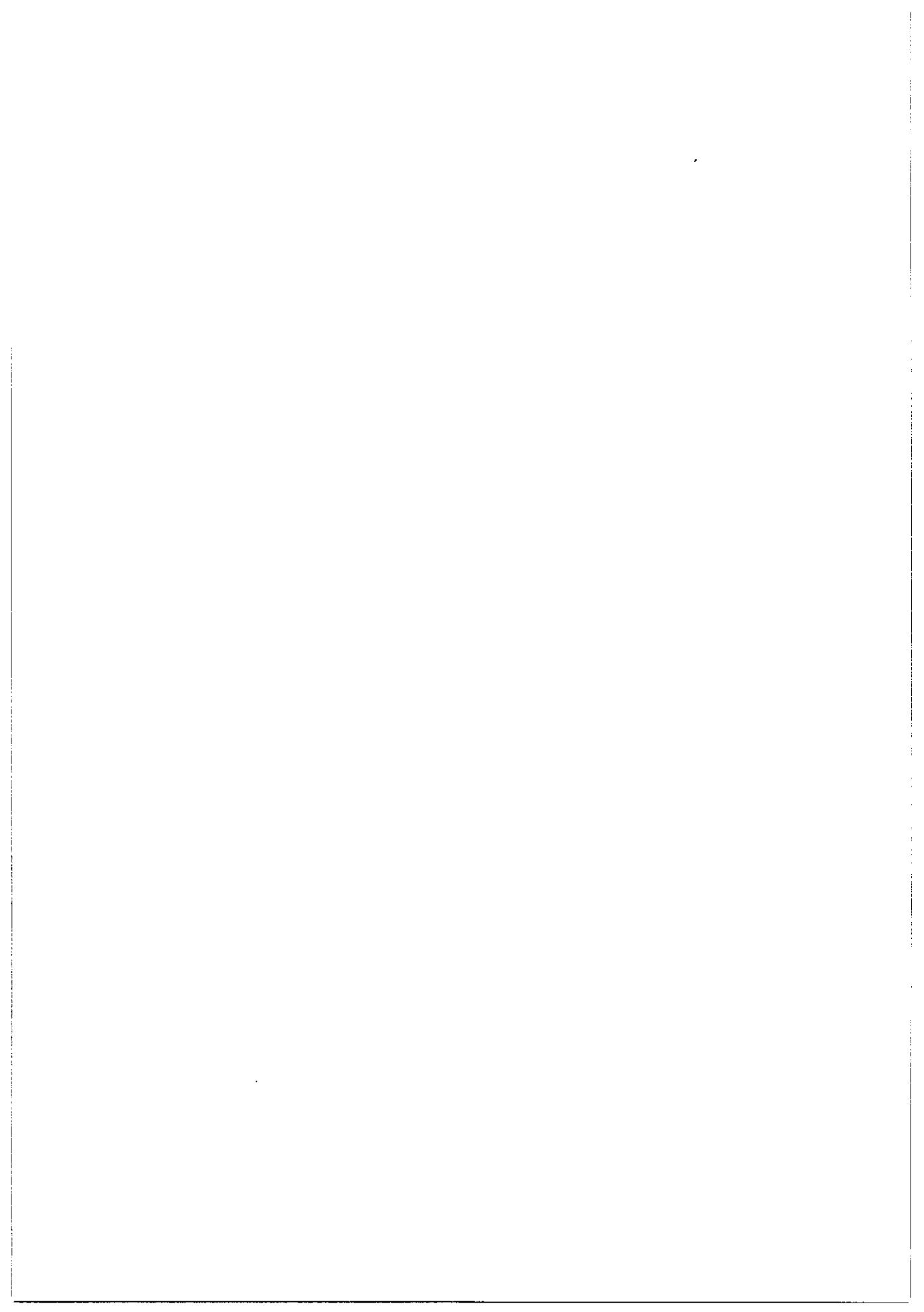
そういうことで、名前からも分かるから、そういうことをするものではない。落ちてゐる扇は拾うものではないといふ話。そういう教えがあるそだよ。首里方ではそだといふ話だよ。これは私のお祖母さん達から聞いたわけさあ。

注 地頭代 地方役人で間切行政の最高責任者。現在の村長に近い。

第二編

資

料



話者別一覧表

凡例

一、話者番号は話者の数を表す番号である。話者の配列は調査班の若い順に並べたが割り付上前後したものもある。

二、話者欄には、話者の氏名を示し、できるだけ写真を載せた。

三、住所欄については、話者のすべてが読谷村に住所を有するので、字名と番地を記入した。生年月日は、便宜上M(明治)、T(大正)、S(昭和)の略号を用いた。

四、話型番号に○を付したのは、翻字資料が掲載されていることを示す。

五、話型名欄のへはモチーフ名を表わす。話は調査年月日の古い順、テープ収録順に並べた。また、同話者による同じ話の再録分については調査の古い順に並記した。

六、語りの欄の○印は方言、×印は共通語、△印は方言共通語混じりの語りを表わす。

七、テープ欄には字ごとに編集したテープ番号を示した。

八、調査欄には調査年月日を示した。

		1	番号	話者			
2				石嶺カメ			
長濱芳							
M 36 · 9 20	大木一二九 M 33 · 5 15	生年月日	住 所				
7 6 5 4 3 2 1	⑤ ④ ③ 2 1	番号	話型				
あそび歌 多幸山フェーレーの歌 屁ひり嫁 繼子と二十日月 繼子の芋掘り 雀孝行 大歳の客〈御馳走〉 子育て幽靈〈打紙由来〉 キジムナー〈屁〉			話 型 名				
	10 16 37	番号	翻字				
	24 36 86		掲載頁				
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○		語り				
1 A 20 17	1 A 12	1 A 8	1 A 5	1 A 4	1 A 2	番号	テープ
S 51 12 · 19						S 51 12 · 19	年月日
ノ ノ ノ ノ ノ ノ							調査

	5		4		3
	比嘉 静		長浜 マツ		比嘉シゲ
T 4 • 10 • 17	大木一二四	M 40 • 6 • 15	伊良皆三五五	M 36 • 3 • 10	大木三三六
⑪ ⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①		⑥ ⑤ ④ ③ ② ①	8 7 6 5 ④ 3 2 1		
真玉橋の人柱 千年蛇 吉屋チルー「身売り十御茶屋御殿」 姥捨山「難題」 継子の雪払い 山原と団亀 屋良ムルチ「生贋」 城間ナーカ「盗人」 犬女房 阿麻和利 ウミナイ・ウミキ ウミナイ・ウミキ		浜千鳥由来 鬼餅由来 嫁と姑「猫と鼠」 大歳の客「御馳走十若返り」 兄弟の仲直り	大木徳武佐 アカマタ智入「浜下り」 鍋蓋アカマタ ハブは神 天人女房 姥捨山「難題」 大歳の晩の話 繼子と二十日月		継子の食事 吉屋チルー「身売り十御茶屋御殿」 姥捨山「難題」 天人女房 アカマタ智入「浜下り」 鍋蓋アカマタ ハブは神 天人女房 姥捨山「難題」 大歳の晩の話 繼子と二十日月
18 66 9 45 25 51 58 40 15 55 54		29 38 27 56 6 53		44	
41 165 20 109 62 130 149 94 33 144 139		70 87 66 147 9 136		108	
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ △ ○		○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
4 4 4 4 4 1 1 1 1 1 1 B B B B B B B B B B 7 6 5 4 1 15 13 11 6 5 2		1 1 1 1 1 1 B B B B B B 14 10 9 8 3 1		1 1 1 1 1 1 1 A A A A A A 19 16 15 14 13 10 7 3	
S 52 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 8		S 51 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 19		S 51 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 12	

	13	12	11		10		9
	仲榮真 三良	照屋ヨシ	高江洲ツル		玉木恵雄		富城ヤス
M 27 • 7 • 20	大木八三	M 42 • 6 • 15	M 33 • 1 • 21	大木一五一	M 40 • 7 • 8	大木一三四一	M 44 • 4 • 25
⑧ 7 6 ⑤ ④ ③ 2 ①	② 1	② 1		③ ② ①	⑨ ⑧ 7 ⑥ ⑤ 4 ③ ② ①		
鬼餅由来 野国總官の墓の移転の理由 アカマタ舞入(カマンタ舞化+浜下り+針糸) 久良波首里殿内 モーイ親方(下駄と草履+勉強+難題) 世間話(知人の話) 城間ナーカ(田の酒甕)	猿長者 昔の話(体験談)	雀孝行 雨蛙不孝		黄金の瓜種 難題舞 ハーリー由来	繼子と二十日月と麦掻き アカマタ舞入り(針糸+浜下り) 曼サン祝い由来 屁ひり嫁	星になつた姉妹 大歳の客(御馳走+若返り) ニースファ星の話	鬼餅由来 星になつた姉妹 大歳の客(御馳走+若返り)
41 47 64 12 8	34	5		52 21 59	26 23	50 62	39 7 33
99 116 160 27 17	78	7		131 50 151	64 59	129 156	92 12 77
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ △	○ ○		× × ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		
4 A 4 A 4 A 3 A 3 A 3 A 3 A A 3 2 1 5 4 3 2 1	2 B 2 B 2 B 2 B B 5 4 6 3	2 B 2 B 2 B 2 B B 1 7 2		5 B 5 A 5 A 5 A 5 A A 9 8 6 5 4 1 2 B 2 B B 2 7 1			
S 52 〃 5 8	S 51 〃 12 19	S 52 〃 5 8		S 52 S 51 〃 12 8 19		S 52 〃 5 8	S 51 〃 12 19

16		15		14	
砂辺 静		長嶺 ウシ		糸村 ツル	
M 36 • 2 • 18	大木 一五四	M 33 • 1 • 5	大木三〇六	M 33 • 6 • 25	大木一二七
8 7 6 ⑤ 4 ③ 2 ①	9 ⑧ 7 6 ④ ③ ② 1		4 3 2 ①	⑪ ⑩ 9	
久良波首里殿内 吉屋チルー(歌い骸骨) 宮古の人が犬の子と言われる理由 猿長者 繼親念佛 天人女房 雀孝行 アカマタ蟹入(小便呪文)	犬ひり嫁 嫁と姑(猫と風) 男女の膳を分かせ お茶二杯 鬼餅由来 真玉橋の人柱 猿長者 大木徳武佐 繼子と機織りと双葉草		雀孝行 ハジチ由来 普天間権現(刀は蛇) 赤犬子(暗川発見)	世間話 モーカイ親方(勉強十難題十下駄と草履)	
36 14 13	28 19 24 35		60 46 22		
83 31 30	68 45 61 82			153 113 57	
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ △ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○	○ ○ ○	
3 B 21 20 3 B 19 18 3 B 17 16 3 B 15 14	3 B 13 12 3 B 11 10 3 B 9 8 3 B 5 4 3 B 2		3 B 7 3 B 6 3 B 3 3 B 1	4 A 6 5 4 A 4 4 4 A 4	
S 51 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 12 19		S 51 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 12 19		S 51 〃 〃 〃 〃 12 19	

	17	
仲栄眞三郎		
T 4 • 4 • 17	大木八三	
② ①	10 ⑨	
親の声は神の声	雀幸行	子供の肝 屁ひり嫁
20 3	32	
47 4	75	
○ ○	○ ○	
5 5 A A 3 2	3 3 B B 23 22	
S 52 〃 5 〃 8	S 51 〃 12 〃 19	

話型一覽表

凡例
一、昔話の分類は『日本昔話集成』に従つて分類し、動物昔話・本格昔話・笑い話・伝説の順に並べた。

一、話型名は【日本昔話名集】（柳田国男監修）【日本昔話集成】に対応する話はなるべくその話型名に従つたが「アカマタ智入」「真玉橋の人柱」など地域に密着した題名についてはそれを用いた。その他の話型については、調査及び編集者が付した話型名を用いた。へゝはモチーフ名を示す。

三、上段は話型名、下段の数字は話数を表わす。

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
子供の肝	嫁と姑（猫と鼠）	兄弟の仲直り	嫁親念佛	継子の食事	継子と二十日月と麦搗き	継子と二十一日月	継子の雪払い	継子の芋堀り	継子と機織と双葉草	継子の麦搗き	継子と鳥と毒入り弁当	難題聾	親の声は神の声	真玉橋の人柱	夫婦の赤い糸	子育て幽霊（打紙由来）	犬女房	天人女房

◆大木の民話調査者名簿

沖縄国際大学口承芸術研究会

屋良ムルチ・生贊
ハーリー由来
赤犬子(暗川発見)
ウートートウ由来
1 1 1 1
渋川洋子・道天悦子・桃原直子・金城宏子・山城悦子・奥間圭子・
又吉利美子・宮里洋子・山之端孝子・阿波根初美・恩納加代美・喜
屋武猛・鈴木信一・遠藤庄治・石嶺まさみ・玉寄春美・宮里光雄・
長嶺洋子・田場米子・上原常子・天久節子・新里律子・上江洲康子・

上原孝子
読谷ゆうがおの会
神谷初子・上原ヨシ
読谷村立歴史民俗資料館
知花春美

久良波首里殿内
牛どろぼう
吉屋チル一（歌い筋骨）
吉屋チル一（身売り十御茶屋御殿）
落ちている扇は拾うものではない

その他

世間話

	3	2
總話數	歌	民 俗
115	2	3

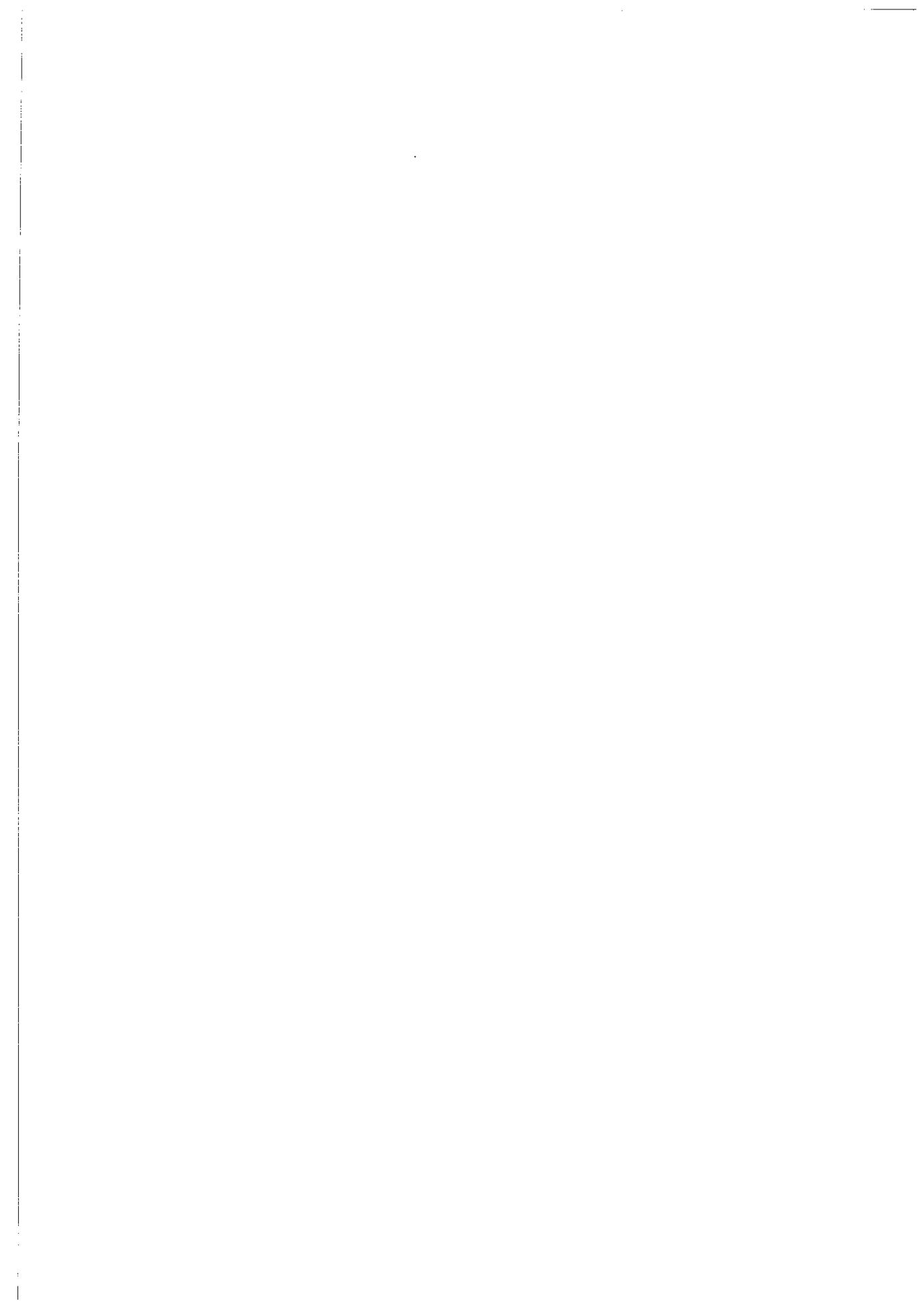
翻字・対訳者一覧表

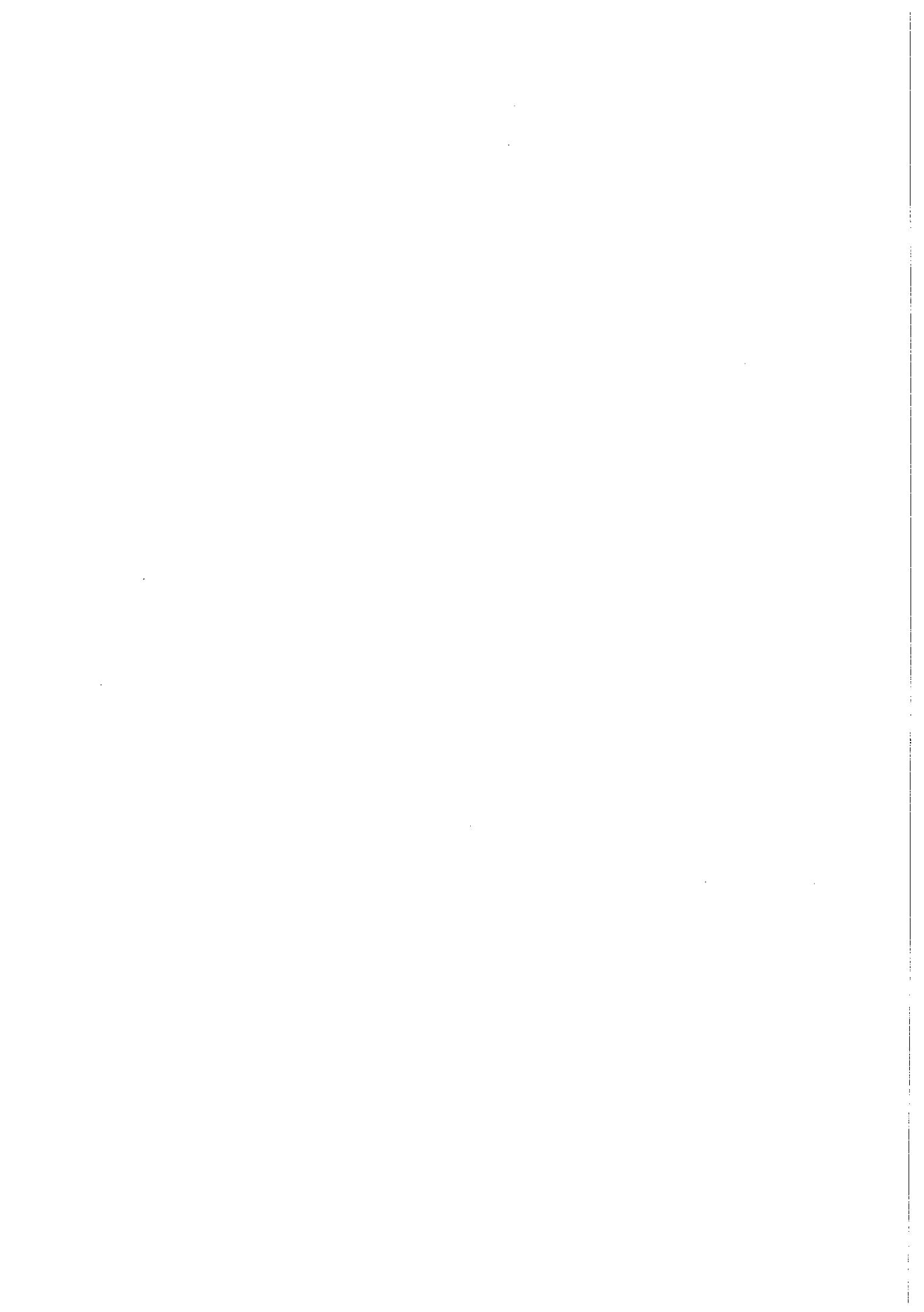
番号	翻字・対訳者名	翻字	話柄
1	安里和子	北谷町字桑江四	
2	上村照代	三重県津市阿漕町津興一五一	七八一二
3	玉城和美	長浜一七八〇一三	
4	玉城琳子	楚辺一三九五	
5	知花めぐみ	大木十三	
6	知花孝子	大木三七三二	
64 61 55 37	12	52 21 20 3	57 49 48 43 42
久良波首里殿内	アカマタ聟入(カマンタ聟) 化+浜下り+針糸 ウミナイ・ウミキ ウートートウ由来	大歳の客(御馳走) アカマタ聟入(カマンタ聟)	雀孝行 難題聟 黄金の瓜種
仲榮真 辺嘉嶺 三 良光	砂比石 木木 恵恵 雄雄	仲榮真 木木 三三 郎郎	砂砂砂新砂 辺辺辺垣辺 賀賀光光光真光
160 154 144 86 27	131 50 47 4	148 127 122 107 105	163 92 78 12 7
161	6 1	64 59	接続頁

星になつた姉妹																		
猿長者																		
大歳の客（御馳走+若返り）																		
城間ナーカ（盜人）																		
城間ナーカ（田の酒翌）																		
姥捨山（難題）																		
モーイ親方（下駄と草履+勉強+難題）																		
扇は拾うものではない	67	62	60	59	58	56	54	53	51	50	47	44	41	40	38	36	35	33
扇は拾うものではない																		
屋良ムルチ（生贊）																		
浜千鳥由来																		
赤犬子（暗川発見）																		
マンサン祝い由来																		
ウ	比	宮	糸	玉	比	長	比	長	比	宮	仲	榮	比	長	砂	長	宮	
シ	嘉	城	村	木	嘉	浜	嘉	浜	嘉	城	榮	真	嘉	浜	辺	嶺	城	
169	156	153	151	149	147	139	136	130	129	116	108	99	94	87	83	82	77	

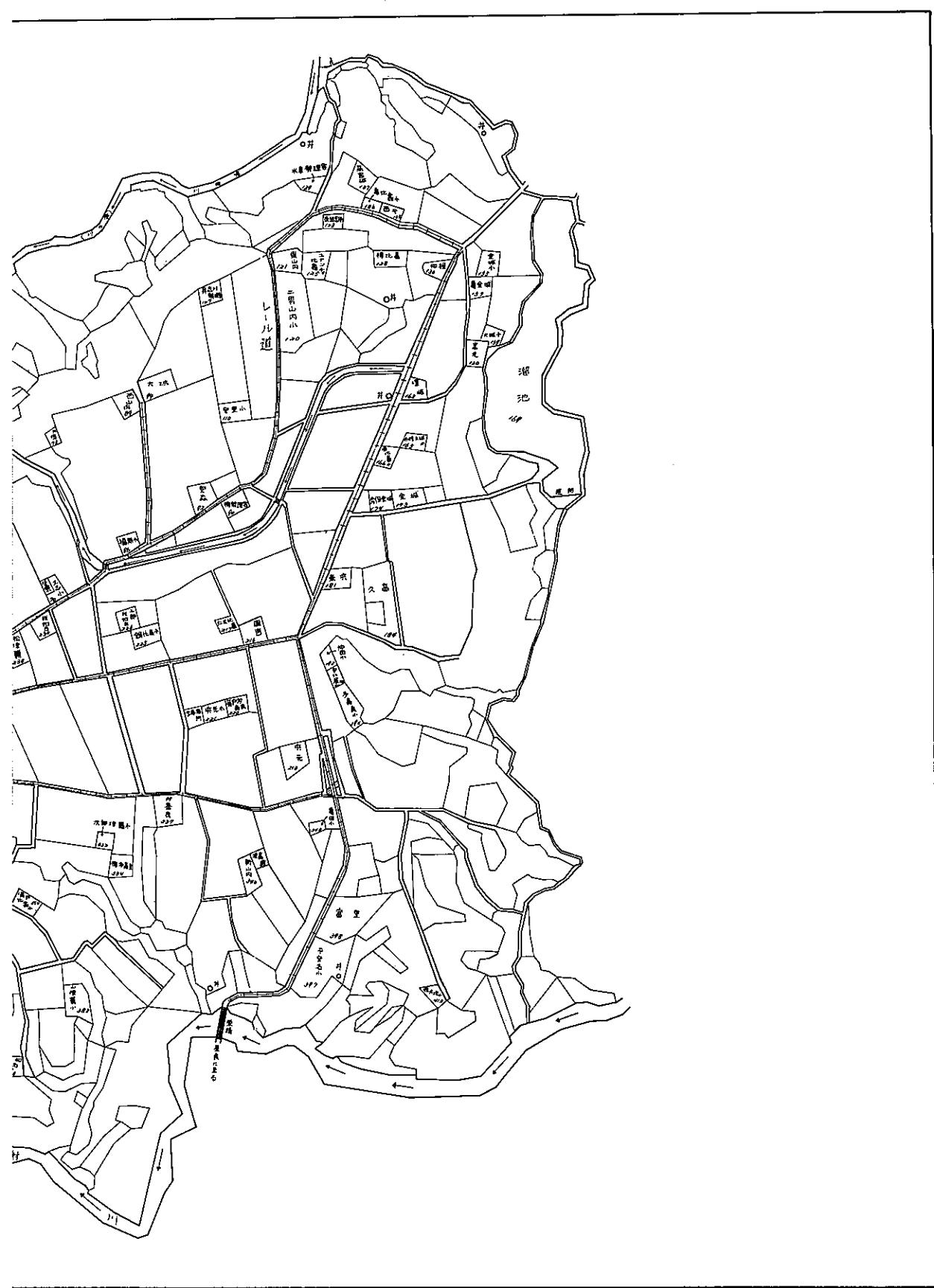


1994.11.23 民話の旅（多幸山於）

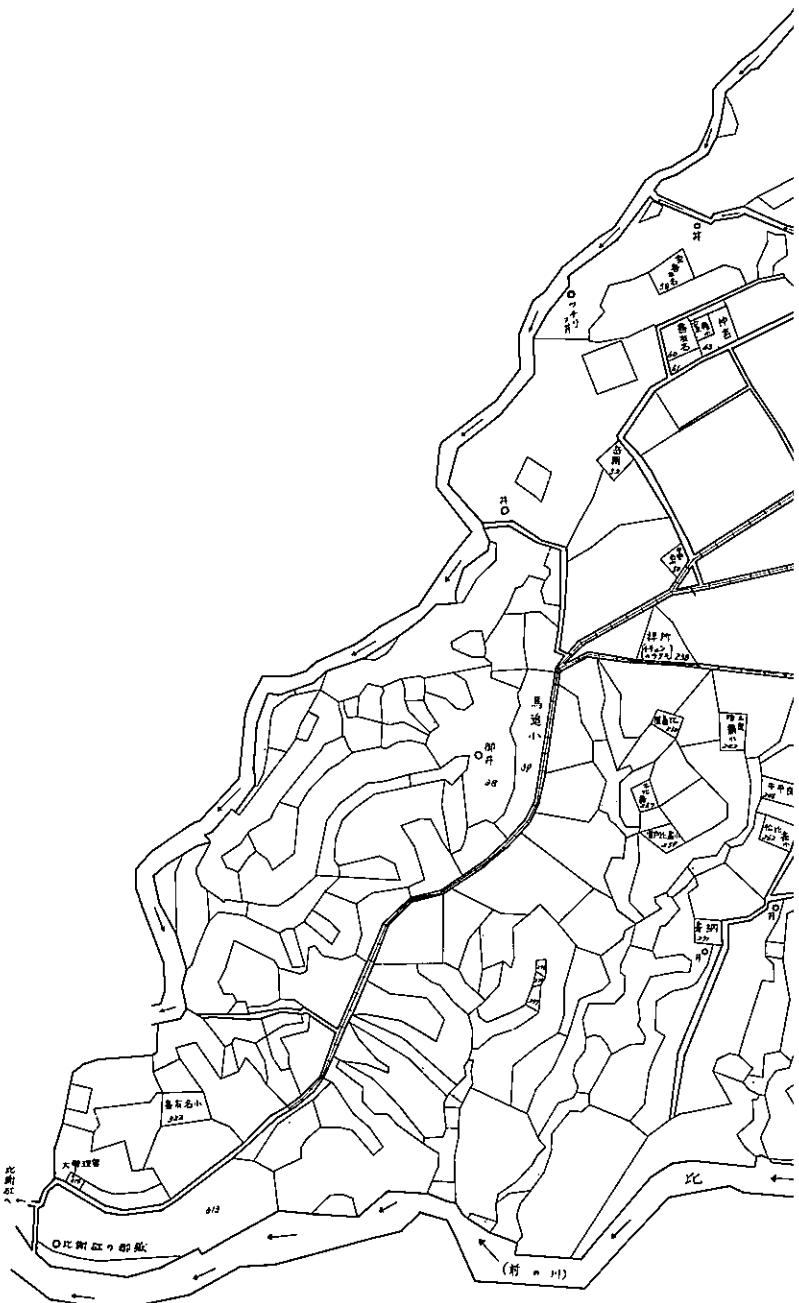


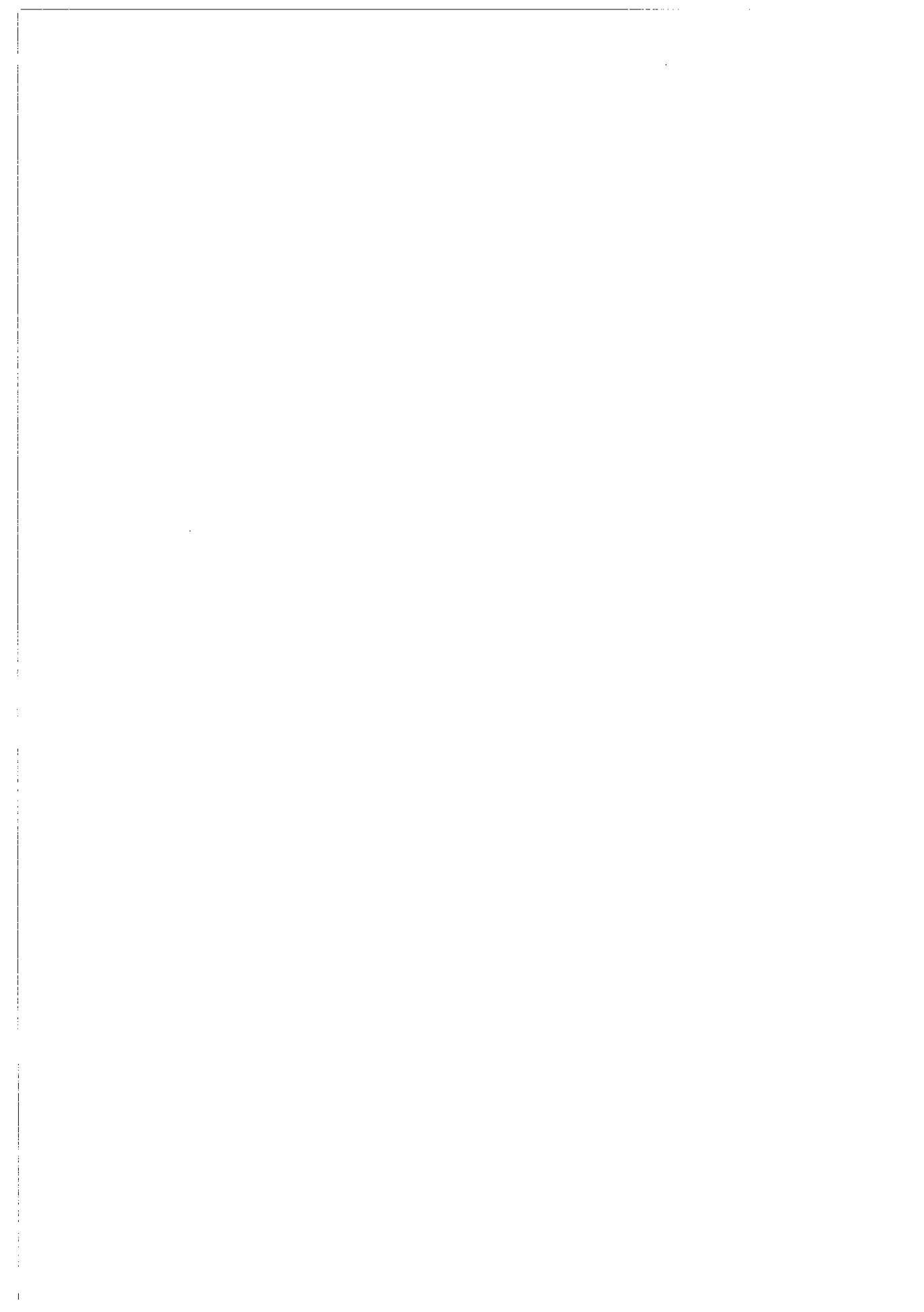


牧原の民話

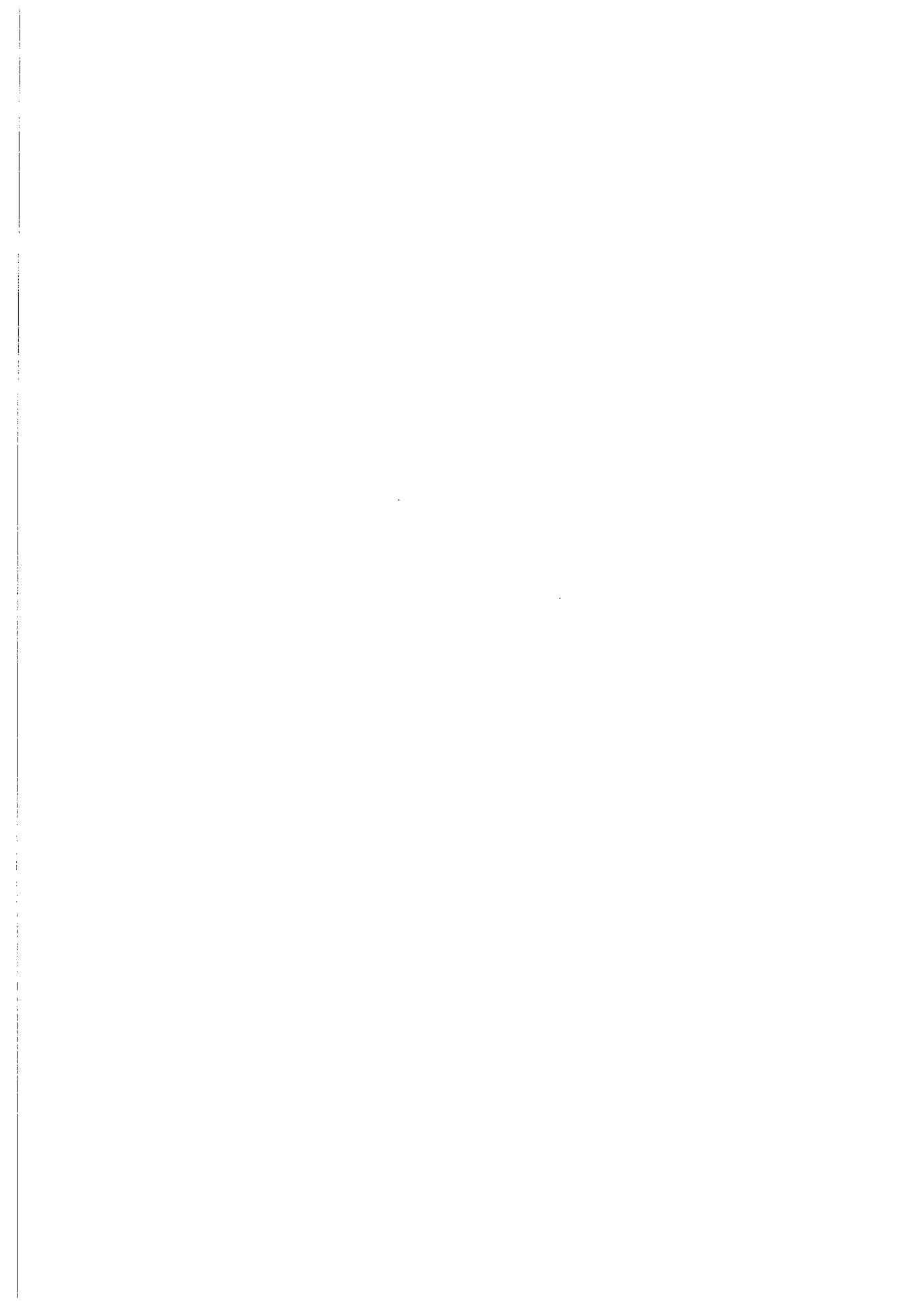


牧原民俗地図





第一編
翻字資料



1 雀 孝 行

話者 勢理客 宗 武(明治二十六年十月三日生)

翻字・対訳 村 山 友 江

雀は親孝行者。川蟬は親不孝者だつたつて。

クラーグわーや親孝行な者。あぬカンジユヤーや不孝な者やたんり。

うりが、あんさーなかいあんやしが、不孝者なやーなかい。人、人間ぬ作てーる穀物こくもつお食みうーさん、川端かーらばたなーりーホラ作つくてい、装すがいせージュジユリぬ装すがいし。美ら装すがいそーしが何ぬーり、うぬふーじーな話はなぬ有たんよ。

うりがクラーグわーや、親孝行な者なやーなかい、嫌な着物、フクター。あれー美らこー無むえんせーや。フクター着きちん親孝行な者やぐとう、人ぬ、金持人ぬ倉ぬ端はしなーりー居ゐとーてい、穀物食くり暮くらちよーんり。

まー、あんさーにカンジユヤーが民間みんかんぬ家庭ちねいんかい上あてい来きねー、飛とり来きねー、あぬ厄やく。不孝な者やぐとう、厄持やくぢつちよーんどうか何などうかしよ。あんしぬ話はなやたるばー。ありがカンジユヤーが、人ぬ屋敷やしきんかいや上あがてー來きらんり。うぬあたい見み知しつとーんりぬ意味みやるばーて。

それで川蟬は親不孝者だつたので、人が作つた穀物を食べることができず、川端から尾類のように着飾つて、エサを探し歩いているそうだよ。それで美しい姿をしているという話があつたよ。

それから雀は親孝行者だが、いつもボロを着けてね。雀は美しくはないさあね。ボロを着けていても親孝行者ということで、金持ちの倉の側を飛びまわつて、穀物を食べて暮らしているんだつて。

それで川蟬が民間の家の中に入つて来ると、飛んで来たら、厄。川蟬は親不孝な者だから厄。厄鳥であるという話だつたよ。そういうことで、川蟬は屋敷には入つて来れなくなつたんだつて。そのくらい忌み嫌われていたという話だよ。

注 ジュリ 娼妓のことで、尾類の字を当てることが多い。一六七三年には摂政羽地朝秀によつて辻と仲島に遊郭がつくられた。一般にはそこに公娼をいい、礼儀作法・芸事を仕込まれていた。歌も歌い、三線も弾くので、芸者も兼ねていた。

2 雀 孝 行

話者 仲 程 龜 (明治二十八年十月十日生)

翻字 田 尻 義 了
対訳 村 山 友 江

あのー、よそ行きして、こうカンジュヤーがいた。
非常にきれいな鳥がいる。それをカンジュヤーという
が、もう昔話(わかしばなし)ですからな。

それは親が病気(びょうき)なつたら、赤い着物(あかきもの)きて行つたそ
で、後から。又このクラーというものは、親が病気(びょうき)と
言つたから、すぐ行(い)つたそうです。

あのう、いつもよそ行きの恰好をした大変きれいな
鳥がいた。その鳥は川蟬(かせん)と言つていたが、それはもう
昔話だよ。

親が病気になつたので、川蟬は赤い着物を着けて、
後から駆け付けたつて。また雀は親が病気だといつた
のですぐに駆け付けたそうです。

それで親が言うに、「いやーや親不孝者(うやぶこわざ)やぐとう、親
ぬうりしん、美ら着物(みらきもの)着ち来(き)ぐとう。いやーや、川か
ら、川しーていー物お食べりよー」り。あんし、クラー

それで、親が言うには「お前は親不孝者だから、親
が病気になつてもきれいな着物を着けて來たからね。

川辺から食物を探して食べ歩きなさい」つて。また雀に

や、「いやーや親孝行な者やぐとう、あま此處ぬ倉ぬ落ち散り食ていうりしーよー」りち、言やつとーんどーりぬ、うり話るやるよー。本当はあつたかどうかは、それは昔話だよ。

採集52・5・8 読谷村民話調査団第十二班（渡慶次熟・仲村渠清美）

3 鬼餅由來

話者 比嘉ウト（明治二十九年八月八日生）

翻字・対訳 村山友江

ウナイ、イキー居たんりしがてー。此ぬイキー、
むる包丁あ側んじ研じやーなかい、人殺ち食りよー。
あんすぐどう、此ぬウナイぬ考えさーにてー、ウナイ
ぬ考えさーに、うれちやーしん退らぎわるないりち。
あんし人食ちえーならんりち。

あんきーに此ぬ、鬼餅ぬ日にて、ウナームーチーり
ち。うりんかい呉しえーよー、うぬイキーンかい呉しえー
て、鬼んかい呉しえー、あぬ瓦餅りち。瓦さーに作てい
呉ていや。作てい呉てい。あんしる又、自分ぬ食むしえー、

ある所に兄と妹がいたらしい。しかし、兄はいつも
側で包丁ばかり研いで、人を殺して食べていただそうだ。
それで妹は、こんなに人ばかり食わせてはいけないと
いうことで、兄をどうしても退治しなければいけないと
考えた。

それで、鬼餅の日にウナームーチー（鬼餅）といふ
ことで、兄にあげる瓦餅を作ったそうだ。瓦で餅を作つ
てあげたつて。また自分が食べるのは、いつもと同じ
ように作つた。兄に瓦餅をあげたら、瓦餅もガサガサ

は「お前は親孝行者だから、あちこちの倉に落ちてい
る物を食べなさいよ」と言つたという、話なんだよ。
本当にあつたかどうか、それは昔話だよ。

あぬ、当たい前ぬ餅作てい。呉たぐとう、あぬ瓦ぬ餅

ん全部ガサガサ食りよ。うぬイキーや。

食つてしまつた。

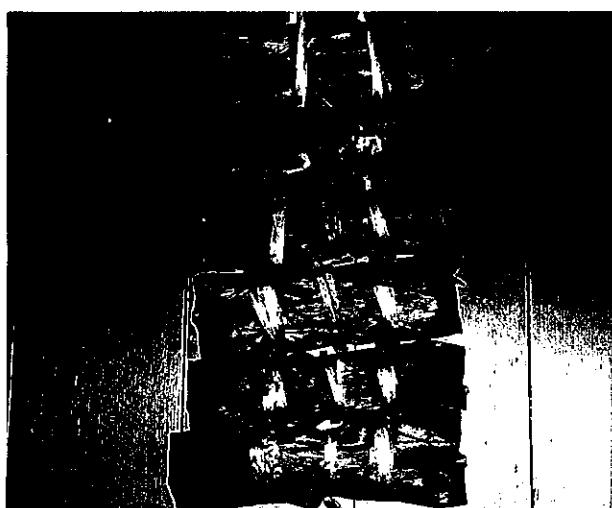
あんさーに、「アヒー」りち、「アヒーや、餅食むる
口びかーじる有しがや。私ねー鬼食いる口ん有んどー」
りやーなかい、下、直ぐ開きて見していよー。うぬ
崖後なち座してーたんりぐどう。崖んかい落とうさー
に、退治さんりちやぬ話やたん。

それから「兄さん」と呼びかけ、「兄さんは餅を食う
口しかないが、私は鬼を食う口もあるよ」と言つて、
下を開けて見せた。兄は前もつて崖を後にして座らせ
てあつたので、そのまま崖から落として、退治したと
いう話だつた。

採集 S 51・12・19

読谷村民話調査団第七班（知花利江子・島尻博光・名嘉真宜勝）

注 ムーチー 一般的にシワーシムーチーとかウニムーチーとも称
する行事で、牧原部落では旧暦十二月八日に行われている。幅
約五センチ、長さ十二センチぐらいの餅を作り、月桃の葉に包
んで大鍋に蒸して作る。魔除けとして煮汁を庭にまき、餅を食
べた後の月桃の殻一枚をあせて十字型にし軒先に吊るす。一歳
児をもつ家ではハチムーチーと称して、たくさん作って親類や
隣近所に配つた。また、男の子の場合は力餅といつて大き目な
ものを作り、それを下にし、その上に子どもの年の数の分だけ
紐で結んで吊り下げた。



ムーチー

4 鬼餅由来

話者 仲 程 龜（明治二十八年十月十日生）

翻字 高砂朋子

対訳 村山友江

この自分の兄でしょう。あれが、鬼になつて。そして、その餅を作つたまんま、それにこうした、という話があるんですがなー。これも昔話だから本当かなー。

それはあのー、あれでしよう。鬼餅といつて、なぜ、鬼餅かというかと言ふと、それを食べらしたそうです。あの、「これ何りしが」り言ちやぐとう、「鬼食え餅」。これを鬼食え餅と言つたら、この餅を食べて。

また、このウナイというの妹でしょう。これを開けて見せて、「これを鬼食え口、鬼食いしやんどー」りち。あんさぐとう、うりさんりぬ話。

自分の兄でしょう。兄が鬼になつてしまつたので、餅を作つて食べさせたという話があるんですよ。これはもう昔話だから、本当かなあと思うのですが。

鬼餅というのがあつて、何で鬼餅かというとね、その餅を食べさせたそうです。そして、兄が「これは何というものか」と聞くと、「鬼食う餅」と。兄はその餅を食べたつて。

このウナイというのは妹でしょう。妹がこれ(陰部)を開けて見せ、「これは鬼食う口だよ。鬼を食う口だよ」と言つた。そうしたらもう鬼になつた兄をやつつけたという話。

5 美女に化けた豚

話者 勢理客 宗 武(明治二十六年十月三日生)

翻字・対訳 村山友江

豚んぬ経ていや、昔ぬ物やるばーるどー。年ぬ経
ていいちーねーや、あぬー、長飼ないしーねーや。なー^は
化きやーなかい、アヒヤー豚んれーやれーや、下駄履
り歩つちゅんり。

あんさーい化きて、男搜めーてい歩つちゅんり。

それで(女に)化けて、男を捜して歩くそだよ。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第二班(富村朝夫・西原俊江・生盛史子)

6 キジムナ一へ魚取り十屁)

話者 勢理客 宗 武(明治二十六年十月三日生)

翻字・対訳 村山友江

私達あ姉さのー具志川天願ぬ前、津堅原ぬガニクす
ん所ぬ女ん子やたるばー。とにかくうぬ人が行じ、私
がー姉さんやるばーてー。長男ぬ妻。

うぬ人が話ぬ、あまぬ前なかい天願ぬ前なかい、ドウー

私の義姉は具志川市天願の前にある津堅原の、ガニ
クという所の娘であつた。私の姉さんというのは長兄
の妻さあ。

その義姉の話で、天願の前にドウーシ坂というのが

シ坂りち、ドウーシ坂有しが。うま前なちする、うま何りぬ屋号がやたらー。うまぬヤツチ一りがらー、何りがらーやたしが。

ありがキジムナー友達なやーなかい、ゆー海かい、うぬ友達なたぐとうからー、なー何ん難儀ん無えん海かい連らつてい行ちゅたんり。連らつてい行じなー、行ちゅぬんせー、魚、魚取つてい持たすんりー。必じ持つち來たんり、又。うれー本当話ふーじやつさー。

あんしいうれーキジムナーなかい、あんさつたんり。又、全然難儀え無えん、海ぬ、海ぬ潮ぬ上から歩つちん、足ん濡らさんり。うれー、大事やつさーやー、あんしーねーうりがしぇーしりしが。本当やたがやーり思ひしが。うれー私達、うんぬー話や、向こう屋号や分からんしが。あんさーい、なー長あんし、うぬ夜ないるんせー、なーキジムナーンかい連らつてい行ちゅんり。

あんしあんするうちねー、話ぬ、キジムナーや、背負さつとーていん、何さつとーていん、屁ひーねー、置つちやんぎーぎさんりやー、り。此り聞ちゃぐどう、なーあんしいうりんかいみつくわさそつてい、連らつてい、

あつた。それを前にした場所に家はあつたが、何という屋号だったのかな。その兄さんが誰かだつたと思うのだが。

その人がキジムナーと友達になつて、いつも海に連れて行かれていたそうだ。すると何の難儀をすることもなく、いつもたくさん魚を持たされたつて。必ず魚を持って来たつて。その話は本当のようだよ。

その人はキジムナーにそういうふうにされてね。何も難儀をすることもなく、それから海面から歩いても、足を濡らすこともなかつたというから、大変なことだよ。そういう話は本当だつたかなとも思うのだが。その人の屋号は分からぬんだがね。そういうふうに長い間、もう夜になるとキジムナーに連れられて、海に行つていたらしい。

そうしているうちには、キジムナーはおぶわれていようが、どうしていようが、屁をすると置き去りにしてしまうという話だつた。これを聞いて、もうキジムナーに嫌われた方が良いと思つたんでしようね。毎日

あんせーなーふしがらんむー。なー、連らつてい行ちーに、屁けーひつちゃんりがらー。うんにーに置つちゃんぎらつたんり。うんにーからーなー來んたんり。

のよう連れて行かれてはたまつたものじゃないと。
それで、海に連れて行かれた時に、屁をしてしまつたとか言つていたな。その時から置き去りにされてしまつて、キジムナーは来なくなつたそうだよ。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第二班（富村朝夫・西原俊江・生盛史子）

注①ヤツチー 士族についていう兄さんのこと。

②キジムナー 沖縄諸島に伝承される古木に宿る木の精。本島北部ではセーマ（今帰仁）、ブナガヤ（大宜味）などの異名がある。

キジムナー一へ魚取り十屁

話者 比嘉長一（明治三十一年五月二十七日生）

翻字・対訳 村山友江

キジムナー庄①友達どうしてー、友達どうし。言えいばなー友達ともだちてー。
あんし友達どうしぐわーとう搜めとういねー、魚いわおうぼ多く取とりりんり
ちやる意味いみなとーせーや。

キジムナー友達さあ。言わば、キジムナーと友達になることさあ。それで、キジムナーの友達を捜したら、魚を多く取ることができるという意味になつてゐるわけ。

やんりしがやつぱりあのー、キジムナーどうしん、
うりやてーるばーてー。言えいばキジムナーや、あのー

そなんだが、（キジムナーは屁が嫌いだつたので）、
言わばキジムナーと一緒に時は屁をしてはいけないわ

屁ひつちえーならんばーてー。あんぐとう、屁ひーねー
なー置つちゃんなぎらりるばーてー。

あんすぐとう、キジムナーがやつぱし友達しーねー、
やつぱり魚おゆー取らりんりー。あれは言わばなーイ
ザイやせー主に、主にイザイ。イザイやせーや。あん
すぐとう、うぬキジムナーかい、キジムナーとう友達しー
ねー、やつぱし魚お多く取らりぬ意味合ないねー。やつ
ぱしなー屁びかーんひつちえーならんばーてー、屁ひー
ねー置つちゃんなぎらりーべーとう、やんりしが。

うりやんりんどーや、うぬ言えばキジムナーとう
友達しーねー、なーどうーち出来しが、キジムナーとう
置つちゃん投ぎらりーねー、又何ん無えんしぇーや。
うにーからー何ん無えんばーてー、なー。

けさあね。屁をしたらもう置き去り（縁が切れる）に
されてしまうつて。

だけど、キジムナーと友達になると、やつぱり魚は
多く取れるそうだ。（キジムナーと一緒にやるのは夜の）
漁、主に漁さあね。だから、キジムナーと友達になつ
たら、魚は多く取れるそうだが、屁をしてはいけないつ
て。屁をすると、置き去りにされてしまうそうだよ。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第三班（辺土名朝三・大村久恵・又吉初子）

言わば、キジムナーと友達になつたら、もう毎日の
ように大漁だが、キジムナーと縁が切れたら、何も取
れないさあね。その時からは何もないわけさあ。

注①キジムナー 188頁参照

②イザイ 干潮時を利用しての蛤や魚、貝類を捕る漁業。冬の夜の松明かり等の明かりをともしてのイザイは情緒がある。

キジムナーへ釘打ち

著者 仲 程 龜(明治二十八年十月十日生)

翻字・対訳 村 山 友 江

ガジマル桂①ぬい、キジムナーぬ出桂②じーるガジマルとう
かウスク。桂③あの釘よ、釘を打ち込んだら、もうこれに
住まらん。これにはもう駄目だめりち、うまんかい住まら
んりぬ話はなしぬ有あたしが。

大きくなつたら、このキジムナーの、これ昔むかしの人、
キジムナー、木の精ひきといつてあるでしょ。そんなも
の。

ガジマルの上、キジムナーの出るガジマルとかウス
クね。あの釘よ、釘を打ち込んだら、もうこの木には
キジムナーは住まないんだつて。もうここには駄目だ
と、ここには住めなくなつたという話があつたが。

ガジマルが大きくなつたら、これは昔の人が言うに
はキジムナーが住むようになるんだつて。木の精といつ
てあるでしょ。そんなものだよ。

採集 S 52・5・8 読谷村民調査団第十二班(渡慶次歟・仲村渠清美)

注①ガジマル(溶樹) クワ科の常緑高木。多くの氣根を出し、それが地中に入ると支柱根となり、四方に広がつて大きな樹冠を形成す
る。

②キジムナー 188頁参照

③ウスク(薄久) 雀榕のことでクワ科の常緑高木。氣根を生じ、ガジマルに似ているが、葉、実ともガジマルより大きい。建築・器
材用にする木はガジマルより劣り、実はいちじくに似て小さく、食用となる。

アカマタ聟 入へ女呑み

話者 比嘉ウト(明治二十九年八月八日生)

翻字・対訳 宮城昭美

大変 美ら容姿よ。美ら容姿女騙ちてー。ちやー、あ
ぬ穴から出でてい来。うりんかいやなー、女んかいや
なー、赤サージぐわー被でい、なーじこー美ら男なでい
見ていよ。さーに、うり大変騙ち。なーうりとうぐー
なでいてー、うぬ女どう。

あんさーにあぬー、此ぬうれーアカマターとうぐー
なでいから、アカマターリち。うぬアカマターや穴ん
かい入つち行じや。うぬ女、ちやー連てい、穴んかい
行じやーなかい。あぬー穴ぬ中んじ、かんしあぬー口
開ちてー、「此処んかい入つち来わ」りち。あんしうちゅ
食べてーたんりちる話る聞ちやざー。

うんにーから、うぬ三月三日ねー、浜下りすんりぬ
事、やたらぬばーて。

大変な美人よ。美しい女を騙した。いつも、あの穴
から出て来るのだが、女には赤い手拭いを被つた美男
子に見えたつて。そういうふうに、女を騙して、その
女と仲良くなつてしまつた。

それで、女はアカマターと一緒になつてから、美男
子がアカマターだと気づいたようだ。アカマターは女
をいつも一緒に穴の中に連れて行つていた。そうして
ある日、どうどう穴の中で、口を開けて「こつちに入つ
て来なさい」と女を誘い入れて、食べてしまつたとい
う話を聞いたよ。

その時から、三月三日には浜下りをするようになつ
たといふことだよ。

耕作地及び山地にかけて、いろんな場所に生息している普通種で、主に夜間活動し、地面を徘徊していることが多い。

②三月三日 海浜に下りて災厄を払い清める習俗。旧暦三月三日にはちそうを持つて浜辺に行き、潮に手足を浸して不淨を清め、健康を祈願して楽しく遊ぶ行事。

10 鍋蓋アカマタ

話者 仲 程 龜 (明治二十八年十月十日生)

翻字 照屋 将人

昔、あのカマンタといつてあるでしょう。あのナービヌフタ(鍋の蓋)。それをもう古くなつて捨てる時には必ず木に下げるよつた。それ覚えておるよ。

それを下には置かん。これ下に置いたら、これの下にアカマターは入つたら、それがあのう化けるといつて、それをカマンタは必ず古くなつて捨てても、何かに下げておきなさい。それをすぐ土にこうして置いたら、その下に、中にアカマターが入つたら、それが化け物になるつて。そんなものを聞いたんですよ。

それでこのアカマターが化けて、あのう女騙ちうりさんりぬ話。うんなむの一昔話やしが(そういうのは昔話なのだが)、そうして、三月三日は浜下りといつて浜に下りる。浜に行つて女は遊ぶという習慣になつたそうです。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第十二班 (渡慶次歟・仲村渠清美)

注①カマンタ(鍋蓋) ススキやチガヤ等の茅で作った円錐状のシンメーナービの蓋。時にはビロウの葉やワラ製もみられる。

②アカマタ 191頁参照

③二月三日 暇貢参照

④浜下り 旧暦二月三日に海滨に下りて災厄を払い清める習俗。

11 子育て幽靈うちかびゆらい打紙由來

話者 仲 程 龜(明治二十八年十月十日生)

翻字・対訳 村 山 友 江

後生ごそぬうりしそーし、あんさーなかい、うりやんり
ち話はなし有あたしがよ。うぬ打紙うちかびりし、うれーうりやたんり。

昔え、うぬ錢じんりねー、後生ごそぬ錢じんりちえー今いまやていん
無なえらんしが。打紙うちかびる錢使じなけえすんりしが。あぬうり持む
ち行こ買いてーしーすたんりよ。

あんしさぐとう、うまぬ店まちやぐわーんかい入いつち、う
ぬ童わらわあ後生ごそうてい童わらわが、生うまりてーぬふーじてー。昔え
なー、昔えなーブチクンなでーうりそーていんなー、
けー亡まちよーんどーし、すぐけー葬うすいてーんてー。
多分墓まいんかい入りーてーんてー。

あんし、うまんじ子産くわなちゃぐとう、なーうりぎぐとう。
なー子産くわなちさぐとう、うぬ錢じんお持もちつち行いじ、紙錢かびじん持つ

後生での話なんだがね。この打紙というのはこうい
うものであつたらしいよ。

昔も今も、後生のお金というのは本当はないのだが、
現在でも紙錢を使つているのだがね。それを持って行つ
て買物をしたりしていただよ。

後生で子供が生まれてしまつたので、そのようにし
て、店に買ひ物に行つたりしていだらしい。もう昔は
氣を失つても、死んでいるものと思つて、すぐに葬つ
たりしたんでしょうね。それで、そのまま墓に入れた
んでしようね。

墓の中で子供が生まれてしまつたようだ。それで、
紙錢を持って店に行き、買物をしては子供に与えてい

ち行んし店まちやぐわーんかい行んじ買いてい、うぬ童わらばんかい食かま
ちそーしが。

うぬ店まちやぐわーぬ、うりが見いじーねー錢じんやしが、うり
が遣はいねー紙かみないたんりちよ。あんさーなかい、うれー
後生ごそぬ錢じんりち、うぬ道理どうりし今いまつしうりやんりしが。

あんすぐとう、うれー沖繩うちなーぬ仕し來きたれー、紙錢かみじんぬ何なぬ
りち、うぬふーじやたんり。昔んかしぬうれー、ミーフガー
ジンかたぬ形かたちやしが、買いてい、うりが見いじやーに、又また助たすき
ていさーなかい。うぬ童わらばや、うりさんりぬ話はなしや有あたし
が。

た。

店の人が見ると、お金なんだが、女の人が帰つて行くと打紙になつたということさあ。それから、もうこれは後生のお金だということで、その道理から今でもそういうふうに紙錢を使うようになつていてる。

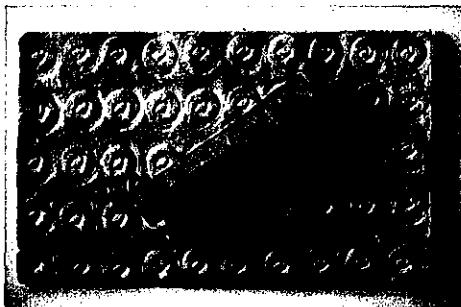
沖繩の仕来たりで紙錢を使うのは、そういうことから始まつたらしいよ。昔のお金は真ん中に穴があいたのだつたがね。その人が見つけて、子供を助けて育てたという話があつた。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第十二班 〈渡慶次歟・仲村渠清美〉

注①ウチカビ 紙錢のこと。ンチャビ(神錢)、アンジカビ(焚紙)

ともいう。一般に死後の世界の通貨と信じられ、藁や古暦などを原料に漉いた黄色紙に、ウチカビウツチャーという金属製の槌などで叩いて錢型をつけたもの。

②ミーフガーデン 直訳すれば穴あき錢で、明治年間に通用して
いた。一厘錢には四角い穴があいていたことからそうよばれた。



ウチカビ (9.5×15.5)
ウチカビウツチャー (8.3)

12 繼子の椎の実拾い

話者 比嘉ウト(明治二十九年八月八日生)

翻字・対訳 村山友江

継子とう自分ぬ当たい前ぬ子とう、なー山かいティール持たてー。ティール持たち。継子あふぎティール持たち、また本当ぬ子あまたざるティール持たち、椎拾いが遣らちえーるばー。

うり拾いが遣らちやぐとうや、なー、あぬー何りが、此ぬ夜暮たぐとうよ。うぬ本当ぬ子あ、じゅんにぬまたさるティール持つちょーせーや、うれーうりが一杯拾つてい行じ。なー継子ああぬー、うりがティールふぎているうぐとう溜まらんよ。

なー、今日や私ねー此ぬまま行ちーねー、又家んじ怒りーぐどうや、アンマーンかい怒りーぐどう。私ねーなー、此ぬ山んかい今日一夜お泊まやーなかい、明日あまたうりがみー拾つてい行ちゆんりち。うまんかい泊まとーたんり。

あんしょー、泊まつい居たんりしが。なーいえー、うぬ鳥ぐわーぬ、生物ぐわーぬ色數なー直ぐ、チーチー

継子と実子に、ティールを持たせて山に行かせたつて。ティールを持たせてね。継子には穴の開いたティールを持たせて、実子には上等なティールを持たせて、椎の実拾いに行かせたようだね。

椎の実を拾いに行かせたのだが、もう夜になり暗くなつてしまつた。実子は上等のティールを持つてゐるのだから、そのいっぱい椎の実を拾つて行つた。しかし、継子のティールは穴が開いているものだから、いくら拾つてもいっぱいにならなかつたつて。

継子はこのまま家に戻つたら、お母さんに叱られるから、今日は一晩この山に泊まつて、明日、ティールのいっぱい椎の実を拾つてから帰ることにしようと考えた。それで山中に泊まつたそだよ。

そういうふうにして山に泊まつたそだが。もうそ

こで、鳥や生物の数々が、チーチーチー、パーパーパー

チー、パー、パー、パーしよ。なー揃てい呼びやーちてー。

さぐどう、うれー木ぬ側んかい、直ぐひん曲がてい、

「私ねー今日や生物んかいうちゅ食りーさやー」りち、

ひん曲がてい。あぬよー、竦ろーたんりしがや。

あぬー、うぬ生物ぬ達がなー、なー黄金から銀から
うぬふぎデイールんかい満つちゃかー満ちていよ。「黄金
ん銀ん満ち満ちり」しえー、あぬ生物ぬ達が全部呼び
てい。あんさーにうりが満つちゃかー満ち満ちていさ
ぐどう。なー、翌日あ、うんぐとうーし家かいうり持つ
ち、あぬひじきてい行じえーんてー。

あんさーなー、継親あ大変嬉し、「いやーや、ちゃー
しあぬー、あんし、うんぐとうーし持つち来が。ちゃー
しやたが」りちやぐどう。「あぬ木ぬ片端ぐわーんかい
寝んとーたぐどう、なー生物ぬ有るつさあんし、うん
ぐどうし、『黄金銀ん満ち満ちり』し、チーチーチー、
パーパーパーし揃てい來にや。うりが満つちゃーかー
持つち來たん」りちさぐどう。なーうにーねー、継親あ
なー嬉しえーんてー。宝物持つち。

「とー又、今日やいやー行きよー」りち、當たい前
ぬ子遣らち、さくとうや。なー又うんにーにん、なー

と、声を揃えてさえずつてやつて來た。すると、継子
は木の側に背を丸めて、「私はもう今日は鳥達に食われ
てしまうかもしれない」と、丸くなつて潜んでいたそ
うだが。

そうしているうちに、その鳥達が、穴の開いたティー
ルに黄金や銀をいっぱい詰めてきた。鳥達は、「黄金も
銀も満ち満ちり」と歌いながら、ティールのいっぱい
詰めてくれたつて。そして翌日は、黄金や銀が詰まつ
たティールを持つて、家に帰つて行つたそつだ。

そしたら継母はもう大変喜んで、「あんたはどのよう
にして、その金銀を持つて來たのか。どうしたのか」
と尋ねた。「木の片端に寝ていたら、鳥達がたくさんやつ
て來て、このように『黄金や銀も満ち満ちり』と、チー
チーチー、パー、パー、パーと歌いながら揃つてやつて來
てね。ティールのいっぱい持つて來てくれたんですよ」
と言つた。もうその時は、継母は大変喜んだんでしょ
うね。宝物を持つて來たから。

それから、「じゃあ、今日はお前行きなさい」と、実
子を継子と同じように行かせたようだ。継子から習つ

うりがさんねーし習^{なら}ている行^んじよーぐとう。木^きぬ側^{そば}ん
かい隠^{くわぐ}てい寝^ねんとーたぐとう。又^{また}ー、チーチーチー、パー^{パー}
パーパーし、全部^{むる}生物^{じちむし}ぬ有^あるつさ捕^{すり}てい来るふー
じ。うんにーねーなー、直^すぐ有^あるつさ生物^{じちむし}んかい直^しぐ
うちゅ^{くわ}食^{くわ}ていや。日^ひかじ抜^ぬじ銀蠅^{お^ーペー}ぶーぶーしみてーた
んりざ。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第七班 〈知花利江子・島尻博光・名嘉真宜勝〉

注 テイール 竹製品のかごで、いさりなどで使う海ディールや、農業用のがある。本島北部では大型の背負い運搬具がある。

13 繼子^{ままこ}の毒入り弁当^{どく入りべんとう}

話者 勢理客 宗 武(明治二十六年十月三日生)

翻字・対訳 村山 友江

親ぬ、繼親^{ままうや}やるばー、女ぬ親ぬ。男ぬ親^{いきが}あ一人^{ちゅい}やる
ばーてー。言ぬんせー、うりが初みぬ、先妻^{はい}とうぬ子^こあ、
繼子^{ままづくわ}なとーるばーるやせーや。あんしから、うぬ先^{さち}
妻え、言るんせー嫡子^{ちやくし}ぬ親^あ死^死じやくとう。今度^{こんど}お又^{また}、
妻^め搜^さめーてい。後ぬ妻^めぬ産^{うぶ}ちえーる子^こあ、居^うんりぬ

親が、繼親だつたわけ、母親がね。言えば、父親は
一人で腹違^{ふくたが}いだから、夫の先妻の子は繼子になるわけ
さあ。先妻が亡くなつたので、今度は後妻を娶つたん
でしよう。後妻にも子供ができるといふ意味さあ。

て行つてているのだから、同じようにして木の側で隠れ
て寝ていたらしい。するとまた、チーチーチー、パー^{パー}
パー^{パー}と、鳥達が捕つてやつて來たようだ。しかし、
その時にはもう、実子は鳥達にすぐさま食われてしまつ
たつて。日も抜かれて、銀蠅^{お^ーペー}がたかつていていた
とだよ。

意味やるばーて。

うりがなー、自分の一産ちえー無えんぐとう、うれー兄あ
継子などーるばーやせーや。うりふどうふどう、やし
が、うれー又、嫡子んりせーなー、自分ぬ性質おゆー^{セイジツ}
ゆたしく生まりーとーたんり。

まー又、後う生まりとーせー、後ぬ妻ぬうれー、嫡子え
やしが、とにかく次男やぐとう。うれー是非、兄あど
うにか取い除きわるやつさーりる、うぬ女ぬ親ぬ気持
ちなやーなかい。此れーどうにかし殺さわんしわるり
ぬ考えぬ、まーうぬ継親なかい起くりとーたんりぬ意
味やるばーてー。自分ぬ子る。だーうれー、あれー兄
りせーなー、本当や嫡子やぐとう。自分ぬ子あ次男る
やぐとう。此れー自分ぬ子、嫡子なせーやーりぬ気持
ちぬ有たんりぬばーてー。

あんさぐとう、うりなかい、此ぬ嫡子え死なしわる
やる、殺しわるやるりぬ気持ちえー刃物掛きてい殺す
ぬ事おならんぐとう。何か利用さーなかい、毒んれー
飲まさーなかい、殺さわんしわるやるりち。あんさー
ない、或る時にあぬ（まー一年の遠足、自由遠足し
みてーるばーてー）。

それは自分が生んだ子ではないから、嫡子は継子になつてゐるわけさあ。継子はいよいよ大きくなつて、性格も良く育つていつたつて。

それから後妻と生まれた子は、後妻にとつては嫡子なんだが、先妻の子がいるものだから次男になつて。それでもう是非、上の子をどうにかして取り除かなければいけないと、母親は思うようになつてしまつた。これはどうにかして殺すかしなければいけないと意味さあ。もう先妻の子は嫡子で、自分の子は次男になつてゐるから、自分の子を嫡子にしたいという気持ちがあつたようだね。

嫡子を殺そうという気持ちはあつても、刃物をかけ
て殺すということはできないから、何かを利用して、
毒でも飲ませて殺そうと考えた。そうして、ある時に、
(まあ自由に遠足でもさせたんでしょう)。

あんさーなかい平生や物んうぬ弟ぬぐとー、さーー
ゆたさぬぐとー呉てー無えん。物ん分かち、にーく呉
らつとーたんりしが。うりが遠足しみーんりる日なた
べとう。時ねー、あぬ弁当や、美味さきさく(うぬま
んぐらーなー米りせー自由やあらんたぬ筈やべとう)。
うんにーねー、お米しなー弁当、美味さきさく支度てい
持たちゃんり。

あんさーなかい、しーねーなーうれー自分一人ぬ遠
足るやぐとう。何ん居らん、後お山んかい、田圃ぬ有
る所んかい行じえーるふーじて。さぐとう、うまんじ
なー良い時分なつい、やーしくなたぐとう、なー弁当
食みわるやつさーりち、うり開きーんりしーねー、う
ぬ近辺んかい鳥ぬ來たんり。鳥ぬ來、ガーガーし呼びー
たしが、何がやーうぬ鳥え、何りちうまつ来あんし呼
びーがやーり。

鳥えー又昔ぬ人のーうれー、ゆーうりが呼びーねー
厄るやがやーどうか何どうか、うぬ何か事ぬ有んりち、
ゆーうんぐとーぬとうくる。うれーうぬ場合ぬ、うぬ
童ん、何んちうれーあんし鳥ぬうまんかい急に集まつい
来、あんし呼びやーていーやーすがやーり。少うす

平生は弟ほどには、食事も満足に与えずに不味い物
を食べさせられていたということだが、遠足に行く日
になつたので、弁当も美味しく作つて持たせた(その
頃は米も自由にはなかつたはずだが)。飯の弁当を作つ
て、美味しそうに作つて持たせたつて。

そういうふうに一人つきりの遠足でしよう。もう何
もいないし、後は山中の田圃のある所まで行つたよう
だ。すると、そこで良い時分になつて、おなかが空い
てきたので、弁当を食べようと思つて広げようとした
ら、その近辺に鳥が來たつて。鳥が来てガーガー鳴い
たが、どうして鳥がここに来てこんなに鳴くんぢろう
と思つていた。

また、昔の人は鳥が鳴いたら厄とか何とか、何か事
があるというふうに忌み嫌つていた。繼子もその時に、
どうして鳥が急に集まつて、そんなに鳴くのだろうと
思い、胸さわぎがした。開けて食べようと弁当を置い
たまま、少しも口にせず、そのまま逃げたようだ。

驚るちぬ氣なかい、弁当や開きてい食むんりち、うまんかい開らち置ちから、ちよつと食まんよーい逃んぎてーぬぐとーん。うれー置ちやーなかい、側んかい逃んぎてい隠とーたぐとう、うぬ鳥え追てい來なかい、うぬ弁当お食いたんり。

うぬ弁当お食たぐとう。今度お、うまでい直ぐ急毒ぬ回いるさにあらに。あんきー、うりが転びん返りんさーなかい、うぬ田圃んかい転り行いたんり。転り行じしーねー、一本かんし地から生てい、かんしゆらゆら揺らし一葉あ出じやしそーる、うぬ、うりんかい私達ん浮き草り言たしが。うり転り行じ、うり食てーうい、又少えうり食いるんせー元気なてい。

あんし、うりん話るやたるり思ひぎるばー。あんすぐどう元氣なてい、又うぬ弁当や美味さぐとう、又ん元氣なやーにうちゅ食てーういし。後お、又ん行じ食てーういし。なー言るんせーなー、弁当や美味さし。あれーなー、ちやーしんうれー治すしりち知つちょーたのーあらに。あんし鳥ぬ物知りりしぇーうまやるばーてー。

あんきーなかい、やつとうぬ弁当ん、鳥え幾ちんや

弁当を開けて置いたまま、側に逃げて隠れていた。すると、鳥が追つて来て、その弁当を食つたつて。

その弁当を食べたら、鳥はそのまま急に毒が回ったんでしようね。それから転げ回つて、田圃の中に転げ落ちて行つたつて。転んで行つて、このように地面から一本だけ生えて、ゆらゆらして一葉だけ出でているのを食べたら元気になつたようだ。

それも昔話であつたと思うのだがね。そういうふうに元気になつたら、弁当は美味しいのだから、また食べたりしていた。言わばもう、弁当は美味しいから食べたりして、毒返しとして浮き草を食べると良いといふことを知つていたと思うよ。鳥が物知りだと言われるるのはそういうことだよ。

鳥は何羽もの鳥で、弁当を食べては、また浮き草を

たんりぐどう。うぬ弁当や鳥ぬ全部うちゅ食やーなか
い、やつぱしうぬ浮き草あうちゅ食やーい逃んぎたる
ばー。「珍しい物やつさー」りち、なー済むん、やーさー
有ていん家かい行ちるないりち、帰てい行じやぐとう。

うぬ繼親あ、「へー、うれー毒お有らんあたがやー」
り言ち。「あんし美味く支度てい、此れー毒お有らんてー
さやー」りち、今度お次男んかい呉たんり、呉たぐとう、
次男おけー死じやんり、うぬまま。

食べたりして、みんな平らげてしまつた。繼子は、「珍
しいことだなあ」と大変不思議に思つた。もうおなか
は空いているのだが仕方がない、家に帰らねばと思つ
て帰つて行つた。

すると、繼母は「へえ、それは毒じやなかつたのか
な」と。「(殺そうと思つて)あんなに美味しく作つた
のに、毒ではなかつたのかな」と思いながら、今度は
次男に食べさせたようだね。すると、それを食べた次
男はそのまま死んでしまつたつて。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第二班 (富村朝夫・西原俊江・生盛史子)

14 繼子の毒入り弁当

著者 比嘉長一 (明治三十一年五月二十七日生)

翻字・対訳 宮城昭美

平生ややー、平生やなー、言えばなー繼子とう、自分
ぬ子とう、自分ぬ産ちえーる子とー、弁当ややつぱし
違とーせーや。なー自分ぬ子あ上等さーに、繼子あ嫌
なー持たちよーしえー。

平生はもう、言わば繼子だから、自分が生んだ実子
とは弁当も分けて持たせていたようだね。実子には上
等な弁当を持たせて、繼子にはよくないのを持たせて
いた。

今度お、今日ぬ日に限てい、今度おなー、ご飯持たすぬばーてー。あれーなー、自分ぬ子やなー、持たちやぐとう。又、継子あ上等持たすぬばーてー。

あんさぐとう、うぬ、自分ぬ、自分ぬなー子や嫌なー持たちやれー。今日に限ていや、なー継子ぬ弁当や上等やせーや。先生が見じやーま、今度お「うぬ弁当食むな」りち、呉らんばーてー、継子んかい。持つち来る弁当や、呉らん。

又、自分ぬ子ん、産ちえーる子あなー、嫌なー持たちえーせー。あんぐとう家んじえー、なーもーくんどーせーるばーて。意味え分かとーぐとう、うりあんさー、うぬ弁当呉らんや。あんぐとう、うぬ弁当やうぬ犬かい貫らちえーぬばー。犬んかい食ちえーるばーてー。魚か鯉かー。鯉とうか、うぬ鯉や全部死じえーるばーてーなー。

あんさぐとう、やつぱしうぬふーじーやたんりぬふーじーてーひやー。あんし、自分ぬ子とう、自分ぬ子あ継子とう、あんし分かさーなかい。なー継子あ殺すんりちょーるふーじーてー。毒食さーに。

あんしうれー先生が見じやーま、うれー弁当食てー

ある時、今日に限つて継子にご飯を持たせたつて。今日に限つて継子の弁当は上等さあね。だから先生がそれを見て、「この弁当は食べるな」と、継子に食べさせなかつたそうだ。持つて来た弁当は食べさせなかつたつて。

また、実子にはよくないのを持たせてあるさあ。だからもう家に帰つてから一悶着あつたようだね。継子は継母の真意は分かつてゐるのだから、その弁当は食べずに犬にやつたようだ。それとも魚か鯉。すると弁当を食べた鯉は全部死んだつて。

そういうふうなことだつたらしいが、もう継子と実子を分け隔てて、継子を殺すつもりだつたということさあ。毒を食べさせてね。

それを先生が察したので（継子は）弁当を食べてな

無えんばーよ。あんきーうれー、鯉とうか或いは犬とうか食ちえーぬばー。犬おけー死じよーるばーてー、鳥とうかん何やていん。うぬふーじーやたんり。

いわけさあ。そうしてそれを犬とか鯉にやつたら、犬（鯉や鳥）は死んでしまつたつて。そういうことだつたつて。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第三班（辺土名朝三・大村久恵・又吉初子）

15 子供の肝へ仲順流れ

話者 比嘉憲一（明治四十二年三月八日生）

翻字・対訳 村山友江

あぬ、仲順大主ぬ由來記やしが。子、三人産しいじや
ちやしが。嫡子ん次男ん三男ん、なーだうつたー心お
産ちからー分からんりやーに。良い日い取てい、今日
ぬ良い日に、今度お、心見りわる、肝見りわるりやー
に。

あぬ嫡子から呼び寄してい。あんきーに大主言い分
ぬ、「とー、食むんならんぐどう。産し子捨ていやーに、
私にんかい乳い飲まし」りちやぐどう。「あー、仲順大主、
寄たる年、ちやーしうぬ子捨ていらりーが。仲順大主
や死ぬだー死ねー」りち、うまつち反対さりやーに、

仲順大主の由来記なんだがね。子供を三人生んだの
だが、長男、次男、三男とも、未だに心のうちが分か
らないということで、大主は三人を試すことにした。
良い日を取つて、今日の良い日に、三人の心をみなく
ちやいけないと思つたようだ。

それで、長男から呼び寄せた。そこで大主の言い分
が、「もう私は食べる事もできないから、生まれた子供
を捨てて、私に乳を飲ませてくれ」と言つた。すると
嫡子は、「ああ、仲順大主、寄った年、どうして我子を
捨てる事ができましょうか。仲順大主は死ぬんでし

行じやぐと。な一又、仲順大主や残念し。

たら死ね」と、そこで反対されてしまった。仲順大主は残念に思つた。

今度お又、次男、呼び出じやちゃぐと。丁度同ぬ物ない。と一うりんな、「仲順大主や寄たる年、死ぬだ一死ね」りやーに。又うつたんかい言らつてい。

今度は、次男を呼び寄せた。すると、ちようど長男と同じようになつてしまつた。もう次男にも「仲順大主は寄つた年、死ぬんだつたら死ね」と、言われてしまつた。

今度お三男呼びたぐと。此れ一なー、又親孝行な者。此れ一「親あ一人、ちやーし捨ていらりーが。産なしむぬ子あ、産しえー居いるすい。親救いしるましやる」りち。なーうつたーや親孝行なでいさぐと。「どーあんしえー、子捨ていーらー、東森ぬ三本小松ぬ有ぐとう。うぬ小松ぬ下んじ三尺穴掘てい埋すりよー」りち、言らつたぐと。

今度お巡り巡り山探てい、うぬ三本小松え何処んかい有がやーりち、なー様々巡てい。いよいよはつちやかたぐと、今度おなーはつちやかやーい。とーうまんかい「此処やさ」りち、穴あ三尺掘てい埋みーんりさぐと、大事な黄金ぬパツとなてい上がやーに。「珍しー物。さていきて珍しー物。なー此れー、何がら

るやる」りち。

三男は三本小松はどこにあるんだろうと、もう山中を方々探し歩いた。いよいよ三本小松を見つけたので、そこで「ここだな」と、穴を三尺掘つて埋めようとしたら、すばらしい黄金が出てきた。三男は「これは珍しいことだ。さて珍しいことだ。これは何かあるはずだ」と思った。

あんざーに今度お、家かい帰てい行じやしが。とー
あんやらー、うぬ黄金やいつたー物るやぐとう、掬い
取てい。あんざーに産しむぬ子ん命ん救てい、黄金ん
取てい、なーうつたーや幸福に暮らする意味。

そうして家に帰つて行つたそだ。すると仲順大主
が言うには、そういうことだつたら、この黄金はお前
達の物だから掬い取りなさい。そのように子供の命も
救い、黄金も取つて、三男の家族は幸福に暮らしなさ
いという意味さ。

そのうちに仲順大主はこの世を去つていかれたよう
だ。亡くなつてしまつてから、今度は財産の奪い合い
が出たようだね。三男が富を得たので、長男と次男が
三男を殺そうと企んだようだ。

なー、既に仲順大主や世や失みそーちやぐとう。う
ぬ間にあんなかんするうちに、失んそーちやぐとう。
今度お、財産ばーけーぬ後から出じとーるばーてー。
三男ぬ富さぐとう、今度お嫡子とう次男お謀反企り。
今度お三男殺すんりやまちつちさぐとう。

それはもう、嫡子と次男の性質なのだからね。そし
て仲順大主は神になつていらつしやるのだから、その
人達が喧嘩をするのを見て、そこに神様が現れていらつ
しゃつたようだ。それで、これではいけないと、神様
が杖を振り回したら、二人とも途端にひっくり返つて
しまつて、三男は災難を逃れたつて。

倒りてい、なーうぬ災逃たんり。

城間ナーカぬすつと（盜人）

話者 比嘉憲一（明治四十二年三月八日生）

翻字・対訳 村山友江

ただうつび聞ちよーたん。盜入ぬ入やーに。なーう
ぬ盜人ぬすらお天井んかい籠くまとーぐとう。主のー見ちよーる
ばー。「いえー筑登之ちくとう此処こゝつち夕飯ゆうはん取り」り。夕飯食
めー、年としん取れー、ということで。

あんさーなかい、なー一分からつたきやーりやーに、
うぬ人ちよお心こころお大変いっぱいあしらかな人ちよやみそーやーによ。あ
んし物もの呉わんてい。

丁度うぬ盜人ぬするさんりぬ意味いみえ、やつぱし貧乏ひんぱう者むかなやー
に、食いん、子ぬ達ちやんまんどーしが、物ものお正月そべわちえしー
うーさんでーるばー。あんさーに今度こんどお、城間ナーカ皆みなあ
金持人きんぢんやぐとう、あまんかい忍しのり、是非子ぬ達ちやや正月そべわち
食りわるやるり。忍しのり天井んかい登のて行いじょーん。
なーきつさ、既に見当みあていらつて いるうしが、「いえー
筑登之ちくとう、うまつちトウシヌユールん取れー」りざぐとう。
なー顔あらあ赤あかんばちやーなかい。仕方しかたあ無なえらん見み」

ただこれだけ聞いたよ。盜人が入つて、その盜人は天井に隠れていたようだ。それを主が見ているわけさあ。「おい筑登之、ここに来て夕飯を取りなさい」と言つた。下に下りて来て、一緒に夕飯も食べて年も取りなさいということでね。

それでもう、主に見つかってしまったのだが、この主人は大変心の良い人であられた。そのように盜人に食事も与えたようだ。

盜人が言うには、子供も多いのだが、食べる物もなく正月もできないということだった。それで城間ナーカは金持ちだから、そこに忍び込めば子供達にも正月をさせることができると思つたと言つたようだ。それで天井に登つて、忍び込んでいた。

もう既に見破られていて、城間ナーカが「おい筑登之、ここに来て年も取りなさい」と言つたら、盜人は顔を真つ赤にしてね。仕方がない、見破られてしまつ

当ていらつてゐるうぐどう、出じてい來に、「いやーや、何処ぬ某が」「何処ぬ某やいびん」「あんしちゃ一れーが」りちやぐどう。「実えなー、私ねー貧乏者なてい、子ぬ達や多くまんり、正月んしみーうーさん。なー貴方達んかい盜人する意味え有いびらんしが、恐るさ恥かさぬ入つち来びたん」り。「えーあにー、とーあんるんやらーあんせータ飯ん、いやーちゅはーら食めー。」「子ぬ達あ物ん渡すさ。持たすさ」りやーに。

たのだから、天井から下りて來た。そこで、「お前はどこの誰か」「ど、そこの誰です」「それでどうしたのか」と、問答が続いたね。「実はもう、私は貧乏者で、子供も多く、正月をさせることもできません。貴方達に盗人に入るつもりはありませんでした。しかしこのままではどうしようもなく、恐ろしくて恥ずかしいことがあります。入つて来ました」と答えたそうだ。それを聞いた城間ナーカは、「ああそうか、それだつたら夕飯も腹いっぱい食べなさい。子供達の分も持たすよ」とおつしやつたそうだ。

城間ナーカから言われた通りに食物をたくさんもらつた盜人は、大変有り難く思つた。子供達の分まで食べ物を持たされたのでね。

それからまた、正月三日にミッチャヌシーケといふのがあるさあ。その日に、今度は、盜人に入つた人が城間ナーカに、「使つて下さい」と申し出て、そこで働くようになつたそうだ。すると、貧乏人は成功して、後に土地も分けてもらつたといふ話。

今度お、食だぐどう。此ぬ筑登^{さくとう}之りぬ人お、有り難^あいがたき思やーに。言んねーすんねー、持たさつていされー。

今度おうぬ三日^{さんち}、正月三日^{さんち}あミッチャヌシーケ^{注③}りぬばー。ミッチャヌシーケ。あんさーうぬ場合^ばに、又今度お「なー使^{つか}ていい呉みそーり」りち、うまうてい使たぐどう。うぬ貧乏^{ひんすう}者^{しゃ}お成^{せい}功^{こう}し、土地^{とち}ん分^わきていて^{とう}らさつたんり、うぬ話^{はなし}。

注①筑登之 位階の名。最下位の位階で、王子から数えて九番目、里之子の次。

②城間ナーカ 浦添市城間に実在する富豪の屋号。

③ミッチャヌシーグ 正月三日の節句。

17 姥捨山（難題）

話者 仲 程 龜（明治二十八年十月十日生）

翻字・対訳 村 山 友 江

あの、うりやたんり、沖縄や薩摩ぬ、うりなどーせー
や。薩摩ぬ言いつけ通いだから。あまからあのー沖縄
んかいやありやたんり。七曲がいそーしんかい、糸う
貫ち来りち、命令さつたぐどう、うりんりよ。かんし
七曲がいし、あんし曲がとーしんかいや糸、んちや貫
からんせーや。

あんし六十一ないる人ぬうりさーなかい。うぬ昔え
馬ぬ尾りち有せー。馬ぬ尾や長はせーや。うぬ髪ぬ毛、
昔ぬ髪ぬ毛やていん長くやせー。うりんかいあぬ、う
ぬ甘物てー、蜜括じやーにうまんかい置ち、蟻ぬ前ん
かい。丁度、蟻やうまからうまんかいやぐどう、うま

あのう、沖縄は薩摩の支配下にあつたらしい。薩摩
から沖縄に難題がきたようだね。七回も曲がりくねつ
た物に、糸を通して来なさいという命令が来た。こん
なふうに七回も曲がつた物には、糸を通することはでき
ないでしょう。

それで、六十一歳になる人に聞きに行つたようだ。
馬の尾の毛というのは長いでしょう。昔は、髪の毛も
長く伸ばしていたからね。それに甘い物ね、蜜を括つ
て、蟻が通る前に置いたそうだ。すると、ちょうどそ
こは蟻の通り道だつたらしい。そこで、糸に括られた

んじ置ちやーにさくとう。あんし、次第次第に、うまんかい咥てい来、うぬ糸ぐわーんかいうり括らつと一ぐどう、蟻おうりし貫ちやーに。又大さる綱ぐわー括じやーに、うりからよんなー弓んちさぐとう。

今度お、あんしうれー六十、あまんかい捨ていらつとーしがさんどーりちさぐとう。うりあまんかいうりさぐとう、「とーとーあんせー、六十ー、六十うりせー捨ていてーならんさ」り。うにーからあのー、又全員戻てい来んりぬ話やさ。

昔えなーあんすぐとう、ちやーさうーあぬ、うりさりーがやーりち、やてーんてー。食物んなー、うつさー無えんぐとう、自分くる死ぬらー死なせーりち、うぬ考えやてーしが。

あんさーに、なーうんぐとうし、年寄いぬ、年寄いん宝りち、話。

蜜を引っ張つて、七面も曲がつた物へ通したつて。それから大きな綱に括り、ゆつくり引いて行つたようだ。
そして、その難題は六十一歳になつて捨てられた人が、解いたということであつた。そう答えたので、「そういうことだつたら、六十一歳になつても捨ててはいけない」と。それからまた連れ戻したという話さ。

昔はもう、どうすれば食いぶちを減らすことができるとかということだつたんでしようね。もう食べ物も充分にないから、置き去りにして、そのまま死ぬんだつたら死んでもかまわないという考え方だつたと思う。

それからそのことがあつて、年寄りは宝物だといふことが分かつたという話。

モーイ親方かた注 よめつ嫁釣りよめつ

話者 仲 程 龜（明治二十八年十月十日生）

翻字 田 尻 義 了

あのう、庭に持つて行つて、わざわざ屋敷に鶏を放し、追いかけてですよ。そしたら鶏は取りに行つて、自分の嫁よめ、妻つまになる者ものを見つけたといって、「見ちゃん、見ちゃん（見たよ、見たよ）」しよ。「見ちゃん、見ちゃん」して、もう帰かえつたそうですよ。そんな話を聞いたんですよ。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第十二班（渡慶次歟・仲村渠清美）

注モーイ親方 毛氏八世盛平。伊野波親方（一六四八—一七〇〇）。童名字眞志、唐名毛克盛、順治五年戊子閏三月三日生。父盛紀（毛泰永・尚質王代の三司官）、母尚氏眞伊金、室は毛氏池城親方安憲の女思武太金、長男盛忠（伊野波親雲上）、次男盛任（糸満親雲上）。康熙一九庚申三月任御鎖側職、二三年甲子十二月四日叙紫冠、三三年九月任三司官職加賜知行高三百二十石都合四百石。同十月任大美御殿總大親職。三九年庚辰十一月四日卒寿五三才号瑞泉。

モーイ親方へ難題十一日殿様

話者 仲 程

亀(明治二十八年十月十日生)

翻字・対訳 村山 友江

あのー親あ、三司官^{三司官}りち、モーイ、あぬ人おう
りやたんりしが。

うぬ入ん達や、昔え吟味すてーるばーてー。あんし
薩摩からあんし来しが、ちやーさらーゆたさがりち、
なー苦勞そーるばーてー。うり一ちやていんならんり
言ねー、うれー沖繩ぬ恥やんり。

昔はその人達が、いろいろな事を協議していたよう
だね。そして薩摩から難題が来て、どうすればよいの
だろうと、大変苦労していただそうだ。その難題を一問
でも答えることができなかつたら、もう沖繩にとつて
は大変な恥だつたらしい。

あんせー、すぐとうりち、なー吟味し苦勞そーに。
うぬモーイ親方ぬ來に、今度おあんし来んりち、あん
し。「あんしぇー、私遣らち呉みそーり」言ちさぐとう。
「あー、うれーいえーや、いやー童ぬ、うりないみ」
りち。「あー、貴方達がないみそーらんしが、私がーな
いびん」言ちやぐとう。

そうして難題に対応するために協議しているところ
へ、モーイ親方がやつて来たので、今度はこういう難
題がきているということを話した。するとモーイは「今
度は私を行かせて下さい」と言うと、「これはお前みた
いな子供にできることか」と言われたようだ。「貴方達
にはできなくても私にはできますよ」と、モーイは返
したそつだ。

あんさぐとう、なー、残いぬ三司官達ん、当たい前
うぬ頭ちぶおありそーせー分かいぐとう。「まじ、うりが言

するど、もう残りの三司官達も、モーイが普通の頭
ではないということは分かつてゐるのだからね。「まず、

るむん、遣らち興みそ一れー」りち、さくとう。「あんすみ」りち、遣らちやんり。

あんさぐとう、直ぐあまんじえー、薩摩んじえー、
あんせーあまぬ、あぬ家老から様様おうまんかい座いちやーま居
ぐとう。あんし、沖縄から御用ゆうよ持つち来ん。あんしさ
ぐとう、「御用持つち来れー、とーあんせー入れー」り
ち。あまんじ、「あんしいやーや、あぬ親うりせーる
むんぬ、いやーが来きしえーちやーぬばーが」「私達わたくたあ親うあ
此処こんかいうりすんりちやしが。急に産さん催さいしし、來きうー
さん、私が來きびん」りち。「いやーや、うぬふーじぬ物もの
言いよーし、いつたー親うあ男いぬ産さん催さいしすみ」りち。「あー、
産さん催さいしそーいびん」「男いぬん産さん催さいしすんりちん有あみ」
りち、あまんじなー、じーー。「あー産さん催さいしそーいびん」
りち我わあ張はてい。「確かにあんしえー、産さん催さいしりちえー
無ねえびらに」りち、「男いぬん産さん催さいしすんりちん有あみ」
りち、なーあまー根ね性せいいじそーに。「あんしえー、あぬ
雄鷄うぬ卵たまごりちん有あいびみ」りち、せーぬぐとーんや。
あんさぐとう、うにーねーなー、あまー頭かぶるよ。振ふるて
「あー、なー良よたさん」。

モーイが言うのだから、行かせて『らん』ということになつた。それで「そうか」と、モーイを行かせたそ
うだ。

もう薩摩では、殿様の側には家老が座つていた。モーイが、「沖縄から御用を解いて持つて来ました」と言つたら「御用を解いて持つて来たのだつたら、入りなさい」と中に入れてもらつた。そこで「親に難題を出したのに、どうしておまえが来たのか」「私の親が来るつもりだつたのですが、急に産氣づいてしまつて來る」とができますに私が代わりに来ました」と。「お前はそういうふうな口のきき方をするが、お前の親は男がも産氣づくというのか」と。「いや、産氣づいています」「男がも産氣づくと言つこともあるか」等と、もう何回も言い合つたようだね。それでもモーイは、「産氣づいています」と我を張つたつて。「確かに、男が産氣づくといふことはないのですか」と、「男がも産氣づくといふことがあるのか」と、もう薩摩も性根を悪くしてしまつた。そこで、すかさずモーイは、「だつたら雄鷄の卵たまごいうのがあるんですか」と言つたようだね。そうした
ら、もうその時には殿様は頭を振つてしまつた。「もう

よろしい」と。

「あんし、灰縄へいぢなあ持つち来らびん」りち。灰縄へいぢなあ五十尋ひりがら一さぐとう。うれ一あまうてい、縄つなあ縄つなや一に、うりんかいま巻まきちやーに、立派りつぱうりんかいま火ひ付きやーに、うまんかいまさぐとう。なーうれー、縄つなぬ型かたあ有あせーや、縄つなあ型かたあ有あせー。「此れ一なー灰縄へいぢなやいびん。此れ一縄つなやたしが、焼やきたぐとう。灰へいぢななどーぐとう。灰縄へいぢなやいびさ」「とーあんせーうりんゆたさん。ゆたさぐとう」りち。

あんさーなかい、今度こんどお「あぬ弁びんぬ嶽だき」⁽⁶⁾あぬ、積のむる船ふね無なえびらんぐとう。薩摩さつまぬ船ふね借あらち呉くわみそーり」りち。あまやていん無なえらんせーや。あんさぐとう、「うりんゆたさん」とーりち。なーあまぬ褒ほみたぐとう、うりやん。

今度こんどお、「なー、いやー、望ねみぬぐとー呉くわん。褒美ほび呉くわん」り、さぐとう。「あんし呉くわみせーみ」りち。「私わあ望ねえあんるんやらー、あぬー今日ちゅうひ」日や、うまぬ薩摩さつまぬ殿との様さまなち呉くわみそーり」。あんさぐとう、なーうぬ家老かろうぬ側そばなかいうぬ臣しんか下さん達たちや、「合点がつてんの一ならん」りち、なー。あん言いちさぐとう、「あー、うれー望ねみぬくとーりち、

それから、「灰縄を持つて来らました」と。灰縄は五十尋ひもあつたそうだ。そこで縄を縄つなつて、それを立派に巻いてから火をつけたつて。もう縄の型はあるのだから、焼いても縄の型がそのまま残るでしょ。そうで、焼いても縄の型がそのまま残るでしょ。そうで、「これが灰縄です。これは縄だけ焼いてありますから灰縄になつています」と、「じゃあ、これももうよろしい」と。

私がる言ちよーぐどう。いつたーあびんな」。「あんせー、
今日一日や、薩摩ぬ殿様なち呉みそーり」「とーあんせー、
なり」りやーに。

が望み通りにすると言つたことだから、お前たちは口
出しするな」と言われた。「そういうことでしたら、今
日一日だけ薩摩の殿様にして下さい」「じゃあ、そうし
なさい」ということになつた。

あんせーなかい、なー殿様ぬ座ちよーぬ側んじ、殿
様あ側んかい下ぎやーい、殿様ぬ着物うりさなかい、
装いさーに。うまんじなー、「私ねー今日や、あぬー薩
摩ぬ殿様やぐとう、私が言し聞き。聞かんあらー合点
の一さん」りち、さぐとう。なーうりやせーやうまな
かい、昔ぬ家老りねー側なかいやぐとう。

あんせーなかいうりよ、「あんせー、あぬ私が言し聞
かんあらー、いつたーや、あぬ、合点の一さん。とー
沖繩からぬ砂糖上納ぬ書類持つち来りち「り言ぬせー、
止むお得んなー持つち来んてー、砂糖上納ぬ書類。砂
糖じやつさうりすん、又うりすんりぬ書類ぬ、あんし
立派さつとーし持つち来に。開きてい見じやーなかい、
ちゅうーく燃すたしが、うまうてい。破やーに燃ち。
あんすぐとう根性いじとーるばーてー、うまぬ側ぬ。
あんしーねーなー、うりん殿様ぬうりるやぐとう、あ
んしうりさーに。

モーイが、「私の言うことを聞かないんだつたら、お
前たちは合点ならぬ。沖繩の砂糖上納の書類を持つて
来なさい」と言つたので、もう止むを得ず砂糖上納の
書類を持って來たようだ。砂糖をいくら上納するとい
うふうに書かれた本物の書類を持って來た。そこで、
モーイは書類を開けて見て、見事にそこで燃やしてし
まつた。破つて燃やしてしまつた。すると側にいた人
達は怒つてしまつたのだが、それはもう殿様のやつた
ことだからね……と。

あんしなーうりさーに、直ぐ側邊から、あぬ、槍ぬしきーんよ。槍ぬしきていしーねー、捕つかみーんよ。うぬモーイ親方ぬ、あぬ昔ぬなー武士るやぐとう。あんさーに捕つかみやーなかい、直ぐ前んかいすんち押すやーなかい。あんさーなかい押すていよ、さーなかいしーぬんせー、なーうつささーに、あぬ琴お、琴おうまからうりさーに押すやーなかい、踏らみてい立つちやーに。うりしーねー放さーに、「私ねーなー、殿様あうつさしぇーゆたさいびん」りやーに。なーうつきぬ上納、砂糖上納納みーねーならんぐとう、此れ一焼きわるやるりちる、焼ちよーぐどうよ。

あんさーになー、止むを得んなー、あまーうりさーにしーねー。あんさーになー合点の一ならんりち、槍ぬしきーねー。槍ん側から捕つかみやーい、うりすぐとう。あんさーなかい、なーうりつし、沖縄ぬ砂糖上納や、あんせー納みらんうりやてーるばーてー。あれー、かきにおーらん、砂糖上納りねー、昔え、あぬうり納みーんりねー、ありやたんりんむー。

それから周辺から槍を向けるのだが、槍が向けられると、すかさずモーイ親方はその槍を捕まえてしまつた。昔でいう武士だからね。そうして捕まえて、前に引きずり降ろしてしまつた。琴で槍を受け止め、その人を倒して踏みつけ、その上に立つたつて。それから「私は、殿様はそれだけで良い」と、その人を離してやつた。もうこれだけたくさん砂糖上納を沖縄が納めなくても済むようにと、書類を焼いてしまつた。

モーイ親方が一日殿様になつたので、止むを得なくなつて、もう合点がいかないということで槍を向けたら、側から捕まえられて、押し倒されてしまつた。それで、もう沖縄の砂糖上納は、そんなに多くは納めなくとも済むようになつたということだよ。

昔は、砂糖上納を納めるということは、大変なことだつたからね。

注① 摂政 首里王府の役職名。

②三司官 首里王府の役職名および位階名で、三司官は親方の中から選舉し、薩摩の承諾を受けて任命した。その上には摂政がいるが形式的で、政治の実権は三司官が握つた。

③モーアイ親方 210頁参照

④家老 武家に仕える家臣の長。

⑤弁が嶽 俗にビンヌウタキといい、海拔一二一mで戦前は松などの大木が茂り、神聖な森で航海の目標ともなっていた。御嶽は、大嶽、小嶽の二つあり大嶽は神名を玉ノミウヂ、スデルカワノ御イビツカサといい、久高島への遥拝所を兼ね、小嶽は神名を天子といい、斎場御嶽への遥拝所といわれている。

20 山原と団亀

話者 勢理客 宗武（明治二十六年十月三日生）

翻字・対訳 村山友江

ある人の話なんだよ。もう便意を催したらしい。道さくなただぐどう。な一道ぬ、道通いる途中やぐどうや、

ある人の話なんだよ。もう便意を催したらしい。道



弁が嶽

山ぬ中んじなー、便しつくーりわるやつさーりち。行ん

じなー、此処あ人のー見らんむーりち、うまんかい、

うまんじまたぐどう。

今度お、うぬ糞お歩つちゅたんりるばーてー。歩つ
ちやぐどう。

すると今度は、糞が歩き始めたわけさあ。歩いたか
らね。

山原の旅や 糞
幾旅んさしが

今度う初み

糞ぬ歩つちゅしえー 今度う初み
りち、此れー有たんりるばーてー。龜ぬ上んかいまやー
なかい、うぬ糞お歩つちゅたんり。

糞が歩くのは 今度が初めて
という歌があつたそうだよ。龜の上に糞をしたら、そ
の（龜の上の）糞が歩いたって。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第二班（富村朝夫・西原俊江・生盛史子）

注 山 原 沖縄本島北部、国頭地方の事。山が多いのでそう呼ばれている。

21 果てなし話 へ蟻運び

話者 仲 程 龜（明治二十八年十月十日生）

翻字・対訳 仲村渠 靖

あの、話上手といつて、昔は話上手、話勝負やる

あのう、話上手といつて、昔の話勝負の話なんだよ。

ろうと、山中に糞をしてしまつたようだ。

ばー。もう、二人集まつて、話すんりち。なー負き
てーならんぐとうんりやーなかい、夜な方、話すんりつ
しするばーてー。

もう、話上手の人が二人集まつて、話勝負をするんだつ
て。負けてはいけないということで、夜通し、話をす
るわけだよ。

あんしーねーうりやんり。「あぬよーさい、唐船ぬみー、
あの、蟻お積りつちよーさい。あんし、うり、髪毛し、
括んち、降るちよーさい。あんし又ん、括んち降るち
よーさい」。なー、ひつちー、うぬ話るやぐとうよ。

そうしたら、こういうことだつて。「あのね、唐船の
いっぱいに蟻を載せて来てさ、そして髪の毛で括つて
降ろしてね。そして、またも、括つて降ろしてね」と。
もう、ずつとこの話が続いたわけさあ。

「あー、うれーいやーねー、敵んどー」、唐船ぬみー
ぬ船んでいーねー、あの昔ぬ船んでいーねー、うりん
かい積でーぬ蟻、なーうりしーねー、何日かかていん
うりちやー同ぬ物るやさい。

あんし話やなー、「なー、いやーねー負きたんりち」、
話ぬ有たんりち。笑い話やるばー。

それで、「もう、この話はお前にはかなわないよ」と
いうことになつた。唐船のいっぱい、昔の唐船に積み
込んだ蟻といつたら、もうそれを数えるというのだから、
何日かかつても同じことで、きりがないでしよう。
それで「もう、お前には負けたよ」という話があつ
たつて。笑い話だよ。

注 唐船 中國へ朝貢（貿易）のために遣わされた船。そのほか沖縄では御冠船（冊封使船）をさす場合もあって、その用例はきわめて多様である。しかし沖縄で通常唐船という場合にはほとんど進貢船・接貢船をさしている。あるいはまた往復時の呼び名である渡唐船・帰唐船にたいして略称してただ唐船とよぶことが多い。

22 牧原の始まり

話者 比嘉憲一（明治四十二年三月八日生）

翻字・対訳 村山友江

あぬー、まー、廢藩侍ぬ達あ、あぬー、そこでね。
ちやーさらーましがりち、摂政三司官集まやーに協議
さぬ結果。松山御殿ぬ牧りるとうくま牧場、なーうま
んじ耕ち食みよーりち遣らさつとーん。

うまからあんさーになー、うれー百姓や、せーんら
んぐどう。今度おちやーさがれー、なーあんしんなー、
命凌じゆる為ねーしわるやるりち、牧原んかい派遣さつ
てい。その当時、まー八名ぐらい、あのー侍ぬ達が牧
原んかい来に。農業すんりさぐとう分からん、とー此
れーちやーすぬ物がりちやれー。

今度お、或る人ぬ山原から派遣しわる、百姓から派
遣しわるやるりやーに。耕ちさぐとう、今度おなーい
よいよ教わりやーに、そーんりしが。あんさーに山原
ん人りしん、ただ鍬道具持つち来るまでいるやぐと。あ
んさーになー、侍んかい教する意味し、いよいよなー
山原から來ぐと。山原から來ぐと。

あのう、廢藩の士族、摂政三司官達が今後どのよう
にすれば良いだろうと、集まつて協議をした。その結
果、松山御殿の牧場を耕して、生活するようにと派遣
されたそうだ。

その人達は、百姓をしたことはなかつた。それで、
今度はどうしたのかと言うと、命を凌ぐためにはどう
してもやらなくちゃいけないと、牧原に派遣された。
その当時、まあ八名ぐらいの侍達が牧原にやつて來た。
そこで農業を始めようとしたのだが分からなく、さて
これはどうすれば良いのだろうと思案した。

今度は、ある人が山原の百姓を派遣せねばいけない
と言つて、いよいよその人達から教わつて、農業を始
めたようだ。山原の人達は鍬や農具を持つてやつて來
ただけだつた。それで農業を士族に教えるつもりで、
山原からやつて來たのだからね。

なーうま牧場やしが、なーうま山るやさい。さぐとう、
耕すぬ為ねー、なー作いる為ねー、山原ん人ぬ考え方
ぬ、山切り倒さーに、うぬ道んかい堆肥ほーやーに入
かい踏まさーに、あんさーにうりあぎてい、今度お
堆肥作てい芋お入つたぐとう。あのー、うんにーねー_{でいき}
出来たしが、うぬ前ぬ話や侍ぬ達や分からんるあぐとう。
圃場んかい七ち植ねー大芋りち嬉し、生活そーたんり
ぬ話。

あんさーに、それからまー八名やしが、今度お山原
から相当上がてい来ぐとう。うまー良い所やんどーさー
に、上がてい来れー。とー、なー良い所りやーに、む
る開墾ん開きー勝負さーなかい。いよいよ今度おなー_へ
平和んかい戻ていちやしが。うぬ侍ん、やつぱりなー
続々、今度お首里から良い所やんりやーに、上がてい
ちゃん。あんしうまとーてい、今度おなー三十名ぐら
いなとーたんり、なとーしが。

今度お、うぬ土地や松山御殿ぬ土地やしが、今度お
なーうぬ沖縄台南製糖りち有たしが、砂糖黍作てい、
砂糖あ煮る所。今度お、うぬ松山御殿おうまんかい株
入つち、台南製糖工場んかい株入つちやぐとう。今度お

そこには八名しかいなかつたが、今度は山原から相
当出て來たからね。そこは良い所だからと、みんなで
競つて開墾したそうだ。そうしていよいよ平和になつ
てきたのだが、今度は良い所だということで、首里か
らも士族が続々とやつて來た。そういうふうに三十名
ぐらいになつてしまつたつて。

その土地は松山御殿の土地で、沖縄台南製糖工場と
いうのがあつた。砂糖黍作つて、砂糖を炊く所で、そ
こに松山御殿が株を入つた。沖縄台南製糖工場の株主
になつたけど、事業は失敗してしまつて、土地を売ら

入つちやる為ねー失敗さーに、うぬ土地や売らんあれー

ならん立場んかいなとーたんだー。

今度お、とーなーうれー、入つちよーる人達あ反対。

「売てーならん、うぬ土地や私達あ物るやぐとう」と。

「あー、うれーなー、あまんかい売りわるないぐとう」、

今度お、松山御殿とうぬいつぱいかつぱいぬ有てい。

所謂なー、あんしえーならんりち、うぬ牧原んかい居

る人達あ手拭被てい、当時、鉦・鼓打つち会社んかい

寄し掛けてい。所謂なー、現在のデモみたいな恰好や

たんり。あんしやしが、いよいよ錢に締みらつてい、

金お無ねえんるあぐどう、うぬ人達あ。

さーに、今度お負けやーに、今度お会社地んかいな

たんり意味なでい。今、現在ん会社地やるばーて。あ

んしやしが、なー今度おうりからまー、それでも良い

りち、なー仕方あならんるあぐどう。今度お借地代え

払てい自分なー物食まんあれーならんりぬ事んかいな

てい。なー、現在やなー、戦前ぬ、戦争、此ぬ戦争前

まで一八十世帶居てーぬちむやるばーて。やしがなー、

青年会ん村ぬ一ない農業發展地域やるばー、牧原と

いう所は。

なければいけない立場になつていたんだよ。

さあ、それには開墾して入つてゐる人達が反対。「売つてはいけない、この土地は私達の土地だ」と。「いや、これはもう売らなくちゃいけない」と、松山御殿と一緒に閑着あつたようだ。そうさせてはいけないと、この牧原の人達は手拭いをかぶり鉦・太鼓を打ち鳴らしながら、会社に押し寄せて行つた。所謂、現在のデモみたいなものだつたつて。そうだつたが、いよいよ金に締めつけられてしまつた。その人達は金はないのだから。

それで、今度は負けて、会社の土地になつたつて。

今現在は会社の土地さあ。そうなつたのだが、もうそれでも良いからと、仕方がないのだからね。今度は借地代を払つてでも、自分達も生活をしていかねばならないといふことでね。戦争前までは八十世帯あつたそ
うだ。青年会も村で一番といふほどの農業發展地域になつてゐたわけさあ、牧原という所は。

あんさーなかい、今度おあのー青年会ん七、八十名
居い。なー八十世帯びかーん部落んかいなてい。発展
ぬ牧原やたしが戦んかいうりきーに、現在ん、戦んか
い追つい、今、現在ぬ調子などーるばー。まー凡そ
ぬふーじなどーるばー、話。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第十一班（村山義隆・石垣みづえ・赤嶺健）

注①廃藩置県 明治四年七月十四日、日本全国の藩を廃し、府県に改めた変革的処置。沖縄においては、版籍奉遷のステップを踏まず、
廃藩置県も明治十二年のことで、そのいきさつも全国に比べてきわだつて異なり、いわゆる琉球処分という形で行われた。

②摂政三司官 26頁参照

③松山御殿 尚順（一八七三～一九四五）。琉球最後の国王尚泰の四男。一八八五年（明治十八年）八月、松山の名島を領して松山王子と称し、また松山御殿とも呼ばれた。

④山 原 217頁参照

⑤台南製糖工場 大正初期～昭和初期の製糖会社。一九一三年（大正二年）資本金三百万円で設立され、台湾に本社を置いた。

23 牧原の坊主御主井戸

話者 津波ウト(明治四十二年五月十日生)

翻字 村山友江

山の下の田圃の方に、そこにあのう、簡単な溝ですがね。こつちあのう牧原ぬ九月拌み、またあのう師走拌み、また初御願とかよく拌んでいますがね。

その時に、こんなあのう坊主御主がうさがてーぬ井戸り(坊主御主が飲まれた井戸つて)。そこを拌んでいる。その坊主御主といいう方は、牧原の馬番に当たつて、あのう首里の方から、いらっしゃつたといいう話があります。これ伝え話を聞いているんだから、あんまり詳しいことは分からぬ。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第七班(知花利江子・島尻博光・名嘉真宣勝)

24 天川坂の話

話者 仲程 龜(明治二十八年十月十日生)

翻字・対訳 村山友江

比謝橋え、今ぬあぬーバスぬうまんかい終点ぬ有せー
や。うまー天川坂りち、うまんかい井戸ん有たんよ。

うまんかい、天川ガーリち、ヒージャーガーリち二
ち有たしが。うまー、かんしし行じやーま、天川坂り

比謝橋の近くに、バスの終点(昭和五二年当時)が
あるでしょう。そこに天川坂といいう井戸があつたよ。
そこは天川ガーといつて、ヒージャーガーが二つも
あつたがね。そこは、昔は天川坂と言われていた。

ねーありやたしが。

やぐとう、うまーゆかい坂やんよ。天川坂あ、石畳みてー。あんすぐとう、うま昔え立派さつとーたしが、多分うまからうり下り、流らしーねー来んりぬ計算やてーるばーてー。

あんし、あま行ちゆる間冷まいせーや。あん、うちゅ食やーなかい元気なでー、殺さつたんりぬ話る。とーうれー、ウケーメーやていん流りていいちゅせーなー、あま行ちゆる間冷まいる物ぬ、青冷じゆるーないくとう、うれー食まーなかい。足んれー湯げーりーぬあたいやらんさひやー。あんすぐとう、昔話りせー可笑しい物やさ。

そこは急な坂だつたよ。天川坂といつて、石畠さあ。昔は立派にされていたはずだが。多分その坂から（お粥）を流したら、敵が攻めて来ないという計算だつたわけでしよう。

しかし、坂を流れて行く間にはお粥も冷めてしまうでしよう。それを食べて元気になつて、逆にやつつけられてしまつたという話。お粥だつて流れ、あつちに行く間には冷めてしまうのに、それでやつつけるというほどのものではないさあ。だから昔話というのはおかしいものだよ。



天川坂

注①比謝橋 嘉手納町と読谷村の境を流れる比謝川にかかる

いる橋。戦前までは石橋であつた。

②天川坂 読谷村から嘉手納に差しかかる急な坂道。戦前は石畠だつた。

翻字・対訳 宮城昭美

昔あぬよ、首里ぬ御殿殿内んかいてー、なーうまん
 かい下男子そーる男ぬ居てーるばー。あんし、うぬ、
 下男子あ、なー大変美ら容姿なやーに。又うまぬウミ
 ングワとうてー、ウミングワとうぐーなやーに、妊娠
 しみたぐとうや。妊娠しみたれー、うまねー置かんな
 てい、なー島流ししわるやるりち。此ぬ妊娠おしーま
 ま宮古んかい島流しさつてい、此ぬ女ん子あ。

島流しさつたぐとう、うれーあぬウミングワーなー
 あまんじ、山ぬ中んじ、此ぬ子あ産ちてー、産ち。自分
 め着物はじやーなかい、此ぬ赤ん子あ包りうまんかい
 寝しとーていや。自分やなー、自殺せーるーばーてー。

自殺しさぐとう、あぬー、此ぬウミングワー、寝ん
 してーるウミングワー、犬ぬ、犬ぬ搜めーやーに。犬
 ぬなー乳い飲まち育ててい。あんし犬ぬ乳い飲まち
 育てていありさんりさりち。あんさーにる宮古お犬
 神信じとーんりちる話い聞ちやしが。

昔ね、首里の御殿殿内に下男として働いている男が
 いたらし。その下男は大変な美青年だつたらしく、
 そこの娘と仲良くなつてしまつて、娘は身籠もつてし
 まつた。娘が身籠もつてしまつたので、そこに置いて
 おくわけにはいかない、島流しせねばいけないという
 ことになつてしまつた。そして、身籠もつたまま宮古
 に島流しされてしまつたわけさあ、この娘は。

島流しされたので、娘はその山の中で赤子を生ん
 だようだ。そして、自分の着けていた着物を脱いで赤
 子を包んで寝かせ、自分はそのまま自殺したようだね。

自殺した娘が生んだ子を犬が見つけて、乳を飲ませ
 て育てたつて。そうして犬が乳を飲ませて育てたとい
 うことで、そういう意味で宮古は犬の神を信じている
 という話を聞いた。

注①御殿殿内 王子・按司の家、またはその人をさす敬称。一般に王族の家や建物を意味する語である。

②ウミングワ 主人の子。または他人の子の敬称。

③島流し 遠く離れた土地へ追いやること。

26 赤犬子へ暗川発見

話者 仲 程 亀 (明治二十八年十月十日生)

翻字 仲村渠 靖

あの犬が、みんなこの川を、水が出る所を分からなかつたそうですよ。毎日この、濡れて出てきよつたそうですよ。もう、こつち、珍しいなあと言つて入つたから、水。僕達の小さい時はなあ、あつちの水はクラガード^桂と言つて、暗い川です。クラガードと言つて、スピクラガードと言つて、暗い。暗いから、こう下りて行つて、行きよつたが。あの、そして行つたら、もう水がゴンゴン出ておつたですよ。その水は、また海に行きよつたそうですよ。このクラガードの水は。

そしてこの犬出てきた。濡れて出るから、珍しいもんと言つて、あのう見たから、もう水がどんどん出てその後から、楚辺のあの部落民は、そつちから井戸を、水を汲んだそうですよ。私の小さい時にはなあ、行つてみたが。

あの水は昔は桶があつたでしよう、こんな。三味線の始まいだし。僕もちよつと話は聞いたが。ちょっと赤犬子、三味線の始まりはもう、その辺は昔はもう、

この糸(いと)
(弦)(げん)もないでしよう。そんなもんでしょうね。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査團第十二班〈渡慶次煦・仲村渠清美〉

注①クラガー 旧楚辺部落にあり、鍾乳洞を流れる地下水源で、戦前は飲料水として利用されていた。洞窟が暗いので、クラガー(暗川)の名前がついている。現在は米軍用地になっている。

②赤犬子 読谷村字楚辺出身と言われてゐるが、生没年未詳。楚辺部落では毎年旧暦九月二十日にアカヌク祭りを催し、五穀を中國よりもたらした恩人として崇高している。また、おもろ歌唱者としても有名である。古典音楽の世界では三線歌謡を始めた人として信仰されている。



赤犬子宮

27

お茶一杯

話者 勢理客 宗 武(明治二十六年十月三日生)

翻字・対訳 村山友江

あぬー、「一茶碗茶あ飲むな」りぬ意味えや、あぬ「急

あのう、「お茶一杯は飲むな」という意味はね、「急

が一回り」りしと一同ぬ物。あぬ、一茶碗飲り行ち
ねーや、難遭たいぬ場合ぬ有ぐとう。御茶あ二茶碗お
飲み。うぬ間ねー、うぬ難遭たいし、一茶碗飲り行ちー
ねー、どうく早さぬ難遭たいしやしが、二杯ぬん飲り
行けー。うぬ難遭たいんり、災難遭たいんり。遭たい
ぐどう茶あ二茶碗飲みり。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査團第二班（富村朝夫・西原俊江・生盛史子）

28 黒金座主と北谷王子

話者 仲 程 龜（明治二十八年十月十日生）

翻字・対訳 村 山 友 江

昔の、あの黒金座主。あれはあのー、術掛きーたん
りち、黒金座主ぬ話や聞ちやしが。

あれは黒金座主といつて非常に、あのー忍術、術掛

けてよ。この黒金座主。あま此処全部うりしさーにさ

ぐとう。首里ぬあのー、あー此れ一術掛きて、うりしえー

すぐとう。そうしてあつちから黒金座主、北谷王子と

いうものは有名な物ですから、それと一緒に行つたそ

がば回れ」というのと同じだよ。お茶を一杯飲んで行
くと災難に遭うことがあるからね。お茶は二杯飲んで
行きなさいって。その間には難を逃れることができる
から、余りにも行くのが早くて難に遭うのだから、二
杯は飲んで行きなさい。一杯だけ飲んで急いで行くと、
災難に遭うから、お茶は二杯飲みなさいって。

昔の、あの黒金座主。黒金座主は術を使うという話を
聞いたが。

あれは黒金座主といつて、大変術をかけるのがうま
かつた。黒金座主はそういうふうにして、あちこち荒
し回つていたようだ。そうして首里の方で、このまま
ではいけないと思つたんでしようね。有名な北谷王子
と一緒に、この黒金座主というのは、確かに女を騙し

うですな。この黒金座主りしえー、確かに女騙かすが

やーりち。

昔え、あぬ女ぬ、あぬ後ろ髪、結んでおるでしよう。こつちにあの簪といつて、この子供のこれは、あの髪は後ろんかいたつくわーすんりち。今芝居の物は髪が結んであるでしよう。こつちにあの一簪といつたような、たつくわーしてこんなして。これに入れて。

もう黒金座主の所に行つて、これ易するふーじやてーんよ、人ぬ。あんすべとう、うまんかい行じさぐとう、言んねーすんねー後ぬ簪え分かいしえーやー。押すらつとーしえ一分かいしえー、たつぴらきーぐどう。あんさぐとう、「あー、此れー確かにあんしえー、嫌な騙かするむん」りやーに。

今度お、あぬ北谷王子、うぬ人が、北谷王子ぬ、あんざーなかいうりさぐとう。北谷王子りしえーなー、文学ぬうりやぐとう、術お掛けーうーさんでーるばー。あんさぐとう、うぬ碁う打つちゅんりしーに。二人碁う打つちーに、あんざーなかい騙かすんりそーしが、お箸立ていやーに逃んぎーたんり。あんざーに、北谷王子ぬ、直ぐ「此れー！」りやーに、直ぐ切り飛

昔の女性は、あの後ろ髪を結んでいるでしよう。こつちに簪をつけて、子どもの髪も後ろに結んでね。今の芝居でも髪は結つてあるでしよう。こういうふうにして、簪でとめてあるでしよう。

黒金座主は、易者でもあつたようだ。そこへ行つてみると、もう後の簪が乱れていることで、乱暴されたということは分かるさあ、髪が乱れていたので、「ああ、確かにこいつは女は騙すんだな」ということが分かつた。

それで今度は、北谷王子が出向いたようだね。すると、北谷王子は文學者でもあるから、術をかけることができなかつたわけだ。

それで二人で碁を打つことになつてね。二人で碁を打つてゐる時に、(北谷王子)を騙そうとしたが、術をかけることができずにお箸を立てて逃げてしまつたつて。すると、北谷王子は「こいつは！」と言ひなり、

ぱちえーるぐとーんやー、黒金座主くるかにざーしゅえ。

あんさーにかい、うれー悪物やなむらやくとうりち。今度こんどお
あぬ人ぬ多く通いるアジマーんかい、葬てーてーんばー。

あんしうれー、あぬ逆立ち幽靈さかだいゆうれいりち。昔んかしえ、あぬ「大

村御殿むらうどんぬ角かくなかい、耳切り坊主みみちぬ立たつちゆんんどー」し、

歌ぬ有あたしが。うれー、あぬ昔んかし、大村御殿うあむらうどんりーねー、

あぬ今なまあ無ねえんなとーしが、中城御殿なかじゆうどんりち有あたしえー

やー。後から儀保じいほぬ裏うちから行いつて、こう上のぼつて中城なかじゆう御殿うどん。

御殿うどんつてこつちあるでしょ。こつちに又リングムイ

か何か、今何いまなになつておるかなー、リングムイ。

あんさーなかい、昔くわせえ大村御殿うあむらうどんりち、御殿うどんと言いうた
ら、あの王おうの兄弟きょうだいですからな。後からあのー、又、中
城なかじゆう御殿うどんになつて、そつちに葬さつてあつたんですよ。

あんすくどう、あの逆立ち幽靈さかだいゆうれいりち、あんしるうま
んかいむる逆さかなでい、うぬ黒金座主くろかにざーしゅ出しじーたんりち。

あんさーなかい、あぬうれー又別またんかい持もつち行いじ
うりさんり。葬さすたんりぬ話はなし。

昔くわせぬあぬ、唐船ドーイにあるでしょ。

首里すいに響ひびまりる

大村御殿うあむらうどんぬヒラマーチヤー

すぐさま黒金座主を叩き切つてしまつた。

そして、黒金座主は悪者だからということで、今度は人通りの多い十字路に葬つたようだ。すると、逆立ち幽靈といつて、昔、「大村御殿の角に耳切り坊主が立つよ」という歌もあつたでしょ。あの大村御殿というのは、今はいいのだが、以前は中城御殿つてあつたでしょ。後には、儀保の裏手から上つた所にあつたのだが。リングムイか何かがあつたと思うが、今はどの辺になつているのかなあ。

そうして、昔は大村御殿といつて、御殿というのは王様の兄弟ですからね。後に、中城御殿になつて、そつちに移つて行つたんですよ。

だから、あの逆立ち幽靈というのは、逆立ち幽靈となつて黒金座主は現われるようになつたんだつて。

そういうわけで、黒金座主を別の場所に移して葬つたという話だよ。

昔の唐船ドーイの歌詞にもあるでしょ。

首里に名高い

大村御殿の平松ひらまつよ

後で行つて、中城御殿になつてからヒラマーチャーを見に行つたが、見事な物でしたよ。

後で中城御殿になつてからヒラマーチャーを見に行つたが、見事な物でしたよ。

採集S2・5・8 読谷村民話調査団第十二班（渡慶次歟・仲村渠清美）

注①黒金座主 護国寺の住職を勤めたこともある盛海座主だとされる。黒金座主は妖術で女色を漁り世間の人を惑わしていたが、ついには北谷王子に耳を切り落とされ討ち取られる。

②北谷王子 北谷朝愛（一六五〇～一七一九）。尚貞王時代の摂政。唐名は尚弘才。尚貞王の四子として生まれ、北谷王子と称した。

③大村御殿 現・県立博物館敷地内に、一八七〇年に中城御殿が造営されるまでは、同敷地内に大村御殿があつたという。

④中城御殿 世子殿の俗称。尚豊王代（一六二一～一六四〇）の創建。創建当時の場所は現首里高校敷地内にあたる。殿の本門は綾門大道に面し、東に道を隔てて大美御殿が隣接。一八七〇年に龍潭に面する地に新しく造営され、同七三年に竣工。同七五年に世子の移住が行われた。

⑤リングムイ（蓮小堀） クムイとは溜池のことで、リングムイは現首里公民館敷地内にあつた。

⑥唐船ドーイ 琉球民謡。唐船が中国から帰つて来たことを知らせた歌である。

逆立ち幽靈

29

話者 仲 程 龜（明治二十八年十月十日生）

翻字・対訳 村 山 友 江

昔、うぬ夫婦じこー可愛つしありさぐとう。なーう

昔、大麥仲の良い夫婦がいたそだ。そだして夫が

りやたんり。今度お、男ぬうりさーなかい。なーあん
しえー、あぬ「いやーとう私とー、なーあんしえー何
時までいんうりさーやー」りちそーしが、今度お、「あ
んし済むん」りやーに。

あんしうぬ男ぬ、鼻切つちやぐとーよ、あんさーに
鼻はなあゴーゴーなどーしえーやー。あんしうり見じゅし
んれー、男あなー、好かんさーに。別ぬ女とう又うりつ
し。あのーうれーなー搜めーやーに。あんさーにうりつ
し、焦がりてい死じえーるばーてー。うぬ置つちゃん
ぎらつたぐどう。

あんさーにうれー、男あ又別ぬ女とう、うりつしさ
ぐどう。今度お、なーうれー、うりんかい焦がり死に
そーぐどう。多分うまんかい行じ、うぬ女お、何がら病や
まさつてーんてー。

あんさぐどうなー、男ん病まちさぐどう。あんしあ
ぬ、うぬうりがてー、鼻切らつとーしがうりさぐどう
うれーかんし、あんしきーにやくとうりち。池城親方
りたがやー、うぬ入ん会ちやていさくとう、あんし話
し。うりん幽靈なでいたた立つちゅたんり。うぬ鼻切らつ
とーし。

妻に、「お前と私はいつまでも一緒だよ」と言つたん
でしょうね。そして妻も「それでいいよ」と。

そこで、夫が妻の鼻を切つてしまつたようだ。する
と鼻は穴があいて、醜くなつてしまつたので、夫はだ
んだん妻への愛情が冷めてきてね。別の女性を好きに
なるようになつてしまつた。すると、妻はもう夫に惚
れているものだから、そこで焦がれ死んだようだ。夫
に見捨てられてしまつたのでね。

夫が別の女性と一緒になつたので、妻は焦がれ死ん
でしまつた。多分そこに行つて、その女性に病でもも
たらしたんでしようね。

それから夫も病気になつてしまつた。この鼻を切ら
れた妻の怨念がそうしたものだから、池城親方という
方がこのままではいけないと思つてね。その人に会い
に行つたようだ。すると、その鼻を切られた女性は幽
靈になつて、そこに立つていたつて。

あんさーに、「何んち、いやーやうんぐとうし立つち
うんぐどうすが。いやーうぐとうーしーねーならんどー
やー。後生こうせいんかい行ゆきじから、かんし人ひと取といんりさに」
「あー、私が人取といるむのー有あいびらん。私見みじやー
にかいる、全員人ひとお病氣びょうきさびーぐとう」「あんしいやー
や何なぬ為ために立たつちゅが」りちさくとう。「あー、実じえか
んやいびんどー」りち、うぬ話はなしいさぐとう。「あんし元もと
ぬうれー薄情はくじょう男おとこ私わたくしねーうんぐとうしから、私がうん
ぐとうなたぐとう、なー妻めえならんりやーにうりつし。
私わたくしねーなーうんぐとうし世間せきんならん、死死じそーしが、
是非じひ此こり仇かた取りわるやしがりちそーしが。あまぬ、家や
なかいや符札ふさだ貼はらつとーぐとう。あぬー行ゆきじん行ゆきから
んぐとう、うり取とりいる、うつたー精ひだりい取とりいるうりん無な
いびらん」りさぐとう。「あんやん、うんぐとーぬ薄情はくじょう
者わたくしやれー、とーうれー、あぬわたくし私が符札ふさだ剝むきじゅぐとう」。
(符札ふさだりしぇーうまんかい貼はらつとーし。昔むかしえうんな
物ものお、坊主ぼうしぬ書かちやーまうりすぐとう。悪者わるものんれー來く
んてーんばーてー)。

それで、「どうしてあなたはそのように立っているのか、あなたはそんなことをしてはいけないよ。後生の者となつて、このように人（命）を取つてはいるそうだね」と聞くと、「私が人の命を取つてはいるのではありません。私を見た者が病気になるのですよ」と答えた。「それであなたは何のために立つてはいるのか」と聞いた。夫は薄情な男で、私がこのような姿になつたら、妻にしてはおけないということで捨てられてしまつたのです。それで、私は世間に顔向けるもできなくなつて、死んでしまつたんですよ。是非、この男に仇を討ちたいと思つてはいるが、あそこの家には護符が貼られていて、入つて行こうにも行くことができないのであります。だからあの一人の魂を取ることもできません」と言つた。「どうか、そんな薄情な男だつたら、じゃあ、そういうことだつたら私が護符を剥いでやろう」（護符というのは、そこに貼られているのさあ。坊主が書いたのを貼つてあるから、悪者が来ないわけさ）。

それから、池城親方が行つて護符を剥いでしまつた。 そうしたら、その家は滅びてしまつたつて。

ねーうま滅ばちさぐとう。

今度お、うぬ為なかい「貴方んかい何んうれーなら
んぐとう。貴方が墓ぬ風水くでいうさぎら」りち。あ
ぬ今度お、池城親方ぬマカンジャーぬうまなかい、風
水くでいせーぬぐとーんや、うぬうりが。

あんしうまー、うま掘いるなかい鯉ぬ三匹うまんか
い入つちょーしが。うま泉ぬ有てーるばーてー。鯉ぬ
入つちすしが。「うりーちん、全部殺さんよーくー取い
るむんやれー、貴方なー三代三司官りねー、大事な昔
ぬうり続ちゅんどー。一ちやていんあんし殺しーねー
一代頭ないびんどー」。昔ぬ三司官りねーなー、大事な
うりやるばーてー。うり三代続ちゅしが、一ちやてい
ん殺しーねー、一代武士るないびんどーりち。さぐとう
「あんやみ」りち。

なーじゅんに掘たぐとう、うま掘ていさぐとう、う
ぬ石大工ぬ誤ていさーに、一ちえー死なちえーぬぐとー
んやー。あんさぐどうなー、うぬ三司官りねー、あぬ
一代武士るなたんり。あんさーに、うまー風水い出じ
てい。うまぬ私達あうりしから、一回の一行じ見ちょー
しが、立派墓あさつとーしが。うまだてーぬうりやし

今度は、女性が池城親方に「貴方に何もして差し上
げられないから、お礼に貴方の墓の風水を見てさしあ
げましよう」と言つたようだね。そうして女性は池城
親方のマカンジャーの風水をみて上げたそうだね。

そこには湧泉があつたようで、三匹の鯉が入つてい
たようだ。女性が言うには、「そこを掘る時に、鯉を一
匹も殺さずに掘ることができたら、貴方方は三代三司
官が続きます。しかし、一匹でも殺してしまつたら一
代の頭で終わりますよ」ということだつたつて。もう
昔の三司官といえば大変な役職だつたわけさあ。それ
が三代も続くといふのだが、もし一匹でも殺してしまつ
たら一代ですよと言われた。「ああ、そうか」と。

もう実際に掘つてみたら、石大工が誤つて鯉を一匹
殺してしまつたようだね。そうしたらもう、この三司
官は一代かぎりだつたんだつて。そこはそういう風水
が出たんだつて。私達は一回行つてみたが、墓は立派
に造られていたがね。そういう話さ。マカンジャーの
幽靈というのは。

が、うぬ話やさ、マカンジヤー^{達^④}ぬ幽靈りし。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第十二班（渡慶次歟・仲村渠清美）

注①符札（護符） 病氣・天災などの災厄がふりかかるのを防護するために、その効力を期待して用いる符のこと。

②風水 古代中国に発生した土地の吉凶（善惡）評価法。風水説・風水思想・風水地理学などの名称で呼ばれる。語源は（藏風得水）といわれるが定かでない。

③マカンジヤー（真嘉比路） 那霸市首里儀保から末吉をへて、現在の古島の松島中学校の前から真嘉比・安里と迂回し、崇元寺下馬碑の前にある道。かつては首里く那霸を結ぶ間道で、沿道には墓地などがあつて寂しいところだつた。

④三司官 216頁参照

30 中城若松

話者 勢理客 宗 武（明治二十六年十月三日生）

翻字・対訳 村山友江

中城若松え首里生まりがやーり思いしが、中城生ま
りやたんりぬ話え有るばーてー。ありが若さいにる話
やたぬ筈はずやしが、うれー、うりん劇げきんかい有たしる見
ち。うれ一年寄よん達たから聞きちえー無むえんばーて。
何なうれー、うぬまんぐらぬ物ものとうしえー、えー支那しな

中城若松は首里生まれだと思うのだが、中城生まれだつたという話もあるわけさあ。若松が若い時の話だつたと思うのだが、それは芝居で見て知つてゐる。その話は、年寄りから聞いたのではない。

その頃の話としては、支那に学問（勉強）しに行く

ぬ学問、ゆ一勉強しーが。又、首里てー、うぬ人ぬ士族むていやたんりぬばーてー。平民からー、うんな勉強しーが行ちゅしん居たぬ筈やしが。平民から上あらんぐとう、ウンタマギル一話ぬ「地頭代まりるない」りちやぐとう、盜人んかいなたんりぬ話ん有せーやー。あんさーにうぬまんぐらー、誰がなー学問習たんてーん、上あがらんりぬふーじなやーなかい、そーる世やくとうてー。

やしが、中城若松りしぇー、やつぱし若松やぐとう士族方やてーんや。あんし、うりが首里、首里んかい、あぬ上代りぬむんぬ有たしが、勤めてー、あまんかい通てー勤めするばすに。

何がりれー、首里勤みしーが通とーる場合に、或る所うてい、夜やてい、暗闇やたんりしが。あぬー、少え行く先ぬあんまり良い具合ねー暗さぬ歩つかんなていそーいねー、道ぬ側うてい、火ぬ明がいたんりー。うまー人ぬ家庭やさやーりち、入つちんちやぐとう、美ら女ぬ居たんり。うぬ美ら女おカニてー、うぬうれー死じょーるばーてー。死じょーしが、生ちちょーんりち、うぬ中城若松望どーたんりぬ話やるばー。あんや

という話もよくあつた。その人も首里あたりの士族出身だつたそうだ。当時は、平民が支那などに勉強しに行く人もいたはずだが、平民からは上がるることはできぬ。ウンタマギル一も「地頭代までしか上がれない」と言われたから、盜人になつたという話さあね。だからその頃は、学問ができるからといって、誰でも出世できるという世の中ではなかつたらしい。

だけど、中城若松というのは、士族だつたんでしょうね。その人は首里の方に勤めていたそうだ。そこに通つている時の話だつた。

首里勤めしていく通つているうちに、ある所で夜になり暗くなつたらしい。暗くなつて行く先もあまり見えず歩きにくくなつていて、明かりが見えたそうだ。その民家に入つて行つたら、美しい女性がいたつて。その女性は、実は死んだ人だつた。死んでいるのだが、生きている人みたいに、中城若松を望んでいたという話だよ。

しが、うりが死じまでいん、うぬ中城若松え望どーん
りぬばー。

さーなかい、うぬ首里上代しーが行ちーぬ途中道
ぬ側うてい火ぬ明がたぐとう。少えうま明りん有るむ
ん行じんだりち。あんさーに行じやぐとう。行じぬう
れー、後生ぬ人んれー思んたる筈やしが。火い明がら
ちやぐとう、なー話ぬ、あんさーになー「うまんかい
泊までいめんそーり」りちやぐとう。なーうにーからー、
「はー、此れー後生ぬ者るやさやー」りち。なーちやー
しん凌じゆる考えし。なー恋話ぬ、うぬ女ぬ出じたぐ
とう。「あー、私ねーなーうまんかいや泊まらうんぐとう、
遣らちとうらし」りち、「ちやーしん泊まれー」りちそー
るぐとーしが。なー泊までい恋しどうらしりちぬふー
じし願いたんりしが、聞かんるあたんりむぬ。後生ぬ
人ぬ、うんにーからーやんりち分かとーぐとう。
あんしーねー、なー何度願つていいん聞かんるあぐとう。

うぬ歌あ

男生まりとてい恋知らぬ者や

玉ぬ盆ぬ底ん見らぬ

りち。うぬ女ぬ歌作て一ぬぐとーん。あんさぐとう、

もう何度願つても聞き入れてくれなかつたので

男に生まれて恋知らぬ者は

玉の盆の底も見えぬ

と女性が歌つた。すると、若松は

そうして、明かりのついている民家に入つて行つた。
入つて行く時には、中にいるその女性を後生の人とは
思わなかつたんでしよう。それで話をしていくうちに
女性に、「ここに泊まつていつて下さい」と言われた。
もうその時から、「はあ、これは後生の者だな」と分か
り、どうしても逃れなければいけないと考えた。その
うちに女性から恋話が出たので、「私はここに泊まるこ
とはできないから、行かせてくれ」と断わるのだが、

「どうしても泊まつて下さい」と聞き入れてくれなかつ
た。女性としては、一晩だけでも一緒に過ごしたいと
いう様子で願つたのだが、若松は聞き入れなかつた。

うぬ若松え又

女生まりとてい義理知らん者や

うりる此ぬ世ぬ中ぬ地獄定み

りち。

あんさーなかい、うんにーから逃んぎーぬ考かげえし。
あん言やーなかい、なー逃ひんぎていそーぬぐとーん。
ちやー追おいさつたんり。

うんぐどうさぐとう、何ぐわうれー首里んかいぬ勤ちぢめ
みるやしが、うり劇げきなかい有しんれーや、那霸なはぬ波な之上じょうぬ所ところままりちやー追おいさつてい。ありんかい逃ひんぎてい
行いじやんり。あまんじ、後あとお、あまー波なみ之上じょうなかいや
長老ちよろうぬ居ゐたんりがらー。うまんかい逃ひんぎてい行いじやー
に、「あんあんし私わねー追おうつてい来きしが、なー隠くらち具ぐ
りりち、坊主ぼうしぬ居ゐん所ところんかい行いじやぐとう。なー何ま処し
までいん搜さめーいるすぐとう、うぬ女めのお。

あんさーなかい今度こんどお、あまぬ鐘かね。何うんにーぬ人ひとお
銅鑼鐘どうらがね、開静けいじょうぬ鐘かねりち名なや付つけちょーる筈はずやしが。銅鑼鐘どうら
鐘がり言いたんよ(なー下さき)ンつし打うちつちゅしえー。今いまあ何なりが言いちょーらー分わけ
からんしが)。うりつし押おすやーなかい、なーうぬ嫌いやな

女に生まれて義理知らぬ者は
これこそ世の中の地獄のようだ

と返した。

そうして、その時からは逃げるつもりで、そう言つて逃げたようだ。しかし、女性はずつと追つて来たつて。

若松は首里勤めだつたはずだが、那霸の海上宮の所までずつと追われて來た。海上宮まで逃げ延びて來たら、海上宮には長老がいたそうだ。それでも女がどこまでも追つて來たので、「こうこういうことで、私はこのように追われて來たのだが、匿かくつてくれ」と、坊主の所に駆け込んで行つた。

そうして今度は、そこには銅鑼鐘、開静の鐘と名が付いていたようだが。そのような吊り鐘には銅鑼鐘と言つていたよ。その鐘の中に隠れたら、後生の女は隠れているのは分かるのだが、どうすることもできなかつた。そういううちに坊主達が経文を読み始め、後

後生ごせいぬ女めのわお、うりんかい押おさすらつとーんりちえー分ぶんか
とーしがなー、ありさーい。あんするうちねー、坊ぼう
主じたどいう話はなだよ。

ぬ達ぢやーが經文きよひん読よまーなかい、退ぬけきたんり。あんさーま、
うぬ後あとから出でじたんりさりぬ話はな。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査團第二班 〔富村朝夫・西原俊江・生盛史子〕

注①中城若松 組踊「執心鐘入」の主人公で恋や縁を知らぬ若者として設定され、ひたすら首里しゆり奉公あるのみと行動する人物に仕上げ

られ、組踊上演当時の儒教道德思想の権化だと評されている。現在、北中城村安谷屋の小高い丘に若松の墓と称するものがある。

②ウンタマギルー（運玉義留） 沖縄おきなわで有名な義賊。

③地頭代 地方役人で間切行政の最高責任者。現在の村長に近い。

④波上宮 琉球八社の一つ。熊野三社五權を祀り、祭神は本宮が伊弉
冉尊、相殿は左に速玉男尊、右に事解男尊の三神を奉祀。『琉球神
道記』に「此權現ハ、琉球第一大靈現ナリ。建立ノ時代ハ遠シテ人
知ラズ」とある。創建年代は不明であるが、元来護国寺の鎮守社と
して勧請したものである。那覇市若狭の海岸に突出した断崖の上に
所在。

⑤開静の鐘 夜明けにつく寺院の鐘のこと。



組踊「執心鐘入」

猫化け

話者 仲 程 龜 (明治二十八年十月十日生)

翻字 照屋 将人

猫はあるう、長らく養つたら化けるという話を聞いたんです。

あれは昔はな、もう猫を年を取つて放す時には、昔は一厘錢があつたでしよう。ミースチャー^注。それを三百といつて、あのう六厘。それを首にかけて放したそうですよ。そんな話を聞いたんです。

養つたら主取るといつてなあ。こつちの主人に何かあつたそうです。昔から放す時には、「もうお前はこの金をくれたから、こつちに来ないよう」、そんな話。

あのう昔、牧原と屋良とは、川を、比謝川を隔ててですな、あつちに拝みに行つて。この前、もう牧原にハツミ川といつてあつたのですが。

この猫はもう年を取つているから、あのう屋良ウグワンに、ウグワンといつてあるつてよ、今。どつちもウグワン。そつちへ持つて行つて放したわけ。持つて行つて、人に持たせて放したら、すぐに来ておつたそうですよ。大きな川ですがな。そつちから。

それから、またそつちのお婆が「ああ、これこうしてはいかん」と言つて、錢、その時の三百と言つて六厘。それを首にかけてね、「もう、お前はこつちの者ではないから帰れ」と言つて。その時から帰つて来なかつたという話を聞いておつたんですよ。

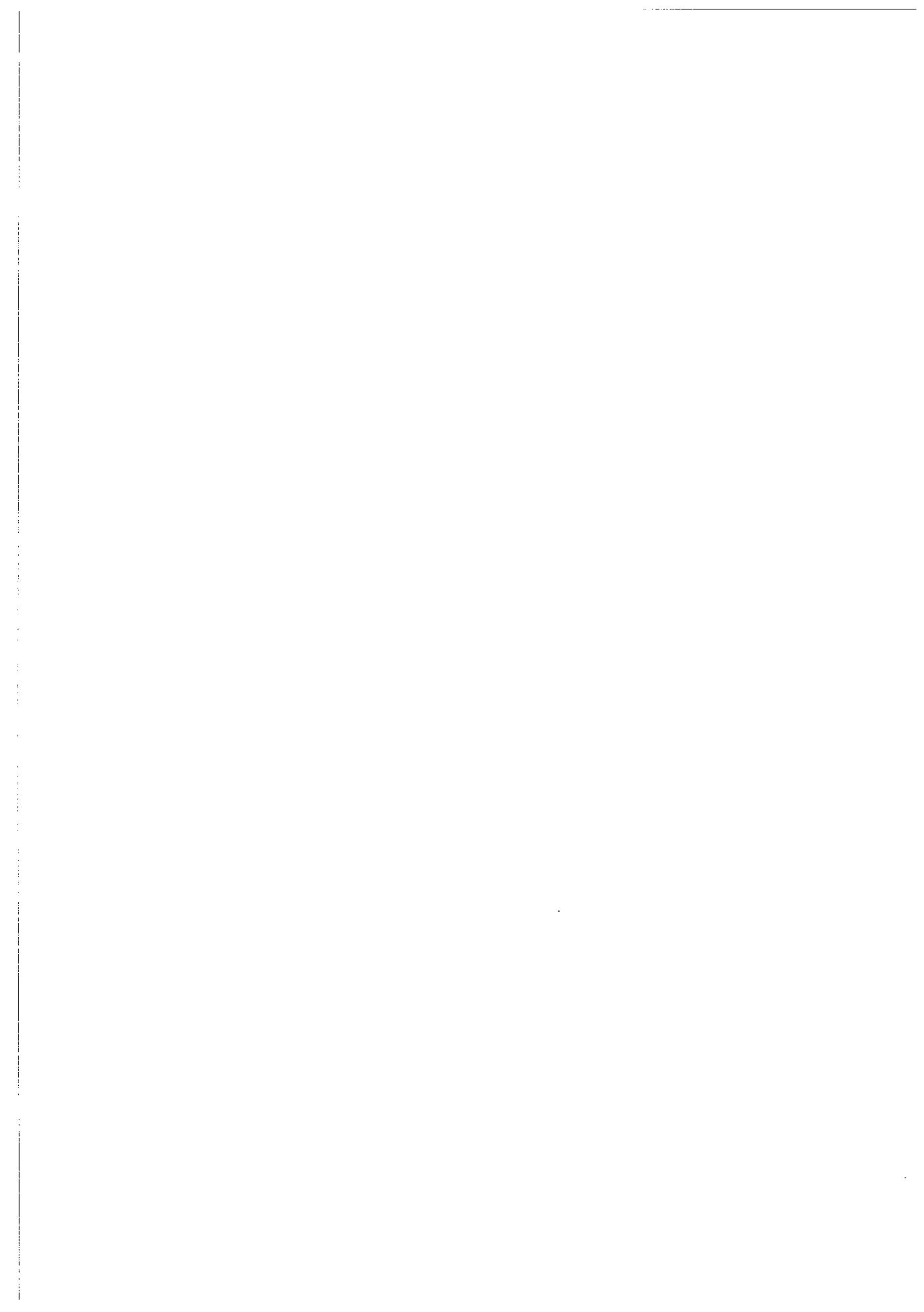
採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第十二班 〈渡慶次歟・仲村渠清美〉

注 ミースチャー ミーフガージンに同じ。194頁参照

第二編

資

料



話者別一覧表

凡例

- 一、話者番号は話者の数を表す番号である。話者の配列は調査班の若い順に並べたが割り付上前後したものもある。
- 二、話者欄には、話者の氏名を示し、できるだけ写真を載せた。
- 三、住所欄については、話者のすべてが読谷村に住所を有するので、字名と番地を記入した。生年月日は、便宜上M(明治)、T(大正)、S(昭和)の略号を用いた。
- 四、話型番号に○を付したのは、翻字資料が掲載されていることを示す。
- 五、話型名欄のへゝはモチーフ名を表わす。話は調査年月日の古い順、テープ収録順に並べた。また、同話者による同じ話の再録分については調査の古い順に並記した。
- 六、語りの欄の○印は方言、×印は共通語、△印は方言共通語混じりの語りを表わす。
- 七、テープ欄には字ごとに編集したテープ番号を示した。
- 八、調査欄には調査年月日を示した。

2		1	番号 話者
比嘉ウト		比嘉憲一	話者名
M 29 • 8 • 8	伊良皆三四四 一一	伊良皆三五六 M 42 • 3 • 8	生年月日 住所
5 ④ ③ 2 1		5 ④ ③ ② 1	番号 話型
雀孝行 キジムナ一(魚取り十屁) 鬼餅由来 アカマタ蟹入り(女呑み) 繼子の毒入り弁当		雀孝行 牧原の始まり 子供の肝(仲順流れ) 城間ナーカ(盜人) 歌ひ骸骨	話型名
9 3		16 15 22	番号 翻字
191 183		206 203 219	掲載頁
○ ○ ○ ○ ○		○ ○ ○ ○ ○	語り
1 A 10 A 9 A 8 A 7 A 6		1 A 5 A 4 A 3 A 2 A 1	番号 テープ
S 51 12 19		S 51 12 19	年月日 調査

	5		4		3	
	比嘉長二		勢理客宗武		津波ウト	
M 31 • 5 • 27	大木一六 一 一一	M 26 • 10 • 3	一 三 比謝三一〇	M 42 • 5 • 10	伊良皆三四四 一 四 一	
③ ② 1	⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② 1			③ 2 1	8 ⑦ ⑥	
継子の毒入り弁当 マジムンの話 キジムナー（魚取り十屁）	アカマタ舞入（芋掘り十女騙し） 美女に化けた豚 お茶二杯 雀孝行 継子の毒入り弁当 キジムナー（魚取り十屁） 中城若松 山原と団亀	アカマタ舞入（芋掘り十女騙し） 美女に化けた豚 お茶二杯 雀孝行 継子の毒入り弁当 キジムナー（魚取り十屁） 中城若松 山原と団亀	子守歌 世間話（浮気の弁当） 牧原の坊主御主井戸	子守歌 世間話（浮気の弁当） 牧原の坊主御主井戸	子守歌 世間話（浮気の弁当） 牧原の坊主御主井戸	継子の椎の実拾い 宮古の始まり 子守歌
14 7	20 30 6 13 1 27 5			23	25 12	
201 188	216 235 186 197 181 227 186			223	225 195	
○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○			× × ○	○ ○ ○	
1 1 1 B B B 11 10 9	1 1 1 1 1 1 1 B B B B B B B 8 7 6 5 4 3 2 1			1 1 1 A A A 16 12 15	1 1 1 A A A 14 13 11	
S 51 〃 〃 12 19		S 51 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃		S 51 〃 〃 12 19	S 51 〃 〃 12 19	

	7		6		
					
M 36 • 9 • 20	 一一二 一一一 ○	比謝 三 一 〇	M 28 • 10 • 10	 一二二 一一一 〇	比謝 三 一 〇
2 1		⑯ ⑭ ⑬ ⑫ ⑪ ⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①			
帽子組歌	雀孝行		赤大子 〔暗川発見〕 果てなし話 〔蟻運び〕 キジムナー 〔釘打ち〕 黒金座主と北谷王子 逆立ち幽靈 子育て幽靈 〔打紙由来〕 天川坂の話 姥捨山 〔難題〕 モーケイ親方 〔難題+一日殿様〕		モーケイ親方 〔嫁釣り〕 雀孝行 鍋蓋アカマタ 猫化け 帽子組歌 鬼餅由来
			19 17 24 11 29 28 8 21 26 4	31 10 2 18	
			211 208 223 193 231 228 190 217 226 185	240 192 182 210	
○ ○			○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ △ ○ × ○ ○ △		
2 2 A A 6 2			2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 A 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 5 4 2 1		
S 52 〃 5 〃 8			〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃	S 52 〃 5 〃 8	

話型一覽表

凡例
一、昔話の分類は「日本昔話集成」に従つて分類し、動物昔話・本格昔話・笑い話・伝説の順に並べた。

二、話題名は『日本昔話名鑑』（柳田國男監修）『日本昔話集成』に対応する話はなるべくその話型名に従つたが「アカマタ聟入」「真玉橋の人柱」など地域に密着した題名についてはそれを用いた。その他の話型については、調査及び編集者が付した話型名を用いた。へゝはモチーフ名を示す。

三、上段は話型名、下段の数字は話数を表わす。

動物昔話											
雀孝行											
本格昔話											
12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
城間ナーカ （盜人）	子供の肝 （仲順大主）	継子の毒入り弁当	継子の椎の実拾い	子育て幽靈 （打紙由来）	鍋蓋アカマタ	アカマタ聟入 （芋掘り女騙し）	アカマタ聟入 （女香み）	キジムナー （釘打ち）	キジムナー （魚取り十屁）	美女に化けた豚	鬼餅由来
1	1	3	1	1	1	1	1	1	3	1	2

	3	2	1	
歌 民 俗		世 間 話		そ の 他
総 話 数				

翻字・対訳者一覧表

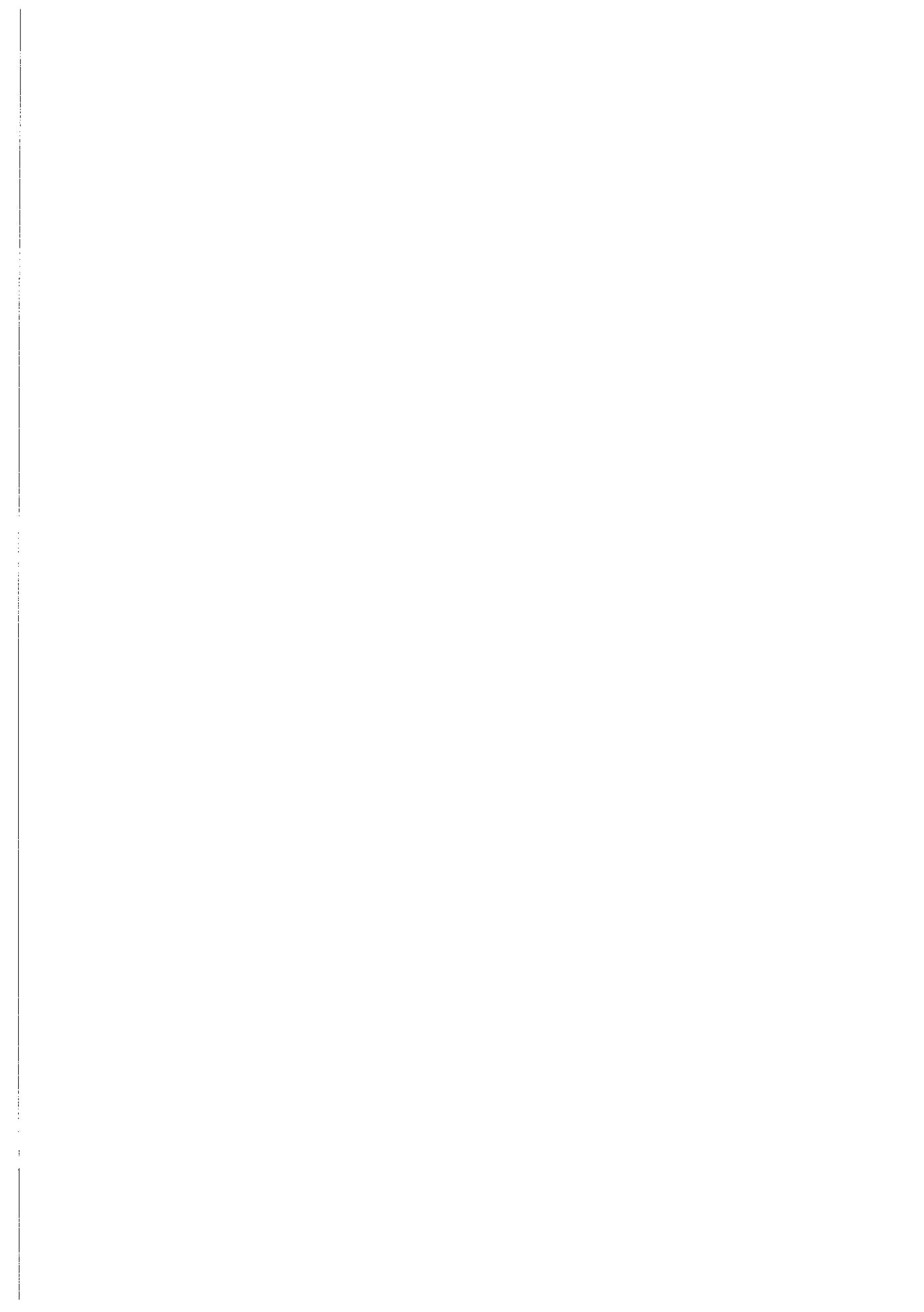
						番号														
17	16	15	13	12	11	8	7	6	5	3	1	6	5	4	3	2	1	番号		
姥捨山 （難題）	城間ナーカ （盜人）	子供の肝 （仲順流れ）	繼子の話の毒入り弁当	繼子の椎の実拾い	子育て幽霊 （打紙由来）	キジムナー （釣打ち）	美女に化けた豚	雀孝行	鬼餅由来	アカマタ錠入 （女呑み）	果てなし話 （蟻運び）	赤犬子 （暗川発見）	鍋蓋アカマタ	猫化け	鬼餅由來	雀孝行 モーイ親方 （嫁釣り）	話柄	翻字		
仲程嘉 憲	比嘉 宗	比嘉 長	比嘉 武	比嘉 ト	比嘉 亀	比嘉 二	比嘉 武	比嘉 亀	比嘉 亀	比嘉 ウ	比嘉 ウ	比嘉 ト	仲程嘉 程	仲程嘉 程	仲程嘉 程	仲程嘉 程	仲程嘉 者	翻字		
208	206	203	197	195	193	190	188	186	186	183	181	225	201	191	226	217	240	185	210 182	掲載頁

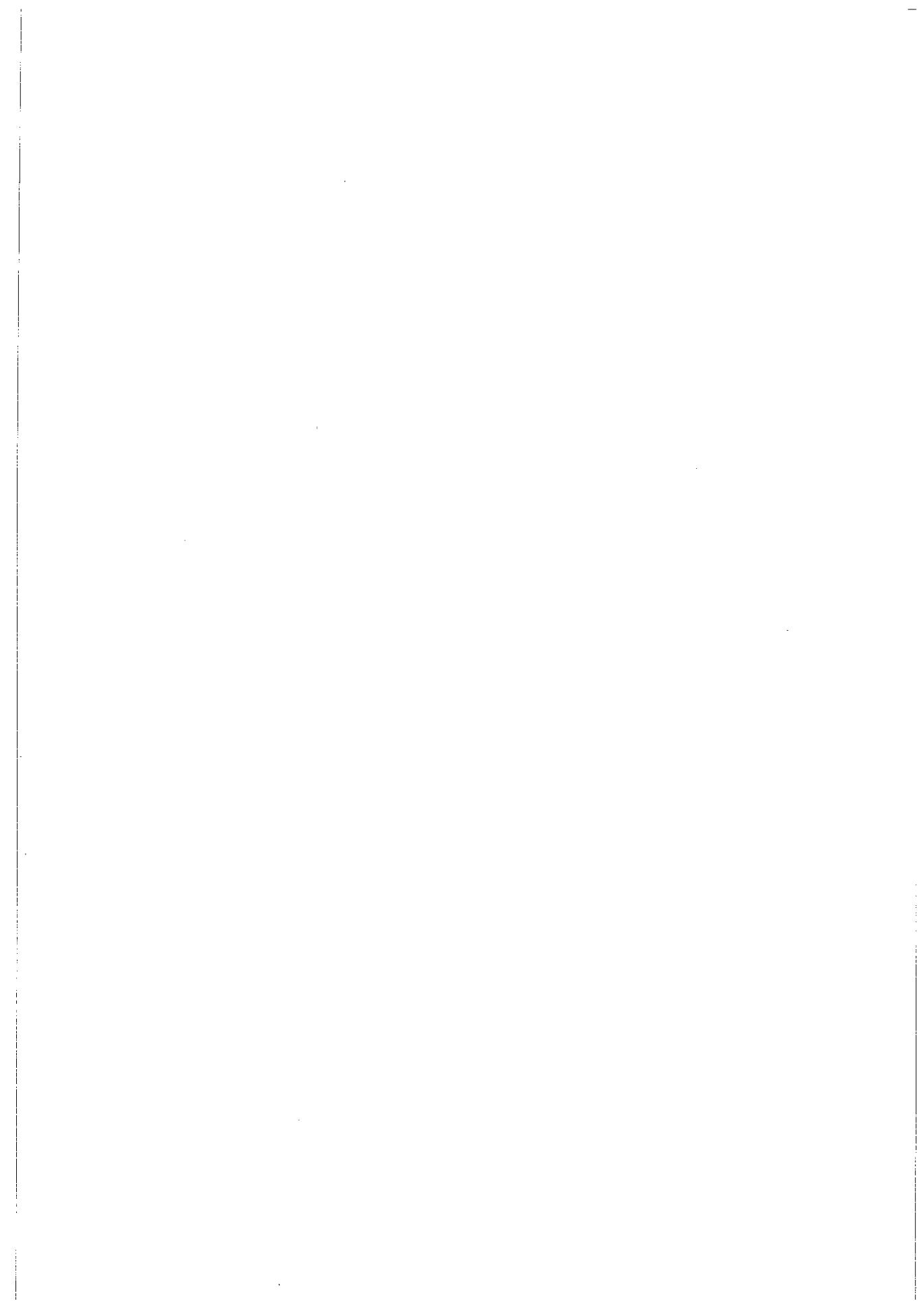
読谷村立歴史民俗資料館
名嘉真宜勝

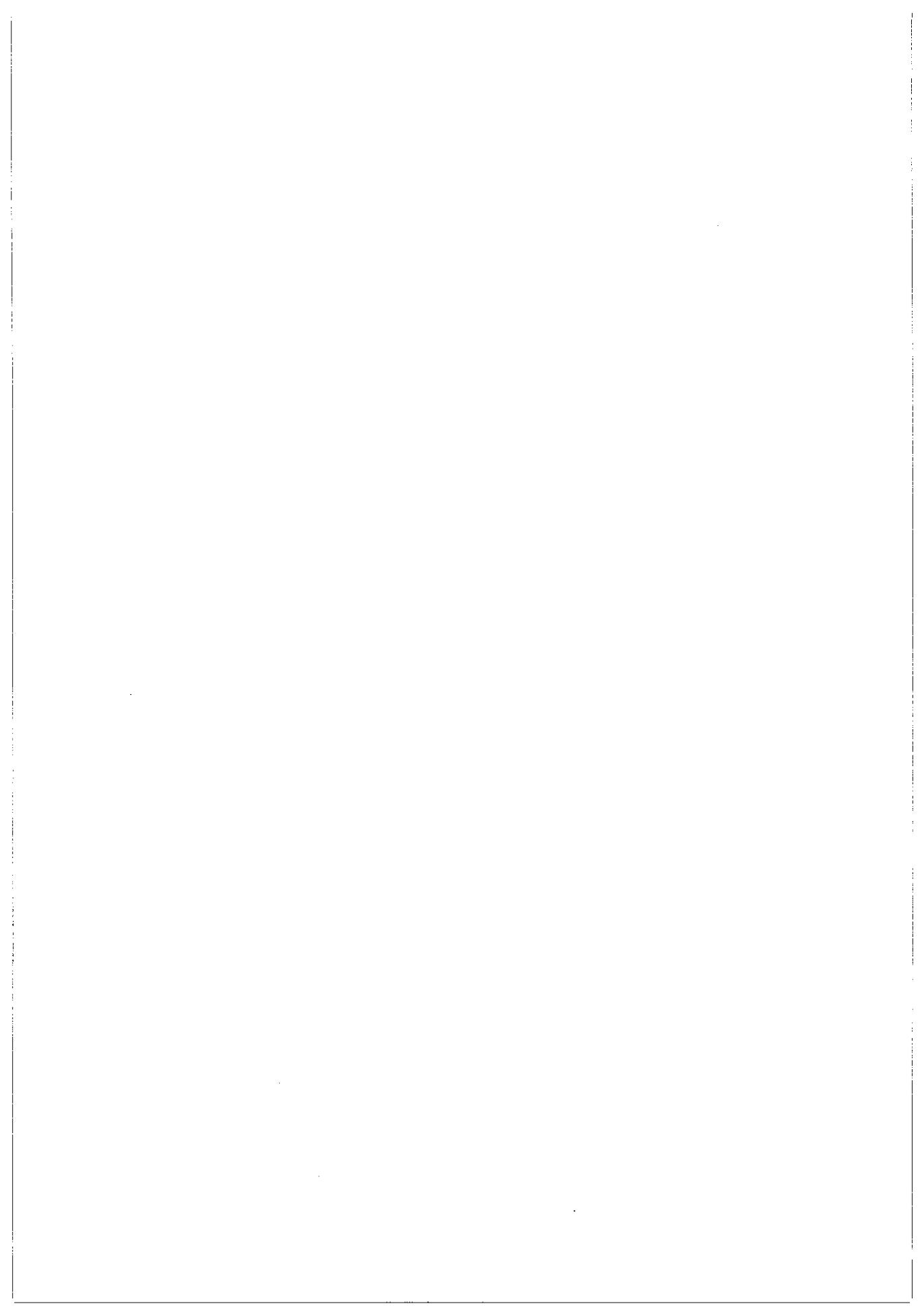
沖縄国際大学口承文芸研究会
知花利江子・島尻博光・富村朝夫・西原俊江・生盛史子・渡慶次歟・
仲村渠清美・辺土名朝三・大村久恵・又吉初子・村山義隆・石垣み
ずえ・赤嶺健

◇牧原の民話調査者名簿

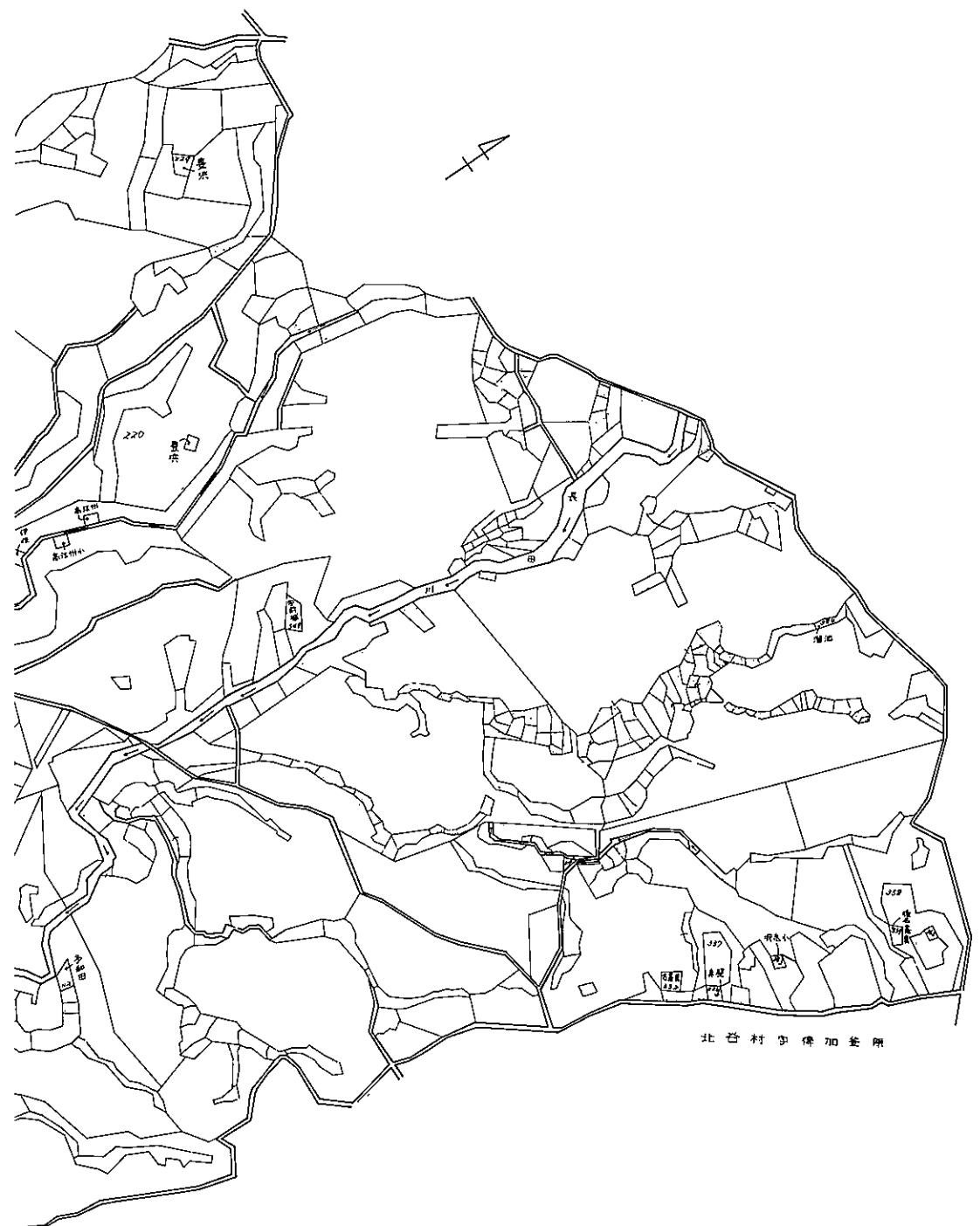
モーイ親方（難題十一日殿様）	中原と団亀	牧原の始まり	天川坂の話	お茶二杯	黒金座主と北谷王子	逆立ち幽靈	中城若松	30 29 28 27 24 23 22 20 19
仲勢理客	仲勢理客	仲勢理客	仲勢理客	仲勢理客	仲勢理客	仲勢理客	仲勢理客	仲勢理客
程嘉	嘉嘉	嘉嘉	嘉嘉	嘉嘉	嘉嘉	嘉嘉	嘉嘉	嘉嘉
憲	宗ウ	長宗	宗ウ	ウ	長ウ	ウ	ト	ト
亀	一	武	ト	亀	亀	亀	亀	亀
235	231	228	227	223	223	219	216	211





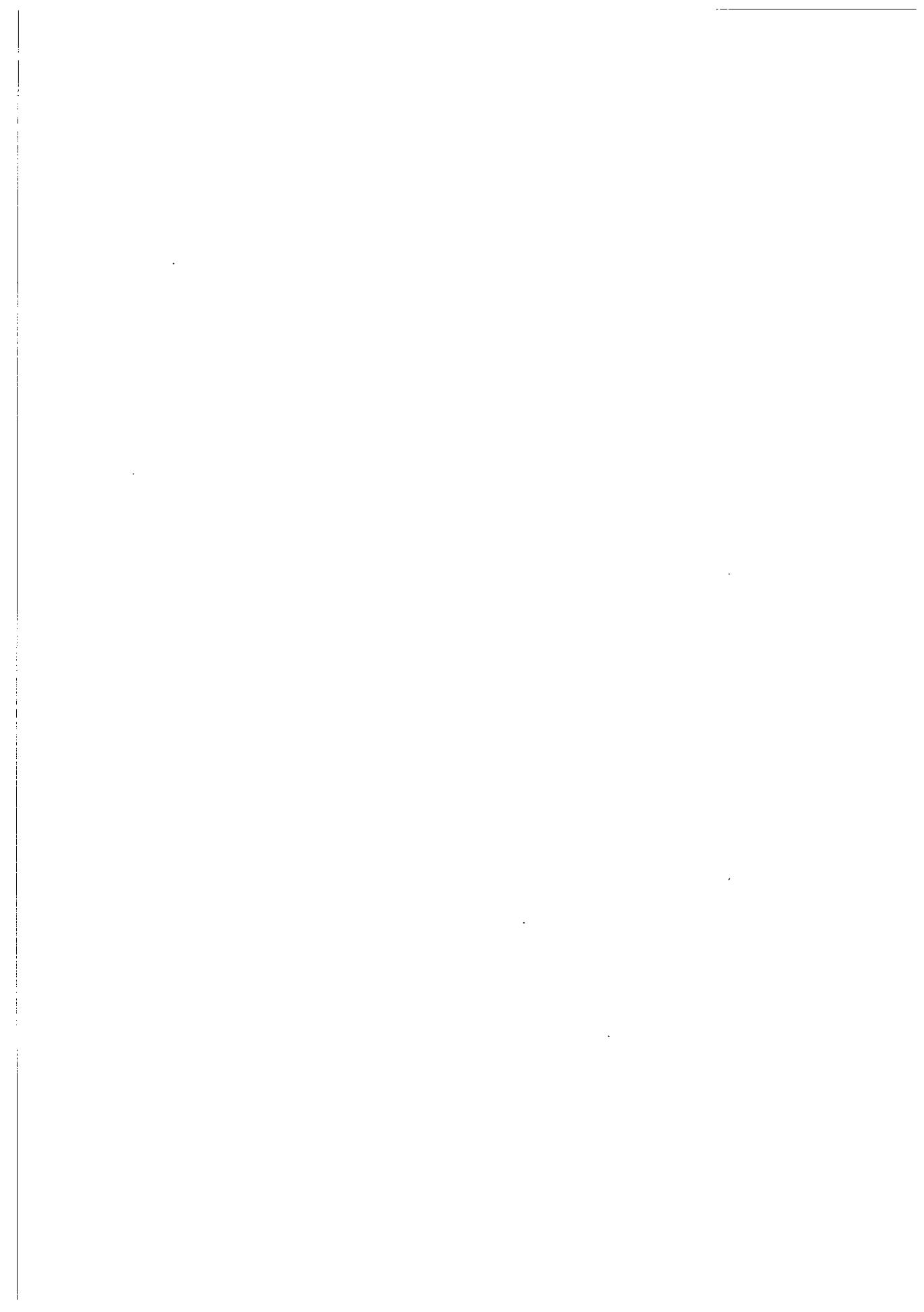


長田の民話

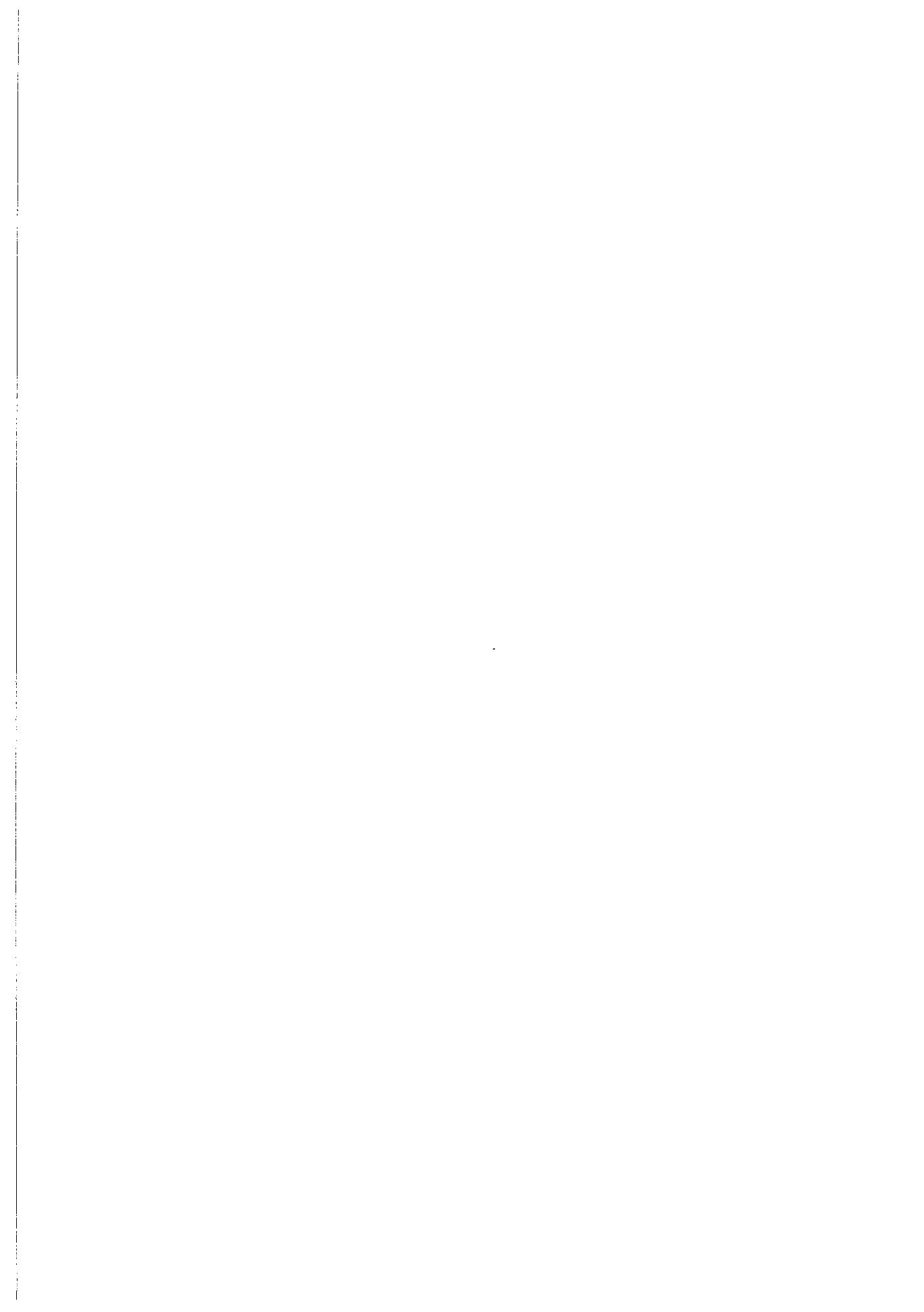


長田民俗地図





第一編 翻字資料



翻字・対訳 知花めぐみ

何時見ちん美させーあれー。あの一毛一毛が青とか何何やー
混まんちょーせーやー。クラーの場合ばあい、直すぐいつそそうありさーに、あの形かたちやぐとう美かわらこー無ねえんり言いちょーるばーてー。いつももーうち被かんたる感じ。

そして、クラーの場合ばあいや、直すぐ行はじえーるばーてーなー。親うやぬ今いま、今ミーウトウイ注する、早はくなー来くわんち呼ゆばつたぐどう、クラーや、此こぬまま飛とんじ行はじやーに。今度こんどお、カンジュヤーの場合ばあいや、川かわに一応いちおう降おりて、浴あみやーに行はつたから、あれー美かわらさたんりちよーるばー。だからあんり、いやーやなー、浴あみて、あん立派りつぱぐわー裝あてい來きぐどう、いやーや親うや不ふ孝こう者しゃなーい、ミーウティー合あたらんてーるばーてー。親うやぬこー死しにかきとーる、寝ねむるには合あたらんやーに、あれ親うやふ孝こう者しゃなーい。

あんさーに、いやーや川かわ端はんじ育はきよー、あれー川かわ端はなーりー歩ほつちやんでい。

いつ見ても美しいでしょ。あれは。あのう毛一毛が青やいろいろな色が混ざつていてるでしょ。雀の場合ばあい、もう同じ色なので、美しくないと言つてゐるわけですよ。いつも、ただ同じ着物はづけてゐる感じでね。

そして雀の場合は、すぐ行つたわけですよ。もう親うやが今、死にそだから早く来なさいと呼ばれたので、雀は、そのまま飛んで行つたつて。今度は川蟬かわせみの場合ばあいは、ひとまず川に降りて浴びてから行つたので、川蟬かわせみは美しかつたと言うんですよ。だからほら、川蟬かわせみはもう、浴びてこのように着飾あつて來てるので、親不孝こうふこう者しゃになつて、親の臨終に間に合わなかつたそだ。親が死にかけて、臨終には間に合わなかつたので、川蟬かわせみは親不孝こうふこう者しゃだということだよ。

それで川蟬かわせみは川端で暮らしなさいよ。といふことで川端から歩くようになつたそだ。

あんさー、クラーぬ場合やなー、装いんさんよー、
直ぐ走えーなてい行じやぐと。あれ親孝行者やぐと、
「いやー、倉の上なーりー歩つち、一応物お食みよー」
でい。クラーは倉の上なーりー歩つちやーに。今やてい
んクラーの場合は、家ぬうまなーりー歩つちゆし。又、
米倉の所、うまんかい歩つちゆる。此ぬ話や聞ちやる
ばー。



雀（赤嶺得信氏提供）



川蟬（赤嶺得信氏提供）

注 ミーウティー 死の呼称の一つ。別にミークータン（目を閉じた）とも言う。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第十三班 〔上原利津子・仲間博恵・佐久川君枝〕

それから、雀の場合は、着飾りもせずに走って行つ
たからね。雀は親孝行者だから、「お前は倉の上を飛び
回つて、物を食べなさい」と言われた。それで、雀は
倉の上を飛び回つてゐるんだつて。今でも雀の場合は、
家の近くを飛び回つてゐるさあ。また米倉の所を飛び
回つてゐるそうです。この話を聞いたんですよ。

2 雨蛙不孝

著者 名嘉眞 フ ミ (大正元年十一月十日生)

翻字・対訳 知花めぐみ

次の蛙は、丁度アタビチャーや、人ぬ丸んでい言ねー四角なするばー。人の、人ぬ言しえー全部反対になー受きじむるばーでー。

例えば私が、「かんどうやら」りねー、「あんねーあらん」でい言ち、いつも反対する雨蛙なたぐとう。親としてはなー、これに本当の事話しーねー、「山んかい、私ねー、あぬけー亡し後じーや、葬むいさ、山んかい持つち行きよー」んでい言ねー、反対するから、川端に持つち行ちゆる、なーあれ。「川端に送りよー」り言ねー、山んかい連てい行ちゆんでいやーに、親ぬ考えたくどう。丁度、親ぬなーけー亡し、「私が、亡しぬ後じーや、お墓やや、川端んじ送ていとうらしょー」んでい言ち、あぬ遺言し、うぬ親あ亡「さぐとうや。

今度この子供は今まで、今までいん私ねー親といつも反対していたから、なー今度ぬ場合や、なーけー亡しるうぐどうや、この一、一回やていん親孝行してみ

蛙の話というのは、アタビチャーというのは、人が丸と言つたら四角にするわけだよ。人の言う事とは全て反対に置き替えるわけさ。

例えば私が、「こうなんだよ」と言つたら、「そうではない」と言つて、いつも反対ばかりする雨蛙だつた。親としては、もうこれ本当の事を話すると、「山の方へ、私が死んだ後は、葬つてくれよ、山の方へ持つて行きなさいよ」と言うと、反対に川端に持つていくはずだからと、考えたようだね。「川端に送りなさい」と言うと、山の方へ連れて行くだろうと親は考えたようだ。ちょうど親が亡くなる時に「私が死んだ後は、お墓はね、私は川端に送つてちょうだい。」と遺言して、この親は死んでしまつた。

今度は子供も、今まで私は親の言うことについても反対していたから、なー今度ぬ場合や、なーけー亡しるうぐどうや、この一、一回やていん親孝行してみ

ようという、あのあれで。川端に送りよーでい言て一
ぐとう、川端に連れて行くんち、連てい行じやぐとう。
あめふ
雨降いがたーないねー、此ぬ墓ぐわーぬ、なー水んか
いかんしうりすぐとう、あぬガーグーガーグーして鳴
ちゅせーや、「私達あ親あなー水んかい流さりーさやー」
りち、鳴ちゅんでいる話を聞いた。

採集 S 51・12・19

読谷村民話調査団第十三班（上原利津子・仲間博恵・佐久川君枝）

3 十二支由来

話者 名嘉眞 光子（大正九年一月三日生）

翻字・対訳 大浜洋子

昔、首里親國の王様であるでしょ。偉い方々が、「これ民衆と、付けないとならん」りちて。あんさーなかい、これ呼び出しさぐとう、順序にあんな言つてるさー。あんさーなかい作でーる様子。

鼠がもう最初りーしぇー、牛は鈍いさーねー、牛の頭んかい乗やーんかい、ちょっと先に飛んだから、先になつたらしいりちぬ話を聞かりーたるばーてー。

鼠が最初になつたのは、牛はのろいので、牛の頭に乗つかつて、降りる時にちょっと先に飛んだから、になつたらしいという話を聞いたわけさあ。

をしてみようと思つた。それで親が川端に送りなさいと言つていたので、川端に連れて行つた。それで雨が降りそうになると、この墓は水に流されそうになるので、あの蛙がガーグーガーグーして鳴くでしょ。あれは「私の親は、もう水に流されるのかなあ」と言つて鳴くんだという話を聞いた。

注①十二支 時刻や方角、十干と組み合わせて年や日をあらわした。子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥のこと。

②首里親国 首里の都の意。親は公とか尊いの意で美称辞。かつての王都を首里親国と呼んだ。

4 鬼餅由來

話者 岳原ツル（明治三十八年五月四日生）

翻字・対訳 伊藝弘子

董ぬ二人居て一るふーじやしが。親ん達やなー、多分、なー居らんなどーて一るばーてー。あんし全部、近さぬ人、童ん達やていん何やていんなー、殺ち食らい何さいし、洞窟んち住まーとーて一るふーじ。

子供が、二人いたそうですが。両親はもう亡くなつていたそうです。それで、近所の人を、子供であろうと、何であろうと、殺して、食べたりなんかして洞窟に住んでいたらしい。

んちや、ウナイとうしなーうれー是非、此り退治さんあれー大事やぐとうんち。あんし師走八日ねームーチー作やーに、イキーぬ側んかい行じ、「兄さん、でーー今日や、あぬー私ねー大変美味さ餅い作てー來くどう、遊ばがなー、食でー來やー」んち、「あんせー、いやーや餅い作てー來んnaー、ウター、あんせー食でー來やー」たそだ。

んち。

あんさーに、崖、高崖、ん所んかい行じ。さーに、「とー
アヒー食めー、私にん食むさ」んち。あんさーに、し
ぐ、前開いどうげーらち、兄ぬ側んかい向かーさーに、
知らんふーなーそーてい食だくとう。「何やが、ウタ一
あれー」んちやくとう、「ありん分からんなー、ホーハ
イムーチーんでいしるやんどーやー」んでい言ちやく
とう「ハーハー」し笑いる場合に、直ぐ崖んかい押し
落とうさーに。あんさーに、うりが退治さんでいさ、
んでいぬ話、丁度、うつさる聞ちやる。

注①ウナイ 妹の」と。

②ムーチー 一般的にシワーシムーチーとかウニムーチーとも称する。行事で、長田部落では旧暦十二月八日に行われている。幅約五、六センチ、長さ十二センチぐらいの餅を作り、月桃の葉に包んで大鍋に蒸して作る。魔除けとして、煮汁を庭にまき餅を食べた後の月桃の殻二枚で十字型を作り軒下に吊るす。一歳児をもつ家ではハチムーチーと称して、たくさん作って親類や隣近所に配った。また、男の子の場合は力餅といって大き目なものを作り、それを下にし、その上に子どもの数の分だけ紐で結んで吊り下げた。

③イキー 兄のこと。

④ウタ一 妹の名前。

⑤アヒー 兄。平民についていう語。

それで、高い崖の所に行つた。そして、「さあ、兄さ
ん、お上がり、私も食べるから」と言い、そしてすぐ、
前をはだけて、兄の所に向かつて、知らんふりをして
食べていた。すると兄が、「何だウタ一、あれは」と言
うので、「あれを知らないの、ホーハイムチーというも
のだよ」と言うと、「あははー」と笑つて、そのすきに
崖に突き落としたそうだ。それで、妹が鬼になつた兄
を退治したという話を聞いています。

5 キジムナーへガジマル十魚取りさかなと

話者 岳原ツル(明治三十八年五月四日生)

翻字・対訳 村山友江

うぬ人ちよお海うみあつちやーやてーるふーじ。なー海うみかい
行いんいじ。なーうぬ人ちよぬ、昔ふかしえあぬウスクガジマルぬ年ねん経きねー、キジムナーがあぬー出でーんりぬ事ことお分わかとー
たんり。

あんさぐとう海うみかい行いちゆるかーじ、行いちーにん行い
ちーにん、「三良スー、見みちょーみせーみ」りち、御ご礼れい
し通とおてーるふーじや、うぬウスクガジマルんかい。

あんさぐとう後あとぬうずみねー、「いやー私わたくしねー見みるす
んなー」り言いちやぐとう、「見みぐとうる御ご礼れいすんどー」
り言いちやぐとう。見みらんしがどー、「見みぐとうる御ご礼れいす
る」りちやくとう、「だーあんしえー友達ともだちさーやー、明あ
日ちから、毎日まいにち来くよー、海うみかい」りち。

それで海うみに行くたびに、「三良スー、見ていらつしゃ
いますか」と、お辞儀ごめいをして通とおつたらしいね。そのガ
ジマルに。

そうしているうちに、ある日「お前には私が見える
のか」とガジマルが言いったので、「見えるからお辞儀を
していりますよ」と答こたえたつて。実は見えないので
が、「見えるからお辞儀をしてしているのですよ」と言いつ
たら、「それなら友達になろう。明日から毎日来なさい
よ。海うみに行こう」ということになつた。

さーなかいなーキジムナーとう友達ともだちさーに、毎日海うみ
かい行いんいじ。なーなー降ふていん晴はりていん、一夜いちやん抜ぬけが
さんなー、毎日うりんかい呼ばよってい。なー魚いわしちお取とつ

その人は漁師ぎょしだつたようだね。もういつも海うみに行い
つていた。その人は、年を経たガジマルにはキジムナー
が住み着くという、昔の伝えを知しつていたらしい。

てい、はまて、い、売、て、い、富、し、な、一、さ、く、と、う。な、一、此、り、と、う、
友、達、切、り、ら、ん、あれ、ー、な、ら、ん、り、や、ー、に。ち、ゆ、ふ、あ、ー、ら、魚、
ん、取、つ、て、い、売、て、い、錢、ん、貯、み、て、い、な、ー、富、さ、ぐ、と、う。な、ー、
う、り、と、う、友、達、切、り、り、わ、る、な、い、り、ち。

葉、枯、あ、束、て、い、行、じ、や、ー、に、う、ぬ、ウ、ス、ク、ガ、ジ、マ、ル、け、ー、
燃、ち、え、ー、る、ふ、ー、じ、て、ー、や、ー。あ、ん、さ、ぐ、と、う、自、分、ぬ、家、
ん、火、い、付、き、ら、つ、た、ん、り、キ、ジ、ム、ナ、ー、ん、かい。あ、ん、さ、ー、
に、し、る、な、た、ん、り、ぬ、話、や、た、ん。

れを頑張つて売つたそ、うだ。そ、うして、金持、ちにな、る
と、そ、ろそ、ろキ、ジ、ム、ナ、ー、と、縁、を、切、ら、ない、とい、け、ない、と
思、う、よ、う、にな、つた。いつも大、漁、で、魚、を、売、つ、て、お、金、も
蓄、え、て、金、持、ち、にな、つた、の、で、キ、ジ、ム、ナ、ー、と、縁、を、切、り、た
くな、つた、ん、で、し、ょ、う、ね。

枯、れ、葉、を、束、ね、て、行、つ、て、そ、の、ガ、ジ、マ、ル、を、燃、や、し、た、そ
う、だ。そ、う、し、た、ら、自、分、の、家、も、火、を、つけ、ら、れ、た、つ、て、
キ、ジ、ム、ナ、ー、に。そ、れ、で、元、(貧、乏、)、に、戻、つ、た、と、い、う、話、だ、つ
た。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第十三班 (富村朝夫・仲程勤・知花利江子)

注①ウスク (簿久) 雀榕のことでクワ科の常緑高木。氣根を生じ、ガジマルに似ているが、葉、実ともガジマルより大きい。建築・器
材用にする木はガジマルより劣り、実はいちじくに似て小さく、食用となる。

②ガジマル (溶樹) クワ科の常緑高木。多くの氣根を出し、それが地中に入ると支柱根となり、四方に広がつて大きな樹冠を形成す
る。

③キジムナー 沖縄諸島に伝承される木の精。本島北部ではセーマ (今帰仁)、ブナガヤ (大宜味)などの異名がある。

6 キジムナーへ魚取り十釣打ち

話者 名嘉眞 光子（大正九年一月三日生）

翻字・対訳 島袋智子

キジムナー^{第①}ぬ話はよー、童ぐわーそーに、よくウン
メーが話し聞かすたしが、あれは、お祖母ちゃんの話では、
では、本当の事やたんでいどー、お祖母達あ小さいねー。
あんし親ぬてー、お祖父ちゃんがキジムナーとう友
達なでいよー、友達なでい。あんし海んかい行ちーねー

毎日大漁だうりやたんでい。ずっと時間なれー、起くしー
が来、寝んしらんよー。あんさー後おなー、身體が続かん
なたくどう、「これー、かんせーならんむー、ちやーされー
ましがやーんち。さーなかい、キジムナーや屁ひーねー、
海ぬ上部うとーてぶん置つちゃんぎつい、直ぐ大変らしい。
あんしきくどう、ある夜、とろとろそーていよー、なー、
とろとろそーてい、神様みたいな、うりし、頭に浮かんだ
らしい。「家ぬ門ぬカジマルんかいや、三寸釣三本打つ
てい」。

うぬキジムナー又、ちやーうまなかい來ない、タ

そのキジムナーはまた、いつもそこに来てから、お

キジムナーの話はね、子供の頃によくお祖母さんが
話をきかせてくれたが。あれは、お祖母さんの話では、
本当の事だつたつてよ、お祖母さんが小さい頃ね。
そしてお祖父さんが、キジムナーと友達になつて、
海に行くと、もういつも大漁だつた。キジムナーが加
勢して、毎日のようだに大漁だつたらしい。いつも時間
になつたら、起こしに来て、寝かせなかつた。そうし
てしまいにはもう、身體がもたなくなつたので、「これ
は、このままではいけない、どうしたらいいかなあ」
と考えた。それからまた、キジムナーは屁をこいたら、
海の上でもどこでも置き去りにして、すぐ大変らしい。

そうして、ある夜に、うつらうつらしている時に、
神様みたいな者が頭にうかび、「家庭のカジマルに、
三寸釣を三本打ちなさい」と言つたらしい。

ンメー起(せ)くすたんでい。あんさぐとう、三寸釘(さんすんくぎ)、三本打(さんぼんうち)
打(うち)つちやくとうよー、うんにーから、全部來(ぜんぶき)んなとー
たんでい、起(あ)くさらんない、来(く)んなとーたんでいし
がよ。こんな話(はなし)、屁(ひ)ひーねー、直(す)ぐ何処(ほか)うていん置(おき)
放(ゆ)きりーたんでい、あんさぐとう、船(ふね)うていんでー、
屁(ひ)ひーねーうつさやたんでいちてー。うぬ話(はなし)あつた。

祖父(じいだい)さんを起こしたそーだ。それで、三寸釘(さんすんくぎ)を三本打(さんぼんうち)
たら、その時からまつたく来なくなつたとい。起こ
しに来なくなつたとい。話(はなし)だつた。また屁(ひ)をこいたら、
すぐ、どこででも置き去りにしたそーだよ。だから、
船の上で屁(ひ)でもこいたら、それまでだつたとい。話(はなし)
あつた。

採集 H 7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館（知花春美）

注①キジムナー 254頁参照

②ウンメー 士族の祖母。または士族の老婆（おばあさん）のこと。

③ガジマル 254頁参照

④タンメー 士族の祖父。または士族の老翁（おじいさん）のこと。



ガジマル

鍋蓋アカマタ

話者　名嘉眞　フ　ミ（大正元年十一月十日生）

翻字・対訳　島袋智子

このアカマターが男に化けて。前はあるの、すすきでカマンタとあつたさー。鍋ぬ蓋つて、あれよ、こんなして土の中にこのまま置いたらさー、これの中で七回このアカマターが孵化けーいねーや、人間に化けるという話だが。

これの中で七回、孵化かーいやつたら、だからこのカマンタという物は使い果てたら下げなさいという道理つて。やー、うぬふーじーぬ話やたさ。

アカマターは男に化けて、女人の人を騙すという。以前は、カマンタというすすきで作つた鍋蓋というのがあつたさあ。カマンタを伏せて土の上にそのまま置いたら、カマンタの中で、アカマターが七回脱皮すると人間に化けるという話。

カマンタの中で、アカマターが七回脱皮したら人に化けるつて。だからこのカマンタという物は、使い古したら下げなさいという道理だつて。そういう話だつたよ。

だから、この珍しい美ら男なやーに、赤サージ被つて。あんし、この女の人もとてもきれいな人だつたつて。あんし、毎日毎日もう約束して会つて、もう人間と思つてゐるのに、お家教えること絶対しなかつたつて、このアカマターや。今日はもう、必ずこれが後を追つてみて、お家ぜひ見てみないと思つて行つた所が、墓の所に行きよつたでいる言さに、お墓。

それで、アカマターが美男子に化けて、赤手拭いを被つていた。この女の人もとてもきれいな人だつたつて。そして、毎日のようによく約束して、会つていた。女はすっかり人間思つてゐるのだから。しかし、家を教えることは絶対しなかつたつて、このアカマターは。今日はもう、必ず後を追つてみて、家を是非見ないと思つて行つたら、墓の所に行つたといふ。

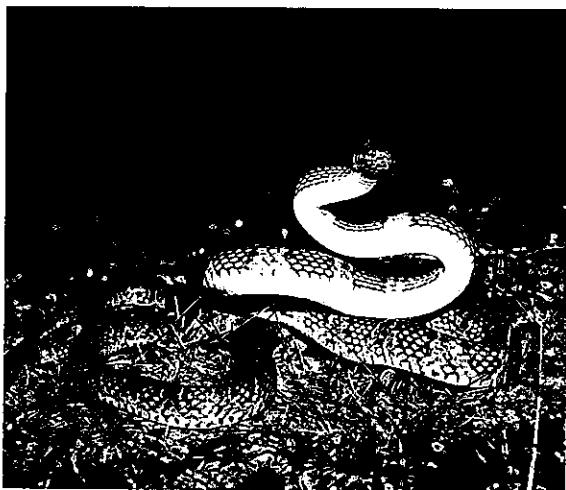
洞窟が
洞窟んかい入つち行じやぐどう。

それからなー親ぬ達がん疑がやーに、此ぬ後ろの娘は妊娠そーしが、行じよーんふーじーし、うんぐとうーし話いされー。「とーあんせー、三月、なー海かい連てい行じやーに、海ぬ白砂踏らみらしーねー、直ぐ全部、下さげるから」と。いう話で、あつち行つたら、全部、こつちで下りたという話い聞かされたことがある。アカマターの由来記は。

洞窟に入つて行つたそうだ。

それから、もう、親達も疑つて、この娘は妊娠しているらしいという話をしたらしい。「それなら、三月に、海に連れて行つて、海の白砂を踏ませばすぐ全部下ろすから」と。そういう話で、海に行つたら、全部、下りたという話を聞かされたことがある。アカマターの由来記は。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館〈知花春美〉



アカマタ（大谷勉氏提供）

- 注①アカマタ ナミヘビ科に属する大型の無毒の蛇。全長八十～百三十内外。奄美諸島、沖縄諸島に広く分布する固有種。人家周辺から耕作地及び山地にかけていろんな場所に生息している普通種で主に夜間活動し、地面を徘徊していることが多い。
- ②カマンタ（鍋蓋） ススキやチガヤの茅等で作った円錐状のシンメーナービの蓋。時にはピロウの葉や藁製も見られる。

8 ア ラ マ タ 聾 入 へ妊娠むこ

話者 宇榮原 カ メ (明治二十三年十月十五日生)

翻字・対訳 津波古 米 子

うぬアカマター注やなー触り者がやたるむんがやらー、
男いきががやたらー、女いながやたらー分からんしが。アカマター
や化ばきーんり。男いきがなたい、女いななたいし。あんしうりとう
密通みつちゆせーるばーてー、なー。美ちゅら女いながやたら、美ちゅら男いきが
がやたら。さくどうアカマターン子ん何ん産ねちえーた
んりんどー。

そのアカマターは馬鹿まづかだつたのか、男だつたかが、女
だつたのかは分からないがね。アカマターは化けるつ
て。男になつたり女になつたりして。そうして化けた
アカマターと通じたんでしようね。もう美しい女だつ
たのか、美男子びじゆうだつたのか分からないが。するとアカ
マターの子こが生まれたんだつてよ。

採集 S 51・12・19 読谷民話調査団第十班 〔山内源徳・前新門恵子・金城清美〕

注 アカマタ 258頁参照

9 ア ラ マ タ 聰 入 へ妊娠むこ十洞窟どうくつ

話者 宇榮原 文 (大正七年五月八日生)

翻字・対訳 村山友江

アカマターンかい注まきかつていよー、うぬ女いなお。犯さつ

アカマターに巻かれてね、その女は、犯されたらし

てーんてー。あんし三人、三子、子産ちやぐとうよ、
うぬハブ（アカマター）がよ。神様んかい化きてい見
たのーあらに、女のー。三子、子産ちやぐとううぬハ
ブお帰けいがちーよ、「子産くわなしるんさー や、何処まぬ何処ま」
かい連そてい来くよー」りち帰けいたんり。

あんさーうまんかい行いじやぐとう洞窟どうくつやたんりよ。
うまんかい来くぐとう、うぬ三子みこぬ子、ハブぬ蛭ひびきやーに
ちやー中なかんかい、ちやーすびち行いちし帰けてー來くらんた
んり。

い。それでアカマターとの間に三つ子が生まれた。女
にはアカマターが神様に見えたんでしようね。三つ子
が生まれたようだね。「子供が生めたら、どこそこに
連れて来なさいよ」と言つて帰つて行つたつて。

そうして、行つてみたらある洞窟になつていた。そ
こに来たら、この三人の子供はアカマターが蛭えて、
すぐ中にそのまま引っ張つて行き、帰つて来なかつた
そうだよ。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館（村山友江）

注 アカマタ 258頁参照

天人女房

話者 名嘉眞 光子（大正九年一月三日生）

翻字・対訳 宮里純子

あのー、天から降ふりてい来くに、浴あみーる所ところ着物きものお、
あぬーうまんかい下さきとーてい、浴あみーして。或ある男いきがぬ

来なかい着物おけー隠みたれー、もう昇れないさ。

あんさいなかい、その方との子供も出来てから。子

んなー何人んちからやてーんて。あんし年上ぬ子
背負そーてい、年下背負そーていぬ、あぬ子守歌ぬてー、

「アンマー、着物お何処ぬ何処んかい、倉ぬ何処んか
い有んどー」りち、かんし歌ていさぐとう。自然に見
ちゃれー、あるわけよ。うり聞ちゃーにかい、又上がつ
たりち、話い有たさ。

てしまったので、もう天に戻れないわけさ。

それでその男と夫婦になり、子供も授かつた。上の
子が下の子を背負って、「お母さんの着物は倉のどこそ
こにあるよ」と子守歌をうたつた。お母さんは、着物
を見つけて、天に上がつていつたという。そういう歌
があつた。

採集 H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館〈知花春美〉

注 アンマー 平民についていうお母さんのこと。

こそだ 子育て幽靈 〈テーラシカマグチ〉

話者 岳原ツル（明治三十八年五月四日生）

翻字・対訳 島袋フジエ

テーラシカマグチりぬ人お、うぬ親ぬおなかぬ入つ
た時に、親は死んだら。うぬ親あ死じやぐとう、そ
まま葬式しよ。

テーラシカマグチが親のおなかに入つていた時、親
は死んでしまつた。親が亡くなつたので、そのまま葬
式がとり行われた。

あんさぐとう、あまうてい生まりたんり。テーラシカマグチりぬ人お墓うてい生まりたんり、親が死んでから。あんしあぬ、翌日あ直ぐお墓参りしーが行ぢやぐとう。行ぢやぐとう、赤ちゃんぬ泣ちゅたんり。連てい来、墓開きやーに連てい来に。うぬ人がなー、うぬありやたんり。

大きくなつてから、子供も出来て。あんしなーうぬ人が、後生お行ち戻やー、一週間に一回なーしみせーたんり。一週間に遣いせーたんり。あんせーうぬ人おなー、「女子が来ん、起くすな。誰が来ねー起くすなよー」りちなー、家ん鍵閉みーるあたいし、休とーみせーんりしが。女ん子あ遠さんかい立つちょーたんりぐとう、「ターリー^塔や、アヤー」りちやぐとう。休とーみせーぐとう起きみそーらすなよーり言ちえーるむんぬ。後生かいyanせー、なー丁度、死人るぐとうるなとーみせんりぐとう。「必じ起くすな」りちえーるむんぬ、「あが遠から来るむん、ターリー^塔まんぐとーいかんぐとう」りち、戸開きやーに「ターリーたい」りちやぐとう、りけー泣ちやぐとう、戻てーめんそーらんたるばー冷るなとーせーや。うりが泣かんあれー済むしが、うりけー泣な^はじやぐとう、戻てーめんそーらんたるばー

それで、テーラシカマグチという人は、親が死んでからお墓の中で生まれたつて。それから、翌日お墓参りに行つたら、そこで赤ちゃんが泣いていたそうだ。すぐに墓を開けて、家に連れ帰つた。その人が後のテーラシカマグチであつたそつだ。

テーラシカマグチは成人して子供もできたのだが、一週間に一度は後生を行き来していた。その時のテーラシカマグチは、「娘が来ても起こすな。誰が来ても起こすなよ」と、家も全部鍵をかけて休んだそうだ。娘は遠くに嫁いでいたらしく、「お父さんはどうしていらつしゃるのですか、お母さん」と。休まれているから起こさないようになさいよと。もう後生に行かれている間は、ちょうど死人のようになつていらっしゃるというのだからね。「絶対に起こすな」と言つてあるのに、「あんなに遠くから来ているのに、お父さんに会わずに帰れない」と、戸を開けて「お父さん」と起こそうとしたら、すでに冷たくなつていた。娘がそこで泣かなればよいのに、泣いてしまつたので、戻つて来れなくなつてしまつた。それで、テーラシカマグチは

てー。あんきーにうぬ人ちよお、うぬ時どもにうりやみせーた
んり、亡くなみそーちゃんり。

その時に亡くなつたそだよ。

採集 S 51・12・19 読谷村民語調査團第十三班 へ原利津子・仲間博恵・佐久川君枝

注①テーラシカマグチ 母親が身みこもつたままままでくなり、墓の中で生まれたので、「後生半分、現世半分」と言われ、あの世とこの世を行き来きわたりできたといふ。

②ターリー 士族でいうお父さんのこと。

③アヤー 士族でいうお母さんのこと。

12 入髪いりがんを拾ひるつた男おとこ

話者 岳原ツル(明治三十八年五月四日生)

翻字・対訳 名嘉真 宜勝

海うみあつちやーが居ゐてーるふーじやしが、ちゃー同ゆうぬ所ところうていい、美女めらこな会あぢやひたんでい。あんし、会あぢやひていい。三回目さくに会あぢやひいねー、歩あつちあーねー、うまんかい居ゐらんいしが、入髪いりがんよ。注うりが落おちとーたんでい。うり海うみんちよ人が、海うみかい行いぢやーが取とやいい。

次の日に又また会あたぐとう、「私わあ入髪いりがん搜さたらやー」

次の日に出会あつたら、「私の入れ髪いりがんを拾ひつたでしょう」

「捲たん」「渡らちとうらし」りちやぐとう、「渡らしえー、今あ渡らさん」でい言ち。うりからなー、暫くうぬ女とうん付合しえーる意味合てー。渡らちやくとう、付合んしつから渡らちやぐとう、あぬー、うれー帰ていなー、うまんかい立たんなどーるぐとーん。

あんしえーなー海かい毎日行ちゆぐとう、なー海んかい、海うとーてい、船んかい、真白ぐわーそーる手うつちやきーたんでい。「何がやー、誰やが」でい言ちやくどう、「私どうやしが」でい言ち。

「うりんかい、私にん船んかい乗しみそーれー、竜宮んかいやー」でいち。あんし、連らつてい行じやーに。なーあまんじえー樂しみなてい、年ぬ走果ていーしえー全然分からん。「帰いみそーんな」でいしが、「必ジ帰りわるない」でいち。なー大変長年経つちえーるばーてー、百年ん。

あんし、あまんかいうぬ間あなー、行じよーる姿あわさんでいーしが。帰てい、なー必ジ帰いんりちやぐとう。あんしえーなー、「帰みしえーらー仕方あならん」ぐとう。此ぬ何でいが、玉手箱でいる言りー、うり持たちえーたんでい。「此れ一開きみそーんなよーやー、

「拾いましたよ」「返して下さい」「返しはしますが、今すぐには返しません」と会話を交わしたようだ。それから、しばらくその女と付合いをしたようです。付合いしてから入れ髪を返したら、その女性は帰つてしまつて、そこには現れなくなつてしまつたつて。

そこで漁師は、毎日海に行くので、海で漁をしていると、船べりに真白い手が差し伸べられたようです。不思議なことだ、「あなたはどなた様ですか」と聞くと、「私ですよ」と答えた。

「私も船に乗せて下さい。竜宮に行きましょう」と言つた。そして男は連れて行かれた。向こうでは楽しくて、年月が経つのも全く分からなかつた。「帰らないで下さい」と言われたが、「是非とも帰らなければいけない」と、もう、大変長年が過ぎたようです。百年余も。

そして、そこにいる間は行つたままの姿で若かつたようだが、もう必ず帰らなければいけないと。それで、「お帰りになられるなら仕方ありません」と、何と言うか、玉手箱というものを持たしたそうです。「それは開けてはいけませんよ。それは開けては駄目ですよ」

うれー開きて一駄目どー」でいちざべとう。

帰てい、村かい帰たくとう、なー自分ぬ親、兄弟ん、なー自分ぬ字ぬ人やていん、全部昔事るやる。知つちょーたる人お全員居らんなどーるばーてー。なー此れー、親、兄弟ん居らん、字ぬ人んりちん昔知つちょーせー一人ん居らん。「あーうれー、何やらわん、此れー開きてい見だーりち、開きたぐとう、白煙ぬ出じやーに、直ぐ白髪ぼーぼーそーる大変ぬ御年寄などーみせーたんでいさりちぬ話い聞ちゃしが。

と言つて持たしたのだが。

村に帰つて来たら、自分の親兄弟、もう字の人達も、すべて知つている人は一人もいなかつたそうだよ。親や兄弟もいなく、自分の字の人々や、知り合いの人も全くいなくなつていた。「ああ、もうどうでもいいから、この箱を開けて見よう」と開けてみたら、白い煙が出て、すぐ白髪だらけのお年寄りになられたという話を聞いたのだが。

採集 S 51・12・19

読谷村民話調査団第十三班（上原利津子・仲間博恵・佐久川君枝）

注 入 髮 髮を結う時に、添えて入れる髪の毛。かもじ。

13 真玉橋の人社

話者 名嘉眞 光子（大正九年一月三日生）

翻字・対訳 宮里純子

七色ムーティー^(注)や、あれー橋がなー、ちやつさうりしん壞りてーしーしーし、そーせーやー。あんさーな

七色ムーティーという話は、橋を架けても架けても壊れたという話さあね。そして、係の役人がいたのだ

かい、この役人であるわけさ、係。その方が、妻ぬよ、ちよつと神^{かみ}_達^(達)そーる人やてーんばー。あんさーなかい、うぬユタガカイぬ方やん。

うぬ橋えや、七色ムーティーそーる人、生ち埋みさん限れー、とうじまらんでいちさぐとう。あんし、役人ぬ達や國々様々七色ぬムーティーそーる人搜とーしが居らん。

最後、又うぬ人が一人残つてから搜てい、七色ムーティーがあるわけよ。子供も出来てているわけさ。あんさぐとう、仕方ならん、この人が生き埋めになつたらしい。この方は、最初でこの方が言つてるさー。「七色ムーティーそーる人埋みらんあれー、橋え持つたんどー」りちゃぐとう。人先、物言やーなかい、自分が損害やせーやー。子んかいん、「人先え物お絶対言なよー」りぬ遺言で、あれだつたらしい。そういう話だから、その人の子供や物言わんぬーやたんりよ。

あんしが人先え物お言なよーりそーしが、この人が生き埋めになつたら、物言つたらしい。

が、妻は神がかりしている人であつたらしい。ユタのような人であつた。

真玉橋^(達)は七色ムーティーをしている人を埋めない限り、いつまでたつても架けることはできない。役人達は国々、あちらこちら回つて、七色ムーティーしていふ人を捜したのだが、なかなか見つけることができなかつた。

とうとう最後にその人が一人だけ残つて、調べてみると七色ムーティーをしているわけよ。子供も授かっていたが、仕方なく女の人は生き埋めになつたらしい。この人は「七色ムーティーしている人を埋めないとつまでたつても橋は架けることができないよ」と、人より先に話したばかりに、それが自分にふりかかつたわけさあ。それで自分の子供には、「人より先には絶対物を言うなよ」と遺言したらしい。そういう話で、子供は物を言わなくなつたつて。

だけど、人より先に物を言うなと遺言したのだが、母親が生き埋めになつたので、物を言つたらしい。

注①七色ムーティー 七色の髪飾りでもどりを結つたもの。

②神ダーリ 神がかり。神人になる際の精神異常の状態。しきりに神事を口走る。

③ユタガカイ 巫女(ユタ)になる際の神がかりに状態。

④真玉橋 国場に架かる橋。現在、豊見城村と那覇市を結ぶ要路。創建は一五二一年で、一八〇九年、一八三六年に修復され、現在の

橋は一九六三年の築造。

14 難題聾^{なん}聾^{だい}（むこ）^{どうぶつ}（おんがえ）^{おんがえ}へ動物の恩返し

話者 岳原ツル（明治三十八年五月四日生）

翻字・対訳 伊藝弘子

親子喧嘩^{おとづれ}さーに、出じてい。最初、猿う助きて。い。
また次え蚊^かお捨ていーが行ちゅし、うり貰^{うり}ていうり助^たきてい。次え蠅^{あぶ}え捨ていーが行ちゅし、うり助^たきてい。
あんさーに、又、蟻^{あい}お捨ていーが行ちゅし、うり貰^{うり}やーに、助^たきて。

親子喧嘩をして、息子が家を出て行つた。最初に猿を助けた。次は、蚊を捨てに行こうとしているのを、貰い受けて助けた。またその次には、蠅を捨てに行こうとしているのを助けてあげた。そしてまた、蟻を捨てに行こうとしているのも貰い受けて助けた。

あんししーから、山ぬ中なーでいー、木ぬ実挽^ひてい、食でい歩^あつちゅんでいしーねー。うり助^たきたる猿が、「貴方^お、私助^たきてーくとう、私達^{わつた}あ親^{うや}ぬ、貴方^お、必^{うんじょ}じめんそーち呉^{くわ}みそーりんでいちやくとう、りかー」

そうこうして、山の中で木の実を取つて、食べながら歩いていた。すると、その人が助けた猿がやつて来て、「あなたは、私を助けて下さつたので、私の親があなたにお礼をしたいので来て下さいと言つていますの

んちさくと。『えーあんせー、連てい行じとうらせー』
んち、行じさくと。行ちえーがなー、うりが教しぬ、
「私達あ親ぬ、黄金御膳に銀御箸うちきて、御飯ぬ
出じーくと。うぬ黄金御膳とう銀御箸うちきて、ちえー
しが、『うぬ御膳貰り』でい言へと、うり貰んなよー』
でい、言たんでい。

あんし又、「あぬ一銀御膳に黄金御箸うちきて、出
じーくと、うりん貰んなよー』んでい言たんでい。
「あんし、何んくいん私ねー断わいねー、何う貰が
んちやくと、『猿さん、御箸んでいしる欲さる』ん
でい言りよー』んでいち。

あんさーになー、「猿さん、御箸んでいしる欲さる」
んちさくと。ありん此りんなー、貰らんでいちゃれー、
「いえーあんせー、いやーが望むしえーなー、私達あ
子ぬなー、命ぬ親やくと、いやーが望むし呉さ」ん
ち。うり貰てい持つち、「うり持つちよーけー、貴方が
思いや、何やていん遂じてい行ちゆくと」んち。
あんしなー貰てい、うまから帰やーに、うりしーねー、
又鼠ぬ出じてい来。「私助きたる恩義、私達あ親ぬ來ん
やくと、一緒行じとうらし」んちされー、行じやく

で、行きましよう」と言つた。「ああそうか、それでは
連れて行つてくれるか」と、一緒に行つた。行きながら、猿が「私の親が、黄金の御膳に銀の御箸をおいて、ご飯を出して、『その御膳を差し上げます』と言ふから、それを貰わないように」と教えたそうだ。

それからまた、「銀の御膳に黄金の御箸をおいて出すから、それも貰わないように」と言つたつて。「じゃあ、私は何もかも断つて、何を貰うのですか」と言ふと、「猿さん、お箸というのが欲しいです」と言ひなさい」と教えた。

そうしてもう、そこで「猿さん、御箸というのが欲しいです」と言つた。あれもこれも欲しくないと言つたので、「あなたはうちの子の命の恩人だから、それではあなたの欲しいのをあげましよう」と言つたそだ。それを貰つて持つて行くと、「これを持つていると、あなたの思いが何でも遂げられますよ」と言つた。

それからそこから帰ると、今度は鼠が出て来た。すると、「私を助けた御恩をお返ししたいと、私の親がおいで下さいということですので、一緒に来て下さい

とう、「だーあんせー、うれーいつたー家ややー、いつたーが入らりーしが、私が一入らんせー」んちやくとう、「尾う撃ちみんそーれー、入らりーびーさ」んち。尾う捕ちみたくとう、入らつたんでい。入つちやくとう、大家やたんでい。

あんさぐとううまんじなー、御馳走んし、うまからん帰てい、さーに、今度お山んかい上がてい行じ、あぬ竹囲いぬ家んかい行じやんばーてー。

あんし行じ、「とーあんせー、いやーがうまんかい居る、いやーがうまんかい居らー置ちゅぐどう、私が言い付きーし、いやーがし来うーしーるんさー、いやーや私達あ婿なすさ」んちやくとう、「あー、何やていん、言ちきてい呉みそーり」ふち。「とーあんせー、畑んかい粟一升時ちえーくとう、うり一粒ん残さんどう、いやーがうり捨るてい來うーすらー、私達あ婿なすさ」ちやくとう。

んちや、うり、土ぬ中んかい時ちえーる粟ぬ、捨るらりーる訳ぬ有みやー。畑んじ寝んとーたくとう。うりが放るちやる蟻ぬ、一粒ん残くさんどう、全部捨てい來、全部入つていとうらちえーたんでい。

と言つた。行つてみると、「お前達の家は、お前達には入れるが、私には入れないよ」と言うと、「尻尾をつかんで下さい、入れますから」と。それで尻尾をつかまえたら、入つたつて。入つてみたら、大きな広い家だつたつて。

そしてそこでもう、御馳走になつて、そこからも帰つて、さらに今度は山に登つて行つて、竹で囲いをされた家に行つたそうだよ。

それで、そこに行つて、「どうして、そこにお前がいるのか。お前がそこにいたいのだつたらおいても良い。私が言いつけるのをお前ができるのだつたら、うちの婿にしよう」と言うと、「はい、何でも言いつけて下さい」と答えた。「それでは、畑に行つて、粟を一升時い」と答えた。「それでは、畑に行つて、粟を一升時いてあるので、それを一粒も残さずに、あんたが拾つて來たら、うちの婿にするこにしよう」ということになつた。

なるほどそれは、土の中に蒔いた粟が拾えるはずがないでしよう。それで、畑で寝ていると、その人が助けてあげた蟻がやつて来て、一粒も残さずに全部拾つてきて、全部入れてあげたつて。

あんし、帰^けてい来^{ちや}に、「拾^ひつて來^{ちや}びたん」ち、行^いじや
ぐとう。「いやー、あんせー偉^{えら}いやるやー、ちゃーし拾^ひ
たが」「りち、「あんせー、なーひん問題^{もんだい}ぬ有さ。私達^{わっただ}
屋敷^{やしち}ぬ竹^{たけ}、あぬ、何千本^{なんぜんぽん}有^あが。いやーうり、かちんり」
んでいちゃくとう。なー、うつさぬ竹^{たけ}、読^よまりーる物^{もの}
あらん。ちゃーせーしむがやーんちしーねー、うりが
放^ゆるちやる蠅^まぬ、「千本^{せんぽん}、千本^{せんぽん}、千本^{せんぽん}」ち、側^{はた}つち呼び
たくとう、「千本^{せんぽん}やいびん」りちゃくとう、當^あたたんでい。

あんし、「私達^{わっただ}あ女^{めの}ぬ名^なあ明^あかしわるないんどー」ん
ちやくとう。又^{また}、蚊^まぬ來^{ちや}に、「チル、チル、チル」さく
とう、「チル一名^なやいびーん」んちゃくとう、當^あたやー
に、うまぬ婿^{むすめ}なたんでい。

それで、帰^けつて来て、「拾^ひつて來^{ちや}ました」と言つた。
すると、「おまえは偉^{えら}いな、どういうふうに拾^ひつて來^{ちや}た
のか」と、感心した。それからまた、「それでは、もつ
と問題があるよ。私達の屋敷^{やしち}の竹^{たけ}、あれは何千本
あるか。お前、それを当ててごらん」と言つた。もう
あれだけの竹、数えられるはずがないでしよう。どう
すれば良いのだろうと困つていると、その人が助けて
あげた蠅^まが、「千本^{せんぽん}、千本^{せんぽん}、千本^{せんぽん}」と、側^{はた}で言^ううので、
「千本です」と答えたたら、當^あたつたそだ。

それから、「私達の娘の名前を当ててごらん」と言つ
た。すると今度は、蚊^まがやつて来て、「チル、チル、チ
ル」と言^うるので、「チルーという名前です」と言つたら、
名前が當^あたつて、そこの婿^{むすめ}になつたつて。

聾選び 茶腹飯腹ちやばらめしばら

話者 名嘉眞 朝光(大正六年四月五日生)

翻字 伊藝弘子

聾を選ぶために、遠い所に使いに行かせたそうです。一人には、弁当を、おいしい弁当を作つて持たせて、一人には、お茶ばっかり持たせて、使つたらしいです。それはあのう、弁当を食べた人はもたなかつたらしいね、お茶ばっかり飲んだ人は、りつぱに、あのう役目を終つて、帰つて来たらしい。お茶には、非常に栄養があるらしい、作り方によつては。ご飯は、どうせ一日、二日しかもたないが、お茶はそうではないらしい。

採集H7・2・1 読谷村立歴史民俗資料館(知花春美・玉城琳子)

16 城間ナーカじょうげま 貧乏人恵みひんぱうにんめぐ

話者 名嘉眞 フミ(大正元年十一月十日生)

翻字・対訳 辺土名 初美

「城間ナーカぬぐとーさ」りたしが、意味は分からん。城間ナーカぬ話やよ、夕飯食り後から必ず御飯炊きよつたつて。「何が、何んち夕飯食ろーそーてい、又

「城間ナーカのようだ」と言つていたが、意味は分からぬ。城間ナーカの話はね、夕飯を済んでから必ずまた御飯を炊くものだから。「どうして夕飯食べたの

今から新に御飯煮が」り言ちさくとう、「あんし此処からや道ん人ぬでーむんあんまさする人が、何か欲しい人がいる時には、煮ち置ちよーきわる人んかい呉らりせー」りぬ、あれで、「あるなーかー城間ナーカ」りーせー、うぬふーじーぬ道理やんりぬ話やたん。

他人に上げる御飯よ、夕飯食べて後から又作つておきよつたつて話。あんしる「あるなーかー城間ナーカ」というものはね、これー由来記にもあるはずだよ。「あるなーか城間ナーカるやる」ということは。うんぐとう煮ち置ちよーちーねーよー、必じ又食べる人が来たんりろー、夜中から。

うぬ話や数に聞かさつていうしが、うりが最初からどうのこうのというふうに意味くじがる分からない。あんしが、あるなーか城間ナーカり言ぬ話ぬうんぐとうやたんりさ。

に、また今から御飯炊くの」つて聞いたら、「だつてこから歩く人で、気分のすぐれない人や、何か欲しい人がいる時には、炊いてておけば人にあげることもできるでしょ」と言うので、「あるなーか城間ナーカ」というのは、そんな道理から出たという話だつたよ。

他人にあげるために、夕飯を済ませた後から、また御飯を作つておいたという話。それで、「あるなーか城間ナーカ」というのは由来記にもあるはずだよ。「あるなーか城間ナーカ」ということは。そのように炊いておいたら必ず食べる人が来たそだよ、夜中から。

その話は数多く聞かされているが、それが最初からどんなこんなという話の意味は分からない。だけど城間ナーカという話はこういうことだつたそだよ。

城間ナーカ力ぬすつと

話者 宇榮原 文(大正七年五月八日生)

翻字・対訳 村山友江

正月に貧乏者お、肉ん買って一食みーさんりち、だー^{そーじわちひんすーちの}
内間あたりに話があつたさー。^{うちま}

あるなーか城間ナーカりちよ、トウシヌユールによ^{たま}
肉煮たんり。うぬなー、何ん無えん貧乏者お男やたん^じ
り。うぬなー、何ん無えん貧乏者お男やたんりしが、
こつそり天井んかい上がやーによ。煮れー食まちや、
さぐどうよ、うまぬ人お分かやーによ。

又^{また}うまぬ人お、大変物知りやみせーてーんてー。あ
んきーに、「何があまんかい、上んかい居る男あ誰やが、
うまんかい下りてい来わ。一緒年ん取れーわ。下りてい
来わ」りちよ、一緒呉ていや、又、肉ん沢山持たちや
んりぬ話。話ん有たさ。

あるなーか城間ナーカりち、呉とーけー、あんすべ
とう城間ナーカりしえー、大変金持人やんりさ、富さ
んり。

正月になつても貧乏人は、肉を買つて食べることも
できないという話が内間にあつたさあ。

城間ナーカでは大晦日に肉を煮ていたつて。その頃
に何もない貧乏者の男が、こつそり天井に忍び込んで
いたらしい。肉が炊けたら食べさせたりしていたら、
主も分かつてね。

またその人は大変な物知りだつたらしい。そして、
「何で、天井の上にいる男は誰か、ここに下りて来な
さい。一緒に年を越しなさい。下りて来なさい」と、
一緒に夕飯もあげて、肉もたくさん持たせたという話。
そういう話もあつたさ。

あるなーか城間ナーカといふことで、誰にでも食べ
させなさいということ。だから城間ナーカといふのは
大変な金持ちだそうだよ。富を蓄えたつて。

18 繼子と竹の子と毒入り弁当

話者 岳原ツル（明治三十八年五月四日生）

翻字・対訳 知花孝子

大変寒さる時に、田打ちが遣らちんじやい何さ
いし、又、竹ぬ子ぬ出じらん時に、あぬ竹ぬ子取いが
遣らち。あんさくとうなー出じーる節あらんあれー、
竹ぬ子りる物お出じらんあくとう、節ぬ來りわるあれー出じーくとう。

大変寒い時に、継母が継子を田打ちに出したり、竹の子のない時に竹の子を取りに行かした。竹の子が出てくる季節じやないから、竹の子というものは出ないのだから、その季節になつてこそ出てくるものでしよう。

なーうり搜めーてい来んあいねー、私ねー。「搜めー
てい来んらー殺すんどー」りち、やたんり。やたぐとう、
あんしなー、ちやつさ搜めーていん無えらん。竹ぬ中
うてい、なー泣ちさくとう、うりが涙ぬポンポン落てい
たくとう、竹ぬ子ぬ出じーいち。採つてい行じ、持つ
ち行じやくとう、うんにーねー殺さりー免てい。

今度おあんし又、「いやー竹ぬ子ん搜ていち、お利口
やぐとう田打つち来わ。弁当上等持たすぐとう」ん

もう、それを搜して来なければ、私は。「搜してこな
ければ、殺す（折檻する）よ」と言われていたんだつ
て。ところがどんなに搜してもないので、竹やぶのな
かで泣いたんだ。すると、その涙がポトポト落ちたと
ころから竹の子が出てきたんだつて。それを搜つて持つ
て行つたら、折檻されなくてすんだんだつて。

今度また、継母が言うには「お前は竹の子を採つて
来るお利口だから田打ちに行つておいで。弁当は上等

ち。

いつそー芋^{いも}持たずしが、ご飯^{はんに}煮ち持たちえーるふー
じやー。ご飯^{はんに}煮ち持たちえーしえー、直^しごー食れーな
らんち。昔^{むかし}え鳥^{がらし}んりる物^{もの}ぬまんどーてーぐどう、一^{いち}応^{おう}
鳥^{がらし}んかい食^くちからるないるんち、自分^{じぶん}や食^くまんぐどう、
鳥^{がらし}んかい食^くちやぐどう、食^くてい。田^たんかいヒラムスル注
りぬ物^{もの}ぬ生^みんよーやー。葉^はつぱぬくん位^位なーさーに。
うぬ鳥^{がらし}やうりご飯^{はん}食^くやーに、ヒラムスルー食^くいたんり。

「持たすからね。」だつて。
いつも芋^{いも}しか持たせないのに、ご飯^{はんに}を炊いて持た
せたようだね。ご飯^{はんに}を持たせたので不思議に思つて、
すぐは食べなかつたそうだ。昔は鳥がたくさんいたか
らね、一^{いち}応^{おう}鳥にやつてからにしようと、自分は食べず
に鳥にやつたそうだ。田圃にはヒラムスルという、こ
れぐらいの葉の草が生えているがね、その鳥は、継母
の弁当のご飯を食つてから、そのヒラムスルを食つた
んだつて。

「あはー、かんし毒^{どく}返^へしするすきやー。」んりやーに。
あんし、うり食^くまーに、ヒラムスルー食^くれーるふーじ。
ちゃーん無^えんたんり。

「なー今日^きぬ弁当^{べんとう}大^{おほ}変^か美味^まさいびーたん。御馳走^{くわっしや}さ
びたん。」りちさぐどう、「美味^まさたらやー。だーうれー
毒^{どく}お有^あらんてーさやー」りやーに、残^のとーし自分^{じぶん}ぬ子^こ
かい呉^くやーに、自分^{じぶん}ぬ子^こ殺^{くわる}ちえーたんり。

「もう今日の弁当は大変おいしかつた。御馳走さま
でした」と継子が言つたので、「おいしかつたでしょ^う」
と継母は答えたものの、これは毒ではなかつたのだな
と思い、残つたものを実子にやつて、実子を殺してし
まつたんだつて。

また、この話も、これだけ聞いたよ。

また又うりん、うつさる聞^きちやる。

注 ヒラムスル 陽あたりのよい池、溝、水田などに生える多年生の水草。浮葉は長橢円形で先はとがり、水面に浮いている。

19 繙子の麦搗き

話者 宮城ヨシ(大正十四年九月十五日生)

翻字・対訳 村山友江

継子にあのー、いくらやつても皮や剥んりらんなやーに。「あんし哀りやるやー」りち、泣ぢやがちー搗ぢやぐどう、この涙ぬ落ていとーる分、あのー皮ぬ剥んりたぐどう。「あー、麦え水入つてい搗ぢゆる物やさやー」という、あの道理やんりぬ話やたん。継子。

継子に麦を搗かせたらしいが、いくらやつても皮は剥けなかつたそうだ。「こんなにも哀れなのかなあ」と、泣きながら搗いたら、この涙が落ちたところだけ、皮が剥けたつて。その時から、「ああ、麦というのは水を入れて搗くものだな」と分かつたということだよ。それが継子の話。

あんし水入つていて搗ぢゆたしえー。大麦やたんや。搗ぢぐりきたんどー、又。あれー大麥搗ぢぐりきたん。

それで水をいれて搗いたさあ。大麦だつたね。搗きにくかつたよ。大麦は大麥搗きにくかつた。

20 嫁と姑 くうどんはミニズ

著者 岳原ツル (明治三十八年五月四日生)

翻字・対訳 知花孝子

丁度、姑親あ冒やでーるばーて、男ん子一人居たんりぐどう。

あんしえー男ん子、旅かい儲きーが行ちゆくとう、「親ぬ孝行立派にそーていとうらしよーやー」んりち、頼まつてい行じやくとう。錢お無えんるあくとう、美味さ物買てーうさぎゅーさん。ミニズ取ていなー全部きれいに洗つて、うり油に焼いて毎日のおかずやでーるふーじてー。

あんしなー、うぬ親あ物ぬ出じーるかーじ、ちやー少なー取つてい、あぬ置ちえーしーしーし、子ぬ来ねー必じ見しーんち。あんしなー夕飯うさがいしえー、又取つてい置ちきてー、翌朝、御差ぎーねー、又うりうさがやーに。又、後ぬ物から取つてー置ちき、とうーちなー紙んかい包でーい、少なー置ちえーてーるふーじ。あんするうちねー、子ぬ帰でーしゃくとうなー、大変肥げとーみしえーたんり、親あ。「貴女おなー、大変美味

姑は目が見えなかつたわけさ。男の子一人がいたんだつて。

その息子が出稼ぎに行くことになつたので、「母親の孝行を立派にしてくれよ」と、息子の妻は頼まれて、夫は旅立つていつた。そう言われても金はないので美味しいものを買ってあげることはできない。ミニズを取つて来て、きれいに洗い油で焼いて毎日のおかずにしていたようだね。

それでその母親は食事が出るたびに、いつも少しずつ取つておいたりしたそうだね。息子が来たら見せようとして、そうして夕飯どきには、それから少し取つておいて、翌朝の食事には前夜の食事を食べて、朝出されたものは取つておいたりして、順送りに紙に包んで少し置いてあつたようだ。

そうしているうちに、息子が帰つて來た。母親が大変太つていたので、「貴女はとてもおいしいものをあがつ

さ物御差ぎらつて一さーやー、肥とーみしえーるむん」
りちやぐとう。「大変私ねー孝行さつていよー、ちゃん
ぐとーる美味さ物具らつとーぐとう、うり、いやーん
食りんれー」りち、出じやち子んかい見したぐとう、
「アギジャビヨー、うれー、ミミジヤーるやさに」ん
りさぐとう、「イエーんりやーに、日開ちょーみしえー
たんり。

ていらしたんでしようね、太つていらつしやるのに」と言つた。すると「私は大変良くしてもらつてね、とてもおいしいものをいつも食べているよ。ほら、お前も食べてごらん。」と言つて、取つておいたものを出したところ、「あれえつ、これはミミズではないか」と言つたら、母親は「えー」とびっくりしたひょうしに口を開けたんだつて。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第十三班（富村朝夫・仲程勤・知花利江子）

21 兄弟の仲直り

話者 岳原ツル（明治三十八年五月四日生）

翻字・対訳 宮城昭美

兄弟えー人やんでいしが、大変反対やたんでい、弟とう
年上とー。あんしぇーなーうぬ弟ぬ、大変兄弟やか深
さぬ友達ぬ友達ぬ居てーるふーじて。なー何ぬ事んなー、
いやー二人や一緒やーでいちやてーるふーじーやしが。

二人の兄弟らしいが、弟と兄はいつも反対だつたつて。仲が悪かつたそうだ。それで、その弟には、たいそう兄弟より仲の良い友達がいたらしいさあ。もうどんな事でも、二人はいつも一緒にやろうねという具合いだつたらしいんだが。

あんし、うり屋良ムルチの所に、畑耕ちょーたんでい。

そして、その屋良ムルチの所で畑を耕していたそ

作くい物しーねー、うぬ作くい物荒さつていならん。
此れーなー人ぬどうそーる。なートーヌチンの穂う摘
みたい、粟ぬ穂う摘みたい。あんきーになー、此れー
なー、是非捕ちみりわるないるんち、あまんじ夜待つ
ちょーてーるばーてー。

あんさぐとう、屋良ムルチからウナギている物ぬ出
じていつ来、うりが一生懸命うりすたんでい。「今日や
盜人捕みたしえー、殺しわるないる」んち殺ちやくとー、
人んでい思とーるばーてー。「なー一大事などーき。私
ねーなー人殺ち無えんむん」でいち。なーうぬ友達ん
かい、「えー私ねーなー生物どうばつペーでい、人殺ち
無えんくとうやー。なー一緒さーなかい、あぬー処分
しどうらしー」でいちゃくとう、「うり、うぬ事おなー、
ちやーんならんさー」でいち断わらつてい。

後お、兄さん端んかい行じやーに、「兄さん助けてい
とうらしよー、私ねー人殺ちえーくとう。なー一緒さー
なかい、あぬー始末しどうらしえー」でいちさくとう。
「早く歩つけーひやー、ウフソーオ者」り言ち、年上とう
一緒にじやぐとう、ウナジなとーたんでい。あんきぐ
とう、うぬ兄弟でいぬ者お、ちやつさ深しく述べる他

だ。それで、作物を作ると、もうその作物を荒らされ
てしまつてね。これはもう人の仕業にちがいない。トー
ヌチンの穂を摘み取つたり、粟の穂を摘み取つたりさ
れていた。これはもう、是非とも捕らえなければいけ
ないと思い、夜、屋良ムルチで待つていたわけさ。

すると、屋良ムルチからウナギというものが姿を現
し、それが作物を一生懸命食べていたそうだ。「これは
今日こそ盜人を捕まえて殺してやる」と。殺したら、
人を殺したと思っているわけさ。「これは大変なことを
してしまつた」と、すぐに友達の所へ行き、「私はもう、
動物と間違えて人を殺してしまつたので一緒に片付け
に行つてくれないか」と頼むと「これは一大事。そん
な大変なことには関われない」と言つて断わられてし
まつた。

しまいにはお兄さんの所へ行き「お兄さん助けて下
さい。私は人を殺してしまつたので、一緒に行つて始
末してくれませんか」と言つた。すると、「早く行こう、
大馬鹿者め」と怒鳴られ、お兄さんと一緒に行つてみ
ると、何と人と思つていたのはウナギだつたんだつて。
それから、その兄弟といふのはどんなに深く付き合い

人やかん、とーい、なーい、ないねーなー兄弟や本当
うりやるふーじ。頼りないるふーじ。

をしている他人より、いざ一大事という大変な時には、
兄弟といいうものは一番頼りになるものであるらしい。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第十三班 〔上原利津子・仲間博恵・佐久川君枝〕

注 屋良ムルチ 嘉手納町屋良にある。俗にムルチグムイと称し、比
謝川の支流である茂呂木川上流の知花へ抜けた県道十六号線沿い
の森の中にある。この渓潭は、昔は約千坪の広さがあったといわ
れるが、米軍基地拡張で半分埋められた。



屋良ムルチ

じーしなー、物乞いがん來、めんそーやーに。一番、あぬー大金持ぬ家から物乞いがめんそー来くとう、うまからー追い払つてい。物乞いがでいしやか泊まらちとうらしんち。あんさぐとう、「なー、いつたーふーじー、泊まらする所おあらん。何処がらんじ泊まり」んち、うまからー追い払つてい。

さーに、また又もう一回の所おなー、あんまり貧乏者なてい、「火正月さーやー」んち、火燃ち温どーぬ場合に、「な一家あ貸らちどうらし」んちさくとう。「くんぐとーる家ぐわーやていん、あぬー貸てい呉みそーり」んでい言ち、あんし貸らち。

「とーあんしー、なー火びけーんどう有いびーる、私達や火正月なー、何ん買てい、買いる金ん無えん火正月どうそーいびぐとう、火びけーんやていん、なー、あたてい呉みそーり」でいちさくとう。「ひー、とーあんしえー上等やさー。薪新しーていー鍋しきれーカマンかいしれー」でい言みそーちやくとう。「何ん無えんむんぬ、水入つていいしやびんなー」んちやくとう、「なんくるないさ、いしれー」んちやぐとう。いしたぐどうなー、御馳走出来とーるふーじてーなー、鍋二

好をして、物乞いに来たらしい。一番に大金持ちの家に物乞いに行かれると、そこから追つ放われてしまつた。物乞いにというよりも、泊めて下さいといいうことだつたらしい。すると、「なんてことだ。お前らのようなやつを泊ませる所ではない。どこかで泊まれ」と、そこから追つ放われてしまつたつて。

それからまた、もう一回訪ねた家は、なんていうか、あまりにも貧乏者の家で、「火正月しようねえ」と言つて火を燃やし暖まつているところへ、「泊めてもらえませんか」とお願いした。すると、「こんな汚い家でもよろしければどうぞ」と言つて泊めてあげた。

「泊めることはできても、何もなくて火を温まるだけです。私達は正月だといいうのに何かを買おうにもお金もなく、火正月をしていますので、せめて火だけでもあたつて下さい」と言つた。「分かりました。それで結構です。薪と一緒に鍋を火にかけなさい。カマにかけなさい」とおつしやるので、「何もありませんが、水を入れて火にかけますか」と尋ねると、「何とかなるものさ。火にかけなさい」と言われた。鍋を火にかけると、もう御馳走ができたようだね、二つの鍋に。そう

ちなかい。あんし、うまうてい、あぬ、一緒うさがてい、

うぬ人ん。うまんな一直ぐ御馳走さーに。

朝あなー、「とー早く、風呂入り」んち。風呂入つた

ぐとう、なー、うぬ人ん達あ全員若げーていねーんよ、
大変年寄やたんでいしが。

して、そこで一緒にいただいて、その方も。その家の人も、もう、たいそう御馳走になつた。

また翌日の朝はもう、「さあ早く、お風呂に入りなさい」と、お風呂に入れると、その家の人はみんな若くなつてしまつた。大変なお年寄りであつたらしいんだがね。

あんさぐとう、なー隣んかい行じやーに、「えー、私達あ昨夜あぬー、直ぐ、白髪ぬ御年寄ぬ来、泊まひみそーやーに、私達あ風呂入みそーやーに。御馳走ん鍋を火にかしきたぐとう、御馳走ん出来てい、風呂入つちやぐとう、くんぐとう若くなどーんどーやー」んちやぐとう。「えーあんどうやんなー。何処行じょーん、何処ぬあたい行じょーが」でいちゃぐとう、「なー、大概何処ぬぐれー行じょーんやー」んちさくとう。追てい行じやーに呼び戻ちつち。

「えーなー、私達者ん若くなち呉みそーり」ちさくとう、「あんすみ」でい言やーに、戻ていめんそーやーに。「とーあんしえー風呂かきてい入れー」んちさくとう、風呂立ててい入つちやぐとう、うぬ人ん達あ猿んかいなたんち。あぬ猿んや、あんしる赤尻やんでいさに

そうしたもんだから、隣の家を訪ねて行つて「私達は昨夜は白髪の老人が訪ねて来て泊まられて、その方が私達にお風呂に入るよう言われてね。鍋を火にかけると御馳走も出来て、お風呂に入つたら、このように若くなつたんですよ」と言つた。「ええそういうことかあ、その方はどこに行つたの。どの辺りまで歩かれているのか」と尋ねるので、「今なら、だいたいあの辺りまで行つてるだろうね」と答えると、大金持ちの人は追いかけて行つて呼び戻して來た。

そして、「どうか私達も若返えらして下さい」とお願ひすると、「いいでしょ」と、戻つて来られた。そうして「お湯を沸かして浴びなさい」と言われたので、お湯を沸かして入ると、その大金持ちの人は猿になつてしまつたんだと。だから猿は、赤い尻をしていると

りぬ話。
ちゆ

人ぬ家ぬ東なーりーぬ、うぬカーミぬ底んかい座やーに。ちやーうまつ來、なー「私あ家あ取らし、取らし」し座たんでい。あんさぐとう、ちやー同ぬ所んかい座ぐどうんち、うぬカーミぬ底焼ち置ちえーたくとう。うりが座ちやーに、あぬー、尻焼ちやーに、赤尻などーんでいきちぬ話やたん。

いう話だよ。

それから、東の方に置いてある甕の底に座つて、その猿になつた金持ちはいつもそこにやつて来ては、「私の家を返せ、返せ」と言つたんだつて。そうしていつも同じ場所に座るので、その甕の底を焼いて置いていると、案の定、いつものようにやつて来て、そこに座り尻を焼いてしまい、赤尻になつたという話でした。

採集 S51・12・19 読谷村民話調査団第十三班 〔上原利津子・仲間博恵・佐久川君枝〕

23 大歳の客 〔御馳走〕

話者 名嘉眞 光子（大正九年一月三日生）

翻字・対訳 辺土名 初美

貧乏者ぬ方が、金持人ぬ家ん有いなー、トウシヌユールーに年取いる米ん無えらんやー、お米借りに行つたらしい。「今日やなートウシヌユールんやぐとうやー、明きーるんせーどーにかないぐとう、一合ぐれーや借ちとうらし」りち言ちよーしがよー。

「いつたーぐとーる貧乏者んかいや、借さん」ちざ

「お前達みたいな貧乏人には貸せない。」と断られた。

貧乏人が、金持ちの家に、大晦日の晩に年を取るための米がなくて、お米を借りに行つたらしい。「今日は、大晦日だから、年が明けたらどうにかなるからどうか、一合ぐらい借してくれ」と頼んだけどね。

ぐどう。昔は呴んかい一俵な一下るち使ひて一べどうてー。「あんすれー、うぬ呴んちょー、借らちょーけー」りちやぐどう、「うりやうー持つち行けー」りちやぐどう。
うぬ呴から、ちやつびん落ていらんせーや。「これで一年取らやー、お爺ーんち。あんし呴うんぐとうーうんぐとうーしきぐどうよー、うぬ呴から米もどんどん出てからに、これからどうのこうのし、正月んさん、年ん取つたんち話やん。「火正月するタジャやぐどう米ん借しー」りち行じやしが、借さんたんり。

それで、昔は呴に一俵ずつ分けて、米を使っていたから、「それじゃあ、その呴でも借してくれ」と頼むと、「それなら持つていきなさい」と言つたそだ。
呴からは、いくらの米粒も落ちないでしよう。「これで年越ししようね、お爺さん」と言つて、呴を逆さにしてふつたら、呴から米がどんどん出て来て、それでどうにかこうにか正月もし、年越しもできたという話だよ。「火正月しないといけないから米を借してくれ」と言つたが、貸さなかつたという話だよ。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館（知花春美）

24 三軒の家

著者 名嘉眞 光子（大正九年一月三日生）

翻字・対訳 大浜洋子

昔、あるところによ、三軒家があつたらしい。田舎に三軒こうあつたらしい。一軒はね、とつてもあのー朝から晩まで、笑い喜び、ほがらかな家庭やてーる様子。又、一軒は、なーとつても悪てー、悪心持つちょー

昔、あるところに三軒屋があつたらしい。田舎の三軒。一軒は、朝から晩まで、笑い喜びいっぱい、ほがらかな家庭であつたようだ。また一軒は、とつても悪い心を持った人で、朝から晩まで喧嘩して、嫁とも

る人ぬ、なー朝から晩まで喧嘩し、嫁とうん、いーひーあーはーし喧嘩し。一か所は又、子供のできないお婆ちやん達が居たらしい。

あんさぐとう、あのー悪やる、ちやー家庭が円満あらん家庭がてー、もうとつても円満な家庭んかい物習しーが行じよーるぐとーんやー。「貴方達家庭や、朝から晩までいや、ちやー笑い喜いし、大変良い家庭。ちやんぐとうーしうりさびーが。習ち呉みそーれー」んりちやべとう。あんしーねーうぬ人お又、「私ねーいつたーから習いる。私達やなーただ毎日ぬ、ただ慣り行きぬ暮らししや、何ん分からん、ただぬ暮らしるやしが、いつたーから習いるむん」りちやぐとう。うぬ人お根性お出じやていよ、「私もうしえーとーるい」うり又始またしえー、「私もうしえーとーるい」りち、根性お出じてひきぐとう。あんさぐとう、「とーとーうまやさ。いやーが根性お出じーしや、落ちついて根性ん出じなけー。あんしえーよ、なんくる物事ん無えんひと並みぬ家庭出じーんどー」んちやぐとう。

あんさぐとう、此ぬ良い家庭ややー、なー何処がらからりりまーちえーそーんちん、「あー帰ていめんせー

いつも言い合いをして喧嘩ばかりしていた。もう一軒は子供のできないお婆ちやんがいたらしい。

それで、この悪の、いつも家庭が円満でない家庭が、とつても円満な家庭に教えを乞いに行つたらしい。「貴方の家庭は、朝から晩までいつも笑い喜びいっぱいで、とつても良い家庭。どうしたらそういうふうにできるのですか、教えて下さい」と言うと、しかし良い家庭の人はまた、「私は貴方達から習いたい。私達はただ毎日の、ただ成り行き任せで暮らをしているだけで、何も分からん。ただの暮らしなんです。あなた達からこそ習いたい」と言つたので、この人は、怒り出して、「私をからかつてているのか」と。ほらまた始まった。「私をからかつてているのか」と怒り出した。そこで、「そうそうそういうところだ。あなたはすぐ怒り出す。落ちついて怒りは出すな。そうすれば自然に人並みの家庭になつてくるよ」と言つた。

そして、この良い家庭は、どこからか主人が遅く帰つて来ても、「おかえりなさい」と、いつも迎えていた。

さやー」んち、なー迎えるし、道具お又漬きとーてい、嫁ぬ昼寝んじそーいねー、うまぬお婆ちやのー、「あり、小ん子持ちえー、夜なーん起きーる起ーるすぐとう、道具んかち洗てーどうらすさ」んち、かち洗てーすすやーに、やるぐとーん。あんさーなかい茶碗やてーん何やていん欠きとーていん、「あれー孫ぬ達がるせーるむぬんや、なんくる壺屋ん儲きらすさ。嘉例なーいる茶碗ぬん割かいさ」んち、こういう暮らしそーみせーたんり。

又、此ぬ家庭円満あらん家庭やよ、直ぐなー茶碗ぬうまんかい蹴り返らさわん、「誰ぬ者がさがーんち、又これからも喧嘩なるし。嫁ぬ一言葉言ねー、二言葉ん三言葉んして、うんぐどうし、とうーち喧嘩ていーえーやってーるぐとーんて。

あんさぐとう又、子ん産しんそーらんお爺さん、お婆さんがめんそーちさぐとうよ。欠き茶碗ぬんかい茶あ御差ぎたぐとう、良い家庭ぬて、円満な家庭ぬ、「なー欠き茶碗るやしがなー童あ、孫ぬ達あ多さぬ、全部かんし欠き茶碗しか無えらんさ」りち、起くちん起くちん欠き茶碗やてーるふーじ。「とー、うりが一番嘉例な物やいびーさ。私達あ産しむぬ子ん産さん、茶碗欠ちゅ

また茶碗道具はつけといて、嫁が昼寝していると、そこのお婆さんは、「赤子持ちは夜中も起きることがあるから、道具は私が洗つてあげよう」と、きれいに洗つてふいてあげたりしたらしい。それで茶碗でも何でも、欠けていても「孫達がやつたことだからいいさ。壺屋も儲けさせていいさ。嘉例だから茶碗も割れるんだよ」と、こういう暮らしだつたそうだ。

また、家庭が円満ではない家は、茶碗がそこにころがろうものなら、「誰がしたのか」と、またこれからも喧嘩になる。嫁が一言いようと、二言も三言も返して、何かにつけて喧嘩ばかりしていた。

そして、また子供のいない家のお爺さん、お婆さんがいらっしゃると欠けた茶碗にお茶を入れて差し上げたら、円満な家庭の人が「欠けた茶碗ですが、子や孫が多くて、欠けた茶碗しかないんですよ」と言つた。おこしてもおこしても欠け茶碗だつたらしい。「それが一番、嘉例なんですよ。私達は、子供も生んでないので、茶碗を欠く人もない。残念です」と、そんな話が

しん居らん殘念やいびーんどーやー」んちよー、こん

な話はなしがあつたらしい。

あんされー又、側そばぬ悪わるな心持じむすつちよーる家庭は、「産うぶしむぬ子こん産うぶさんしが、又またあびーみ」んちよ、こんな
すでで、「人間じんげんでいーしえー、喧おーえー睡ねていーえーすしん、
家庭かていぬ主ぬしんかいる、柱はしらんかいる有あくとう」りち、これ
小さい時ときによく聞きかされた。お祖父じいじちゃん、お祖母ばあちゃんから。

あつた。

そしたらまた、隣の悪の心を持つてゐる家庭は、「子供こどもを生うぶんでない人が何なにを言いうか」と言いつたつて。そう
いうことで「人間じんげんといふのは、喧おーえー睡ねばかりするのも、
その家庭の柱はしらによるんだよ」と、小さい時ときによく聞きか
された。お祖父じいじちゃん、お祖母ばあちゃんから。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館（知花春美）

25 鳩料理はとりょうり

著者 宮城ヨシ（大正十四年九月十五日生）

翻字・対訳 国吉トミ

身みは浮うちやまるつて、鳩はとの肉にくは。下したに沢山たくさんあると思おもつ
たんだしようね、そこの嫁よめさんはね。「浮うちやまとーる
分ぶんお食くま」りち、食くらぐとう。掏すくいんりさぐとう全部おもる
無むえらんなとーたんだり。

鳩はとはよ、上うえに浮うくつて、肉にくは。大概たいがいね沈しづむせーや。

鳩の身みは浮うくんだつて。たくぎんあると思おもつていて
んだしようね。そこの嫁よめさんは。「浮ういている分ぶんは食べ
よう」と、食べてしまった。そうして身みを入れようと
したら、全部おもなくなつていたんだつて。

鳩はとはね、上うえに浮うくつて、肉にくは。だいたいの肉にくは沈しづむ

鳩おなーじゅーんねー煮らんがあたらー、上びんかい
浮ちよーし、全部食らぐどうよ、無えらんなでーーー。
迷惑そーたん、うまから出じゃきつたんどうか。

さあね。鳩はちゃんとは炊けてなかつたのか煮ている
最中に、上に浮いているのを食べていたら、全部なく
なつてしまつてね。大変迷惑し、そこから出されてし
まつたという話もあつたよ。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館〈村山友江〉

26 喜屋武ミーぐわーへ俵投げたわらな

話者 名嘉眞 朝 光(大正六年四月五日生)

翻字・対訳 玉城琳子

あの人はね、あのー非常に小さくてよー。あの万事
と言つたら、もう最高の時ときまんぐらだつたから、三十七
七斤ななせんしかなかつたらしい。

喜屋武ミーぐわーは、非常に小柄な方でね。もう最
高に体力がある時に(働き盛り)、三十七斤しかなかつ
たらしい。

馬車ムツチャーやつていた、この人は。あのー駅ん
かい行じやーに、だーうつびぐわー、童ぐわーるそー
んねーぐとう、皆にうせーらつてい。通堂かに取いん
ゆーさん、ちやー人後どうやたせー。

後お怒やーにかい。馬車、四、五間ぐらい投げて、
自分の馬車に、うつさぬ棒で積みよつた。昔はね、俵

喜屋武ミーぐわーは馬車引きをしていた。駅に荷物
を取りに行つても、小柄で子どもみたいに小さかつた
ので、皆に馬鹿にされていた。それで、那覇の通堂で
荷物を取るのも、いつも人より後になつていたらしい。
それで、とうとう終いには怒つてしまつてね。四、
五間程も離れている馬車に、棒を使つて荷物を積んだ。

に編んで、それを又、横目にしてあるさ。それからはも
も一、「喜屋武さん、喜屋武さん」と、皆で手伝つて積ん
積みよつたらしい。本当の力はないけど、武士。その
棒持つた力は、もー大変だつたらしい。

昔は、僕だったからそれを棒に通して。それからはも
う、「喜屋武さん、喜屋武さん」と、皆で手伝つて積ん
だらしい。本当の力はないけど、武士だった。棒を使つ
た力は、大変なものだつたらしい。

採集H7・2・1 読谷村立歴史民俗資料館（知花春美・玉城琳子）

注 喜屋武ミーぐわー 喜屋武朝徳（一八七〇～一九四五）武人。首里に生まれる。通称チャンミーぐわー。十二、三歳の頃、父と共に上京し、十六歳まで一松学舎で漢字を学ぶ。小柄で身体も弱かったので、父親から空手や角力を教わる。後に、読谷比謝社に住居を構える。体つきは瘦せて小柄であるが、飛鳥のような早業をもつて世に知れた。

27 田 場 大 工^{く注}

話者 名嘉眞 朝 光（大正六年四月五日生）

翻字 伊 藝 弘 子

ある人が、普請を頼まれたら、一ヶ月かかる普請は、十五日ぐらいは、道具ばかり、研ぎよつたらしいね。あの人が、有名になつたのは、家造つたらクサビというのがあるさあね。クサビと言うのをあれはナタで削つて、それを、あのう二つ重ねて、水を入れて、縄で立派に括つて、何日経つても水が入らなかつたらしい。それぐらい密着していたらしい。それで、それから有名な大工になつたらしい。

注 田場大工 へたな大工、素人大工。田場という昔の名工に由来する語で、へたな大工を皮肉つていう語。

28 モーイ親方いえ かた 〔なんだい へんたい〕

話者 名嘉眞 フ ミ (大正元年十一月十日生)

翻字・対訳 島 袋 フジエ

昔ぬ唐とう琉球やなー首里城やるばーてー。うぬ首里城ぬ丁度侍、なー偉い様が集まてい役員が、皆集まやーに。なーあまから唐ぬ国から請求さりーるばーてー。今度お灰繩絹てい持つち来りち御用ぬ有たぐとう。雄鷄ぬ卵、灰繩とう何城りがらー寄してい来りぬ、三ぬ問題ぬ來ぐとう。なー揃てー別い別いし、この役員ぬ達やなー頭押すてい、なーちやさらーましがやーりち、もう別りてー、揃てー別り別りしする所んかい、此ぬモーイ親方りせー、うまぬ嫡子わやくしやてーんや。

あん聞ちやーなかい今度お、「何んちターリー達や、ひつちー揃てー別かい別かいし。うんぐとーぬ協議びかーしみせーが」りちやぐとう。「此れーなー、ていーちんなー私達わがだとうし、ないるうれーあらん。なーうん

昔は唐と琉球はもう、首里城（が中心）だつたらしい。その首里城に侍、偉い方達、役人がみんな集まっていた。唐の国から請求があつたわけさあ。今度は、灰繩を持つて来いという御用があつた。もうどうすれば良いものかと、ああでもないこうでもないと役人達は頭を悩ませていた。モーイ親方はその長男だつたんでしようね。その人達の話を聞いてやつて來た。

今度はモーイが、「どうしてお父さん達はそんなに集まつてばかりで、そのような協議をしていらっしゃるのですか」と言つた。「これはもう私達に解けるようなものではない。どこそこの城を寄せて來い。また灰で

べとうーん丁度、何処ぬ城寄してい來。(なーうれー分
からんばーてー、はつきりえー、うぬ城、何処ぬ城り
ち分からんしが、うり寄してい來)。又、灰さーに縄絹
てい來りしんやい。雄鶏ぬ卵持つち來りぬ御用ぬ有し
が。なーうまんかい注文さつとーしが。此り雄鶏ぬ卵
産すんりちん無えらん。灰し縄絹らりーるうりんあら
ん。又此ぬ城やていん、向うに持つち行ちゆる事なん
らん。此れーちやーきらましがりち、私達やなー頭押
すい捻とーんどーやー」りぬ話子んかい言ちやぐどう。

「とー、うぬ事やらー私遣らち呉みそーれーターリー。
私が行じやーに返外んち来びーる」りちゃぐどう「いやー
ぐとーる」「うりやかどー一易つさしる返答が有いび
ん。私が直ぐ一度に返ち来びーさ」りちさぐどう。「いやー
ぐとーる者ぬ何んないんなー。なー常平生やうんぐどうー
しダラダラし、親ぬうれー何ん出来らん、何んならん
そーてい」りち、くさむにーんち聞ちえーるばーてー。

あ、「今度お私が行ちやびーん」りち、うぬターリー
たましに行じやぐどう、代わりに。「だー何が、琉球か
らぬ、此処からぬ、支那からぬ、かんし注文さし持つ

縄を絹つて來なさい。雄鶏の卵を持つて來なさいとい
う御用だが。このように雄鶏が卵を産むといふことも
ない。灰で縄を絹えるはずでもない。また、この城で
も、向こうまで持つて行くこともできない。これはいつ
たいどうすれば良いのだろうかと、私達は大変頭を悩
ませているのだよ」という話を、モーイに聞かせた。

するとモーイは、「はい、このことでしたら私を行か
せて下さい。私が行つて解いて来ます」と言つた。「お
前みたいな奴は」「たやすいことですよ。私がすぐ一度
に解いて来ますよ」と言つたようだ。すると、「お前み
たいな奴にできるのか。お前はいつもはだらだらして、
親が言うのも聞かないのに、何もできないくせに」と
言われたのだが、結局はモーイが親の代わりに行くこ
とにになった。

そこで、「おい、このように注文した物は持つて來た
か、どうしてお前が来たのか」と言われた。「はい、お
父さんが産氣づいたので、代わりに私が来ました」と

ち来み、何がいやーが来る」りちゃぐとう。「はーなー
ターリーや、産催ししみそーやーなかい、今度お私が
来びたん」りち、さぐとう。「男ぬん産催しますみ」りち
さぐとう。「何、男ぬ産催しさんむんぬ、貴方達あ雄鷦ぬ
卵、あぬうまんかい注文しえー何ぬ意味合やいびが」
りち、うれーうりさーに外んちゃんり。

あんさーに又、灰さーに縄縊てい來り言せー、「うり
灰し縄ぬ縊らりーびーんなー、縄あ縊やーにうぬま
かんし焼ちゃーに、うり持つちやぐとう、「此りやいびー
ん」りち、これも外んちゃんり。

あんさー此ぬ城や又、今度お持つち來りぬ御用や、
「此りちやーしん持つち、引かち持つち行ちゆる舟ぬ
有りわるないびーぐとう、とーうまからうぬ城乗しら
りーる船、うまかい琉球かい持つちめんそれー、此
ぬ城お直ぐ壞さーに持つち行ちやびんどー」りちゃぐ
とう。そのまま外んちゃんりぬ話やんばーてー。

そうして、この城を持つて来なさいという御用も、
「城を引っ張つて持つて行く船がないとできませんと。
そこから城を乗せる船を琉球に持つて来て下さい。城
は今すぐに壊して持つて来ますよ」と答えた。それで
全ての問題を解いたという話だよ。

言つたら、「男がも産氣づくということがあるのか」と
言われた。「何ですか、男が産氣づくということはない
のに、貴方達が雄鷦の卵を注文したのは、いつたいど
ういうことなのでですか」と、それは解決したつて。

②モーイ親方 毛氏八世盛平。伊野波親方（一六四八—一七〇〇）。童名宇真志、唐名毛克盛、順治五年戊小閏三月三日生。父盛紀（毛

泰永・尚質王代の三司官）、母向氏眞伊金、質は毛氏池城親方安憲の女思武太金、長男盛忠（伊野波親雲上）、次男盛任（糸満親雲上）。

康熙一九年庚申三月任御鎖側職、二三年申子十二月四日叙紫冠、三三年九月任三司官職加賜知行高三百二十石都合四百石。同十月任大美御殿總大親職。三九年庚辰十一月四日卒寿五三才号瑞泉。

③ターリー 26頁参照

29 モーイ親方いえ かた へ難題なんたい

話者 宇栄原 力メ（明治二十三年十月十五日生）

翻字・対訳 島袋喜美子

はじめ一や、あぬ親ぬ集までい、揃やさぐとう。家ん
かい行じなー、「私ねーあんやしがちゃーすがやー」でい
ち。「うりん心配すみ、ターリー。^{注⑨}私が外んすさ」「ワ
タブターグわーひやー、いやーがんうり外んしーうー
すみ」と、よーいそーてい、「私が行ちやびーさ」でい
やーに。

「私達あモーイが行ちゆでい言んどーやー」でいち。
「貴方うぶじょお分からん物言い方かた、あんねーぬ嫌な童わらわがんあ
まんかい行ちうーするばーい」んちやくどう、「とーモー

モーイ親子は話したらしい。
そうして、「私達のモーイが行くそうですよ」と父親
は報告した。すると、「貴方は、分からない」とをおつ
しゃつて、あるような子供がもそこへ行けるのか」と

イ、いやーあまんかい行んじんでー」でいやぐとう。

「何がさい、私達あターリーやなー心配さびーしが、

何が何ぬ用事やいびーが」りち、「あんあんやんどーやー

でいち。「私が行ぢやびさ」でいやぐとう「いやーア

タビチひやー、いやーがうり、あぬー行ぢうーするば

あい」でい言ぢさしが。「とーまじ遣らちんじみそーれー

でいちなー、一人ぬ人ぬ、「とー、ないんでいしゃーな

いぐとう。何なていん済むぐとう遣らし」でいち、行ん

じやぐとう。

あまんじえー、「いやーひやー童あ、何しーが來が」

でいやぐとう。「御用、沖縄から日本から御用でいち

来いびーんどー」でいやれー。「何が、何事が。ター

リー遣らせー、いやーが来ん」「私達あターリーや産催

しそーびーるむん」でい言ぢやぐとう。「男ぬん産催

しすみ」でい言ぢやぐとう、あまぬ言ぢやぐとう。向

こうぬ言ぢやぐとう、「あんするむんぬ貴方達あ雄鷄ぬ

卵、あぬー御用でい言みせーみ」でい。「いー、やー此

りねー負きたるむん」りそーるむんぬ。

又なーーちえー、あぬ山御用、山御用でい言みそーちや

ぐとう。「あぬ私ねー、うぬうり載しーる沖縄ねー日本ねー

言われたらしい。それで父親が、「モーイ、向こうへ行つてみなさい」と、モーイを直に行かせたようだ。「どう

して私の父は心配しているが、どういう用件だったのですか」と「こうちこういう事です」と説明した。「私が

行きます」と答えた。「お前は、アタビチャーハー、お前が行けるのか!」と言ったのだが。「まず行かせてみて下さい」と、他の人が言つたので、「どうにかできるんだつたら、どうでもいいから行かせなさい」と行

かせたようだね。

向こうでは、「そこの子供! 何をしに来たのか」と言つたので「私は御用をしに、沖縄から日本からの御用という事で来ました」と言つた。「どういう事なのか、父親をよこしなさいと言つたらお前が来たのか」、「私の父は産氣づいています」と答えた。「男がも産氣づくのか」と言つたので、「それなのに、あなた方は雄鷄の卵を持つて来なさいというのですか」と返答した。すると、「もう、こいつには負けた」と。

またもうひとつは嶽御用と言われた。「あのう私は、それを載せる船が沖縄にはないので、その船を借りに

無えらん。うぬ船借いが来びたん」でいわさぐと「ひやー、

ワタブターや」でいち、「又うりん済まちよーん。

「来ました」と答えたので「ワタブターや」と言つて、これも済ませたつて。

灰縄御用でいちやぐとうや、あぬー「灰縄あ持つち来びんどー、うれー持つち易つさてーぐとう」「何ぐわいやーうれー縄あらん灰るやるむんなー」でいちやぐどう。「あんし貴方達あ灰縄でい言るむんぬ。何ぐわ縄焼ちやーに灰なちえーびんてー」でいちよ、うり持つち、三]ち、うぬモーイが外んちえーたんてい。

と一うんに一うとーとい、「此りんかいなー負きたるむん」でいち。「上んかい、少えうまんかい座れー」りちやぐどう。「うーううー、私がうまんかい座る権利え無えびらんむん」でいちよー、うれー何がらなたんりんどー、うぬモーイや。

灰縄御用と言つたので、「灰縄を持つて来ましたよ。それは持ちやすかつたので」と言つたら、「それは綱ではなく、灰じやないか」と言われた。「あなた方は、灰縄とおつしやつたじやないですか。綱を焼いて灰にしたら灰縄ができました」と、それを持って行き、三つの御用はモーイが解いたつて。

その時に「こいつには負けたよ」と。「上に来て座わりなさい」と言うと、「はいはい、私にはそこに座わる権利がありません」と言つて、その時にも何かあつたという話だつたよ。

注①ターリー 232頁参照

②ワタブターグわー 直訳はお腹が大きい人のことだが、転じて、人を愚弄する言葉として使われる。

③モーイ親方 232頁参照

④アタビチ 直訳は蛙のことだが、転じて、人を愚弄する言葉として使われる。

モーイ 親方 ^{いき}
カタ ^{かた} へ嫁釣り^{よめつ}

著者 宇栄原 カメ (明治二十三年十月十五日生)

翻字・対訳 島袋 喜美子

モーイ親方が、モーイ親方ぬ嫡子ぬモーイーが、上に登つて、鉤でこのようにかけたんかい登とーていカキジャーかんし掛けたぐとう。掛けたぐとう、下から女ぬ通てい。あぬ髪えかんし掛けたぐとう、「いやーひやーワタブタ」、人ぬ、あぬ頭掛けーんでいちんあんなー」でいちやぐとう、「何う一つさ、事お分からぬーが、カキジャー何掛けとーる、私がる掛けーるい。うぬカキジャー叱わ」でいち、うりんとーうつきさーに済まちえーたんでいー。「かんねーる者ねー適んむん」でいち、又うぬ女お通つて行じえーるばーてー。

モーイ親方が、上に登つて、鉤でこのようにかけたようだ。かけたら、下の方から女が通つたらしい。髪にこのようにかけたら、「お前みたいな奴は！ワタブタは、人の頭をひっかけるといふこともあるか」と言つたら、「何だと！事の次第も分からずに、カキジャーは私がかけてあるのか。このカキジャーがかかつているんであって、カキジャーを叱りなさい」と言つて、それもそのまで済ませたつて。「こいつにはかなわないよ」と、女は通つて行つたわけさあ。

うぬモーイでいしぇーなー、何までいん変わとーん。薩摩んかいうりが行じや、又うりから鶏んうりが連つて歩つち。なー三ちえー、うれー全部一ちやでーるばーてー。うぬモーイや、嫡子え。

モーイといふ人は、どこまでも変わり者だつた。薩摩にも行つて、いろいろ難題も解いた。いつも鶏を連れ歩いていたそうだ。そういう三つの難題もすべて同じようなもんだつたつて、そのモーイには。

注①モーイ親方

292頁参照

②ワタブター 295頁参照

31 モーイ親方へ鶏

著者 宇栄原 カメ (明治二十三年十月十五日生)

翻字・対訳 島袋喜美子

モーイーやあぬー、雄鶏やー、鶏ぐわー飼らとーてー
るばーてー、鶏モーイや。あんさーなかい、うぬ鶏え、う
まぬ何処がら御殿殿内^(まどんどうんちゆうか)廻^(まわ)い廻^(まわ)ちえーるうまんかい飛^(と)
り入^(い)じえーるばーてー。「いやーひやーワタブター、触^(ふ)
りモーイーや、何が人ぬ屋敷^(やぢ)んかい鶏入りーる」でい
ちやぐとう。「何が貴女お鶏ぬる飛^(と)り入^(い)つちよーる、私
がー入^(い)つてーねーびらんどーやー」「此ぬひやーワタ
ブターモーイねー、あんねーる者^(わん)ねー負きたるむん
りち。

モーイは、あのう雄鶏、鶏を飼っていたって。そう
したら、その鶏がどこかの御殿殿内の、囲われた屋敷
内に入つていつたようだね。すると「お前は、ワタブ
ターひやー、馬鹿者モーイは、どうして人の屋敷に鶏
を入れたのか」と怒られた。「どうして貴女は鶏が飛ん
で入つているのに私が入れたのではないよ」と返した
ら「このワタブター、モーイみたいな者には負けたよ
と。

うりん鶏んあんやたんでいんどー。屋敷んかい入つ
ちやぐとう、「何が私が入つちよー無えん」、叱たぐとう
「私がー入^(い)つてー無えん、鶏ぬる飛^(と)り入^(い)つちよーるむ

それも鶏の話もそういうことつてよ。屋敷に入つて
行つたので「どうして私がは入れてないのに」と、叱
られたので「私がは入れてない、鶏が勝手に飛んで入つ

んぬ、私叱いみ」りち、又うりんよー返ち、うりん済
まちやんでい。あんしうぬモーイりしえーなるけー者
やたんり。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第十班 〈山内源徳・前新門恵子・金城清美〉
たのに、私を叱るのですか」と、それもまた返してそ
ういうふうにモーイは強か者だつたつて。

注①モーイ親方 292頁参照

②御殿殿内 王子、按司の家、またはその人をさす敬称。一般に王族の家や建物を意味する語である。

③ワタブター 295頁参照

32 モーイ親方へ勉強十嫁釣りく

著者 名嘉眞 フ ミ(大正元年十一月十日生)

翻字・対訳 名嘉眞 宜勝

隠てい勉強さーに。人ぬ見じゆる所うとーてー蛙い
取つたい、色んな悪い遊びするばーてーなー。あんさー
に、鶏ぐわー持つち闘らちやい何さいし。

あんさー或る所んかいありやたんでいや。此ぬうり
とう、許婚しぇーる女ぬ居たのーあらに。鶏ぐわー持つ
ちやーに、「あんし、でいー賭し闘らさ」でいち、鶏や

隠れて勉強をして。人の見ているところでは、蛙を
獲つたりいろいろ悪い遊びをしたそうです。鶏を持
ち歩いて闘わせたりして。

あるところに、モーイと許婚している女性がいたん
でしおうね。そこへ鶏を持って、「賭をして闘わしてみ
よう」と鶏を抱いて出てきた。そして、そこへわざ

抱ち出じたくとう。あんさー態とううぬ、うまんかい投ぎやーに、うぬ鶏ぬ屋敷んかい入つちやくどう。うぬなー、毎日、うまんかい籠とーぬ女ぬ、直ぐ急に飛び出じやーに。鶏ぬ入つちやくとう、魂抜きやーに、飛び出じたぐとう。「今ねー、見ちゃん、見ちゃん」し、あんしさんでいる、話るやさに。

と鶏を投げ込んで、屋敷の中に入れてしまつた。鶏がそこの屋敷に入り込んだので、もう毎日家の中に閉じこもつてゐる娘が、すぐ急に飛び出して來た。それで、「今度は見たよ、見たよ」と、はやしたてたという話でしよう。

丁度、此ぬ親方でいしえー、なー隠とーていむる勉強さーなかい。なー又相手や、一生懸命勉強しなー、是非自分や誰やかんゆー出来やーなりわるやるでいち、なー側に見してい勉強する人お落第し。いざ、ある大學ぬ試験ぬ場合ねー。あんし、此ぬモーイ親方でいる人お隠どーてい勉強さーなかい、一番取つたんでいる話やー。

モーアイ親方へ小便+煙草+難題

話者 名嘉眞 光子（大正九年一月三日生）

翻字・対訳 知花 春美

モーアイ親方、でもちょっと人とは変わった人だつたんだね。小さい時からよ、籠武士やつてーるばーてー。自分の能力は人に表さないで、何もかも分かつていたんだろう。昔は籠武士言たんり。分からんふーなーし、何んくい分かてい言いよつたわけさ。

あれはもう何でも反対するわけ。道ぬ側んかい小便やすしえ。「此処んかいしつこしたら罰金さりーん」りぬ立看板があつたらしい。あんされー、うまんかい向かとーいい小便さぐとうよ、もう侍方んかい、「いやーあんしえーならーあらに」り言ちやぐとう、「何が、此処んかいしーねー、金払れー、罰金払れー済まびーさに。小便さんあれーしえーならんりちる書ちゆる、何んがんしる書ちゆる」りぬ思やつてーるばーてー。

あんさーに、勉強、人が見えない所でやつて。そつちゅう鶏ぐわー持つて遊んで、あんさぐとう、鶏ぐわー持つち遊り、勉強見えない所でやつたらしい。あんす

モーアイ親方は、何でも反対のことをするわけ。道の側に小便をするでしよう。「ここに小便したら罰金」との立看板があつたらしい。すると、そこに向かつて小便したら、侍が「お前、それではいけないよ」と言つた。「どうして、ここにやつてもお金を払えば、罰金を払えば良いのではないですか。小便をしてはいけないならやつてはいけないと書くのであって、どうしてそのように書くのか」ということだつた。

それから、人が見えないところで勉強をやつていた。いつも鶏を持って遊んで、鶏を持って遊んで、勉強は見えない所でやつたらしい。それで、伊野波のモーアイ

ぐとう、伊野波ぬ鶏ぐわーいーてい遊ぶ馬鹿、馬鹿さつ

とーる様子。

あんし又、煙草ん、男ぬ親ぬ、「煙草お一吹ちなーどう吹ちやんどーやー」りちやぐとうよ。「一吹ち吹け一済めーさに」りち、沢山入れてからに煙らしてよ、あんし又、親んかい叱てい。「何が、ターリーがる一吹ちなー吹きり言たのーあらに」りち、こんなにして理屈ばかし並べたんだろう。

あんしするうちに又、薩摩から藁綱絹てい持つち来り、又、恩納岳御用、雄鶏ぬ卵持つち来、命令や。うしぇーらつとーるばーてー、沖繩や。
もう首里親國ぬ役人達あ揃ていよ、ちゃーすが、かーすが、揃てー別り別りしそーるとうくる。

なー男ぬ親んかい、「ターリーさい、私が行ぢ来びーべとう」りち、「いやーがんないみ、いやーがならんさ」りち、親の一反対しているけど。

あんしぇー、或る役人が「伊野波ぬモーイが、うり遣らしーねー迷惑すしが」「りちよーしがてー、そー言つているけど、又、或る人のー、「まじ行じんじゅんりるむん遣らしぇー」りち、遣らちさぐとうよ。立派色ん

は鶏を持つて遊ぶほどの馬鹿だと言われていたようだ。

また、父親が「煙草は一吹きずつ吸うんだよ」と言つたので「一吹きだつたらいいでしょ」と、たくさん入れて、煙らせて、父親に叱られた。「どうして、お父さんが一吹きずつ吸いなさいと言つたのではないですか」と、理屈ばかり並べていた。

そうしているうちに、薩摩から藁綱を纏つて持つて来なさい、恩納岳御用、雄鶏の卵を持つて来なさいと命令がきた。沖繩は馬鹿にされていたんでしょう。

もう首里親國の役人たちが揃つて、どうするかと集まつては別れたりして協議をしていた。

モーイ親方が、父親に「お父さん、私が行きます」と言つて、「お前がもできるか、お前にはできないよ」と、親は反対した。

また、ある役人は、「伊野波のモーイを行かせると迷惑する」と言つていたが、またある人が、「まず行くというのであれば行かせると良い」と、薩摩へやつた。すると、色々な問題をちゃんと理屈で解いたつて。

な物理屈で解いているわけ。

あんし、「私達わわたあターリーがめんせーんりやたしが、出じ發つちゅんりしーねー、産催さんせいししみそーちや、来うさん、私が來びたんどー」り言いちやぐとう、「男いぎぬん子産すみ」りちやぐとう、「うりから雄鷄おごぬ卵産たまごさびーみ」りち。

それからもう、やつて、又「恩納岳うんなりん持つち来らんり、那霸港はんこうまで一持つち来らしが、うり載のしーる船ふね無ねえんぐどう、大きぬ船貸ふにからち具きみそーり」りちよ。これももう解ほいているわけさ。

なーーてーー一てーー一てーー藁綱わらつなは、綱つなでこれ持つつて來らたらよ、やつぱし何もかも解ほいたらしい。勤ちうみ果はたしたらしいよ。

そこで、「私の父親が来ることになつていましたが、出発間際に産氣づいて来れなくて私が来ました」と言つたので、「男でも子を生むのか」とね。「それでは雄鷄は卵を産みますか」と答えた。

それから、また、「恩納岳うんなりん持つち来らんり、那霸港はんこうまで持つつて來らたが、それを載せる船がないので、大きな船を貸して下さい」と、これも解いたわけだ。

もうひとつ、藁綱わらつなは、綱つなを持つて來らたね、これで、何もかも解いたらしい。勤めを果たしたらしいよ。

採集 H 7・2・1 読谷村立歴史民俗資料館（知花春美・玉城琳子）

注①モーイ親方 261頁参照

②恩納岳 恩納村恩納に位置。標高二六二・八メートル。優美な、気品あふれる女性を思わせる山容は、遠く王府所在の首里あたりからも望見され、歌にも詠まれた。

③首里親国 251頁参照

④ターリー 263頁参照

屁へ
ひり嫁よめ

話者 名嘉眞 フ ミ (大正元年十一月十日生)

翻字・対訳 玉城和美

だから女性は、屁やひつちえーならんりちょーるばーて、人ぬ前うてー。屁ひーぶさいねー、ガスが出る前に踵あとうくみりち。足ひきぬ踵あとう、で、押おしたらガスは出ないよと言うて。「アードウードー、モーサー」^注り。

だから女性は、人前でおならをしてはいけないということさあ。おならが出そうになつたら、ガスが出る前に踵で押さえなさいと。足の踵で押せたらおならは出ないよと言つたつて。「アードウードー(踵だよ)、モーサー」とね。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館(知花春美)

注 モーサー 娘の名前。

35 山原と団亀

話者 名嘉眞 光子(大正九年一月三日生)

翻字・対訳 具志堅 タケ

山んじる龜かめぬ居たらー。山んじ糞くそまたぐとう。木ぬ葉かみぬなー龜かめぬ居てーぬばーてー。あんさぐとう糞くそおま

山に龜がいたのか。山で糞をしたらしい。木の葉の中に龜がいたんでしょうね。それで糞をしたら、糞が

たぐとう、糞あぬ歩つちやくとう。

たぐとう、糞ぬ歩つちやくとう。
やんばる注
山原ぬ旅や
糞ぬ歩つちゅしや
幾旅んさしが
今度う初み

歩いたつて。

山原の旅は幾旅もしたが
糞が歩くのは今度が初めて
という歌があるさ。

採集H 7 · 1 · 21 論谷村立歴史民俗資料館（知花春美）

注 山原 沖縄本島北部、国頭地方のこと。山が多いのでそう呼ばれている。

36
山 やん
原 ばる
と
団 だん
亀 かめ

話者 宇榮原 文
(大正七年五月八日生)

翻字・対訳 国吉トミ

山原の旅は、幾旅もしたが
糞が歩くのは、初めて

巻之三

龜が座つているのだが、そうとは知らずに龜の上に糞をしたわけさあ。そうしたら、その龜が歩いたので、糞ばかりを見たんであつてね。

かみ
かみ
うま
かみ
ながり
かみ
うま
かみ
ながり
かみ
うま
かみ
いわ
あ
かみ
うま
かみ
いわ
あ

亀とは知らずに、亀の背中に糞をやつてしまつたわけさあ。それで、亀の上の糞が歩いたということ。

採集 H 7 • 1 • 21 読谷村立歴史民俗資料館 〈村山友江〉

注山原 304 頁参照

37 果てなし話へ蟻運びへ

話者 岳原ツル（明治三十八年五月四日生）

翻字・対訳 村山友江

なー毎日ぐとうに、あぬー、子供達に、「話聞かせて、
聞かせて」して。なー親ん、話る有るうつさる有る、
無えんなたぐとう。

もう毎日のように、子供達に、「話を聞かせて、聞かせて」と、せがまれたようだ。親も分かるだけしか聞かせてあげられない、後は話が尽きてしまったつて。

「なー一番長い話い聞ちゅみ」りちゃぐとう。なーあんし一番上等りち、沖縄は蟻が居らんぐとう、唐から唐船ぬみー蟻お、あぬ積りつち。うぬ唐船ぬみーぬ蟻お、一ちなー一ちなー、括ちえー降るし、とー此れー有るつき言ねー、十日んかかいしがちやーすが「りちゃ

その唐船いっぽいの蟻を一匹ずつ、もう縛つては下ろし、縛つては下ろし…と、話し始めたようだね。する

ぐとう。「十日とうかにんならんるあしがちやーすが」りちや
ぐとう、「もうやめて」とあきりたんち、うつびる話はなし聞きちや
る。

と、「もう、これは全部話したら十日ぐらいかかるがど
うしようか」と言つたつて。「十日でも話し終わらない
かも知れないがどうしよう」と言つたら、「もうやめて」
と呆れ返つたという、それだけの話を聞いたよ。

採集 S 52・5・8 読谷村民話調査団第十三班（富村朝夫・仲程勤・知花利江子）

注 唐 船 中國からやつて来る船。シナ式ジャンク型のいわゆる中國風の船体構造を持つ船。

38 夫婦喧嘩の仲裁

話者 名嘉眞 光子（大正九年一月三日生）

翻字・対訳 大浜洋子

とう一ち 夫婦喧嘩ふうおうびかーする、有ある家庭やへうぬ有あていよ。
あんし此みとうぬ 夫婦喧嘩ふうおうしーねー、この方かたはうりやたんり。
これ戦前せんぜんの話はなしやしがてー。

いつも夫婦喧嘩ふうおうばかりしている家庭やへうがあつた。これ
は戦前せんぜんの話はなしだけどね。

あんさぐとう、側そばぬ又隣まごとにかい、じこー、なまちな
叔父おじさんが居ゐてい。うぬ人ひとお又、夫婦喧嘩ふうおう分ぶんかさーや
たんり。「誰だが言いしん聞きかんしが、うぬ人ひとが言いしえー
夫婦仲直むつむつりすたん」ち、音おとうつちよーたんりよ。

この家の隣となりに、とても愉快な叔父おじさんがいらした。
この人はまた、夫婦喧嘩ふうおうの仲裁さいが上手じょうしだったそうだ。
「誰だが言うのも聞かないけど、この人が言うと夫婦仲
直むつむつりする」と、世間よのでも評判ひょうばんになつていた。

あんさぐとう、言んねーすんねー、なー喧嘩始おーストまた
ぐとう、「いえーお父ヒ、始ハジまとーんどー。今日やなー必
じあれー、道具ビラギん何ナニん全部ムツルすんち出ハシじやさぎーぐとう
や。あんし、『いやんぐとーる者ハルや』んち、全部ムツルすんち
出ハシじやち、絶対ゼツタ入りらんちさガーぐとうや。子コん半分
なーやしが、あんにんあれー全部ムツルいやー連ツイてイ行けー
んち、うぬあたいなとーんどー」んちやぐとう。なー
愛さぬる喧嘩オーラせーりち見ムちょーしが、心ハぬ忍シムばらん行
じよーる様ヨウ子チでー。

あんさぐとう、「何ホが、いつたーや何んちあんし産ハナし
むぬ子ハナん産ハナちから、うんぐとうーすが」んちやぐとう
や。夫ヒぬよ、「よーさい、此れーやー、ちゃーしかーし」
んち、もう妻ハルぬ悪い事ハコびかー言ハシちえーるばーてー。あ
んさぐとう、このすくちな叔父オジさのー、「あんしえーん
ちや、あんしえーんちや、あんしえーんちや」んちや
ぐとう。又、「あねーあいびらんどー、かんるやいびん
どー」んち、又妻ハルが言ハシちやぐとう、又うぬ、「あんしえー
んちや、あんしえーんちや、あんしえーんちや」さぐ
とう。「いーあねーあらん、かんるやんどー」しゃぐ
とう、又まだん、「あんしえーんちや、あんしえーんちや」

すると、またもや喧嘩が始まったので、「お父さん、
始まりましたよ。今日はもう、道具類もみんな出して、
『お前みたいな奴は』と追い出して、絶対中に入れない
と言っているよ。子供は半分ずつ連れて行けといふ
が、そとはしない、あんたが全部連れて行けといふほ
どの状態になっているよー」と言つた。すると、好き
合つているから喧嘩オーラもするのだろうからさせなさいと
見ていたのだが、後はいたたまれず叔父さんは出て行つ
た。

そして、「どうしてあんた達は、子供まで生んでおき
ながら、こんなにするの」と言つと、夫が、「あのです
ね、こいつはこうでああで」と、妻の悪口ばかり言つ
た。すると、このおもしろい叔父さんは、「それはそう
だ、それはそうだ、それはそうだ」と言つた。また、
「そうではありません。こうなんです」と、妻が言つ
と、また、「それはそうだ、それはそうだ、それはそう
だ」と言つた。「いやいや、そうではない、こうなんだ」
と言つと、またも、「それはそうだ、それはそうだ」と
言つた。そうして、そうして、ずっとこれを取り返し
たので、三回目には、一人ともイヒヒーと笑つて「お

りちよ。あんし、ひつちー此れ繰り返して、三回目ねー

よー、二人、イヒヒーんち笑やーんかいや「茶あんでー

沸かせー、アタビチ^塔」りち、仲直りそーたんり。

茶でも沸かしなさい、アタビチ」と仲直りしたつて。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館（知花春美）

注 アタビチ 25頁参照

人間の始まり

話者 宇榮原 文（大正七年五月八日生）

翻字・対訳 村山友江

昔の人の始まりは新原ビーチから始まつた。海から、何処からが来ら一泳じ来たんり。新原ビーチんかい。あんさい岩ぬ上んかい暮らちよ。

昔の人の始まりは新原ビーチから始まつた。どこから来たのかは分からぬが、海から泳いで来たつて。そして新原ビーチに泳ぎ着いて、その岩の上で暮らすようになつてね。

うぬ人ん又うまぬ女とうぐーなやーに、うまんじ子産ちえーたんり。うまから広がとーんり。新原ビーチから人お広がとーんり。

その人はまたそこの女人と仲よくなつて、子供も生まれたらしい。そこから、新原ビーチから人は広がつていつたそうだよ。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館（村山友江）

注① 新原ビーチ（みーばる） 玉城村百名にある海水浴場。北東側にある百名ビーチと連続している。

40 夫 振 岩

話者 名嘉眞 光 子（大正九年一月三日生）

翻字・対訳 知 花 春 美

今は結婚、ほとんど恋愛さーね。昔はもう、親ん達が決みやーないかい、それに従わなくちゃいけないわけさー。

あんさーないい、男あなー、じこーぬ、今はそういう男見えないけど、カンパチャー^{注①}というて、こんなしてハゲがあつたらしい。あんさーにかい、親ん達が名付きていせーしが、絶対女ぬ振ていならん。

あんさーにかい、親ん達あ作戦さーにかい、岩んかい、作戦さーにかい遣らちさくとう。うにーねー嵐が来る様子。あんさぐとう、此ぬ男あ自分ぬ着ちよーる着物、こんなにして着していさくとう、うりから心人情出じやーにかい、あんし思いるむやー、女ん結婚さんりよー。

現在の結婚はほとんど恋愛さあね、昔はもう、親同士で決めて、それに従わなければいけないわけさあ。

それで、今はそのような男はみえないがカンパチャーというて、男にはこんなにしてハゲがあつたらしい。その男と親達が縁組してあつたのだが、女は絶対できないと言つた。

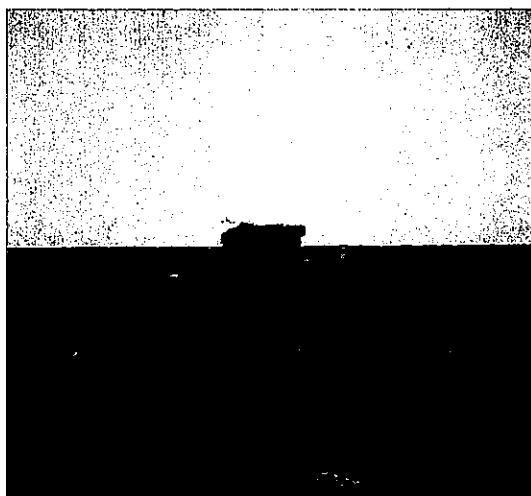
そこで親同士で作戦を立て、岩に、作戦で、二人を行かせた。その時、嵐がきたようである。その男が自分が着ている着物を女に着せてあげると、それから心人情を感じて、こんなに思つてはいるんだねと、女は結婚したそうだ。

あんさーにかい、夫振岩、夫振いらー、あぬ岩んか
い連そてい行いけーりち、ありかーん人ちよお言いいたん。

それで、夫振岩、夫を振るなら、あの岩へ連れて行
きなさいと、あの辺の人は言つていた。

採集H7・2・1 読谷村立歴史民俗資料館（知花春美）

- 注①カンパチャー 禿のある者。
- ②夫振岩 名護市羽地の源河のほぼ真北一・四キロメートル沖にある海拔三・五メートルの岩礁のこと。



夫婦岩

41 シチヤヌ力一由來

話者 宇榮原 文（大正七年五月八日生）

翻字・対訳 知花めぐみ

水釜の井戸の下んかい、海の側んかい井戸ぬ有しえー

水釜の方に、海の側に井戸があるでしょう。あ

や。あぬかんし下りてい行ちーねー、あたいんかい有るばーてー。汲みんじや井戸ぬ、昔からぬ。昔からりちんうぬ井戸やよー、後んかい七門墓んち有たんよー、七門。七ち墓ぬ有たるばーよ。うま尾類墓んでい言たしが、本当はつきれ一分からんしがてー。

何が、うぬ井戸や造たしえー、うぬ七門墓造いに、造いんでい、うぬ井戸や掘たんでい、造たんでい。何百年がらーないら一分からんしが。ただ昔から有んでい思たぐとう、あの七門墓造いんでいるうぬシチャヌカ一や。今あまた移動しみてーんでい、何処んかいが、七門墓。

井戸は、シチャヌ、水釜ぬシチャヌカー。一番此処あ、あのー始まい。うまからる水釜あ全部水え汲むたんでい。

の、このように下りて行くと、近くに井戸があるんですよ、昔からの。昔からほらこの井戸はね、後ろに七門墓というのがあつたんですよ。七つ墓があつたんですよ。そこは尾類墓と言われていたが、本当ははつきりしたことは分かりませんがよ。

どうしてこの井戸を造つたかと言うと、その七門墓を造るという事でこの井戸を掘つたそうです。何百年ぐらいになるか分かりませんが。ただ昔からあると思つていたら、あの七門墓を造るという事で、シチャヌカーを造つたそうだ。それから今はまだ、七門墓はどこかに移動してあるそうです。

この井戸は、水釜のシチャヌカーとります。ここはあのう一番の始まりで、ここから水釜は、全ての水を汲んでいたそうです。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館（村山友江）

注①水釜 嘉手納町の字のひとつ。国道五八号線を隔てて嘉手納基地と向かいあつていて、西側の海が埋め立てられ新興住宅地となつてゐる。

②七門墓（ナナチジョーバカ） 嘉手納チナーという人が造つたといわれる墓である。ジョー（門）がナナチ（七つ）あつたといふことで、ナナチジョーバカと呼ばれるようになつた。

③シチャヌカー 嘉手納町水釜にあるヤラバンタ南側に流れる川。

タケーサガマの話

はなし

著者 宇榮原

文（大正七年五月八日生）

翻字・対訳 知花めぐみ

あのよ、水釜みじがまの後うしろかいタケーサガマたけーんち、タケー
サー^{さー}ガマがまでいち有あるばーてー。あの高山たかやまよ。

うぬタケーサー^{さー}ガマがまー、何ながやーんり思おもたべとうや。
今いま聞きちやぐとうよー、昔むか戦せん争あそぬ有あたる場合ばあいによー、今いま
帰か仁じんからありんかい、水釜みじがまの後うしろぬ山やまんかい追おついよー、
うまんじ、あの、兵隊ひょうたいるやさに、うまんじ沢だざーんちゅ山やまぬ亡ま
さんでい。あまから攻せみらつてい。

あんさーになー、此こ世よになていからよー、今な帰き仁じん
ぬ人ひとぬめんそーやーに、かんし碑文ひもぬり立派りつけしえーぬばー
てー。うり造つくりてーぬ、タケーサー^{さー}ガマがまでいー、うま。
水釜みじがまの裏うらの山やま、渡具知とぐちからは良く見えますよ。水釜みじがまか
らは後うしろになつていて。渡具知とぐちからは川かわ越こえて行いかな
いと。水釜みじがまからは歩あるいて行いけます。渡具知とぐちからは、船ふね
に乗のつて行いかないと、伝馬船でんまぶねぐわーに。その幅はばは小ちいさ
いんだけどよ、すぐ行いける所ところ。

あのう、上の水釜の後方にタケーサー^{さー}ガマがまというの
があつたんですよ。あの高山たかやまよ。

このタケーサー^{さー}ガマとは何なだらうと思おもっていたら。
今いま聞いたらですね。昔、戦争せんそうのあつた時に、今いま帰か仁じんか
ら水釜の後方うしろの山へ追おわれて、そこで、たくさんたくさんの兵
隊ひょうたいが亡まくなつたそうです。向むかから敵寇に攻められて。

そしてこの世よになつてから、今いま帰き仁じんから來くわた人ひと
が、このように碑文ひもぬりを置いてあるんですよ。これがタ
ケーサー^{さー}ガマがまだそうです。水釜の裏うらのところで、渡具
知とぐちからは良く見えますよ。水釜みじがまからは後うしろになつていて
ます。渡具知とぐちからは川かわ越こえないと行いけません。水釜
からは、歩いて行いけますが、渡具知とぐちからは船ふねに乗のつて
しか行いけません。伝馬船でんまぶねに。その川幅はばは小さいんです
けどね。すぐ行いける所ところなんですよ。

注①水 篓 31頁参照

②タケーサガマ 本来はタテーサガマといい、古い時代の人骨が
葬られた洞窟である。

③今帰仁 沖縄本島の北部。村の歴史は古く、沖縄の三山分立時
代は北山王の居城である今帰仁城を擁して沖縄北部の文化・経
済の中心地として栄えた。

④渡具知 読谷村の比謝河口にある字。戦前は名称地渡具知泊城

を有する半農半漁の部落であった。

⑤天馬船 ティンマともいい、ハギ船のうち龍骨（カーラ）があ

る小型のものをさす。櫂や帆をもつて物資運搬、人員輸送に使
われたが、此の天馬船を大型化したのが宮古船、山原船、馬船
船であるといわれている。

43 天川坂のお粥戦争

著者 宇榮原 文（大正七年五月八日生）

翻字・対訳 上原ヨシ

うれ一大昔ぬ薩摩とう沖縄との戦争の場合。沖縄や、
あんざーにやがてい戦攻しかきてい來ぐどうやバナナ

その話は大昔の薩摩と沖縄との戦争のこと。
沖縄にやがて兵を寄せて来るという時に、（天川坂注に



タケーサガマ

ぬ皮ん、うまんかい全部放てい、ウケーメー煮やーに
ほーてーたぐとう、ゆくんうりうち食まーなかい、戦あ
全部負け戦なたんり。

バナナの皮や) お粥を炊いてそこに流したつて。そう
したらそれを食べて、相手はよけいに元気になつて、
負け戦になつたつて。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館(村山友江)

注 天川坂 読谷村から嘉手納にさしかかる急な坂道。戦前は石畳だつた。

44 阿 麻 和 利 〈網発見〉

話者 宇榮原 文(大正七年五月八日生)

翻字・対訳 村山友江

屋良のアマンジャナーは、アマンジャナーよ。あれー
大変ビーラーやたんりや、あぬ人お。洞窟んかい置えー
たんり、あんしどうーち。あんしが秀り者るやみせー
たんりどー、うぬ人おアマンジャナーや。皆が捨てい
がち者やたんりしが。

後お屋慶名ぬみーんかい住りがうたらー、あまんじ
いゆくわーちえーういさーに。洞窟うてい網作でい、洞が
窟んかい住まとーてい。捨てい置つちさやーに、洞が

後に屋慶名に移り住んだのか、そこで魚を取つたり
していた。ああ、洞窟に住んで、そこで網を作り出し
たんだ。捨てられて洞窟に住み着き、そこで網を作り

うとーい網作いじやち、うぬ網持つち屋慶名んかい
行じ、魚取つてい皆んかい吳たんり。うるつさんかい
吳たんり。人助きやーやたんり。

じこー偉い人おやしがビーラーやみしえーたんり。
ビーラーなたぐとう、なー昔るむんぬ人お、なーとう
んじやくすせー喧ざるあたらー、病院ん無えんがあた
らー、洞窟んかい捨てい置つちさーによ。うぬ人お又、
網、魚取いる網作いじやちゃんり。アマンジャナーが
る網え、作り出じやちえーんり。

出し、その網を持って屋慶名に行き、魚を取つて皆に
あげたそだ。皆に食べさせたつて。人を助けていたつ
て。

非常に偉い人ではあるのだが、体が弱かつたんでしょ
うね。体が弱かつたので、もう昔の人は面倒を見るの
がめんどうくさかつたのか、病院もなかつたのか、洞
窟に捨てて置き去りにしてね。その人はまた、網、魚
を取る網を作り出したつて。阿麻和利が網を作り出し
たそだよ。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館（村山友江）

注①屋 良 嘉手納町の字のひとつ。町分離以前は北谷村に所属。嘉手納基地に面し、大部分は軍用地に接収されている。

②アマンジャナー 阿麻和利のこと。

③阿麻和利 北谷屋良村に十五世紀初頭に生を受けた英雄である。十歳頃まで体が弱く、山に捨兎にされていたが、山中で蜘蛛が巣を
はるのを見て網を作り出したとい。成長の後、勝連接司につかえたが、勝連接司茂如附を亡ぼし勝連城主となる。また、海外貿易
なども盛んにしたとされるが、護佐丸や第一尚氏と対立抗争し、一四五八年に越來接司（鬼大城）にひきいられた軍勢に亡ぼされて
しまった。阿麻和利の墓と称されるものが大木のエンミ原にある。

④屋慶名 与那城村の字のひとつ。村役場、中央公民館、農協などがあり、村の中心部である。

45 長田の始まり

話者 名嘉眞 光子（大正九年十一月三日生）

翻字・対訳 知花春美

長田は昔はよ、部落はなくて山さーね。首里の廃藩
なていからどう首里からぬ侍ぬ達が一人、一人めんそー
やーに開墾あきて、あのぐらいの字になつたらしい。
あんすぐとう、戦前、大変出来やー達がまんどーてー
るばー。首里からぬ人達ぬ、自分なー祖父母ぬ達までー
よー、すぐ物知りぬ人がまんどーたん。

長田は昔ね、集落はなくて山だつた。首里の、廃藩
になつてから、首里から侍達が一人ひとりいらして、
開墾してあのぐらいの字になつたらしい。

それで、戦前はたいへん秀れた方々が多かつた。首
里からの人たちのね、自らの祖父母までは、すぐ
物知りの人たちがたくさんいた。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館（知花春美）

注 廃藩置県 明治四年七月十四日、日本全国の藩を廃し、府県に改めた変革的処置。沖縄においては版籍奉還のステップを踏まず、廢
藩置県も明治十二年のことで、そのいきさつも全国に比べわだつて異なり、いわゆる琉球処分という形で行われた。

46 長田の始まり

話者 名嘉眞 朝光（大正六年四月五日生）

翻字・対訳 知花春美

はじめはね、川平といふ人が、学者が、あの人のが、何か指導してあげたらしいですね。この人は最初はお茶栽培さ

せ、最初は桑だな。桑作つて蚕を養つて、公民館で、うちらが分からぬ。それからお茶、お茶からは分かるね、それからパインとか、それが始まりではなかつたかと思う。

採集H7・2・1 読谷村立歴史民俗資料館（知花春美・玉城琳子）

注 川平 川平朝矩。首里出身で大正二年に長田に住み着き、農業開拓を行つた。いつも白いシャツにカンカン帽をかぶつた紳士で、子供達から「川平のタンメー」と呼ばれていた。

47 普天間権現

著者 宇榮原 文（大正七年五月八日生）

翻字・対訳 村山友江

或る美ら容姿女ぬよ、首里ぬ端んかいめんせーたんりよ。あんさーに、うぬ美ら容姿女おなー、込みていがあたらー、どうく美らさぬ。人んかい見らつてーならんたんりしが。

大変きれいな女の人が、首里の近くにいらつしゃつたそうだよ。この女の人はあまりにも美しかつたので、どこかに閉じ込めてあつたのかは知らないが。人には姿を見せなかつたらしい。

又、或る二才達がよ、必じ人んかい見らんりぬ人、見じぶさしよ。必じ見じゆんりち、うま通てーるふーじ。二才達が。あんさぐとう、なーひよつとし誤まつばーてー、うぬ美ら容姿女ん。あんさーにうぬ二才

そうしてある青年達が、人に見られたくない女性を、必ず見てみたいものだと思って、そこに通つたようだ。青年達が。すると、もうひよつとしたら、何か誤まつたんでしょうね、この美しい女性は。そうしたらもう

達や、「あい！今ねー美ら容姿女見ちゃん、見ちゃん」
し、手打つよ。

さぐとう、なーうぬ人おすぐ芭蕉紡うじみせーたんり。
布ぬ作くいんり。あんさーにうぬ針持はーじつちやーに、魂拔たましぎやーに。
あぬ普天間ふてんまぬ洞窟がまんかいちやー走はえーし。
うぬ芭蕉うぬよ、家から普天間ふてんまぬ洞窟がまぬみーまり芭蕉うや
続ちじよーたんり。

あんさーにうぬ芭う蕉さとうていよ。居らんなどーん
どーさくとう。普天間ふてんまぬ洞窟がまんかい入いつちょーみせー
たんり。

青年達は、「ああ！美しい女性を見たよ、見たよ」と、
手をたたいたつて。
その女性は布を織るための芭蕉を紡いでいる途中だつ
たようだね。そしたらびっくりしてしまつて、針を持つ
たまま普天間の洞窟に走つて行つた。その芭蕉は家か
ら普天間の洞窟まで続いていたつて。

そうして芭蕉を辿つて行つたら、そこで女性はいな
くなつていた。そのまま洞窟の中に入つて行つたつて。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館〈村山友江〉

注

普天間權現 宜野湾市普天間の普天間宮内にある洞窟。

普天間宮の鳥居をはいると拝殿があり、その後に洞窟が

あつて鍾乳石がたれ下がり奇観を呈している。中に普天

間観音を祀る。



普天間權現

赤犬子あかいぬこ 暗川發見くらがーはつけん

話者 宇榮原 文(大正七年五月八日生)

翻字・対訳 上原ヨシ

あぬ水ぬ無えんたんりやー、楚辺そべ。井戸ん掘かてー
無えんたるばーるやさに。又うぬ洞窟がま。

赤犬子あかいぬこ しえー、うまんかい昔からぬ洞窟がま、私達や
うま入つち見ちやしがよ。上部うぶんかい松ぬ生みてい、
横洞窟よこなてい入つち行ちねー、水ぬ多く溜たまとーんよー。
うまよ、水ぬ無えんなー、かーま大昔おおむかし、なー水えまー
んじ搜かめいがやーそーねー。犬ぬよ、濡どり鳥ぐわーなてい
出んじてい來ちたんり、うまから。うぬ犬ぬ濡どりとーせー
不思議ふしきぎりやーに、犬追いやーに、うぬ洞窟がまんかい入つち
行んじやぐとう、水ぬほんない有あたんり。

あんさーに読谷中よ。うま一掛けーん所ん無えんた
んり。懷ふぢくるんかい、桶とうんかい水入いつてい。あんさーに岩いし
うま下さりーる所ぬ岩いしんかい桶とう掛けくやーによ、かんし又、
膝ひざんかい掛けくやーに、かんしかみてや家いかい來ちたんり。
うんにからよ、犬ぬる水え搜さてーんりよ。あんしる
赤犬子あかいぬこ ち付つきてーらー、あんいち話はなしい聞きちゃん、犬いん

水がなかつたそだよ、楚辺は。井戸も掘つてなかつ
たんでしようね。そこには洞窟があつたらしい。

赤犬の子というのは、昔からそこには洞窟があつて、
私も入つてみたのだが。上方には松が生え、横穴に
なつていて、中に入つたら水量は豊富にあつたよ。

そこはね、水がない頃のずっと大昔、もう水はどこ
から搜してきたら良いかと困つている時にね。犬がよ、
濡れた鳥みたいになつてそこから出て來たつて。その
犬が濡れて來たので不思議に思つて、犬を追つて洞窟
に入つて行つたら、水がどんどん溢れ出ていたつて。

そうして読谷中に知れ渡つてね。そこは桶をかける
所もなかつたつて。懷に水を入れた桶を抱きかかえて
來た。そして途中にある岩に桶をかけて膝に乗せ、そ
れから頭に乗せて家まで運んだという話だつたよ。

その時から、犬が水を搜したつて。それで赤犬子と
付けたのか、そういう話を聞いた。犬が搜したんだつ

ぬ搜てーんり、うぬ水、川や。

て、その水、暗川は。

その水、暗川は。
〔註③〕

注① 楚辺 読谷村の南西部にある部落。戦後、部落全体が米軍の通信施設として強制接收されたので、新部落を字都屋の近くに建設。

六万坪の耕地を買上げ、一戸当たり百坪の割当で区画整理を行つて、現在に至つている。

もたらした恩人として崇高している。また、おもろ歌唱者としても有名である。古典音楽の世界では三線を始めた人として信仰されている。

③暗川 旧楚辺部落にあり、鍾乳洞を流れる地下水源で、戦前は飲料水として利用されていた。洞窟が暗いのでクラガード（暗川）の名前がついている。現在は米軍基地になっている。

49
ハジチ由來

話者　名嘉眞　光子（大正九年一月三日生）

翻字・対訳 玉城和美

あれーよー、あぬー此なぬハジチ往むかし突つかんあいねー、薩さつ摩まから来き、全部連つづらりーすたんりさに、なー誘拐ゆうがいさりーてーるばーてー、美うつくしさぬいさ女めん達たちや。あんさーにかいるハジチせーる筈はずどー。

ハジチの話はよ、ハジチを突かないと薩摩から来てみんな連れて行つたというんでしよう。きれいな女の達はもう誘拐されたわけさあ、それでハジチといふのはやつたと思うよ。

十二、三歳ぐらいから、私達あウンメー達やうり
すんりなー、豆炒りちょーていうり咬かーちやー、なー
あんそーているしみーたんり。

ハジチャーリ居たんりよー。親ん達が、うり頬り
ちやーによ、女ん子ん全員しみーたん。手ぬうんぐとう
せー又、嫌がてい連て一行かんてーるばーてー。七歳、
八歳からハジチし何回なかいる、あんぐどうし黒くな
すたんり。

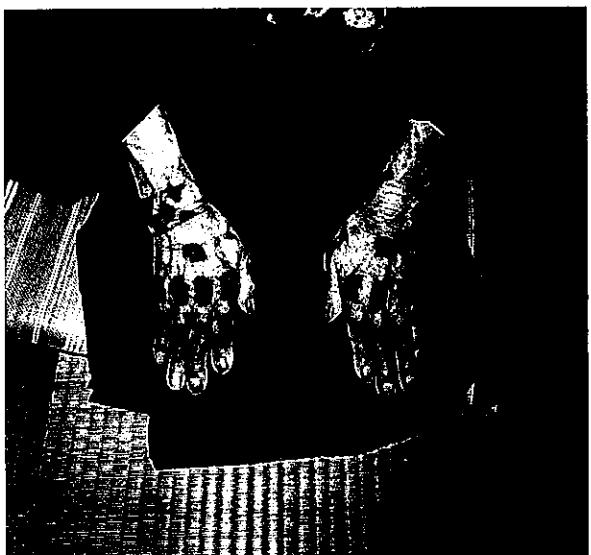
十二、三歳ぐらいから、私のお祖母さん達は、炒め
た豆をかんで、ハジチを突かせていたつて。

ハジチャーというのがいたらしい。親がその人を頼
んで、女の子は皆させられた。手の甲が汚いと嫌がら
れて、大和に連れて行かれなかつたわけさ。七、八歳
頃から何度も突いているうちに黒くなつたそうだ。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館(知花春美)

注 ハジチ 入れ墨。左右の手の甲、および指の背にした入

れ墨。明治の中頃禁止された。



ハジチ

著者 宇栄原 力メ(明治二十三年十月十五日生)

翻字・対訳 津波古米子

あんさーに一茶碗飲まーになー、「私ねー慌てーとーるむん、行かひー」んでいねー、「一茶碗、一茶碗飲まーに出じてい行じやる人お怪我し。うぬ一茶碗茶あ飲まんせー、又なー一茶碗飲みーるんせー、うぬよー何ん恐るし物お遭たらんり。あんすくとう、一茶碗茶あ飲むる物おあらんり。

又、私がよー、銀原うてい怪我させーやー。私あ五男が、うりが少え目ぬ悪さてー、トラホームないんどーり言ちやくとう。とーうり男童んでートラホームなしーねー何んゆぢらー無えんむんりやーに。うり連てい、金武かい、病院かい行ちゅんちすたんてー。又、降りーしどう一緒理髪店うとーてい、金武ぬフラーが踊いたんてー。踊いたん。「あんうりが金武フラーが踊いるむん、りーアンマーライ見ち行か」んちやくとう。「いーいいー、私ねーカンダ刈ちえーるむんぬ。うれー見らんむん」りち。

一杯だけお茶を飲んで、「私は急いでいるので行きましょうね」と出て行つた人は怪我をした。またもう一杯お茶を飲んで出て行つた人は、何事にも出会わしないですんだようだ。そういうわけでお茶は一杯だけ飲むものではないそうだよ。

また私が銀原で怪我をしたのはね。私の五男がちよつと目が悪くなつて、トラコーマにかかりそくなつた。それで、男の子でも目を悪くしたら大変だと思つて、金武の病院に連れて行こうとした。すると降りると同時に、ある理髪店で金武のフラー（頭がおかしい人）が踊つたつて。踊つた。「金武フラーが踊るのだから、お母さん見て行こう」と、息子が言つた。「いいよ、私はかづらを刈らせてあるのに、それは見ないよ」と、そこを後にした。

と一うりるん見ち、うぬ車走い過がしんせー、私ねー
怪我あさんどうーや。うぬ童ぬ言るぐとう聞ちるんせー。
と一厄持つて一からーやー、「いーいいー。うれー見ら
んていん済むくとう、早く歩つけー」んり言やーなか
い、と一金武じえー又私ねー怪我しるうるむんぬ。あ
んすぐとうるよー、人ぬ少いぐわー待つてー」んでい
ねー、少え待つちよーちゅしやんり。

一茶碗なー飲り、あぬなー慌ていとーる飲まんよー
い行ちゅんでいねーよ、うりん又悪さるばー。二茶碗お
飲み、と一うぬ二茶碗、なー一茶碗飲むる間なー、何
ん無えんないるばー。一茶碗飲まーに遣いねーよ、怪
我が遭たいるばー。と一私がうぬ理髪店うとーてい、う
りが踊いし見じゆるむんるんやれー、足あ無えんなら
んたんどー。直ぐ慌ていーはーていーし行ちゅんり、
前んじえー怪我しちよーるむん、私ねー。

あんすぐとう私あ身からあたがていよー、人ぬ少い
ぐわー待つちよーけー」んでいねー、「でい、あんさひー」
んち、座ちよーてい。又慌ていとーていんよ、「私にん、
今行ちゆるむんぬ待つちよーけー」りせー、うれー待つ
ちゅしどー。「いー、私ねー慌ていとーるむん」りち、

そこで金武フラーが踊るのを見て、その車に乗り遅
れたのだつたら、私は怪我をしなくてもすんだんだよ。
子供の言うことを聞いていたらね。もう厄持つたら、
「いやだよ、それは見なくてもいいから、早く先に歩
きなさい」と言って急がしたので、私は金武では怪我
をしてしまつたさあ。だから、人が「少しは待ちなさ
い」と言つたら、少しの間は待つた方がいいって。

お茶を一杯だけ飲んで、もう急いでいるからと飲ま
ないで行くと、それもまた悪いわけさあ。二杯は飲ん
で、その二杯飲む間には、何の難もなくなるわけ。一
杯だけ飲んで行くと、怪我をしたりする。私が理髪店
で金武フラーが踊るのを見たのだつたら、足を失うこ
ともなかつたよ。すぐ慌てて行つたものだから、金武
で怪我してしまつたんだよ、私は。

だから私の身の上からして、人が「少しは待つて
なさいよ」と言つたら、「じゃあ、そうしよう」と、座つ
てね。また急いでいても、「私も、今すぐに行くから待つ
ていなさい」と言つたのは、それは待つべきだよ。「い
いよ、私は急いでいるから」と、慌てて行くと、まあ

走えー走えしーねーよ、まじうりん運しでーるやる。

あ遭たらぬんあいやすしが、うれー前んじきつちやきひつ

ちやきぬ有ぐとうや。喧嘩あらんわん、又何ぬ野蛮遭

たらわんすくとう。うれー皆ゆー聞ちよーてい、「じやあ、

わんばや茶飲まんよーい、「んだ、あんしぇー飲まひー」ん

でい言やーに休つくとーてい「たちやんぬ茶碗飲みーるんせー、

一茶碗茶飲む間あ、厄お晴りやーに、何ん無えんばー

やさ。

それも運しだいであって。当たらない時もあるが、前で何か良くないことがあるかもしねれない。喧嘩でも、

また何か野蛮なことに出くわすかもしねれない。それは

皆よく聞いて、一杯だけお茶は飲まずに、「じやあ、あ

と一杯は飲もう」と言つて、休みながら一杯飲んだら、

あと一杯飲む間には、厄は晴れて何のこともないわけ

さあ。

採集 S 51・12・19 読谷村民話調査団第十班 〈山内源徳・前上門恵子・金城清美〉

注①銀原 金武町金武中川区の戦前の集落名。戦前は銀原組と称し四十数個の小部落で、並里区の管轄で一つの組（現在の班）であつ

た。

②金武 沖縄北東部に位置し、金武湾に沿つて恩納岳や石川岳などの山なみが連なる。

③アンマー 261頁参照

51 多幸山 フエーレー

著者 名嘉眞 光子（大正九年一月三日生）

翻字・対訳 玉城和美

多幸山は、又フェーレー岩^{法事石}一りち岩^レがあんりよ。う
まんかい登^{ねぶ}とーてい。ありかーなー塩屋^{法事屋}、真栄田^{法事田}あり
かー辺^{ひん}かい、魚壳^{いわく}やー必^{かんな}じうり通^{とう}いんり。分^わからんさー、
バーキ、ターレーんかい魚^{いわ}かみとーてい、全部^{むる}うりまでい取^とつていうりすたんり。あんしるあれー、フェー
レー岩^レりち。

多幸山には、フェーレー岩^レという岩^レがあつたそうだ。
フェーレーはその岩^レに登つていた。塩屋や真栄田の魚
行商人は必ずそこを通つて行つたつて。バーキやタラ
イを頭にのせて行商しているので上から魚を取られて
も分からなかつたようだ。それであればフェーレー岩
と言うそうだ。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館（知花春美）



多幸山フェーレー岩

注①多幸山 読谷村喜名から恩納村山田の丘陵地帯。喜名番

所から山原に抜ける国頭街道の一大難所であつた。木が

うつそと茂り、石くびりと呼ばれる場所にフェーレー
が出没したといふ。

②フェーレー 追い剥ぎのこと。

③塩屋 恩納村真栄田の行政区の一つ。

④真栄田 恩納村の字のひとつ。景観の美しい真栄田岬がある。

伊良皆ビンジャク

話者 名嘉眞 光子（大正九年一月三日生）

翻字・対訳 玉城和美

伊良皆、じゅんに襲われたという人、知つてゐる人が居る訳さー。襲われて、ビンジャク^{ビン}言うて。

あれー、時しる夜中ないるんせー。昔は着物もないさー、一人前しかないさ。着物欲しきによー、金ん、何ん持つちえー無えんねー裸なち遣らすたんり。パンツだけうりつし。こんな取られてよー。盜入てーなー。

ビンジャクという場所で、夜が更けると襲われた。昔は、着物も一着しかなくて、その着物欲しきに襲うようだが、お金も何も持つてないと、裸にさせられパンツだけにされたようだ。盜賊だよ、多幸山の。

採集H7・1・21 読谷村立歴史民俗資料館（知花春美）

注①伊良皆 読谷村の字。戦後、国道五八号線の東側が米軍基地に接收されたため、新住宅を国道西側に造成して居住している。

②ビンジャク 読谷村字喜名と伊良皆のちょうど中間に位置した所にビンジャクと呼ばれるところがある。そこにはぼら穴があつて、昔からジュリぐわー幽霊が出ると噂されていた。

吉屋チル一 うたもんどう

話者 名嘉眞 フ ミ (大正元年十一月十日生)

翻字・対訳 知花春美

うぬ吉屋は波之上の海に飛び込んでいるでしよう。
此ぬふーじーぬ話。あんさーに自殺てー、海に飛び込んで亡くなつ
んで亡くなつたらしいね。

あんさぐとう、この波之上ぬ坊主がよ、もう毎日、
毎日、な一夜の夜中、大概時間が、夜中やんてー、三
時、四時頃、二時、三時頃なー、ちゃーなーただ一言
歌ぬ有たんり。

月は昔から 変わることねさみ
か 変わていいくものや、人の心
りちなみ、毎日。

月や昔から、変わること無えらん、りち、ひつちー
歌びけー、ただ一言ぬ歌ぬ、この坊さんに聞こえたつ
て。坊さんに、何回も何回も。

「これ不思議だねえ」と思つてこの坊さんが、又あ
との文句よ。

月は昔から 変わることねさみ

吉屋チル一は波之上の海に飛び込んでいるでしよう。
そのような話だが、自殺だね。海に飛び込んで亡くなつ
たらしいよ。

すると、波之上の坊主がもう毎日、毎日、夜の夜中、
だいたい時間が夜中だね。三時、四時頃、二時、三時
頃、もういつもただひと言、歌が聞こえたらしい。

月は昔から 変わることはないが
変わつてゆくものは 人の心
と、もう毎日。

月は昔から、変わることはないと、ずっと歌ばかり、
ただひと言の歌が、この坊さんに聞こえたつて。坊さ
んに、何回も何回もね。

月は昔から 変わることはないが

変わつていくものや 人の心

変わつてゆくものは 人の心

りち、この坊さん^{ぼん}が返したからさ、それ限り、もう歌^{うた}はなかつたつて。歌^{うた}を返したからなくなつた。それからなかつたといふ話を聞いたことがある。

月^{つき}や昔^{むかし}からでいしぇー、お月様^{つきさま}は昔^{むかし}から変わるこ^とはない、変わつていくのは人の心つて。これ返したからさ、これ限りもう歌^{うた}はなかつたと聞いたことがある。

あんし、昔^{むかし}ぬ道理^{どうり}ぬ、この坊さんは、毎日^{まいにち}、毎日^{まいにち}、同^ゆぬ時間^{じかん}これ不思議^{ふしき}ですねと思つて、後^{あと}ぬうんずみねー、もうこの歌^{うた}返^{たま}ちやぐどう、それからもう歌^{うた}はなくなつたつて。

月は昔^{むかし}からといふのは、お月さまは昔^{むかし}から変わるこ^とはない変わつていくのは人の心と、これを返したのと、それつきり歌^{うた}はなかつたと聞いたことがあります。

そして、昔^{むかし}の謂われが、この坊さんは毎日^{まいにち}、毎日^{まいにち}、同じ時間に、これは不思議だと思つて、あとで、この歌^{うた}を返すと、それからはもう歌^{うた}はなくなつたつて。

注①吉屋チルー 恩納ナベと並ぶ女流歌人で、幼いとき遊廓に売られ、ある男と恋仲になるがそれも裂かれ、十八歳で亡くなつたといふ。

②波之上 琉球八社の一つ。熊野三社五權を祀り、祭神は本宮が伊弉冉尊、相殿は左に速玉男尊、右に事解男尊の三神を奉祀。『琉球神道記』に「此權現ハ、琉球第一大靈現ナリ。建立ノ時代ハ遠シテ人知ラズ」とある。創建年代は不明であるが、元来護国寺の鎮守社として勧請したものである。那覇市若狭の海岸に突出した断崖の上に所在。

54 吉屋チルーへ歌問答十身売り

著者 名嘉眞光子(大正九年一月三日生)

翻字・対訳 知花春美

吉屋チルーでいしえー本当ぬ人ふんどるやたがやー、御神うかみどうやたがやー、あれー神かみどうやてーしがはなといはな話はなから始はじみんしえーたるばーよー。

あんし童わらびそーに、遊あどーにから、今はそいういう風景ふうけいは見みられないが、自分達じぶんたちのちいさいとき時はよく、あのー、かまきりが、あれーイサトウーさとといはうアササー、蟬せみ、これを餌えさにするわけさ。

チャラチャラたして食べたようとする瞬間しゅんかんで、あんしこれ見てからに、子供こどもの時ときによ、これ見てからに、吉屋よしやチルーちるーが、

吉屋チルーといはう人は本当の人ふんどたのか、御神うかみあつたのか、あれは神かみだつたんでしようかねはなといはな話はなから始められていた。

それは、子供の頃、遊んでいる時、今はそのような風景は見られないが、自分達の小さい時は、かまきりにイサトウーさとといはうが、それがアササー、蟬、これを餌えさにするわけさ。

チャラチャラたして食べたようとする瞬間しゅんかん、これを見て、吉屋チルーが子供の時にこれを見て、

鳴なちゃんすなアササー 驚うるちゃんすな
恋くしさぬあまり 抱だちるんちやる
りちやぐとう、離はなして、この蟬せみは命拾はなしいした話はながあるわけさ。

鳴なくなアササー 驚うくなアササー
恋くしさのあまり 抱いいてみただけだ
と言つたので、離はなして、この蟬せみは命拾はなしいした話はながあるわけさ。

あんし又また、昔むかしは、十じゅう、十一じゅういち、二にから薪まき取りなんかやるさーね、山やまかい薪まき取りまきとりに行いつて。

それからまた、昔むかしは、十じゅう、十一じゅういち、二にから薪まき取りまきとりにやるでしよう、山やまへ薪まき取りまきとりに行いつた。

昔又、木炭なんか焼いて生活しているお爺さんが居たらしい。あんし、そこ行つて、もう薪取りに行つて、行ち戻り、そこに行つたらお茶なんか出すさーね、（今だつたらお茶も出してもいい、出さなくともいい。昔の人は必ず茶あ出したら御茶請は必ず一緒やたるばー必ず出よつたわけさー）

貧しい昔だから、お茶は出ても長い間御茶請が出なかつたらしい。あんすぐどう、お茶はサンピンぬ御茶つてあるわけさー。

サンピンぬ御茶ぬ 白茶なるまでいん
今までの御茶請ぬ 当ていや無えらん

り、この吉屋チルーが言つたらこのお爺さんは又、多分頭の利いているお爺さんだと思う、炭焼きやーウスメーや。（生味噌いうたらね、昔は油味噌して食べよつたから、生味噌という、生の味噌であるわけさー）

先月どうちぢえる 生味噌るやしが
大和味噌とう思てい 食べていたぱり
りち返したらしい。

あんし、それからよく友達なつてよ、色んな話、歌うたづくりなんか励んだらしいよ。

昔はまた、木炭なんか焼いて生活しているお爺さんがいたそうだ。そこへ薪取りに行つて、行き帰りそこへ行くと、お茶などを出すでしよう。（今だつたらお茶を出しても出さなくともいい。昔の人はお茶を出すと御茶請けは必ず一緒に出していたわけだ）

昔は貧しいから、お茶は出ても長い間御茶請けが出なかつたらしい。それで、サンピン茶つてあるがね。

サンピンのお茶が 白茶になつてゐるのに
いまだ茶請けの 当てはない

と、この吉屋チルーが言つた。このお爺さんはたぶん頭が良かつたと思う。炭焼きの爺さんはね。（生味噌といつたらね、昔は油味噌を作つて食べたので、生味噌という。生の味噌であるわけさ）

先月作つた 生味噌であるが
大和味噌と思つて 食べて下さい

と、返したそうだ。

それから（二人は）友達になつて、いろんな話をし

(あんし、先月といふのはね、先月さ)

先月どちらちえる 生味噌どうやしが

大和味噌とう思てい 食べていたぼり

大和味噌といふのは元およ、お米で作つてある、もうあれは御汁なんか沸かさんでね、高かつたから、お茶請しよつたわけ。そういう関係でその言葉も出たとおもうさ。

あんしに、もう家庭が困窮なつて、尾類（注③）売りされ
るき一ね。又、比謝橋渡る時は、

恨む比謝橋や 情ねん里が

私渡さとうむてい 架きていうちえさ

り、こうして詠つて行つたらしい。

あんし、辻に売られて行つたらあつちでもよ、客ぬ
来て一まん、上句打ち出じやし一ねー、下句詠らん
限り一絶対呼ばれなかつたらしい。この吉屋チルーや。

あんされー、ジュリアンマーによ、

元や読谷山 新垣ぬチルぐわー

今や仲島ぬ 花ぬチルぐわ

り、アンマーに言つたらしい。

あんしにかい、吉屋チルーや読谷山ん人りち言い

(クタチチといふのは先月のことさ)

先月作つた 生味噌であるが

大和味噌と思って 食べて下さい

大和味噌といふのは、原料はお米で作つてある。もうこれはお汁には入れないでね、高かつたから、お茶請けにしたわけだ。そういうことでその言葉も出たと思うよ。

それから、家庭が貧乏で尾類に売られるでしょう。

比謝橋を渡るときに

恨めしい比謝橋は 情けもない人が

私を渡そと 架けてあるよ

と、詠んで行つたらしい。

そして、辻に売られていつたら、あそこでも客がきて、上句を詠んで、下句を詠まない限り絶対よばれなかつたらしい。この吉屋チルーはね。

また尾類アンマーにね、

元は読谷山 新垣のチルぐわー

今は仲島の 花のチルぐわー

と、アンマーに言つたらしい。

それで、吉屋チルーは読谷山の人と言ふが、本当は

しが、本当やよ、金武間切ん人やたんり。

金武間切やたしが、イキーが、イキーといつたら兄おにであるわけさー。イキーが何かの失敗しつぱいで、あつちでは居られなくなつて、読谷山間切に移つたらしい。うまからジュリ賣うりいさつてい行いじよーるばーてー。親おや、イキー助たすきーんり。

こんなして、又また辻行さじゆきつたら有名な尾類ゆうめいになつて、仲里里主なかざとやしぬ、首里親國そいらしんこくぬ殿内でんないぬ詰尾類ぢみじゅうだつたらしい。人にはもう呼ばれなくて。人にも上句かみくわん打ち出だじやしえー、下句しもくだしたら、誰だれにも呼ばれよつたつて。こんな詰尾類ぢみじゅうになつて、有名な尾類ゆうめいやしが。

あんし又また、アンマーはお金さーね。あの、昔むかしは、クンチャーきん、ギンジャヤーぎんりーねー、今はこれは見えないけどさ。癩病らびびょうなんかなつたらさ、浜側はまばたの洞窟どうくつでね、日頃ひごろはあつちこつち、個人個人こじんこじんまわつて、物貰ものもららしていたよ。これが自分達のじぶんたち小さい時の時代ときであるわけさー。

あんしそーに、物乞ぶさいにんお金持かねもちもいるらしい。一錢せん二錢にせん一錢いちせん一錢いちせん貰もらつて、お金がない時とき、何か貰もらつて行くから。

金武間切の人だつたそ�だ。

金武間切の人であつたが、イキーといつたら兄おにとき。兄さんが何か失敗しつぱいをして、そこには居られなくなつて読谷山間切に移つたらしい。そこから尾類ぢゅうに売られて行つたらしい。親、兄さんを助けようとね。

こうして、辻へ行つて、有名な尾類ゆうめいになつて、仲里里之主の首里親國の殿内の抱え尾類いだれだつたらしい。人にはもう呼ばれなかつた。人に対たいしては、上句かみくわんを出して、下句しもくを詠よんだら誰だれにも呼ばれたらしい。そのような抱え尾類いだれ、有名な尾類ゆうめいだつた。

それからまた、アンマーはお金さあね。昔むかしは、クンチャーきん、ギンジャヤーぎんりーというと、今はこれは見えないが、癩病らびびょうになつたら、浜辺の洞窟どうくつに住んでいた。日頃ひごろはあつちこつち、個人個人こじんこじんまわつて、物貰ものもららしていたよ。私が小さい時はこんな時代だつたよ。

そうして、物乞ぶさいにもお金持かねもちもいるらしい。一錢、二錢貰もらつて、お金がないとき何かを貰もらつて行つた。

あんさーにアンマーが又、この人と相談してからにお金たくさん貰つて、無理矢理に行かせたようあんさーにかい、ジュリアンマーが、「尾類え錢、豆腐お豆どうやんどーやー」りぬ言葉ぬよ、これから出たらしい。

その後は波之上の坊主に魂がのつたんだろう。あんされ一、毎夜、同ぬ時間にちゅ言葉なー

月や昔から 変わる事ねさみ
りち、声が聞こえてからに、後お坊さんも気がついて「此れ一間違え無えん。チルーやるむん」りちえー、返ちえーるぐとーん言葉。

変わつていいくむぬや 人ぬ心。
それから一言もなかつたらしい。
あんさーに、夜ぬ一言葉や、一言葉やれー返答する物お有らん。夜ぬ人ぬ必じ二言葉呼びりわる返答んすんどーりぬ、昔、あつたわけさ。昔はこういう習慣があつたわけよ。

あんさーにかい、戦前だから歩いてきーねー。あつちで葬いがたもして、また二、三年経つてから骨拾い

そこで、ジュリアンマーが、この人と相談してからに、お金をたくさん貰つて、無理矢理に行かせたようだ。尾類アンマーが、「尾類はお金、豆腐は豆なんだよ」という言葉はそのことから出たらしい。

その後、チルーは亡くなつて、波之上の坊主に魂が乗り移つたんでしょう。すると、毎夜、毎夜、同じ時間にひと言、

月は昔から 変わることはない
と、声が聞こえた。後に坊さんも気がついて、「これは間違いなくチルーだ」と、言葉を返したようだ。

変わつていいくものは 人の心

それからは一言もなかつたらしい。

それから、夜の一言は、一言だつたら返答するものではない。夜は、必ず二言いつて初めて返事をするものだと、昔は言われていた。昔はこういう慣しがあつたわけだ。

それから、戦前は歩いてきあね。葬り、一、三年経つてから骨拾いに、兄弟が出かけた。骨拾いして、首里

に、兄弟達、イキーん達が行じ。骨拾いして、首里巡
てい来し、途中で、こつちで一晩お夜明かちから歩か
りちするどうくる木の下うてい。

又、その時は、この里之主の殿内造やーにかい、此く
ぬ殿内は何名前付きーがやー臣下ぬ達あ揃て、吟味
するところよ。クチタマなつて、そこで言うさーね。

遊びうちやがいる 御茶屋御殿

りちさくとう、そのまま名前が付いたらしいよ。

あんされー、「今言ーたる言葉やチルー言葉やしが」
りち、出じてい見ちやぐとう、やつぱし。そこで夜ま
でいそーでーるばーてー。官から褒美頂だいてよ。死
んでからもクチタマなついからん、親、イキーぬ事お
そーんどーりちぬ話があつた。

を廻つて帰る途中で、こつちで一晩は夜を過ごしてか
ら歩こうと、木の下で休んでいた。

その時は、この里之主が殿内を造つて、この殿内は
どんな名にしようかと、臣下が揃つて吟味していた。
チルーは遺骨になつて、そこで言うわけさ。

遊ぶのによい所だよ 御茶屋御殿

と言つたので、そのまま名前が付いたらしいよ。

そして、「今の言葉はチルーの言葉だが」と出てみる
と、やつぱりそうであつた。夜まで吟味していくわけ
だ。官から褒美を頂き、死んで、遺骨なつてからも、
親、兄弟のことをやつたという話である。

注①吉屋チルー 38頁参照

②ウスメー 平民でいう祖父、おじいさんのこと。

③ジユリ 姬妓のことで、尾類の字を当てることが多い。一六七三年には摂政羽地朝秀によつて辻と仲島に遊郭がつくられた。一般に
はそこに公娼をいい、礼儀作法・芸事を仕込まれていた。歌も歌い、三線も弾くので、芸者も兼ねていた。

④比謝橋 嘉手納町と読谷村の境を流れる比謝川にかかる橋。

⑤ジュリアンマー 女郎の抱え親。抱え主はすべて女で、ジュリはジュリアンマーと母子まがいの関係を結び、それぞれアンマー、ジュリングワと呼ばれた。

⑥仲島 那霸市旧上泉と下泉にまたがる小字名。近世から近代初めにかけて遊里として知られる。現、泉崎一丁目西寄りの地。

⑦金武間切 金武町の旧行政区画名。番所は金武村（むら）にあった。

⑧イキー 282頁参照

⑨読谷間切 読谷村の旧行政区画名。番所は喜名にあった。

⑩辻 那霸市にあつた遊廓の名。沖縄各地の、多くは農漁村の貧しい人々から幼少の頃に売られて來た。またはそこで生まれ育ち、「性を売る」ことをなりわいとする女達だけで形づくっている社会であり、「花ぬ島」とも呼ばれていた。本土人、中国人、首里那霸の上流人を相手とした高級な遊廓であった。

⑪首里親国 21頁参照

⑫詰尾類（チミジユリ） ある客が一定

期間独占して買い切った女郎。

⑬クンチャヤー 癪病患者。こじき。癪病

患者はこじきに多いので、こじきの別名にもなつた。

⑭ギンジャヤー こじきのこと。

⑮波之上 288頁参照

⑯クチタマ 遺骨のこと。

⑰御茶屋殿内 首里崎山町にあつた旧王家の別邸、東院のこと。一六七七年築造。



吉屋チルーの碑



比謝橋（明治13年頃）

炭焼ちやーターリー

話者 名嘉眞 朝 光（大正六年四月五日生）

翻字・対訳 玉 城 琳 子

あの炭焼ちやータンマーというのは、あの人本当の大武士だつた。久得に新崎といつてあるけどね。その人の非常にもー、野蛮事件だけども。この人が行つて、「とーなー」と言つて、「これじや、ならんむん」と言つて行つたらしいが。

空手を習つているさーね。なー、力上だつたらしい。この新崎という人は、後お賭き試しすんりち、うぬ炭焼ちやータンマーかい、賭き試しし。知らんふーなーし棒し殴いんりされー、棒ぬ先撗みやーなかい、すぐ炭窯んかい叩つ込まつていよ。そのくらい武士だつたらしい。

炭焼ちやータンマーは空手を習つていたので、新崎という人より力はあつたそうだ。そこで、新崎といいう人は、炭焼ちやータンマーと賭け試しをしようと思つた。知らんぶりして、棒で殴り飛ばそうとしたら、棒の先を撗まえて炭焼き窯にたたき込まれたつてよ。そのくらい炭焼ちやータンマーは達人だつたそうだ。

採集 H7・2・1 読谷村立歴史民俗資料館（知花春美・玉城琳子）

名護親方と具志頭親方

話者 名嘉眞 光子（大正九年一月三日生）

翻字・対訳 知花春美

名護親方あ、じこーぬ誠な人やみしえーたん。具志頭親方あ、又そうではない。

上からもう並松りーねー、もう四百五十年くらい前でーやー。三百五十年、話いすてーぐとう。

首里親国ぬ王様、もう役人から、今の五十八号線、あれーずっと那覇から山原まで、松植りりちさつたぐとう。

名護親方あ誠な者なみそーなかい、六月やたんでい、あんしがずつと植ていとうーていよー。

あんさーに、具志頭親方あ、植たんてーまん枯りー

るぐどうりち。
名護親方あ松ん子壙ちち、うぬ人お松ぬ枝、折やーに押しんちゅたんり。

あんされー、何がりちやぐとう、「どうせ、今植ねー枯りーるすんむぬ同じことさ。松え師走、十二月にる時期りち。

名護親方はたいそう誠な人だつた。具志頭親方はそうではない。

並松といふと、もう四百五十年くらい前だね。三十年という話をしていたから。

首里親国の王様、役人から、現在の五十八号線（沿いに）那覇から山原まで、ずっと松を植えなさいと言われた。

名護親方は誠な人だつたので六月だが、植えていつたそだ。

具志頭親方はまた、植えても枯れるのにと。

名護親方は松の苗を取つてきて、具志頭親方は、松の枝を折つて植えたそうだ。

そこで、具志頭親方にどうしてかと聞くと、「どうせ、今植えても枯れるのだから同じことさ。松は師走、十二月に植えるものだ」と。

あんしる、松え十二月に植らん限れ一枯りーんりしえー
うぬたつペーやん。あんさーにる十二月に植てい並松
りち。

名護親方あどうく誠な者なてい、首里ぬ言いちきる
とうーい、枯りーんりちえー分かとーしがる植ていとうー
たんりんどーやー。私ねーあんしる聞ちやる。

それで、松は十二月に植えない限り枯れるというの
はその道理である。そうして、十二月に並松を植えた
とね。

名護親方はとても誠な人で、首里に言われた通り、
枯るのは分かつていたが、植えたそうだね。私はそ
のように聞いた。

採集H7・2・1 読谷村立歴史民俗資料館（知花春美・玉城琳子）

注①名護親方 程順則（一六三九～一七三四）。那覇市久米村に生まれた。一七一五年に久米村総役となり、一七一八年に彼の提案によつ
て久米村に、琉球で最も古い学校である明倫堂を創設した。

②眞志頭親方 志頭親文若、唐名を蔡温（一六八二～一七六一）。久米村総役志多伯親方の次男。佐留通時として中国へ行き、帰国後
世子尚敬の市伝となる。四七歳～七二歳まで三司管を務める。御教条を編んで国民読本となす。

③首里親国 21頁参照

57 中城若松

話者 宇榮原 文（大正七年五月八日生）

翻字・対訳 村山友江

なかぐしくわかまち達（なぶ）
中城若松い上いる道よ、夜やてーんて首里（なまち）
んかい上

中城若松が首里に上つて行く途中、夜になつてしまつ

いる道、昼が歩つち行ちゅたら一晩夕暮たぐとう、な一歩つからんしえーや、あが遠首里んかいやぐとう。

な一うまんかい家ぬ有たんり、灯籠ぐわー付きて。あんしうまんかい伺がたぐとうよ、大変美ら女ぬ居ていよ、美らさたんり。「なー首里んかい上いる道やしが、夜ん暮りてい此処に泊まらちたぼり」りち頼むたんり。あんし泊までーぬふーじて、うぬ人お。

あんさーに、泊またぐとう、うぬ人お鬼んかい化きとーたんり。鬼なとーたんり。きれいな女の人が住んでる所に中城若松が尋ねて、「一夜泊めて下さい」と頼んだらしい。泊つたら後は鬼になつていたつて。首里に何か勤めに行く途中。中城は、昔はとても有名な。

うぬ坊主え何処んじ、何処んかいがめんしえーたらー、坊主ぬよ、「鬼んかい追つい来ぐとう」りち、坊主んかい言ちやぐどう。「菖蒲ぬ葉に隠りみそーり」り言たんり。あんし菖蒲ぬ葉ぬ下んかい隠りてい、鬼え菖蒲ぬ葉や恐るさぬばーるやさに。菖蒲ぬ葉ぬ下うとーてい、中うとーてい凌じみそーちゃんり。中城若松り。

たらしい。昼歩いて行つたのだが、途中で夜が更けてしまつたつて、あんなに遠い首里までだから。

そこに灯りがついた家があつたので、尋ねて行つたら、大変な美人がいたそうだ。もう見た目には大変な美人であつたらしい。若松は「首里に上がって行く途中ですが、夜も暮れてしましました。そこに泊めて下さい」と頼んだ。そうしてそこに泊つたようだ。

そこに泊つたら、女の人は鬼に化けていたつて。美人が住んでる所へ中城若松が尋ねて、「一夜泊めて下さい」と頼んだらしい。泊つたら後は鬼になつていたつて。

その話は、首里に勤めに行く途中だつたんでしょうね。昔は中城は有名だつたから。

また、その坊主はどこにいらつしやつたのか、若松が「鬼に追われて來た……」と坊主に言つたら、「菖蒲の葉の下に隠れて下さい」と言つたつて。そうして菖蒲の下に隠れたら、鬼は菖蒲の葉が恐かつたんでしようね。中城若松は菖蒲の葉の下に隠れて凌いだということだよ。

注①中城若松 組踊「執心鎧入」の主人公で恋や縁を知らぬ若者として設定されている。現在、北中城村安谷屋の小高い丘に若松の墓と称するものがある。

②首里 那覇の東部に位置し、地域全域が高台になって、山紫水明で名所旧跡に富む。かつての王城の所在地で、首里親国といわれていた。

58 瓦屋節

話者 宇榮原 文（大正七年五月八日生）

翻字・対訳 村山友江

又、ムムウイアングワーん有たしえー。あれー又、
桃売てい歩つちゆるアングワーがよ、うま村ぬ人やてー
んて。坊主んかい惚りていよ。坊主ん家んかい大変通
てい歩つちゆんりしが、瓦（屋）ぬ上まり、桃賣いな
じやきーし。坊主え又、昔え妻え搜ららんたんりやー。
あんさーに大変望どーんりしがよー、なーならん
なたぐとう、うぬムムウイアングワーや、うまぬ井戸
んかい落ていていりー。何処んかい行じやがやーし搜
たぐとう、井戸んかい落ていてい居らんなどーたんり。

ムムウイアングワーというのもあつたさあ。あれは
桃を売っている娘さんがいてね。坊主に惚れたらしい。
そうして坊主が住んでいる所まで、桃を売りに行くの
を口実にして、毎日のように通っていた。しかし昔の
坊主というのは妻を娶ることができなかつたつてね。
それで坊主を大変望んでいるのだが、どうしても一
緒になることができなくて、その娘は井戸に身投げし
てしまつた。どこに行つたのかと搜したら、井戸に落
ちて亡くなつていたつて。

第二編
資料

7	名嘉眞朝光		6	宮城ヨシ	
T 6 • 4 5	伊良皆三六〇		T 14 • 9 15	伊良皆三六〇	
7 ⑥ ⑤ 4 ③ ② ①	長田の始まり 喜屋武ミーぐわー（俵投げ） 喜焼ちやーターリー	⑬ 12 11 10 9 8 ⑦ 6 5 4 3 2 1 鳩料理 吉屋チルー 屁ひり嫁 肝試し モーイ親方（難題） 白銀堂由来 継子の麦搗き	26 ㉕ ㉔ ㉓ 22 21 20 19 赤犬子（暗川発見） 天川坂のお粥戦争 多幸山フェーレー	鍋蓋アカマタ お茶二杯 キジムナード（屁） 厄払い（鳥） ジール番 ヨーカビー	親捨山 喜屋武ミーぐわー（空手名人） 吉屋チルー（比謝橋の歌） 山原と団亀
仲順大主 智選び（茶腹飯腹） 田場大工 真嘉比喜屋武					
15 27 55 26 46	25	19	43 48 36		
271 289 336 288 316	287	276	313 319 304		
○ × × △ △ △ ○	×	×	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		
4 4 4 4 4 4 4 A A A A A A A 15 14 13 11 10 9 2	3 3 3 3 3 3 3 B B B B B B B 36 34 33 31 30 27 23 3 3 3 3 3 3 3 B B B B B B B 39 38 37 35 32 29 28 3 3 3 3 3 3 3 B B B B B B B 26	3 3 3 3 3 3 3 B B B B B B B 36 34 33 31 30 27 23 3 3 3 3 3 3 3 B B B B B B B 7 6 8 10 18 12 14 B B B B B B B 39 38 37 35 32 29 28 3 3 3 3 3 3 3 B B B B B B B 26	H 7 • 2 1	H 7 • 1 21	H 7 • 1 21

話型一覧表

凡例 一、昔話の分類は『日本昔話集成』に従つて分類し、動物昔話・本格昔話・笑い話・伝説の順に並べた。

二、話型名は『日本昔話名彙』(柳田國男監修)『日本昔話集成』に対応する話はなるべくその話型名に従つたが「アカマタ聟入」「真玉橋の人柱」など地域に密着した題名についてはそれを用いた。その他の話型については、調査及び編集者が付した話型名を用いた。へゝはモチーフ名を示す。

三、上段は話型名、下段の数字は話数を表わす。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	雀孝行 雨蛙不孝 十二支由来 本格昔話 鬼餅由来 クスケー由來 キジムナ一〈ガジマル+魚取り〉 キジムナ一〈魚取り十釘打ち〉 キジムナ一〈屁〉 アカマタ聟入〈妊娠十浜下り〉 アカマタ聟入〈妊娠〉 アカマタ聟入〈妊娠十洞窟〉 鍋蓋アカマタ アカマタの話 天人女房	3 2 1	子育て幽靈〈テーラシカマクチ〉 入髪を拾つた男 真玉橋の人柱 紫差由来 打紙由来 難題聟〈動物の恩返し〉 聟選び〈茶腹飯腹〉 城間ナーカ〈貧乏人恵み〉 城間ナーカ〈盜人〉 繼子と竹の子と毒入り弁当 継子の麦搗き 嫁と姑〈うどんはミミズ〉 兄弟の仲直り 猿長者 大歳の客〈御馳走〉 三軒の家	1 1 2
1 1 2 1 1 1 1 1 1 3				
27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12				
1 1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 2 1 1				
15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	鳩料理 喜屋武ミーぐわー〈空手名人〉 喜屋武ミーぐわー〈俵投げ〉 姥捨山 田場大工 モーライ親方〈嫁釣り〉 モーライ親方〈鶏〉 モーライ親方〈難題〉 モーライ親方〈娘釣り〉 モーライ親方〈小便+煙草+難題〉 肝試し 屁ひり嫁 山原と団亀 果てなし話〈蟻運び〉 夫婦喧嘩の仲裁	笑い話		
1 1 2 2 1 1 1 1 3 2 1 1 1 1				

	1	1	26	25
歌 総話数	民俗	そ の 他	瓦屋節 牧港アンぐわー	1
99	3	8	1	1

◆長田の民話調査者名簿

沖縄国際大学口承芸術研究会

江子・前新門恵子・金城清美
読谷ゆうがおの会

勤知花利

卷之四

吉屋チルー（歌問答）

古漢集

吉屋チル一死

信鑑二

吉屋テルト
〈電問答〉

炭焼ちやーエーりー

卷之三

真嘉比喜屋武

名媛規方上集

中成苦公

口块未标

1000

翻字・対訳者一覧表

19		18		17		16	
村喜名三三〇七一四	宮里純子	宮城昭美	宮城昭美	古堅二六六	辺士名初美	八〇一B	八〇一B
58 57 47 44 39 37 19 17 9 5	南風原町字宮平	大木一九	大木一九	大木一九	大木一九	大木一九	大木一九
瓦屋節	喜名三三〇七一四	喜名三三〇七一四	喜名三三〇七一四	喜名三三〇七一四	喜名三三〇七一四	喜名三三〇七一四	喜名三三〇七一四
中城若松	天人女房	猿長者	猿長者	兄弟の仲直り	兄弟の仲直り	兄弟の仲直り	兄弟の仲直り
普天間権現	真玉橋の人柱	真玉橋の人柱	真玉橋の人柱	大歳の客(御馳走)	大歳の客(御馳走)	大歳の客(御馳走)	大歳の客(御馳走)
阿麻和利(網発見)	キジムナ(ガジマル+魚取り)	アカマタ舞入(妊娠十洞窟)	城間ナーカ(盜人)	城間ナーカ(盜人)	城間ナーカ(盜人)	城間ナーカ(盜人)	城間ナーカ(盜人)
果てなし話(蟻運び)	キジムナ(ガジマル+魚取り)	アカマタ舞入(妊娠十洞窟)	城間ナーカ(盜人)	城間ナーカ(盜人)	城間ナーカ(盜人)	城間ナーカ(盜人)	城間ナーカ(盜人)
人間の始まり	キジムナ(ガジマル+魚取り)	アカマタ舞入(妊娠十洞窟)	城間ナーカ(盜人)	城間ナーカ(盜人)	城間ナーカ(盜人)	城間ナーカ(盜人)	城間ナーカ(盜人)
宇榮原	岳原	岳原	岳原	岳原	岳原	岳原	岳原
宇榮原	宇榮原	宇榮原	宇榮原	宇榮原	宇榮原	宇榮原	宇榮原
宇榮原	宇榮原	宇榮原	宇榮原	宇榮原	宇榮原	宇榮原	宇榮原
文	文	文	文	文	文	文	文
文	文	文	ル	シ	文	ル	ミ
340	338	317	314	308	305	276	273
259	253						
265	260						
280	278						
283	271						

◆参考文献

1 「日本昔話名集」柳田国男監修 日本放送協会編 日本放出版協会 昭和四九年二月
2 「日本昔話集成」関敬悟著 角川書店 昭和二十五年
3 「日本昔話通観 第26巻」稻田浩一・小澤俊夫編 同朋舎出版 一九八三年七月第一刷発行



長田公民館での民話調査（1995. 1. 21）

- 4 「沖縄語辞典」 国立国語研究所編 大蔵印刷局 昭和五十年三月 四版
- 5 「広辞苑」 新村出編 昭和五二年三月第三刷発行
- 6 「琉球史辞典」 中山盛茂編著 文教図書 昭和五九年三月 四版発行
- 7 「沖縄大百科事典」 沖縄タイムス社編 一九八三年五月発行
- 8 「沖縄の民謡集」 海邦出版編集部編 海邦出版社 一九七三年九月発行
- 9 「嘉手納町史 資料編2 民俗資料」 嘉手納町史編纂委員会 平成三年
- 10 「金武町史」 金武町史編纂委員会 昭和五八年
- 11 「羽地村史」 羽地村史編纂委員会 一九六二年
- 12 「那覇市史 資料編 第2巻中の7 那覇の民俗」 那覇市企画都市史編集室 昭和五四年
- 13 「読谷村史第四巻資料編3 読谷の民俗」 読谷村史編纂委員会編 平成七年三月発行
- 14 「伊良皆の民話」 読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五四年三月
- 15 「喜名の民話」 読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五五年三月
- 16 「長浜の民話」 読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五六年三月
- 17 「瀬名波の民話」 読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五七年三月
- 18 「儀間の民話」 読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五八年三月
- 19 「宇座の民話」 読谷村立歴史民俗資料館編 昭和五九年三月
- 20 「渡慶次の民話」 読谷村立歴史民俗資料館編 昭和六十年三月
- 21 「高志保の民話」 読谷村立歴史民俗資料館編 昭和六一年三月
- 22 「波平の民話」 読谷村立歴史民俗資料館編 平成元年三月
- 23 「座喜味の民話」 読谷村立歴史民俗資料館編 平成二年三月
- 24 「楚辺の民話」 読谷村立歴史民俗資料館編 平成四年三月
- 25 「上地・親志・都屋の民話」 読谷村立歴史民俗資料館編 平成六年三月

編集後記

読谷村民話資料集十三『大木・牧原・長田の民話』をお届けいたします。

大木・牧原・長田の民話調査は、昭和五一年十一月十九日と翌年五月八日に沖縄国際大学遠藤庄治ゼミ、同大学口承文芸研究会、読谷ゆうがおの会、読谷村立歴史民俗資料館によって合同で行われました。その後、平成七年一月と翌年二月に、資料館によって長田の補足調査が行われ、総採集話数が大木一一五話、牧原四四話、長田九九話で、合計二五八話にのぼりました。

翻字作業においては、平成七年九月に長田の九九話の中から語りの良い五八話を選定し、ゆうがおの会会員一人当たり二～五話を依頼しました。そして、初めての試みとして大木と牧原は全一五九話を翻字し、その中から語りの良い九八話を選定し掲載しました。一部落で伝承され採集された全民話を翻字し、活字として目を通した時、今までより一層の口承文化の意義を感じるとともに、次へのステップの足掛かりを確実に見出すことができました。

会員から提出された翻字原稿は再度テープを回し、話者の語りに忠実に翻字されているかどうか、一字一句丁寧に点検していきました。その後、平成七年十二月から翌年一月にかけて原稿を入稿し、五校正を行いました。

部立ては第一編翻字資料、第二編資料編とし、話者別一覧では話者の顔写真もできるだけ掲載するようしました。

このようにして『大木・牧原・長田の民話』を編集するにあたって、各老人会、各公民館関係者、話者の家族の方々、ゆうがおの会会員、その他多くの方々に大変お世話になりました。また、校正作業、その他で宮城昭美氏（沖縄市立郷土博物館嘱託）、知花孝子氏（記録工房20）のご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。

次回は『大湾・古堅の民話』を予定しております。今後も、なお一層のご協力をよろしくお願い申し上げます。

編集者

館長 名嘉真 宜勝
主事補 知花 めぐみ
嘱託 村山 友江
ノ 玉城 和美
臨時 玉城 琳子

大木・牧原・長田の民話 読谷村民話資料集 13

発行年月日 平成8年7月31日

編集・発行 読谷村教育委員会
歴史民俗資料館
〒904-03 沖縄県読谷村字座喜味708-6
電話 098(958)3141

印 刷 文 進 印 刷 株 式 会 社
〒901-03 沖縄県糸満市西崎町5丁目10-14
電 話 098(994)5777
